St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学年報: 2008年度（平成20年度）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/4728

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

年報－2008年度（平成20年度）

聖路加看護大学

St. Luke's College of Nursing

目　次

序　文　　学長　　井部　俊子　1

Ⅰ　学事暦　3

Ⅱ　学生の受け入れ　7

【学　部】
1．学生募集の現状 …… 7
2．入学者選抜方法の現状 …… 7
3．収容定員に対する在籍者数 …… 8

【大学院】
1．大学院生募集の現状 …… 9
2．入学者選抜方法の現状 …… 9
3．収容定員に対する在籍者数 …… 10

Ⅲ　教育課程　12

【学　部】
1．教育課程 …… 12
2．授業実施内容 …… 22
3．カリキュラム評価 …… 29
4．立教大学との単位互換 …… 30
5．安全対策 …… 30
6．卒業の状況 …… 32
7．カリキュラム運用委員会 …… 32
8．実習室委員会 …… 33
9．実習のあり方検討会 …… 35
10．養護教諭一種検討会 …… 36

【大学院】
1．大学院の教育課程 …… 39
2．修了の状況 …… 47
3．立教大学との単位互換 …… 49
4．ティーチングアシスタント（TA） …… 49
5．がんプロフェッショナル養成 …… 51

Ⅳ　生涯教育　54

【学　部】
1．科目等履修生 …… 54

【大学院】
1．科目等履修生 …… 55
2．研究生 …… 55

【研究センター】
1．認定看護管理者ファーストレベル講習 …… 55
2．認定看護管理者セカンドレベル講習の開講準備 …… 57
3．認定看護師教育課程 …… 60

Ⅴ　社会貢献　76
1．企業等との連携－産学共同プロジェクト …… 76
2．社会活動－まちかどクリーンデーに参加 …… 78

Ⅵ　研究活動　80
1．研究活動 …… 80
2．研究費の取得状況 …… 88
3．研究活動を支える基金等 …… 90
4．研究倫理審査委員会 …… 92
5．紀　要 …… 92

Ⅶ　国際活動　93
1．WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センター …… 93
付：Annual Report 2008一部抜粋
2．国際交流 …… 101
3．研修生の受け入れ …… 101
4．国外への派遣 …… 103

Ⅷ　ファカルティ・ディベロップメント　105
1．教員の研修 …… 105
2．職員の研修 …… 106

Ⅸ　図書館　107
1．サービスと利用 …… 107
2．コレクション …… 113
3．環　境 …… 116
4．組織と連携 …… 118
5．経費・資産 …… 119

Ⅹ　大学史編纂・資料室　120
1．大学史編纂・資料室業務 …… 120
2．広報・普及業務 …… 121
3．渉外活動業務 …… 122
4．その他 …… 123

Ⅺ　看護実践開発研究センター　124
1．研究センターの運営および構成員 …… 124
2．研究実績 …… 125
3．研究事務支援 …… 127
4．実　践 …… 129
5．生涯学習支援 …… 133

Ⅻ　情報ネットワーク　139
1．情報システムの運用状況 …… 139
2．情報システム環境の整備内容 …… 140
3．教育研究活動への対応の現状の将来構想 …… 141

XIII　学生生活への配慮　143
【学　部】
1．学生部 …… 143
2．自治会活動 …… 144

3．課外活動 …… 144
4．学生相談 …… 145
5．奨学金 …… 146
6．福利厚生 …… 149
7．健康管理 …… 151
8．チャペルアワー委員会 …… 161
9．オリエンテーション・セミナー …… 162
10．就職・進学に対する支援体制 …… 163
【大学院】
1．学生部 …… 167
2．自治会活動 …… 167
3．奨学金 …… 167
4．アルバイト …… 169
5．福利厚生 …… 169
6．健康管理 …… 170
7．就職・進学に対する支援 …… 170

XIV 広報活動 172
1．学園ニュース …… 172
2．受験生への広報 …… 175
3．ホームページ管理室 …… 179

XV 施設・設備 182
1．施設・設備の整備状況 …… 182
2．施設・設備の維持管理 …… 184

XVI 管理・運営 186
1．組　織 …… 186
2．財　政 …… 189
3．文部科学省学校法人運営調査委員による実施調査 …… 190
4．プロジェクト活動 …… 191
5．規程の新設ならびに改正 …… 192
6．教員の学位取得に対する支援対策 …… 193
7．加盟団体および協会 …… 193
8．教職員の活動に対する評価 …… 194
9．人権委員会 …… 195
10．教授会・研究科委員会 …… 195
11．表彰制度準備委員会 …… 199
12．防災対策 …… 201

XVII 自己点検・評価 202
1．大学基準協会による認証評価の報告書作成 …… 202
2．2007年度年報の作成 …… 202
3．修士学生によるカリキュラム評価への対応 …… 202
4．教員評価・職員評価の実施案について …… 202
5．2008年度年報の作成準備 …… 203

序　文

聖路加看護大学の2008年度はポスト COE の体制を整える年であり、活発な教育・研究活動が行われた。

2008年度は、学部１年生70名、学士編入12回生20名ならびに大学院博士前期（修士）課程看護学専攻26名（うち社会人入学８名）、ウィメンズヘルス・助産学専攻16名および博士後期課程13名が入学した。今年度は、博士課程の定員増が認可されて３年目となり、博士後期課程の定員がすべての学年で10名となり大学院拡充計画が完成年度を迎えたが、社会人入学生の伸びが少ないためプロジェクトを設置して受け入れについて課題を整理した。博士後期課程では、今年度より看護師資格をもたない者の受け入れを開始し、看護社会学に１名の入学者があった。

保健師助産師看護師学校指定規則の改正が今年度より施行されたが、本学での影響は少なかった。また、2011年度改訂を目標として「カリキュラム2011」プロジェクトを立ち上げて検討を開始した。

2007年10月よりスタートした文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」による「南関東圏における先端的がん専門家の育成」事業は順調に進み、がん看護専門看護師教育の充実と、がん化学療法看護認定看護師教育が実施された。

生涯教育の一環として開講されている科目等履修は、履修生が減少しているため今年度より通常の学部授業に組み入れることとし７名の応募があった。さらに、個別に論文指導を行う「看護研究Ⅱ」を開講し、教養科目の教員が担当することとした。

看護実践開発研究センター（２号館）では、不妊症看護、がん化学療法看護、訪問看護の３つの認定看護師講習と、認定看護管理者ファーストレベル講習が実施された。前者では75名、後者は80名が修了した。

社会貢献として産学協同で始まった「聖路加・テルモ　新健康カレッジ」では全７回の講演とセミナーが市民を対象として実施され好評を得た。COE 拠点プログラムの成果として引き継がれた「ナースクリニック」「聖路加健康ナビスポットるかなび」も地域住民に定着している。中央区が推進する「まちかどグリーンデー」に登録し、毎月10日朝に大学周辺のクリーンアップ活動を本年７月から開始した。

教員の研究活動を支える外部資金の獲得は年々増加しており、文部科学省科学研究費補助金の採択件数は 37 件、9,535 万円（間接経費を含めると 1 億 2,235 万円）、厚生労働科学研究費補助金は 7 件、2,100 万円となった。

大学におけるアーカイブ事業の重要性から、４月より「大学史編纂・資料室」を設置し、渡部尚子客員教授が室長として就任された。オーラルヒストリーの聴取や史料の収集、さらに自校教育に資する本学のブックレット作成の準備を開始した。

学生･教職員が互いに関心をもち承認する場として表彰制度を設け､創立記念式において学長賞、グッドティーチャー賞などの授与を行った。

また、同窓生青木康子先生のご寄付により、今年度から「青木奨学金」制度が稼動して３名の助産学専攻生が恩恵を得ることができた。

本学の理念と使命を果たすために、財政基盤の中心である学納金収入の確保と増収策の検討は引き続き検討課題である。経済的要因で本学の学習を断念する志願者への対策も積極的に検討していく必要がある。

2009年３月31日

聖路加看護大学学長　**井　部　俊　子**

Ⅰ 学 事 暦

2008(平成20)年度の学事暦は**表１**に示す通りである。

１．入学式・開講式

学部入学式は４月８日㈫午前９時30分よりアリス・C・セントジョンメモリアルホールで執り行われた。

１年生70名、学士編入12回生20名が入学した。式後、聖路加国際病院礼拝堂で入学感謝礼拝を行い、さらに父母と教職員の懇談会を開催した。

大学院入学式開講式は４月16日㈬午後２時よりアリス・C・セントジョンメモリアルホールで執り行われた。博士前期(修士)課程看護学専攻に26名（うち社会人入学８名)、同ウィメンズヘルス・助産学専攻に16名（社会人入学なし)、博士後期課程に13名が入学した。引き続き教員・在学生による歓迎会を学生ラウンジにて行った。

２．卒業式・修了式

大学院看護学研究科修了式を2009年３月10日㈫午前９時30分より、大学看護学科卒業式を午後１時よりアリス・C・セントジョンメモリアルホールで挙行した。例年、卒業生・修了生、ご家族、来賓の方々、在校生でアリスホールおよび映像・音声を流しているサテライト会場となる301教室でも収容できなくなったため、今年から大学院修了式と大学卒業式とを分けて行うことにした。大学院修了式は席に余裕があったが、卒業式はちょうど満員の状態となった。

88名の学部卒業生、32名の博士前期（修士）課程修了生、７名の博士後期課程修了生、１名の論文博士が、それぞれ学士(看護学)、修士(看護学)、博士(看護学)の学位を授与された。

卒業生・修了生の内訳（人）

学部卒業生	88	一般入学生	69				
		学士編入学生	19				
博士前期(修士)課程修了生	34	看護学専攻	19	一　般	15	修士論文コース	8
						上級実践コース	7
				社会人	4	修士論文コース（うち9月修了1名）	3
						上級実践コース	1
		ウィメンズヘルス・助産学専攻	15	一　般	15	修士論文コース	4
						上級実践コース（うち9月修了1名）	11
博士後期課程修了生	9（うち９月修了２名）						
論文博士	1						

引き続いて卒業感謝礼拝を、聖路加国際病院礼拝堂にて行った。さらに大学院生については祝会を学生ラウンジで行ったが、大学卒業生については時間的な理由により祝会を取りやめた。なお前期で修了した者の修了証書授与式は、９月30日㈫に行った

３．大学創立記念行事

2009年１月23日㈮午後１時よりアリス・C・セントジョンメモリアルホールにて創立記念行事を行った。

記 念 講 演　「人をつくる」教育者として

永井敏枝氏（元北里大学看護学部教授学科長、聖隷学園浜松衛生短期大学学長）

第１回表彰式：学長賞（グッドプレゼンター）をはじめとする表彰式を行った

４．教授会

毎月第２火曜日（８月を除く）に定例教授会を11回開催した。また入学・卒業に関わる臨時教授会を５回開催した。

５．研究科委員会

毎月第３火曜日（８月を除く）に定例の研究科委員会を11回開催した。また入学・修了に関わる臨時研究科委員会を８回開催した。

６．教育会議

2009年３月25日㈮午後４時から６時までコートヤード・マリオット銀座東武ホテルにおいて教育会議を開催した。

また、聖路加国際病院看護部との看護教育会議を４月23日㈬、７月16日㈬、２月19日㈬の３回開催した。

表１　2008年度学事暦

年　月　日	大　学　行　事	教授会・委員会など
2008年		
4月 8日（火）	学部入学式・始業式	教授会
9日（水）	新入生オリエンテーション（～10日）	
11日（金）	学部授業開始	
12日（土）	新入生オリエンテーション・セミナー、清泉寮（～13日）	
14日（月）	新入生のみ13日の代休	
15日（火）	大学院入学式・開講式	研究科委員会
16日（水）	大学院オリエンテーション	
17日（木）	〃	
18日（金）	大学院授業開始	
19日（土）		
23日（水）		看護教育会議

5月13日（火）		教授会
15日（木）	修士論文研究計画書締切	
17日（土）	大学説明会（オープン・キャンパス）	
20日（火）		研究科委員会
27日（火）		ミセス・セントジョン記念日
28日（水）	消防訓練	
6月 6日（金）	体育デー（中央区立総合スポーツセンター）	
10日（火）		教授会
13日（金）	総合看護・看護研究Ⅱ計画書提出締切	
17日（火）		研究科委員会
7月 8日（火）		教授会
10日（木）	修士・博士論文提出締切	
15日（火）		研究科委員会
16日（水）		看護教育会議
23日（水）	修士課程学内推薦入学試験	
25日（金）	前期試験期間（～31日）	修士課程学内試験判定会議
31日（木）	授業終了	
夏季休暇　8月１日～９月30日 大学一斉休暇　8月13日～18日		
8月 1日（金）		FD研修会
2日（土）	大学説明会（オープン・キャンパス、～3日）	
10日（日）		トイスラー記念日
9月 1日（月）	看護援助論Ⅳ実習（～13日）	
9日（火）		研究科委員会、教授会
16日（火）		研究科委員会
17日（水）	修士課程入学試験（前期）（～18日）	
18日（木）	臨地実習オリエンテーション（～19日）	
22日（月）	野外活動実習（～25日）	
24日（水）	学士編入学試験	修士課程入試選考判定会議
27日（土）		聖路加看護学会
30日（火）	学位授与・論文発表会	学士編入学試験選考会議
10月 1日（水）	後期授業開始	
2日（木）	防災訓練	
14日（火）		臨時研究科委員会、教授会
21日（火）		研究科委員会
22日（水）	博士後期課程入学試験（～23日）	
28日（火）	〃	博士後期課程入試選考判定会議
11月 1日（土）	白楊祭（～２日）	
3日（月）	学生振替休日	
11日（火）		教授会
18日（火）		研究科委員会
19日（水）	公募推薦入学試験	
25日（火）		公募推薦入試選考委員会・臨時教授会
12月 9日（火）		教授会
10日（水）	修士論文研究計画書提出締切	
16日（火）		研究科委員会
18日（木）	総合看護・看護研究提出締切	
19日（金）	クリスマスの集い	
冬季休暇　12月22日～１月９日 大学一斉休暇　12月29日～１月３日		

2009年		
1月10日（土）	博士論文提出締切、授業開始	
13日（火）		教授会
20日（火）		研究科委員会
23日（金）	大学創立記念行事	
25日（日）	大学創立記念日	
31日（土）	修士論文提出締切	
2月 3日（火）	学部入学試験１次	
4日（水）		学部入試１次選考会議、臨時研究科委員会
〃	学部入試１次発表	
5日（木）	学部入学試験２次	
10日（火）		学部入試２次選考会議、教授会
12日（木）	学部後期試験（～18日）	
13日（金）	学部入試２次発表	
16日（月）	修士論文審査・最終試験（～21日）	
17日（火）		研究科委員会
19日（木）		看護教育会議
23日（月）	学士編入生看護援助論Ⅳ実習（～28日）	
25日（水）		臨時研究科委員会、
26日（木）		臨時教授会（卒業生単位認定）
〃	修士課程入学試験（後期）（～27日）	
27日（金）	博士論文発表会	修士課程選考判定会議
3月 2日（月）	修士論文発表会（修論･上級実践）（～３日）	
9日（月）	卒業式・修了式予行演習	
10日（火）	卒業式・修了式	
11日（水）		科目等履修生選考会議・教授会
12日（木）		FD研修会
17日（火）		研究科委員会
24日（火）		臨時教授会（在校生単位認定）
25日（水）		教育会議、教職員歓送迎会

Ⅱ　学生の受け入れ

【学　　部】

１．学生募集の現状

学生募集のための広報活動は広報委員会と事務局が行っている。大学案内パンフレット作成、大学説明会の開催および模擬授業の実施、学生ボランティアおよび自治会主催の白楊祭での大学説明コーナーの開設、毎週火曜日・金曜日午前・午後実施の大学見学、高等学校や予備校での大学説明会への教職員の参加、ホームページ等を通し、本学の目的や校風を多くの受験生に知ってもらう努力をし、徐々に宣伝活動、募集活動を広げている。

２．入学者選抜方法の現状（表１参照）

入学者選抜方法については、入試委員会が原案を作り、教授会の決定により進められている。

本年度は2009年度学部１年生の入学者選抜と、２年生への編入学選抜および科目等履修生の選抜を実施した。

１年生の入学者選抜は、一般入試と公募推薦入試（帰国子女を含む）を行っている。推薦入試に関して2009年度は公募推薦（帰国子女を含む）15名の募集を行った。高校の平均評定値4.3以上で、本学専願であることを条件とし、調査書、小論文（120分）、面接による選抜を行った。

帰国子女については、昨年度同様、学歴記入書、保護者の外国勤務を証明する外国居住証明書、出身高等学校３年間の成績証明書、学校の公式案内書をさらに提出することを課している。20名の志願者のうち、13名が合格した。帰国子女の応募はなかった。

一般入試は、学科試験、小論文、面接、調査書により選抜を行った。志願者は450名で昨年とほぼ同じであった。出願者を増やすため、出願期間を長くすることが検討されたが、日程の公表後であったため、2010年度入試より12月中旬から出願受付を開始し、出願期間を長くすることが決まった。男子学生の志願者数は16名と、昨年より若干減少しており、入学者は１名であった。２次試験合格者を114名、補欠者を30名発表した。合格者のうち入学手続きをしなかった者が15名と昨年度とほぼ同数であったが、最終的には52名の辞退者となり、入学者を70名とする予定が、５名増の75名の入学者となった。昨年度の結果を踏まえての合格者数としたが、歩留まり率がよく、予想外の入学者であった。

また、2007年度一般入学試験から、当該年度の受験生本人からの請求に限り、試験結果をランク・グループ別区分表により、どのグループであったかを開示することになり、募集要項、ホームページに掲載した。2008年度５月に開示の申し込みのあった件数は、45件（入学者31名、不合格者10名、入学辞退者４名）であった。

２年生への学士編入学選抜は、大学卒業生（見込みの者を含む）を対象にし、学科試験（生物、英語）、小論文、面接により選抜を行った。今回は62名の応募があり、22名が合格したが、６名辞退（うち２名手続きせず）があり、５名の補欠者が入学した。志願者は昨年より大幅に増加してい

るが、同時に辞退者数も多くなっている。

科目等履修生の選抜は、2008年度より夜間開講を廃止し、昼間の学部学生の授業の中で履修することとしている。時間割等の詳細の決定が遅かったため、募集要項のホームページ掲載が２月となった。応募資格は、大学入学資格を有する者とし、従来の看護職のみから受け入れの枠を広げている。ただし、科目の内容により専門職のみを受け入れる科目も募集を行った。従来通り書類審査により選抜を実施した。志願者は８名であったが、１名辞退があり７名が履修することになった。

表１　学　　部　　《　》…男子内数

	学部一般	公募推薦 (帰国子女を含む)	学士編入学	科目等履修生
募集要項配布期間	2008 年 8 月～ 2009 年 1 月	2008 年 7 月～11 月	2008 年 8 月～9 月	2009 年 2 月～ 2009 年 3 月
願書受付期間	2009 年 1 月 5 日～ 1 月 16 日	2008 年 11 月 1 日～ 11 月 7 日	2008 年 9 月 5 日 ～9 月 12 日	2009 年 2 月 23 日～ 3 月 4 日
募集人員	60（推薦 15 名程度を含む）	15 程度	20	各科目若干名
志願者数（倍率）	450（7.5 倍）	20（1.3 倍）	62（3.1 倍）	8
合格者数	1 次試験　183《3》 2次試験　114《1》	13	22　《3》	8
補欠者数	30		5《0》	
入学者数	62《1》	13	21《2》	7

３．収容定員に対する在籍者数

2008年４月現在の学部学生数は、**表２**のようである。

表２　収容定員に対する在籍者数　　（2008年４月現在）

学　年	収容定員	現員数（114.0%）	休学者数	留年者数
1　年	60	72	0	2
2　年	80	89	1	1
3　年	80	93	1	1
4　年	80	88	0	0
計	300	342	2	4

【大 学 院】

1．大学院生募集の現状

看護系の雑誌へ広告を掲載、「社会人に開かれた大学展」への資料参加を行った。2005年度よりウィメンズヘルス・助産学専攻を増設し、看護系大学に資料を配付、ホームページに掲載するなど広く宣伝を行った。ウィメンズヘルス・助産学専攻では、助産学担当教員が独自に「ウィメンズヘルス・助産学　大学院受験生と語る夕べ」を開催し、広報を行ったが、他の専攻においても学部同様に大学院説明会開催の要望が受験生よりあり、今後開催を検討していく必要がある。修士課程においては、Ⅰ期、Ⅱ期の２回に分け募集を行った。

修士課程看護学専攻ではカリキュラム改訂により、看護師資格を持たない者の受け入れおよび専門の細分化により新たな専門分野が加わった。修士論文コース[看護心理学、看護社会学、看護情報学、看護統計学、基礎看護学、看護技術学、看護教育学、小児看護学、急性期看護学、慢性期看護学、がん看護・緩和ケア、老年看護学、精神看護学、国際看護学、地域看護学、在宅看護学、看護管理学の17専門分野]と、上級実践コース[小児看護学、急性期看護学、がん看護学・緩和ケア、老年看護学、精神看護学、国際看護学、地域看護学、在宅看護学、看護管理学の９専門分野]で募集を行った。小児看護学の上級実践コースでは、従来の専門看護師を目指すコースに加え、高度な知識と技術を有し、診断や治療を施すことのできる上級実践看護師（プライマリケア実践）を目指す新たなコースを設け、募集を行った。ウィメンズヘルス・助産学専攻では、修士論文コース、上級実践コースともにウィメンズヘルス、助産学の２専門分野で募集を行った。

博士後期課程においても、修士課程と同様に看護師資格を持たない者の受け入れと、専門の細分化により、看護心理学、看護社会学、看護情報学、看護統計学、基礎看護学、看護技術学、看護教育学、看護管理学、助産学、小児看護学、成人看護学（急性・慢性）、老年看護学、ウィメンズヘルス、がん看護学・緩和ケア、精神看護学、在宅看護学、地域看護学、国際看護学の18専門分野で募集を行った。

修士課程、博士後期課程ともに出願書類をホームページからダウンロードできるようにしている。

なお、2008年度より修士課程への学内推薦制度を実施し、2009年度は６名の応募があった。

2．入学者選抜方法の現状（表３参照）

修士課程については、Ⅰ期・Ⅱ期２回の選抜を行い、各専攻を15名の定員とした。一般、社会人共に専攻する専門科目の筆記試験、英語（辞書持ち込み可）、小論文、面接から審査し、選抜した。専攻分野を第２希望まで出願し、受験することができるが、第２希望の科目を受験したものはⅠ期試験において２名であった。志願者数、合格者数は**表３**の通りである。合格者の中でウィメンズヘルス･助産学専攻の３名から辞退の申し出があった（うち１名は看護師国家試験不合格による）。

今回第２回目となった学内公募推薦試験では、ウィメンズヘルス・助産学専攻に６名の応募があり、書類審査、面接により審査した結果、５名が合格となった。

また、ウィリアムズ司教記念教育基金による研修生１名から、修士課程への入学希望があり、外国人特別選抜試験を免除し、2009年４月15日より、修士課程ウィメンズヘルス・助産学専攻に外国人留学生として受け入れることになった。

博士後期課程については、看護学、英語（辞書持ち込み可）、論文、面接を実施し、選抜を行った。志願者25名、合格者は13名で，うち５名が社会人入学であった。また、今年初めて看護師資格を持たない者の志願があり、看護社会学の領域に入学することになった。募集人員を満たしていたため，２次募集は行わなかったが、１名より辞退の申し出があった。本学修士課程からストレートで進学した者は３名であった。また、本学の博士号取得支援を受けて入学する教員はいなかった。

インドネシア政府からの研究生として、１月より２名を受け入れることになり、両名とも博士後期課程の入学を希望しており、政府等公的機関により委託されたものであることから、外国人特別選抜試験を免除し、2009年４月15日より博士後期課程の外国人留学生として受け入れることが決定した。

研究生に関しては、紹介教授の指導を受け、書類審査で選抜した。

表３　大　学　院

	大学院修士課程		大学院博士後期課程	研　究　生
	Ⅰ期試験	Ⅱ期試験		
募集要項配付期間	2008年７月 ～2009年２月	2008年7月～ 2009年２月	2008年７月～10月	2009年１月
願書受付期間	2008年８月29日～ ９月４日	2009年2月6日 ～２月12日	2008年９月29日～ 10月３日	2009年１月10日～ ２月９日
募　集　人　員	㊐：12 ㋒：12	㊐：３名 ㋒：３名	10	—
志願者数（倍率）	㊐：　22（1.8倍） 社会人　7 ㋒：　25（2.1倍） 社会人　0	㊐：　11（3.7倍） 社会人　2 ㋒：　2（0.7倍） 社会人　0	25（2.5倍） 社会人　10	7 （継続4名を含む）
合　格　者　数	㊐：　15 社会人　5 ㋒：　13 社会人　0	㊐：　10 社会人　2 ㋒：　2 社会人　0	13 社会人　5	
補　欠　者　数	㋒：０	０	－	—
入　学　者　数	㊐：　15 社会人　5 ㋒：　11 社会人　0	㊐：　10 社会人　2 ㋒：　1＋1＊ 社会人　0	12 （うち社会人　５） ＋2＊	５ （継続4名を含む）

㊐：看護学専攻　　㋒：ウィメンズヘルス・助産学専攻　　＊特別外国人留学生

３．収容定員に対する在籍者数

2008年４月現在の大学院学生数は**表４**、**表５**のとおりである。また、2008年度入学生の状況は**表６～８**、研究生は**表９**のようであった。

表４　修士課程

学　年	収容定員	現　員　数
１　年	㊐：15 ㋒：15	26 16
２　年	㊐：15 ㋒：15	20 17
３　年		6
計(名)	60	85（141.7%）

表５　博士後期課程

学　年	収容定員	現　員　数
１　年	10	13
２　年	10	11
３　年	4	26 （うち留年者16）
計(名)	24	50（208.3%）

表６　大学院入学状況　　**左欄：一般　　右欄：社会人**

		入　学　志　願　者　数									
		当該大学出身者		他大学出身者		外国の学校卒		その他		計	
修士課程	看　護　学	5	2	14	9	1	1	0	1	20	13
	ウィメンズ	1	0	23	0	1	0	0	0	25	0
博士後期課程		6	3	2	2	1	0	0	0	9	5

		入　学　者　数									
		当該大学出身者		他大学出身者		外国の学校卒		その他		計	
修士課程	看　護　学	5	2	11	5	1	1	0	1	17	9
	ウィメンズ	1	0	14	0	1	0	0	0	16	0
博士後期課程		5	3	2	2	1	0	0	0	8	5

表７　修士課程大学（学部）卒業年別入学状況

大学卒業年度		2008年３月大学卒		2007年３月大学卒		2006年３月以前大学卒		その他*（外国卒等）		計		左記のうち有職者数(再掲)	
志願者数	看　護　学	3	1	1	1	15	9	1	2	20	13	16	13
	ウィメンズ	19	0	0	0	5	0	1	0	25	0	13	0
入学者数	看　護　学	2	0	1	1	13	6	1	2	17	9	0	9
	ウィメンズ	12	0	0	0	3	0	1	0	16	0	0	0

＊その他に大学評価・学位授与機構を含む

表８　修士課程看護教育機関別入学状況

看護教育機関		大　学		短期大学		専門学校		計（名）	
志願者数	看　護　学	17	4	0	2	4	6	21	12
	ウィメンズ	21	0	0	0	3	1	26	1
入学者数	看　護　学	15	4	1	1	2	4	17	9
	ウィメンズ	15	0	0	0	1	0	16	0

表９　研究生等の学生数

研　究　生		計
学部卒以上	左記以外	
0	5＋2＊	5＋2＊

※５名全員修士課程修了者　　＊インドネシアからの外国人研究生

Ⅲ 教育課程

【学　　部】

１．教育課程（表１、２）

教育課程については、各部門代表者（教養基礎教育は各科目担当者）からなるカリキュラム運用委員会がその検討・運用の任を持ち、教授会の決定により進められている。現在のカリキュラムは、1995年度入学生より適用し、現在までカリキュラム評価により見直しを行い、2003年度には一部カリキュラムの改正、2006年度には養護教諭一種免許状取得課程の申請、2007年度助産課程の廃止、2008年度からの保健師助産師看護師学校指定規則の改正による変更承認申請等を経て現在のカリキュラムとなっている。

さらに、教員の満足度等のカリキュラム評価結果から、カリキュラムの見直しが必要となり、カリキュラム改訂を行うことが決まり、カリキュラム2010の小委員会を立ち上げ、活動を開始した。2010年度入学生からカリキュラムの改正を行うには、2009年８月までに文部科学省への申請が必要となるが、2009年２月の時点でカリキュラム改訂の方向性について学内で合意が得られず、2010年度からの改訂は見送られ、2011年度改訂を目指すことになった、

学士編入生のカリキュラムについては、12年目となり、調整を行いながら徐々に改善され軌道にのりつつある。

また、学士編入生の養護教諭一種免許状の取得については、３年間では履修できないが、すでに教職課程免許状を取得している者については、個別に対応していくこととしている。

学生への成績開示と問い合わせ期間の設置や、定期試験の採点ミス防止のため、教員向けスケジュール表等、業務上の事項をまとめた教務関係マニュアルを作成し、マニュアルに則り定期試験を行うことができ、特に問題は起こらなかった。

表１　教育課程および開講学年予定表（2008年度入学生）

授業科目			㊙ 人文 ㊥ 社会 ㊟ 自然	単位数 必修	単位数 選択	１年 前期	１年 後期	２年 前期	２年 後期	３年 前期	３年 後期	４年 前期	４年 後期
教養科目	人間と文化	キリスト教概論	㊙	2		✓							
		キリスト教倫理	㊙		2		✓						
		音楽	㊙		2	✓		✓					
		美術	㊙		2	✓		✓					
		文学	㊙		2	✓		✓					
		哲学	㊙		2		✓						
		倫理学	㊙ ㊥		2			✓		✓			
		宗教学	㊙ ㊥		2			✓		✓			
	人間と社会	歴史学	㊙ ㊥		2	✓		✓					
		法学（日本国憲法）	㊙ ㊥		2		✓		✓				
		教育原理	㊙ ㊥		2	✓							
		教育方法の研究	㊙ ㊥		2		✓						
		教育課程論	㊙ ㊥		2							✓	
		社会学	㊙ ㊥		2	✓							
		心理学	㊙ ㊥		2	✓							
		教育制度論	㊙ ㊥		2				✓				
		カウンセリング概論	㊙ ㊥		2				✓				
		教職概論	㊙ ㊥		2				✓				
		道徳及び特別活動論	㊙ ㊥		2							✓	
		生徒指導論	㊙ ㊥		2							✓	
		女性学	㊙ ㊥		2			✓					
	人間と言語	国語表現法	㊙		2				✓				
		総合英語			2		✓						
		英語Ⅰ		2		✓	✓						
		英語Ⅱ		2				✓	✓				
		英語Ⅲ—A			1		✓						
		英語Ⅲ—B			1			✓					
		文献講読—A			1				✓				
		文献講読—B			1					✓			
		英語表現法Ⅰ—S		1		✓	✓						
		英語表現法Ⅰ—W		1		✓	✓						
		英語表現法Ⅱ—S		1				✓	✓				
		英語表現法Ⅱ—W		1				✓	✓				
		英語表現法Ⅲ—S			1				✓				
		英語表現法Ⅲ—W			1					✓			
		異文化コミュニケーション	㊙ ㊥		2					✓			
		ドイツ語Ⅰ			2	✓	✓						
		ドイツ語Ⅱ			2			✓	✓				
		中国語			2	✓	✓	✓	✓				

授業科目			㊝ 人文 ㊥ 社会 ㊟ 自然	単位数 必修	単位数 選択	1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期	4年 後期
	人間と情報	統計学	㊥ ㊟		2	✓							
		情報科学	㊥ ㊟		2	✓		✓					
		統計学演習	㊥ ㊟		2								✓
		情報処理演習	㊥ ㊟		2	✓	✓						
教養科目	人間と自然環境	生物学	㊟		2		✓						
		物理学	㊟		2	✓							
		化学	㊟		2		✓						
	体育	体育Ⅰ			1	✓	✓						
		体育Ⅱ			1	✓		✓		✓		✓	
	総合科目	総合科目Ⅰ（対人関係論）	㊝ ㊥		2	✓							
		総合科目Ⅱ（健康科学）	㊟		2		✓		✓				
		総合科目Ⅲ（生活科学論）	㊥ ㊟		2	✓	✓	✓	✓				
		総合科目Ⅳ（国際交流演習）	㊥ ㊟		1								
		教職総合ゼミ	㊥ ㊟		2				✓				
基礎科目	人間と健康	生涯発達論Ⅰ		2			✓						
		生涯発達論Ⅱ		2			✓						
		形態機能学		4		✓							
		形態機能学演習		2			✓						
		生化学		2		✓							
		栄養学		1			✓						
		家族関係論		2				✓					
		集団力動論		1				✓					
		ヒューマンセクシャリティⅠ		1					✓				
		ヒューマンセクシャリティⅡ			1				✓				
		生命倫理		1					✓				
	環境と健康	環境論Ⅰ		2		✓							
		環境論Ⅱ		2			✓						
		疾病・治療概論		2				✓					
		疾病・治療各論		3					✓				
		保健医療福祉政策論		1						✓			
		保健医療福祉行政論		3				✓					
専門科目	看護の基本	生活と健康		2		✓							
		看護学概論		2		✓							
		看護援助論Ⅰ		3				✓					
		看護援助論Ⅱ		3			✓						
		看護援助論Ⅲ		3			✓	✓					
		看護援助論Ⅳ		1				✓					
		看護提供システムⅠ		2					✓				
		看護提供システムⅡ			1							✓	
		看護技術論			1							✓	

授業科目			㊙人文 ㊥社会 ㊤自然	単位数 必修	単位数 選択	1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期	4年 後期
専門科目	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅰ		2				✓					
		生涯発達看護論Ⅱ		2					✓				
		生涯発達看護論Ⅲ			1							✓	
		家族発達看護論Ⅰ		3						✓			
		家族発達看護論Ⅱ			1							✓	
		地域看護論Ⅰ		2					✓				
		地域看護論Ⅱ		3						✓			
		地域看護論Ⅲ			1							✓	
		学校保健			2					✓			
		養護概説			2							✓	
	人間と環境の相互作用の修正	慢性期看護論Ⅰ		4						✓			
		慢性期看護論Ⅱ		3						✓			
		慢性期看護論Ⅲ			1							✓	
		リハビリテーション看護論Ⅰ		2						✓			
		リハビリテーション看護論Ⅱ			1							✓	
	人間と環境の相互作用の回復・保護	急性期看護論Ⅰ		3					✓				
		急性期看護論Ⅱ		2					✓				
		急性期看護論Ⅲ			1							✓	
		ターミナルケア論		3								✓	
	臨地実習	臨地実習 A		2							✓		
		臨地実習 B		2							✓		
		臨地実習 C		2							✓		
		臨地実習 D		2							✓		
		臨地実習 E		2							✓		
		臨地実習 F		2							✓		
		臨地実習 G		3							✓		
		総合実習			2							✓	
		養護実習Ⅰ			3							✓	
	看護学統合	看護研究Ⅰ		2								✓	
		看護研究Ⅱ			3								✓
		総合看護			3								✓
		看護政策論		2									✓
		看護ゼミナール			1							✓	
	養護教諭1種に関する科目	養護実習Ⅱ			2							✓	
		計		105	110								

表２　教育課程および開講学年予定表（2006～2007年度入学生）

授業科目			㊙ 人文 ㊥ 社会 ㊟ 自然	単位数 必修	単位数 選択	１年 前期	１年 後期	２年 前期	２年 後期	３年 前期	３年 後期	４年 前期	４年 後期
教養科目	人間と文化	キリスト教概論	㊙	2		✓							
		キリスト教倫理	㊙		2		✓						
		音楽	㊙		2	✓		✓					
		美術	㊙		2	✓		✓					
		文学	㊙		2	✓		✓					
		哲学	㊙		2		✓						
		倫理学	㊙ ㊥		2			✓		✓			
		宗教学	㊙ ㊥		2			✓		✓			
	人間と社会	歴史学	㊙ ㊥		2	✓		✓					
		法学（日本国憲法）	㊙ ㊥		2		✓		✓				
		教育原理	㊙ ㊥		2	✓							
		教育方法の研究	㊙ ㊥		2		✓						
		教育課程論	㊙ ㊥		2							✓	
		社会学	㊙ ㊥		2	✓							
		心理学	㊙ ㊥		2	✓							
		教育制度論	㊙ ㊥		2				✓				
		カウンセリング概論	㊙ ㊥		2				✓				
		教職概論	㊙ ㊥		2				✓				
		道徳及び特別活動論	㊙ ㊥		2							✓	
		生徒指導論	㊙ ㊥		2							✓	
		女性学	㊙ ㊥		2			✓					
	人間と言語	国語表現法	㊙		2				✓				
		総合英語			1		✓						
		英語Ⅰ		2		✓	✓						
		英語Ⅱ		2				✓	✓				
		英語Ⅲ—A			1		✓						
		英語Ⅲ—B			1			✓					
		文献講読—A			1				✓				
		文献講読—B			1					✓			
		英語表現法Ⅰ—S		1		✓	✓						
		英語表現法Ⅰ—W		1		✓	✓						
		英語表現法Ⅱ—S		1				✓	✓				
		英語表現法Ⅱ—W		1				✓	✓				
		英語表現法Ⅲ—S			1				✓				
		英語表現法Ⅲ—W			1					✓			
		異文化コミュニケーション	㊙ ㊥		2					✓			
		ドイツ語Ⅰ			2	✓	✓						
		ドイツ語Ⅱ			2			✓	✓				
		中国語			2	✓	✓	✓	✓				

授業科目			㊝ 人文 ㊥ 社会 ㊦ 自然	単位数 必修	単位数 選択	1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期	4年 後期
	人間と情報	統計学	㊥ ㊦		2	✓							
		情報科学	㊥ ㊦		2	✓		✓					
		統計学演習	㊥ ㊦		2								✓
		情報処理演習	㊥ ㊦		2	✓	✓						
教養科目	人間と自然環境	生物学	㊦		2		✓						
		物理学	㊦		2	✓							
		化学	㊦		2		✓						
	体育	体育Ⅰ			1	✓	✓						
		体育Ⅱ			1	✓		✓		✓		✓	
	総合科目	総合科目Ⅰ（対人関係論）	㊝ ㊥		2	✓							
		総合科目Ⅱ（健康科学）	㊦		2		✓		✓				
		総合科目Ⅲ（生活科学論Ⅰ）	㊥ ㊦		2								
		総合科目Ⅳ（生活科学論Ⅱ）	㊥ ㊦		2								
		教職総合ゼミ	㊥ ㊦		2				✓				
基礎科目	人間と健康	生涯発達論Ⅰ		2			✓						
		生涯発達論Ⅱ		2			✓						
		形態機能学		4		✓							
		形態機能学演習		2			✓						
		生化学		2		✓							
		栄養学		1			✓						
		家族関係論		2				✓					
		集団力動論		1				✓					
		ヒューマンセクシャリティⅠ		1					✓				
		ヒューマンセクシャリティⅡ			1				✓				
		生命倫理		1					✓				
	環境と健康	環境論Ⅰ		2		✓							
		環境論Ⅱ		2			✓						
		疾病・治療概論		2				✓					
		疾病・治療各論		3					✓				
		保健医療福祉政策論		1						✓			
		保健医療福祉行政論		3				✓					
専門科目	看護の基本	生活と健康		2		✓							
		看護学概論		2		✓							
		看護援助論Ⅰ		3				✓					
		看護援助論Ⅱ		3			✓						
		看護援助論Ⅲ		3			✓	✓					
		看護援助論Ⅳ		1				✓					
		看護提供システムⅠ		2					✓				
		看護提供システムⅡ			1							✓	
		看護技術論			1							✓	

授業科目			㊇ 人文 ㊥ 社会 ㊦ 自然	単位数 必修	単位数 選択	1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期	4年 後期
専門科目	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅰ		2				✓					
		生涯発達看護論Ⅱ		2					✓				
		生涯発達看護論Ⅲ			1							✓	
		家族発達看護論Ⅰ		3						✓			
		家族発達看護論Ⅱ			1							✓	
		地域看護論Ⅰ		2					✓				
		地域看護論Ⅱ		3						✓			
		地域看護論Ⅲ			1							✓	
		学校保健			2					✓			
		養護概説			2							✓	
	人間と環境の相互作用の修正	慢性期看護論Ⅰ		4						✓			
		慢性期看護論Ⅱ		3						✓			
		慢性期看護論Ⅲ			1							✓	
		リハビリテーション看護論Ⅰ		2						✓			
		リハビリテーション看護論Ⅱ			1							✓	
	人間と環境の相互作用の回復・保護	急性期看護論Ⅰ		3					✓				
		急性期看護論Ⅱ		2					✓				
		急性期看護論Ⅲ			1							✓	
		ターミナルケア論		3								✓	
	臨地実習	臨地実習 A		2							✓		
		臨地実習 B		2							✓		
		臨地実習 C		2							✓		
		臨地実習 D		2							✓		
		臨地実習 E		2							✓		
		臨地実習 F		2							✓		
		臨地実習 G		3							✓		
		総合実習			2							✓	
		養護実習Ⅰ			3							✓	
	看護学統合	看護研究Ⅰ		2								✓	
		看護研究Ⅱ			3								✓
		総合看護			3								✓
		看護政策論		2									✓
		看護ゼミナール			1							✓	
	養護教諭1種に関する科目	養護実習Ⅱ			2							✓	
		計		105	110								

表３　教育課程および開講学年予定表（2005年度入学生）

授業科目			㊝ 人文 ㊥ 社会 ㊟ 自然	単位数 必修	単位数 選択	１年 前期	１年 後期	２年 前期	２年 後期	３年 前期	３年 後期	４年 前期	４年 後期
教養科目	人間と文化	キリスト教概論	㊝	2		✓							
		キリスト教倫理	㊝		2		✓						
		音楽	㊝		2	✓		✓					
		美術	㊝		2	✓		✓					
		文学	㊝		2	✓		✓					
		哲学	㊝		2		✓						
		倫理学	㊝ ㊥		2			✓		✓			
		宗教学	㊝ ㊥		2			✓		✓			
	人間と社会	歴史学	㊝ ㊥		2	✓		✓					
		法律学	㊝ ㊥		2		✓		✓				
		教育学	㊝ ㊥		2	✓							
		教育方法学	㊝ ㊥		2		✓						
		社会学	㊝ ㊥		2	✓							
		心理学	㊝ ㊥		2	✓							
		応用社会学	㊝ ㊥		2				✓				
		応用心理学	㊝ ㊥		2				✓				
		女性学	㊝ ㊥		2			✓					
	人間と言語	国語表現法	㊝		2				✓				
		総合英語			1		✓						
		英語Ⅰ		2		✓	✓						
		英語Ⅱ		2				✓	✓				
		英語Ⅲ—A			1		✓						
		英語Ⅲ—B			1			✓					
		文献講読 A			1				✓				
		文献講読 B			1					✓			
		英語表現法Ⅰ—S		1		✓	✓						
		英語表現法Ⅰ—W		1		✓	✓						
		英語表現法Ⅱ—S		1				✓	✓				
		英語表現法Ⅱ—W		1				✓	✓				
		英語表現法Ⅲ—S			1				✓				
		英語表現法Ⅲ—W			1					✓			
		異文化コミュニケーション	㊝ ㊥		2					✓			
		ドイツ語Ⅰ			2	✓	✓						
		ドイツ語Ⅱ			2			✓	✓				
		中国語			2	✓	✓	✓	✓				
	人間と情報	統計学	㊥ ㊟		2	✓							
		情報科学	㊥ ㊟		2	✓		✓					
		統計学演習	㊥ ㊟		2								✓
		情報処理演習	㊥ ㊟		2	✓	✓						

授業科目			㊝人文 ㊥社会 ㊟自然	単位数 必修	単位数 選択	1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期	4年 後期
教養科目	環境人間と自然	生物学	㊟		2		✓						
		物理学	㊟		2	✓							
		化学	㊟		2		✓						
	体育	体育Ⅰ			1	✓	✓						
		体育Ⅱ			1	✓		✓		✓		✓	
	総合科目	総合科目Ⅰ（対人関係論）	㊝㊥		2	✓							
		総合科目Ⅱ（健康科学）	㊟		2		✓		✓				
		総合科目Ⅲ（生活科学論Ⅰ）	㊥㊟		2								
		総合科目Ⅳ（生活科学論Ⅱ）	㊥㊟		2								
基礎科目	人間と健康	生涯発達論Ⅰ		2			✓						
		生涯発達論Ⅱ		2			✓						
		形態機能学		4		✓							
		形態機能学演習		2			✓						
		生化学		2		✓							
		栄養学		1			✓						
		家族関係論		2				✓					
		集団力動論		1				✓					
		ヒューマンセクシャリティⅠ		1					✓				
		ヒューマンセクシャリティⅡ			1				✓				
		生命倫理		1				✓					
	環境と健康	環境論Ⅰ		2		✓							
		環境論Ⅱ		2			✓						
		疾病・治療概論		2				✓					
		疾病・治療各論		3					✓				
		保健医療福祉政策論		1						✓			
		保健医療福祉行政論		3				✓					
専門科目	看護の基本	生活と健康		2		✓							
		看護学概論		2		✓							
		看護援助論Ⅰ		3				✓					
		看護援助論Ⅱ		3			✓						
		看護援助論Ⅲ		3			✓	✓					
		看護援助論Ⅳ		1				✓					
		看護提供システムⅠ		2					✓				
		看護提供システムⅡ			1							✓	
		看護技術論			1							✓	
		生涯発達看護論Ⅰ		2				✓					
		生涯発達看護論Ⅱ		2					✓				
		生涯発達看護論Ⅲ			1							✓	

授業科目			㊝ 人文 ㊥ 社会 ㊐ 自然	単位数 必修	単位数 選択	1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期	4年 後期
専門科目	人間と環境の相互作用の保持・強化	家族発達看護論Ⅰ		3						✓			
		家族発達看護論Ⅱ			1							✓	
		地域看護論Ⅰ		2					✓				
		地域看護論Ⅱ		3						✓			
		地域看護論Ⅲ			1							✓	
	人間と環境の相互作用の修正	慢性期看護論Ⅰ		4						✓			
		慢性期看護論Ⅱ		3						✓			
		慢性期看護論Ⅲ			1							✓	
		リハビリテーション看護論Ⅰ		2						✓			
		リハビリテーション看護論Ⅱ			1							✓	
	人間と環境の相互作用の回復・保護	急性期看護論Ⅰ		3					✓				
		急性期看護論Ⅱ		2					✓				
		急性期看護論Ⅲ			1							✓	
		ターミナルケア論		3								✓	
	臨地実習	臨地実習 A		2							✓		
		臨地実習 B		2							✓		
		臨地実習 C		2							✓		
		臨地実習 D		2							✓		
		臨地実習 E		2							✓		
		臨地実習 F		2							✓		
		臨地実習 G		3							✓		
		総合実習			2							✓	
	看護学統合	看護研究Ⅰ		2								✓	
		看護研究Ⅱ			3								✓
		総合看護			3								✓
		看護政策論		2									✓
		看護ゼミナール			1							✓	✓
計				105	91								

2．授業実施内容

2008年度開講した科目ならびに単位認定者は次のようであった。

また、学部生の選択科目履修状況は**表４**のようであった。実習は**表５**の施設を利用して行われた。

1）Class　2012　第１学年

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	人間と文化	キリスト教概論	2		＊		上田　憲明
		キリスト教倫理		2		＊	関　正勝
		音楽		2	＊		西澤万有里
		美術		2	＊		太田　雅雄
		文学		2	＊		廣木　一人
		哲学		2		＊	岩田　成就
	人間と社会	歴史学		2	＊		矢崎　彰
		法学(日本国憲法)		2		＊	倉爪真一郎
		教育原理		2	＊		佐藤　英二
		教育方法の研究		2		＊	菊田　文夫
		社会学		2	＊		伊藤　和弘
		心理学		2	＊		廣瀬　清人
	人間と言語	総合英語		1		＊	菱田　治子
		英語Ⅰ	2		＊	＊	菱田　治子 M.Huffman
		英語Ⅲ―A		1		＊	深谷　計子
		英語表現法Ⅰ―S	1		＊	＊	F.Kikuta B.Saito
		英語表現法Ⅰ―W	1		＊	＊	深谷　計子 柳澤　波香
		ドイツ語Ⅰ		2	＊	＊	福西　弘美
		中国語		2	＊	＊	黄　麗華
	人間と情報	統計学		2	＊		菊田　文夫
		情報科学		2	＊		開講せず
		情報処理演習		2	＊	＊	大津　洋

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	人間と自然環境	生物学		2		＊	新山　優子
		物理学		2	＊		中本　淳
		化学		2		＊	渡部　徳子
	体育	体育Ⅰ		1	＊	＊	大濱あつ子
		体育Ⅱ		1	＊		大濱あつ子 菊田　文夫
	総合科目	総合科目Ⅰ（対人関係論）		2	＊		教養基礎科目担当教員
		総合科目Ⅱ（健康科学）		2		＊	菊田　文夫
基礎科目	人間と健康	生涯発達論Ⅰ	2			＊	及川　郁子
		生涯発達論Ⅱ	2			＊	亀井　智
		形態機能学	4		＊		大久保暢子 鈴木　高祐
		形態機能学演習	2			＊	大久保暢子 鈴木　高祐
		生化学	2		＊		小浪悠紀
		栄養学	1			＊	余語　典
	環境と健康	環境論Ⅰ	2		＊		古川　恵一
		環境論Ⅱ	2			＊	中山　和弘
専門科目	看護の基本	生活と健康	2		＊		菱沼　典子
		看護学概論	2		＊		菱沼　典子
		看護援助論Ⅱ	3			＊	安ヶ平伸枝
		看護援助論Ⅲ	1			＊	佐居　由美

前期　４月11日㈮～７月31日㈭
後期　10月１日㈬～12月19日㈮
　　１月13日㈬～２月18日㈬

2）Class　2011　第２学年

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	人間と文化	音楽		2	＊		西澤万有里
		美術		2	＊		太田　雅雄
		文学		2	＊		廣木　一人
		倫理学		2	＊		鶴若　麻理
		宗教学		2	＊		岩田　成就
	人間と社会	歴史学		2	＊		矢崎　彰
		法学（日本国憲法）		2		＊	倉爪真一郎
		教育制度論		2		＊	伊藤　和弘
		カウンセリング概論		2		＊	廣瀬　清人 石川　智
		女性学		2	＊		中村　美亜
	人間と言語	国語表現法		2		＊	廣木　一人
		英語Ⅱ	2		＊		園城寺康子 深谷　計子
		英語Ⅲ－B		1	＊		深谷　計子
		文献講読－A		1		＊	深谷　計子
		英語表現法Ⅱ―S	1		＊	＊	F.Kikuta B.Saito
		英語表現法Ⅱ―W	1		＊	＊	菱田　治子 深谷　計子
		英語表現法Ⅲ―S		1		＊	菱田　治子
		ドイツ語Ⅱ		2	＊	＊	福西　弘美
		中国語		2	＊	＊	黄　麗華

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	情報と人間と	情報科学		2	＊		開講せず
	体育	体育Ⅱ		1	＊		大濱あつ子 菊田　文夫
	総合科目	総合科目Ⅱ（健康科学）		2		＊	菊田　文夫
基礎科目	人間と健康	家族関係論	2		＊		瀬戸屋　希
		集団力動論	1		＊		萱間　真美
		ﾋｭｰﾏﾝｾｸｼｬﾘﾃｨⅠ	1			＊	有森　直子
		ﾋｭｰﾏﾝｾｸｼｬﾘﾃｨⅡ		1		＊	有森　直子
		生命倫理	1		＊		関　正勝
	環境と健康	疾病・治療概論	2		＊		白木　和夫 川名賢一郎
		疾病・治療各論	3			＊	小松浩子他
		保健医療福祉行政論	3		＊		伊藤　和弘 田上　豊
専門科目	看護の基本	看護援助論Ⅰ	3		＊		安ヶ平伸枝
		看護援助論Ⅲ	3		＊	＊	佐居　由美
		看護援助論Ⅳ	1		＊		佐居　由美
		看護提供システムⅠ	2			＊	井部　俊子
	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅰ	2		＊		梶井　文子
		生涯発達看護論Ⅱ	2			＊	大森　純子
		地域看護論Ⅰ	2			＊	麻原きよみ
	人間と環境の相互作用の修正	急性期看護論Ⅰ	3			＊	卯野木　健
		急性期看護論Ⅱ	2			＊	小野　智美

※2008年度は、夏季海外語学研修を履修し、英語表現法Ⅲ―S、Ⅲ―W２単位を認定された学生は11名であった。

前期　４月11日㈮～７月31日㈭

後期　10月１日㈬～12月19日㈮、１月13日㈬～２月18日㈬

3）Class　2010　第３学年

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	人間と文化	倫理学		2	＊		鶴若　麻理
		宗教学		2	＊		岩田　成就
	人間と言語	文献講読―B		1	＊		菱田　治子
		英語表現法Ⅲ―W		1	＊		深谷　計子
		異文化コミュニケーション		2	＊		園城寺康子 助川　尚子
		体育Ⅱ		1	＊		大濱あつ子 菊田　文夫
基礎科目	人間と健康	◎家族関係論	2		＊		瀬戸屋　希
	環境と健康	◎環境論Ⅰ	2		＊		古川　恵一
		◎保健医療福祉行政論	3		＊		伊藤　和弘 田上　豊
		保健医療福祉政策論	1		＊		星　旦二
専門科目	看護の基本	＊看護提供システムⅠ	2		＊		井部　俊子
	人間の環境と相互作用の保持・強化	家族発達看護論Ⅰ	3		＊		大隅　香
		地域看護論Ⅱ	3		＊		大森　純子
		学校保健		2	＊		岩辺　京子
	人間の環境と相互作用の修正	リハビリテーション看護論Ⅰ	2		＊		糸井　和佳

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
	人間と環境の相互作用の回復・保護	慢性期看護論Ⅰ	4		＊		飯岡由起子
		慢性期看護論Ⅱ	3		＊		瀬戸屋　希
	臨地実習	臨地実習A	2			＊	平林　優子
		臨地実習B	2			＊	永森久美子
		臨地実習C	2			＊	卯野木　健
		臨地実習D	2			＊	飯岡由起子
		臨地実習E	2			＊	梶井　文子
		臨地実習F	2			＊	瀬戸屋　希
		臨地実習G	3			＊	小林　真朝

＊印…編入生のみのクラス
◎印…編入生（３年生以外と合同クラス）

前期　４月11日㈮～７月31日㈭

後期　10月１日㈬～12月19日㈮、１月13日㈬～２月18日㈬

4）Class　2009　第４学年

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	人間と情報	統計学演習		2		＊	菊田　文夫
		体育Ⅱ		1	＊		大濱あつ子 菊田　文夫
専門科目	基本の看護	看護提供システムⅡ		1	＊		井部　俊子
		看護技術論		1	＊		菱沼　典子
	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅲ		1	＊		開講せず
		家族発達看護論Ⅱ		1	＊		堀内　成子
		地域看護論Ⅲ		1	＊		大森　純子
	人間と環境の相互作用の修正	慢性期看護論Ⅲ		1	＊		市川和可子
		ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ看護論Ⅱ		1	＊		大熊　恵子
	人間と環境の相互作用の回復・保護	急性期看護論Ⅲ		1	＊		卯野木　健
		ターミナルケア論	3		＊		小松　浩子
	臨地実習	総合実習	2		＊		看護担当教員
	看護学統合	看護研究Ⅰ	2		＊		松谷美和子
		看護研究Ⅱ		3		＊	専任教員
		総合看護		3		＊	専任教員
		看護政策論	2			＊	井部　俊子

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
専門科目	看護学統合	看護ゼミナール		1	＊		苦痛を伴う検査や処置を受ける子どもと家族の看護 （小野智子） 老年看護学 （亀井智子） 老年期の看護援助に関する文献学習 （梶井文子） 看護教育学 （松谷美和子） 国際看護 （長松康子） 学校保健 （岩辺京子） 生活行動が障害された患者とその家族への看護 （大久保暢子） 看護技術習得のあり方 （佐居由美） 遺伝看護 （有森直子） 性教育 （片岡弥恵子）

前期　４月11日㈮～７月31日㈭（随時）

後期　10月１日㈬～12月19日㈮、１月13日㈬～２月18日㈬（試験期間　随時）

5）Class　2011　学士編入12回生

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
教養科目	人間と文化	キリスト教概論	2		＊		上田　憲明
	人間と情報	統計学		2	＊		菊田　文夫
		情報処理演習		2	＊	＊	大津　洋
	体育	体育Ⅱ		1	＊		大濱あつ子 菊田　文夫
専門科目	人間と健康	○生涯発達論Ⅰ	2		＊		平林　優子
		○生涯発達論Ⅱ	2		＊		亀井　智子
		形態機能学	4		＊		大久保暢子 鈴木　高祐
		形態機能学演習	2			＊	大久保暢子 鈴木　高祐
		生化学	2		＊		小浪悠紀子
		栄養学	1			＊	余語　典子
		集団力動論	1		＊		萱間　真美
		ﾋｭｰﾏﾝｾｸｼｬﾘﾃｨⅠ	1			＊	有森　直子
		ﾋｭｰﾏﾝｾｸｼｬﾘﾃｨⅡ		1		＊	有森　直子
		生命倫理	1		＊		関　正勝
	環境と健康	環境論Ⅱ	2			＊	中山　和弘
		疾病・治療概論	2		＊		白木　和夫 川名賢一郎
		疾病・治療各論	3			＊	小松　浩子

○印…編入生のみのクラス

授業科目			単位数 必修	単位数 選択	学期 前期	学期 後期	担当教員
専門科目	看護の基本	生活と健康	2		＊		菱沼　典子
		看護学概論	2		＊		菱沼　典子
		看護援助論Ⅰ	3		＊		安ヶ平伸枝
		看護援助論Ⅱ	3			＊	安ヶ平伸枝
		看護援助論Ⅲ	3		＊	＊	佐居　由美
		看護援助論Ⅳ	1			＊	佐居　由美
	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅰ	2		＊		梶井　文子
		生涯発達看護論Ⅱ	2			＊	大森　純子
		地域看護論Ⅰ	2			＊	麻原きよみ
	人間と環境の相互作用の修正	急性期看護論Ⅰ	3			＊	小松　浩子
		急性期看護論Ⅱ	2			＊	小野　智美

前期　４月11日㈮～７月31日㈭

後期　10月１日㈬～12月19日㈮、１月13日㈬～２月18日㈬

表４　学部選択科目履修状況

授業科目			学年	人数
教養科目	人間と文化	キリスト教倫理	１年	10
		音楽	１年・２年	3
		美術	１年・２年	18
		文学	１年・２年	13
		哲学	１年	4
		倫理学	２年・３年	5
		宗教学	２年・３年	19
	人間と社会	歴史学	１年・２年	7
		法学（日本国憲法）	１年・２年	21
		教育原理	１年	43
		教育方法の研究	１年	16
		社会学	１年	53
		心理学	１年	44
		教育制度論	２年	12
		カウンセリング概論	２年	14
		教職概論	２年	12
		女性学	２年	38
	人間と言語	国語表現法	２年	2
		総合英語	１年	14
		英語Ⅲ－A	１年	0
		英語Ⅲ－B	２年	14
		文献講読A	２年	6
		文献講読B	３年	9
		英語表現法Ⅲ－S	２年	0
		英語表現法Ⅲ－W	３年	7
		異文化コミュニケーション	３年	27
		ドイツ語Ⅰ	１年	37
		ドイツ語Ⅱ	２年	8
		中国語	１年・２年	10
	人間と情報	情報科学	１年・２年	開講せず
		統計学演習	４年	7
	人間と自然環境	生物学	１年	22
		物理学	１年	1
		化学	１年	1
	体育	体育Ⅰ	１年	51
		体育Ⅱ	１～４年	52
	総合科目	総合科目Ⅱ（健康科学）	１年・２年	9
		教職総合ゼミ	２年	12

授業科目			学年	人数
専門科目	看護の基本	看護提供システムⅡ	４年	3
		看護技術論	４年	1
	人間と環境の相互作用の保持・強化	生涯発達看護論Ⅲ	４年	開講せず
		家族発達看護論Ⅱ	４年	11
		地域看護論Ⅲ	４年	11
	人間と環境の相互作用の修正	慢性期看護論Ⅲ	４年	1
		リハビリテーション看護論Ⅱ	４年	6
	人間と環境の相互作用の回復・保護	急性期看護論Ⅲ	４年	35
	看護学統合	看護研究Ⅱ	４年	71
		総合看護	４年	17
		看護ゼミナール（障害を持つ子どもと家族の看護）	４年	8
		看護ゼミナール（老年看護）	４年	5
		看護ゼミナール（看護教育）	４年	0
		看護ゼミナール（国際看護）	４年	9
		看護ゼミナール（学校保健）	４年	3
		看護ゼミナール（生活行動が障害された患者とその家族の看護）	４年	5
		看護ゼミナール（看護技術習得のあり方）	４年	0
		看護ゼミナール（老年期の看護援助に関する文献学習）	４年	11
		看護ゼミナール（遺伝看護）	４年	10
		看護ゼミナール（性教育）	４年	4

表５　2008年度　実習施設一覧表

	授業科目	単位数	施　設　名
1	看護援助論Ⅳ	1	聖路加国際病院
2	臨地実習 A	2	聖路加国際病院
3	臨地実習 A	2	済生会横浜市東部病院
4	臨地実習 A	2	神奈川県立 こども医療ｾﾝﾀｰ
5	臨地実習 B	2	聖路加国際病院
6	臨地実習 B	2	東府中病院
7	臨地実習 C	2	聖路加国際病院
8	臨地実習 D	2	聖路加国際病院
9	臨地実習 E	2	永生会永生病院
10	臨地実習 E	2	救世軍ブース記念病院
11	臨地実習 E	2	ブース記念老人保健施設 グレイス
12	臨地実習 E	2	介護老人保健施設リハポート明石
13	臨地実習 F	2	東京武蔵野病院
14	臨地実習 G	3	杉並区荻窪 保健センター
15	臨地実習 G	3	杉並区高円寺 保健センター
16	臨地実習 G	3	杉並区高井戸 保健センター
17	臨地実習 G	3	杉並区上井草 保健センター
18	臨地実習 G	3	豊島区池袋保健所
19	臨地実習 G	3	練馬区大泉 保健相談所
20	臨地実習 G	3	練馬区関 保健相談所
21	臨地実習 G	3	練馬区北 保健相談所
22	臨地実習 G	3	練馬区石神井 保健相談所
23	臨地実習 G	3	足立区竹の塚 保健総合センター
24	臨地実習 G	3	足立区江北 保健総合ゼンター
25	臨地実習 G	3	千代田区 千代田保健所
26	臨地実習 G	3	中央区日本橋 保健センター
27	臨地実習 G	3	中央区中央区保健所
28	臨地実習 G	3	中央区月島 保健センター
29	臨地実習 G	3	江戸川区中央 健康サポートセンター
30	臨地実習 G	3	江戸川区東部 健康サポートセンター
31	臨地実習 G	3	江戸川区清新町 健康サポートセンター
32	臨地実習 G	3	江戸川区葛西 健康サポートセンター
33	臨地実習 G	3	中野区中部 保健福祉センター
34	臨地実習 G	3	中野区南部 保健福祉センター
35	臨地実習 G	3	中野区北部 保健福祉センター
36	臨地実習 G	3	中野区鷺宮 保健福祉センター
37	臨地実習 G	3	港区みなと保健所
38	臨地実習 G	3	おもて参道 訪問看護ステーション
39	臨地実習 G	3	浅草医師会立 訪問看護ステーション
40	臨地実習 G	3	医師会立中央区 訪問看護ステーション
41	臨地実習 G	3	医師会立品川区 訪問看護ステーション
42	臨地実習 G	3	セコム駒込 訪問看護ステーション
43	臨地実習 G	3	セコム高輪 訪問看護ステーション
44	臨地実習 G	3	セコム田園調布 訪問看護ステーション
45	臨地実習 G	3	セコム吉祥寺 訪問看護ステーション
46	臨地実習 G	3	セコム練馬 訪問看護ステーション
47	臨地実習 G	3	練馬区医師会立 訪問看護ステーション
48	臨地実習 G	3	自由が丘 訪問看護ステーション
49	臨地実習 G	3	白河訪問看護 ステーション
50	臨地実習 G	3	綾瀬訪問看護 ステーション

	授業科目	単位数	施　設　名
51	臨地実習 G	3	板橋ロイヤル訪問看護ステーション
52	臨地実習 G	3	白十字訪問看護ステーション
53	臨地実習 G	3	あすか山訪問看護ステーション
54	臨地実習 G	3	訪問看護ステーションけせら
55	臨地実習 G	3	訪問看護ステーションみけ
56	臨地実習 G	3	訪問看護ステーションけやき
57	臨地実習 G	3	訪問看護ステーションさぎそう
58	臨地実習 G	3	城北訪問看護ステーション
59	臨地実習 G	3	東電さわやか訪問看護ステーション中野・訪問看護
60	臨地実習 G	3	訪問看護ステーション芦花
61	臨地実習 G	3	岩本町訪問看護ステーション
62	臨地実習 G	3	新みさと訪問看護ステーション
63	総 合 実 習	2	聖路加国際病院
64	総 合 実 習	2	訪問看護ステーションパリアン

	授業科目	単位数	施　設　名
65	総 合 実 習	2	中央区明正小学校
66	総 合 実 習	2	東京武蔵野病院
67	総 合 実 習	2	聖路加国際病院訪問看護ステーション
68	総 合 実 習	2	共同作業所ひやしんす城北
69	総 合 実 習	2	永生会永生病院
70	総 合 実 習	2	川崎市立井田病院
71	総 合 実 習	2	東芝ﾋｭｰﾏﾝｱｾｯﾄｻｰﾋﾞｽ(株)保健支援事業部
72	総 合 実 習	2	小鹿野町保健福祉センター
73	総 合 実 習	2	NTT 東日本首都圏健康管理センター
74	総 合 実 習	2	訪問看護ステーションあかし
75	総 合 実 習	2	多摩たんぽぽ訪問看護ステーション
76	総 合 実 習	2	助産婦石村
77	総 合 実 習	2	森田助産院
78	総 合 実 習	2	かもめ助産院

3．カリキュラム評価

新カリキュラムが開始されて以来、毎年カリキュラム評価を行っている。本年度は前後期に例年の通り、①学生による科目評価、②学生による実習評価、③教員による科目評価、④実習受入機関のスタッフによる評価を行った。2000年度から2004年度までの５年間の総括評価をもとに、10年を経過したカリキュラムの全面的な見直しを行うことになり、カリキュラム2010の小委員会を編成し、活動を行った。

課題となっているカリキュラム評価の公表については、カリキュラム運用委員会で検討した結果、2008年度より学内イントラ上に公表することが決定され、詳細について検討した。各科目ごとの項目の平均値と自由記載に対する教員の所見を学期ごとに学内イントラネットに公表することになり、まず、2008年度前期分について公表された。

４．立教大学との単位互換

１）2001年度より、本学学生の立教大学全学共通カリキュラム（教養科目に相当）の履修が開講され、履修を進めている。本年度の立教大学特別聴講学生の履修状況は、**表５**および**表６**のとおりであり、1人１科目から２科目履修していた。履修科目数は昨年度と比べ２倍であったが、前期は履修者３名、後期は０名と少数であった。前期終了時にアンケートを実施した結果、キャンパスが遠い、興味ある授業がない、移動が大変である等が履修者が少ない主な理由となっている。

表５　立教大学履修者数

授　業　科　目	履修者数
対人関係の心理	3
現代社会と環境	2

表６　立教大学科目履修状況

	前期	後期
開講科目数	23	19
履修科目数	2	0
履修者数	3	0
単位習得率	100％	

２）2002年から立教大学において全学共通カリキュラム［総合A群・環境と人間に属する科目「人間と看護」］２単位を開講している。後期月曜日１限目に各看護専門領域教員10名および非常勤講師１名が担当するオムニバス方法をとっている。履修登録者189名のうち単位取得者169（89.4％）名であった。

今後、立教大学との単位互換をどのように進めていくか、立教大学全学共通カリキュラム運営センター部長と教務部長が10月に意見交換を行った。考えられる方法が挙げられ、今後も話し合いの機会を持ち検討していくことになった。

５．安全対策

リスクマネージャーを学部長とし、学事協議会が安全対策に関する協議や対応の任に当たった。本年度の事故報告書は、実習関連10件、教務関連３件、健康管理１件の合計14件であった。

１）実習関連

患者の安全対策にかかわるインシデント報告は以下のとおりで、いずれも後遺症や入院期間を延長する治療は必要としなかった。

基礎看護実習（１年次）の後に学生に発疹が認められ感染源になる疑い１件。看護援助論Ⅳ（２年次）で、車椅子移乗の際に不注意による下肢の外傷が１件。臨地実習（３年次）では、次の５件の報告があった。①車椅子からの転落②患者持ち物の破損③皮膚の損傷④酸素の供給ミス（数分間）⑤移動時の外傷。総合実習（４年次）では、子どもの転落の報告ミス１件。大学院（修士１年）の実習では、①針刺し事故②湿布の貼付ミスによる皮膚の損傷の２件であった。

以上の報告を受けて、インシデントを起こした学生と教員とが十分に話し合うこと、発生の原因や背景を再度確認しあうこと、どのような思考や行動をとれば最良であったかを振り返って考えること、再発防止のために臨床現場と話し合うこと等、学生に対して教育的に関わることを確認した。

２）教務関連

教務事務のインシデントには、次の３件の報告があった。

①　「博士学位論文内容の要旨と審査結果の要旨第25集」を学外へ公表したところ、修了生２名から誤植の指摘があった。印刷業者と教務部との連絡・確認作業が適切ではなかったためであった。当該修了生には説明と謝罪を行い、訂正版の印刷を行い再配布した。再発防止のための手順の確認等の対策を教務部で講じた。

②　看護実践開発研究センターにおいて、認定看護師教育の実習先に送付するべき研修生の予防接種歴調査票・健康診断書の取り扱いに際して、異なる研修生の感染情報を送付するというインシデントが起こった。同姓の名前の確認が不十分であったためであった。

実習先の医療機関と当該研修生に対しては経過説明と謝罪を行った。このインシデントを通じて、認定看護師教育課程研修生の個人情報の保管場所と方法、個人情報送付時の手順等の再確認が行われた。

③　学生の提出リポートの紛失（盗難）および書き写しの不正行為が発覚した。授業科目の評価の一部となるリポートを担当教員の研究室の廊下の引き出しに提出させていた。廊下の引き出しは、鍵がなく誰でも持ち出せる状態にあったことが、盗難を招いた。被害にあった学生に対しては、状況を説明し謝罪した。授業科目に関連するリポートは、期限を決めて教務部に提出し保管する原則の徹底を再確認した。なお、不正行為を行った学生に対しては、「学生懲戒処分規程」に基づき、学事協議会および教授会の議を経て処分を決定した。

３）健康管理関連

教員と大学健康管理部とが連携して行う仕事で、連絡網等の不備が指摘されるインシデントが起こった。臨地実習の実習先で学生が意識を失い救急搬送となった。適切な治療が行われて回復したが、検討課題が明白になった。

①実習施設の学生担当者から大学の実習担当者への連絡体制②事前の学生の健康状況から予見することができなかったか③学生の既往歴を実習先に事前に伝えるべきかどうか等。

その結果、①実習中の学生に健康上の問題が起きた場合の連絡網の確認②健康管理部での実習前のオリエンテーションの充実③学内実習担当者会議での情報交換等の対策を再確認した。

上記のように、本年度は実習関連、教務関連、健康管理関連のインシデントが起こり、安全対策の必要があった。報告を受けて、被害を受けた人への説明と謝罪を行うと同時に、詳細な記録を残しインシデント発生の背景になったシステム上の不備を見直し、どのように防ぐかの改善策を講じ、再発防止に取り組んだ。

今後も、安全対策はますます必要になってくると考えられる。教職員全体でヒューマンエラーを認識し、インシデントを惹起するシステム見直し、必要な手順を遵守し、事故の再発防止を目指して考え、教え、行動する組織を目指したいと考える。

６．卒業の状況

2008年度学部卒業生は88名（一般入学生69名＋学士編入生19名）であった。１年次入学生は70名であったが、４名が１級下がり、１名が退学、３名が上級より加わった。

学士編入10回生は20名の入学で、１名が１級下がった。

卒業生の修得単位および国家試験の結果は**表７、８**のようであった。

表７　平均修得単位数（学士編入生を除く）

		卒業所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
教養科目	教養科目		19	26	17
	外国後科目	10	10	13	10
	小　計	28	30	38	28
基礎科目		31	32	32	32
専門科目		69	70	72	69
総　計		128	132	140	130

表８　国家試験結果　（9月卒業生を除く）

	受験者（名）	合格者（名）	合格率（%）
保健師	87	86	98.9
看護師	88	86	97.7

７．カリキュラム運用委員会

2008年度カリキュラム運用委員会は、定例会議を11回開催した。委員は各領域の責任者16名と教務課長（書記）で構成され、教務部長が委員長を務めた。委員が欠席の場合、その領域から代理が出席した。

委員会では例年同様、本年度の教育課程運用に関する事項（学生の履修上の課題、臨時助教の人事等）、単位認定に関する事項、次年度の教育課程運用に関する事項（単位認定者の決定、非常勤講師の人事、日程、時間割）を扱った。また、本年度は科目等履修生の履修科目の検討（看護研究Ⅱを履修科目とした）、祭日等により授業回数（時間）が規定に満たない科目に関する対応の検討と補講日の設定、立教大学全学共通カリキュラム履修生の減少に伴う履修方法のあり方に関する検討、カリキュラム改訂に関する小委員会（カリキュラム2010）からの報告についての検討を行った。

カリキュラム2010については、８名で構成され、12回の会議を開催した。また、FD研修会およびF&Sミーティング（教職員会議）の際に、現行カリキュラムの問題点および新しいカリキュラムへの要望等意見を採集し、検討を行った。しかし、カリキュラム改訂が現行カリキュラムの小規模な改訂か、教育理念から見直す大規模な改訂か、教員間で合意が得られていないことがわかった。そこで、カリキュラム2010からの提案を受けて、カリキュラム改訂の方向性について再検討を行った。その結果、教育理念や卒業生の特性要件の大枠を踏襲しながら改訂することとし、期限は2011年３月までとなった。カリキュラム改訂小委員会はカリキュラム2011とし、メンバーを増やして来年度に継続することとなった。

総合実習、看護研究Ⅱ・総合看護の担当決定のため特別会議をそれぞれ１回開催した。

８．実習室委員会

本委員会は４名で活動し、実習室運営に関するマニュアルに基づき運営した。2008年度の活動内容について報告する。

１）予算について

本年度は文部科学省補助金（平成20年度　教育・学習方法改善支援経費）により、パラマウントスイングアーム介助バー６台、ベッドサイドレール３個、Neonatal Resuscitation Baby１台、注射のシミュレータかんたんくん１台、摘便・浣腸モデル１台、アトム輸液ポンプ１台を購入した。

２）物品および教材の管理について

⑴　医療機器・教材の定期点検

従来どおり、年２回（８月、３月）心電図、呼吸器、シリンジポンプ等は聖路加国際病院のCE に点検を依頼し、年１回（３月）、蘇生人形、レサシ人形等の点検を業者に依頼した。そのうち蘇生訓練用学童シミュレーターの呼吸フィルターが破損していたため修理を依頼した。そのほかの蘇生人形、レサシ人形、呼吸音聴診シミュレーターにも破損部位が報告されたが、修理依頼は次年度の委員会で報告内容を検討した後に行う予定である。通電・充電・作動については、自己学習支援員により学内で毎月行っている。

⑵　物品の貸し出し、破損の管理について

物品の貸し出しについては、教務にある物品持ち出し票を用いて管理を行った。また、貸し出す際は、物品名と個数、番号を票に記載してもらい、物品が同時に多く貸し出された場合の確認ができるように配慮した。なお、物品持ち出し票の管理は教務で行い、物品貸し出し後の返却状況の管理は自己学習支援員が行い、問題はなかった。本年度、多く貸し出された物品はアネロイド血圧計やステート、高研ベビー人形、蘇生人形、体温計、乳房触診モデル、助産演習物品等であった。破損や修理等の管理に関しては、実習室委員間で月ごとに担当者を決め、ポスターで学内に周知し、窓口を決めて管理を行った。また、修理依頼物品リストを作成し、一貫して管理できるようにした。

⑶　実習室インベントリー

2009年３月11日㈬10時から14時まで、教員（看護系担当助教および有志の准教授、研究センター助教）、学生アルバイト、自己学習支援員総勢47名により、地下アーツルーム、倉庫、シミュレーションルーム、診察室、自己学習室、準備室および６階アーツルームについて実施した。例年どおり、領域ごとの特徴的な物品の管理は担当領域の教員が行い、チェック体制はスムーズであった。昨年に引き続き、古い看護実習に関する物品（湿布しぼり）をアーカイブ関連（歴史的資産の保存）棚に保管した。また、地域看護学領域で使用しなくなった古い型のアネロイド式血圧計11台を、国際看護学領域を通してフィリピンに寄付することになった。

３）清掃について

例年どおり夏・春の年２回、業者と協力し実習室の清掃及び整備を地下アーツルーム、倉庫内、シミュレーションルーム、診察室、自己学習室、準備室、和室、６階アーツルームにおいて実施した。床清掃とともに各部屋の棚と各ベッドの清掃、床頭台、オーバーテーブルなどの整備も行った。また、倉庫のワックスかけは年１回行った。

４）自己学習支援員について

本年度の自己学習支援員の勤務は原則として毎火曜日および木曜日13時～19時とし、学生が卒業や休暇となる年度末の３月には配置しなかった。また援助論の実技試験前、臨地実習前など学生のアーツルーム利用頻度が増える時期にあわせて、人数や時間帯、曜日を変更し、さらに夏休み時期も配置した。この結果、支援員の指導件数は**表９**のとおりであった。総数は昨年度の利用状況よりやや増加している。これは、12月と１月に実技試験前の自己学習数の増加を見越し、支援員の人数を増やしたり、年明け早々から支援員を配置したことにより、支援員の指導件数が増加したと考えられる。また昨年度から助産課程の大学院生の利用も定着しつつある。

表９　2008年度実習室自己学習支援員指導件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	*学年別総計*
１学年	0	0	0	0	0	0	3	10	103	241	34	0	*391*
２学年	0	20	203	34	0	9	12	26	42	0	3	0	*349*
３学年	0	2	0	0	0	59	4	4	10	5	8	0	*92*
４学年	0	0	1	3	0	0	0	0	0	2	0	0	*6*
月間総計	*0*	*22*	*204*	*37*	*0*	*68*	*19*	*40*	*155*	*248*	*45*	*0*	*年間計　838*

主な学習内容

５月	ベッドメーキング
６月	ベッドメーキング、ベッドバス、体位変換、移動、陰部洗浄、皮下・筋肉・静脈注射、採血
７月	皮下注射、採血
９月	ベッドメーキング、沐浴、ベッドバス、移動、バイタルサイン測定、経管栄養、便器・尿器の当て方、輸液管理、採血、吸引、摘便、三方活栓の使い方
10月	体位変換、バイタルサイン測定、フィジカルアセスメント、導尿
11月	フィジカルアセスメント、経管栄養、便器・尿器の当て方、血糖測定、人工呼吸管理
12月	浣腸、導尿、便器・尿器の当て方、血糖測定、吸引、食事介助
１月	浣腸、導尿、血糖測定、吸引、外傷管理
２月	沐浴、フィジカルアセスメント、吸引

上記利用状況と別に、大学院生（助産課程）の利用は６月が11人、10月が１人であった。

このように、実習室委員会では、学生の自己学習の支援、器材・物品管理等に関して実習室委員である専任教員のみの対応では限界があり、自己学習支援員の存在は不可欠である。今年度は聖路加国際病院勤務経験のある卒業生、他大学大学院生（臨床経験あり）により支援員業務を継続的に行う人材を確保した。支援員の確保については、今後も広くのリクルート活動を継続していく。また、支援員の氏名と顔写真をポスターにしたり、支援員の勤務シフト表を掲示することで、学生や教員が親近感をもち、相談しやすくなるよう周知に努めた。

５）その他

実習室委員会では、アーツルームと物品の活用や管理に対する学生の意見や要望を委員会活動に反映するために、学生実習室委員会の必要性について検討したが、発足には至らなかった。

９．実習のあり方検討会

１）実習のあり方検討会の目的

実習のあり方検討会では、患者の在院日数の短期化、医療の高度化･複雑化、実習における看護学生の経験知の低下のなかで、看護基礎教育における実習のあり方を再検討することを目的として発足した。現在、主に以下の２点について検討している。

⑴　学生の臨床への適応を促進するための方策の検討

⑵　臨床側と大学側との連携強化

２）検討会の構成メンバー

本検討会のメンバーは､聖路加看護大学教員および聖路加国際病院看護職員で構成され､現在、11 名（聖路加看護大学６名、聖路加国際病院５名）である。

３）活動内容

2008年度は､「①臨床側と大学側の連携を強化するとともに､②学生の臨床への適応を促進するための演習・臨地実習モデルを構築し、導入、評価をしていくこと」を目的とし活動した。

⑴　本年度の活動概要

昨年度（2007年度）、実施した演習プログラムの実施状況を見直し、内容を洗練させ演習を実施した〔研究課題「看護基礎教育における臨地実習のあり方に関する研究：新人看護師への職業適応促進のための演習プログラムの開発08（研究倫理審査委員会承認番号08-026)」〕。本演習プログラムは、具体的な実習･演習プログラムの一部であり、統合的な内容で行う実習状況の設定を前提とし、複数の患者を受け持ち、タイムマネージメントの必要性を学ぶことを目的とした演習である。今年度の演習は、昨年度同様、聖路加国際病院消化器センターにて実施し、聖路加国際病院の看護師等の協力を得て、プリセプター役・患者役を担当してもらい、よりリアリティの高い臨床現場に近い演習状況を設定した。昨年度の演習結果や、昨年度の演習経験者のフォーカスグループインタビューの評価をふまえ、プログラムの内容を見直した。与薬の基本を基礎演習とし、多重課題演習では複雑性に応じて中級・上級の２段階を設けた。効果的に演習が行えるよう事前学習資料を配布した。本演習のカリキュラムへの導入を想定し演習可能な人数を10名に設定した。昨年度、卒業式前日の３月に実施したことで参加者が少なかった反省を踏まえ、７月より募集を開始して10月に演習を実施した。

その結果、10名の学生の応募があった（後に辞退者があり、全日程の演習を終了した学生は８名であった)。演習に参加した学生や看護師からは、臨床現場への橋渡しとして効果的なプログラムであると評価された。与薬の基本では、既習の内容にもかかわらず、時間制限や現実的な種々の対応が必要な状況下では、安全な与薬技術を実施することが困難で、基本を呼び覚ます体験ができたこと、点滴の操作など、これまで実際には行えなかった内容を実施できたことなどに意義を感じていた。また、「プリセプター役からのフィードバックがとてもよかった」「前年度参加者からのよりリアルなフィードバックもあり演習の目的に効果があった」などが聞かれた。また多重課題の演習では、演習目的にそった内容を検討したことで、参加学生はほぼ時間内で対応すべき内容をこなすことができた。順序が後半の学生ほど他学生の演習を見学する機会を得られ、より自分の実践状況を描くことができ、前半の学生と比べ落ち着いて演習にのぞんでいた。さらに多重課題は２パターンの演習を午前と午後に分けて行ったが、午後の

演習では、午前の経験が活かされ、状況への対応のぎこちなさも減少し、反復経験による学習効果の手ごたえが得られた。

４）今後の方向性

2009年度は、これまでの活動成果をふまえ、2011年のカリキュラム改定に向け、具体的な提案を行っていく予定である。

【活動成果の公表】

［報告書］

・看護基礎教育における実習のあり方検討会　あり方検討会活動報告書（2004 年度～2007 年度）：2008 年 4 月.

［学会発表］

・新人看護師への移行演習プログラム開発プロセス［実践報告］：飯田正子、松谷美和子、 高屋尚子、平林優子、 寺田麻子、 西野理英、 桃井雅子、 佐居由美、 卯野木健、 井部俊子、 佐藤エキ子、第 12 回聖路加看護学会学術大会（2008 年 09 月）.

・看護学生の卒直後と卒後３ヶ月の「臨床実践能力」の比較：佐居由美、松谷美和子、平林優子、村上好恵、桃井雅子、西野理英、寺田麻子、高屋尚子、飯田正子、佐藤エキ子、井部俊子、第 39 回日本看護学会：看護管理（2008 年 10 月）.

［論文］

・桃井雅子、佐居由美、松﨑直子、松谷美和子、平林優子、村上好恵、高屋尚子、飯田正子、寺田麻子、西野理英、佐藤エキ子、井部俊子：新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価（１）－コミュニケーション･スキル習得のための演習－、聖路加看護学会誌、第 12 巻第２号、41～48, 2008.

・村上好恵、平林優子、飯田正子、松谷美和子、佐居由美、桃井雅子、松﨑直子、高屋尚子、西野理英、寺田麻子、佐藤エキ子、井部俊子：新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価（2）－状況設定の中での与薬の基本演習－、聖路加看護学会誌、第 12 巻第２号、50～56，2008.

・寺田麻子、松谷美和子、高屋尚子、西野理英、飯田正子、佐藤エキ子、平林優子、松﨑直子、村上好恵、桃井雅子、佐居由美、井部俊子（2008）、新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価（３）－多重課題シナリオによる演習－、聖路加看護学会誌、第 12 巻第２号、58～63，2008.

・佐居由美、松谷美和子、平林優子、西野理英、寺田麻子、高屋尚子、飯田正子、桃井雅子、佐藤エキ子、井部俊子：看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果～看護学生から臨床看護師へ～、聖路加看護学会誌、第 13 巻第１号、24～33，2009.

［2008年度　検討会メンバー］

聖路加国際病院；佐藤エキ子、高屋尚子、西野理英、寺田麻子、飯田正子

聖路加看護大学；井部俊子、松谷美和子、平林優子、佐居由美、大隅 香、卯野木健

10. 養護教諭一種検討会

［2008年度委員］

及川郁子（委員長）、麻原きよみ、伊藤和弘、菊田文夫、廣瀬清人、留目宏美、岩辺京子（非常勤講師）、森川雪絵（教務）

1）目的

養護教諭一種検討会は、2006年度より開講した養護教諭一種取得に関する選択科目の運用の検討ならびに運用の過程で生じる問題を検討するための委員会である。本委員会は学生の履修に関わる委員会であるため、カリキュラム運用委員会と密に連絡を取り合いながら行われる。

開講して３年目にあたる今年度の重点課題は、以下の２点であった。

⑴　履修者の養護実習校の決定

⑵　養護実習Ⅰ・Ⅱの実習内容や実習方法の検討による実習要項の作成

2）活動内容

⑴　科目履修に関するオリエンテーションの充実

養護教諭一種取得に向け、必要な履修科目等が各学年においてきちんと履修できるよう、新学期はじめに１年生から３年生にオリエンテーションを行った。

⑵　実習校の決定

実習校の決定は、３年次に行われる。今年度は、以下のプロセスを踏んで行われた。

①　新年度開始時のオリエンテーション

新年度開始時に養護実習の履修の有無を確認し、４月末に養護実習履修願いと養護実習校を決定するための手順等の説明を行った（履修願い、養護実習希望先に関する書式の作成）。その際、実習校の確保の目的から、出身校への申請を勧めることとした。

②　実習予定校の申請

５月から学生各自が実習希望校への依頼を行い、その結果、16名の履修者予定者のうち、８名が東京都公立校以外の出身校、８名が東京都公立校への希望となった。

③　東京都公立校以外の実習校への手続き

東京都公立校以外の実習校を希望し、内諾を得られた学校については、実習依頼ならびに承諾書の文書の取り交わしを８月末までに行った(書式作成)。

④　東京都公立校への申請

東京都公立校の実習校希望者８名については、学生の希望に沿って９月末に一括申請を行った（小学校４校、中学校２校、高等学校１校)。

12月の結果通知において、決定者２名、条件付・実習日相談者４名、否２名であった。条件付・実習日相談者については、各校に問い合わせなどを行った。否の学生を含め３名について、補充申請を12月末に行い、2009年２月に全員実習校が確定した。

⑶　養護実習要項の作成

実習要項の作成に当たっては、他学校の要項などを参考としながら岩辺京子非常勤講師と留目宏美助教が中心になって実習内容、方法、記録について検討したものを、全体で討議し作成した。その際、養護実習は総合実習の一部となっているため、５単位を養護実習Ⅰ（２単位総合実習）と養護実習Ⅱ(３単位選択)に分けているが、実習要項は５単位の学習と考え作成した。

実習要項の作成と平行して、事前学習の内容、評価方法、カンファレンス等についても検討を行い、要項に盛り込んだ。

⑷　その他の活動

・学士編入生の教職免許申請に関する科目の単位認定を行った。
・実習校の選定や実習内容など学生の不安や質問に適宜応じられるようにした。
・東京都公立校の実習校確保が難しかった場合を考え、私立学校数校の内諾を得た。
・日本養護教諭養成協議会2008年度総会に菊田文夫准教授と留目助教が出席した。
・養護に関する図書や雑誌の購入に関する検討を行った。
・教職総合ゼミに関する科目内容の変更について菊田文夫准教授を中心に検討を行った。

３）検討課題

今年度の活動過程で今後検討を要する課題について

①実習期間について：実習期間が、現在の総合実習の時期では遅い。今回依頼した多くの学校が、５月中頃から６月にかけて実習生を受け入れており、７月は定期試験や夏休みになるため不適であることがわかった。また、実習受け入れ期間が合わないために断られた学生もいた。

②養護実習と総合実習との分離：養護実習の履修決定が３年前期に行われるため（実習校の申し込みの関係上）、総合実習の履修選択を行う時期に迷う学生がいた。また、養護教諭一種資格取得の学生が例年10名以上いることは、実習校の確保、実習期間の問題などもあり、分けたほうが検討しやすい。

③養護教諭一種に関する専任教員の不在：養護教諭一種の科目履修、実習については委員会で検討を行っているが、学生相談の窓口、実習校との調整など、専任教員による対応が望ましいと考える。

養護教諭一種取得に関する履修については、まだ４年経過していないこと、４年次の実習は初めての実習であり現在検討している委員が実習担当をしていくことが望ましいと考え、次年度も引き続き同じ委員構成で、養護教諭一種取得に関する履修について検討していくことが申し合わされた。

【大 学 院】

1．大学院の教育課程

修士課程と博士課程は区分制で，２年と３年の別個の課程になっている。

博士後期課程は1999年度から、修士課程は2005年度からのカリキュラムに従って学習を進めている。

修士課程では、基盤分野に特別講義（がんと人間と社会）、特別講義（代謝医療と薬物療法）各１単位を新たに開講し、特別講義が５科目の中から選択できるようになった。

1）修士課程

修士課程のカリキュラムは，研究能力の開発と高度な職業能力の開発の２つの目的ごとに修士論文コースと上級実践コースを設けている。カリキュラムは，基盤分野，専門分野に大別され，2005年度より基盤分野を強化し、看護専門分野を細分化したカリキュラムを開始し、基盤分野では看護学の基礎的理論や研究方法ならびに関連諸科学の技法を学び，専門分野ではそれぞれ専攻する看護学の分野での理論や技法を探求する。さらに、修論コースでは看護学特別研究、上級実践コースでは実習、課題研究へと進む。

看護学専攻修士論文コースでは、①基礎看護学、②看護技術学、③成人看護学（急性・慢性）、④老年看護学、⑤国際看護学、⑥地域看護学、⑦看護管理学の７領域、そして上級実践コースでは、①がん看護学・緩和ケア、②老年看護学、③精神看護学、④地域看護学、⑤在宅看護学の５領域に学生が入学し、ウィメンズヘルス・助産学専攻では、修士論文コース、上級実践コースともに助産学の領域の学生が入学し、学習を行っている。社会人入学は看護学専攻が７名入学し、ウィメンズヘルス・助産学専攻は該当者がいなかった。

社会人入学制度は、科目の履修において最低週２度（土曜日を含め）来校し、夜間授業を含め３年間で修了する形としている。社会人と一般の学生が無理なく履修できるよう、看護学研究法、看護倫理の必修科目は週に２度開講している。履修の方法は**表10**に示すとおりである。社会人の場合、３年間の予定が初年度の７月の時点では立たないことが多く、変更が多くなっていることから、社会人に限り次年度以降年度初めに履修届を提出することを可能としている。

2）博士後期課程

博士後期課程のカリキュラムは、基盤分野、専門分野、看護学特別演習、看護学特別研究から構成され、看護学特別演習２単位、看護学特別研究６単位を含む14単位以上の修得が課せられている。入学後１年目が６単位の科目履修にあてられ、その後看護学特別演習、看護学特別研究へと進む。

本年度は、13名（うち５名が社会人入学、１名が外国人留学生）が入学した。指導体制については、入学後改めて指導教員を学生が選択し、原則としてそのまま研究指導の教授となる。また、必要に応じて、学外の研究者にも研究指導を依頼している。

修士課程および博士後期課程のカリキュラムについては、看護師資格を持たない学生の受け入れ、修士課程における上級実践コースの教育課程の検討、およびより専門性を高めるために部門の細分化の検討を行い、2009年度入学生よりカリキュラム改訂を行うことになった。

3）修士課程の履修科目および履修者数

2008年度修士課程の教育課程および履修者数は**表11**のようであった。

4）博士後期課程の履修科目および履修者数

2008年度の博士後期課程教育課程および履修者数は**表12**のようであった。

5）学位論文評価基準

研究科委員会において学位論文にかかる評価基準の検討を行い、明確な基準を設けた。2006年度後期の審査より導入し、2007年度便覧より評価基準を掲載している。

6）科目評価

大学院の授業科目について、学部同様科目評価を行うことが研究科委員会で検討され、評価表を作成し、2006年度後期から実施した。また、その結果と担当教員からのコメントを自己評価委員会がまとめ、2007年度より学内イントラネットに掲載している。

表10　修士課程授業科目、単位数および学年配置（2008年度入学生）

看護学専攻

分野	授業科目		修論コース 単位数 必修	修論コース 単位数 選択	上級実践ｺｰｽ 単位数 必修	上級実践ｺｰｽ 単位数 選択	1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	3年次 前期	3年次 後期
基盤分野	応用形態機能学			2		2	◎		○			
	病態生理学			2		2		◎		○		
	看護心理学	特論		2		2	◎	◎	○	○		
		演習		2		2		◎	◎	○	○	
	看護社会学	特論		2		2	◎	◎	○	○		
		演習		2		2		◎	◎	○	○	
	看護学研究法		2		*2		◎	◎				
	看護理論		2		*2		◎	◎				
	看護倫理			2	*2			◎		○		
	看護情報学			2		2			◎		○	
	応用統計学		2			2	◎					
	フィジカルアセスメント			2		2		◎		○		
	特別講義（健康教育）			1		1		◎		○		
	特別講義（質問紙調査法の原理とその応用）			1		1		◎		○		
	特別講義（国際関係論）			1		1	◎		○			
	特別講義（がんと人間と社会）			1				◎		○		
	特別講義（代替医療と薬物）			1				◎		○		
専門分野	基礎看護学	特論Ⅰ		2			◎		○			
		特論Ⅱ		2				◎		○		
		演習Ⅰ		2			◎		○			
		演習Ⅱ		2				◎		○		
		演習Ⅲ		2					←△→			
	看護技術学	特論Ⅰ		2			◎		○			
		特論Ⅱ		2				◎		○		
		演習Ⅰ		2			◎		○			
		演習Ⅱ		2				◎		○		
		演習Ⅲ		2					←△→			
	看護教育学	特論Ⅰ		2	*2		◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅰ		2			◎		○			
		演習Ⅱ		2				◎		○		
		演習Ⅲ		2					←△→			
	小児看護学	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	成人看護学（急性・慢性）	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2		◎		○		
		演習Ⅱ		2		2	◎		○			
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	がん看護学・緩和ケア	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2		◎		○		
		演習Ⅱ		2		2	◎		○			
		演習Ⅲ		2		2			←△→			

分野	授業科目		修論コース 単位数 必修	修論コース 単位数 選択	上級実践コース 単位数 必修	上級実践コース 単位数 選択	1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	3年次 前期	3年次 後期
専門分野	老年看護学	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	精神看護学	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	国際看護学	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	地域看護学	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	在宅看護学	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
	看護管理学	特論Ⅰ		2	*2		◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎		○			
		演習Ⅱ		2		2		◎		○		
		演習Ⅲ		2		2			←△→			
特別看護研究			8							←△→		
実習					6					←△→		
課題研究					2						←△→	

上級実践コースの必修科目は＊印の中より８単位以上を選択する。
ウィメンズヘルス・助産学専攻の専門分野の科目を10単位を超えない範囲で履修することができる。

・一般は、当該コース ◎ の時期に履修する。
・社会人は、当該コースの ◎ もしくは ○ の時期に履修する。（○ は翌年度入学生のクラスで受講）
・ ←△→ は、一般・社会人とも、担当教員と相談の上、履修時期と期間を決定する。

ウィメンズヘルス・助産学専攻

分野	授業科目		修論コース 単位数 必修	修論コース 単位数 選択	上級実践コース 単位数 必修	上級実践コース 単位数 選択	1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	3年次 前期	3年次 後期
基盤分野	応用形態機能学			2		2	◎		○			
	病態生理学			2		2		◎		○		
	看護心理学	特論		2		2	◎	◎	○	○		
		演習		2		2		◎	◎	○	○	
	看護社会学	特論		2		2	◎	◎	○	○		
		演習		2		2		◎	◎	○	○	
	看護学研究法		2		*2		◎	◎				
	看護理論		2		*2		◎	◎				
	看護倫理			2	*2			◎		○		
	看護情報学			2		2			◎		○	
	応用統計学		2			2	◎					
	フィジカルアセスメント			2		2	◎		○			
	特別講義（健康教育）			1		1		◎		○		
	特別講義（質問紙調査法の原理とその応用）			1		1		◎		○		
	特別講義（国際関係論）			1		1	◎		○			
	特別講義（がんと人間と社会）							◎		○		
	特別講義（代替医療と薬物療法）							◎		○		
専門分野	ウィメンズヘルス	特論Ⅰ		2		2	◎		○			
		特論Ⅱ		2		2		◎		○		
		特論Ⅲ				2			◎			
		演習Ⅰ		2		2	◎			○		
		演習Ⅱ		2		2		◎			○	
		演習Ⅲ		2					←△→			
	助産学	特論Ⅰ		2		2			◎			
		特論Ⅱ		2		2			◎			
		特論Ⅲ				2	◎					
		特論Ⅳ				2	◎					
		特論Ⅴ				2		◎				
		演習Ⅰ		2		2				◎		
		演習Ⅱ		2		2				◎		
		演習Ⅲ		2		2	◎	◎				
		演習Ⅳ				2		◎				
		演習Ⅴ				2		◎				
	国際協働論	特論		2		2			◎			
		演習		2		2				◎		
	コミュニティ論	特論		2		2			◎			
		演習		2		2				◎		
	サービスマネジメント論	特論		2		2			◎			
		演習		2		2				◎		
特別看護研究			8						←△→			
実習					6				←△→			
課題研究					2					←△→		

看護学専攻の専門分野の科目を10単位を超えない範囲で履修することができる。

・一般は、当該コース ◎ の時期に履修する。
・社会人は、当該コースの ◎ もしくは ○ の時期に履修する。（○ は翌年度入学生のクラスで受講）
・助産学上級実践コースは一般入学のみ
・←△→ は、一般・社会人とも、担当教員と相談の上、履修時期と期間を決定する。

表 11　大学院修士課程履修者数

分野	授業科目		修論コース 単位数 必修	修論コース 単位数 選択	上級実践コース 単位数 必修	上級実践コース 単位数 選択	履修者数
基盤分野	応用形態機能学			2		2	15
	病態生理学			2		2	11
	看護心理学	特論		2		2	10
		演習		2		2	5
	看護社会学	特論		2		2	15
		演習		2		2	10
	看護学研究法		2		*2		26
	看護理論		2		*2		26
	看護倫理			2	*2		23
	看護情報学			2		2	2
	応用統計学		2			2	25
	フィジカルアセスメント			2		2	15
	特別講義（健康教育）			1		1	0
	特別講義（質問紙調査法の原理とその応用）			1		1	11
	特別講義（国際関係論）			1		1	4
	特別講義（がんと人と社会）			1		1	5
	特別講義（代替医療と薬物療法）			1		1	4
専門分野	基礎看護学	特論Ⅰ		2			2
		特論Ⅱ		2			2
		演習Ⅰ		2			2
		演習Ⅱ		2			2
		演習Ⅲ		2			1
	看護技術学	特論Ⅰ		2			1
		特論Ⅱ		2			1
		演習Ⅰ		2			1
		演習Ⅱ		2			1
		演習Ⅲ		2			0
	看護教育学	特論Ⅰ		2	*2		25
		特論Ⅱ		2		2	12
		演習Ⅰ		2			0
		演習Ⅱ		2			0
		演習Ⅲ		2			0
	小児看護学	特論Ⅰ		2		2	0
		特論Ⅱ		2		2	0
		特論Ⅲ				2	0
		演習Ⅰ		2		2	0
		演習Ⅱ		2		2	0
		演習Ⅲ		2		2	0
	成人看護学（急性・慢性）	特論Ⅰ		2		2	2
		特論Ⅱ		2		2	3
		特論Ⅲ				2	0
		演習Ⅰ		2		2	3
		演習Ⅱ		2		2	2
		演習Ⅲ		2		2	0
	がん看護学・緩和ケア	特論Ⅰ		2		2	6
		特論Ⅱ		2		2	6
		特論Ⅲ				2	5
		演習Ⅰ		2		2	5
		演習Ⅱ		2		2	5
		演習Ⅲ		2		2	5

分野	授業科目		修論コース 単位数 必修	修論コース 単位数 選択	上級実践コース 単位数 必修	上級実践コース 単位数 選択	履修者数
専門分野	老年看護学	特論Ⅰ		2		2	2
		特論Ⅱ		2		2	1
		特論Ⅲ				2	0
		演習Ⅰ		2		2	2
		演習Ⅱ		2		2	1
		演習Ⅲ		2		2	0
	精神看護学	特論Ⅰ		2		2	7
		特論Ⅱ		2		2	6
		特論Ⅲ				2	4
		演習Ⅰ		2		2	3
		演習Ⅱ		2		2	3
		演習Ⅲ		2		2	3
	国際看護学	特論Ⅰ		2		2	2
		特論Ⅱ		2		2	2
		特論Ⅲ				2	0
		演習Ⅰ		2		2	2
		演習Ⅱ		2		2	1
		演習Ⅲ		2		2	0
	地域看護学	特論Ⅰ		2		2	4
		特論Ⅱ		2		2	4
		特論Ⅲ				2	1
		演習Ⅰ		2		2	4
		演習Ⅱ		2		2	5
		演習Ⅲ		2		2	2
	在宅看護学	特論Ⅰ		2		2	2
		特論Ⅱ		2		2	2
		特論Ⅲ				2	1
		演習Ⅰ		2		2	2
		演習Ⅱ		2		2	2
		演習Ⅲ		2		2	1
	看護管理学	特論Ⅰ		2	*2		23
		特論Ⅱ		2		2	15
		特論Ⅲ				2	0
		演習Ⅰ		2		2	1
		演習Ⅱ		2		2	1
		演習Ⅲ		2		2	0
特別看護研究			8				8
実習					6		10
課題研究					2		10

ウィメンズヘルス・助産学専攻

分野	授業科目		修論コース 単位数 必修	修論コース 単位数 選択	上級実践コース 単位数 必修	上級実践コース 単位数 選択	履修者数
基盤分野	応用形態機能学			2		2	4
	病態生理学			2		2	13
	看護心理学	特論		2		2	0
		演習		2		2	0
	看護社会学	特論		2		2	3
		演習		2		2	1
	看護学研究法		2		*2		16
	看護理論		2		*2		16
	看護倫理			2	*2		16
	看護情報学			2		2	0
	応用統計学		2			2	16
	フィジカルアセスメント			2		2	14
	特別講義（健康教育）			1		1	0
	特別講義（質問紙調査法の原理とその応用）			1		1	3
	特別講義（国際関係論）			1		1	1
	特別講義（がんと人と社会）			1		1	7
	特別講義（代替医療と薬物療法）			1		1	0
専門分野	看護教育学	特論Ⅰ		2		2	7
		特論Ⅱ		2		2	0
	国際看護学	特論Ⅰ		2		2	0
		特論Ⅱ		2		2	0
		演習Ⅰ		2		2	0
	看護管理学	特論Ⅰ		2		2	9
		特論Ⅱ		2		2	3
	ウィメンズヘルス	特論Ⅰ		2		2	0
		特論Ⅱ		2		2	16
		特論Ⅲ				2	0
		演習Ⅰ		2		2	0
		演習Ⅱ		2		2	0
		演習Ⅲ		2		2	0
	助産学	特論Ⅰ		2		2	16
		特論Ⅱ		2		2	16
		特論Ⅲ				2	13
		特論Ⅳ				2	13
		特論Ⅴ				2	13
		演習Ⅰ		2		2	16
		演習Ⅱ		2		2	16
		演習Ⅲ		2		2	16
		演習Ⅳ				2	13
		演習Ⅴ				2	13
	国際協働論	特論		2		2	15
		演習		2		2	9
	コミュニティ論	特論		2		2	16
		演習		2		2	13
	サービスマネジメント論	特論		2		2	13
		演習		2		2	14
特別看護研究			8				3
実習					6		13
課題研究					2		13

表12　博士後期課程履修科目および履修者数

分野	授業科目			単位数 必修	単位数 選択	担当教員	2008年度履修者数
基盤分野	理論看護学				1	田代　順子	13
	看護学方法論			3		田代　順子	13
	心理学方法論				1	安保　英勇	8
	社会学方法論				1	伊藤　和弘	10
	基礎医学方法論				1	白木　和夫	4
	健康科学方法論				1	中山　和弘	10
	高等統計学				1	柳井　晴夫	13
専門分野	基礎系看護学	基礎看護学	特論		2	菱沼　典子	2
			演習		2	菱沼　典子	2
		看護教育学	特論		2	松谷美和子	0
			演習		2	松谷美和子	0
	臨床看護学Ⅰ	小児看護学	特論		2	及川　郁子	1
			演習		2	及川　郁子	1
		母性看護・助産学特論	特論		2	堀内　成子	3
			演習		2	堀内　成子	3
		成人看護学	特論		2	小松　浩子	3
			演習		2	小松　浩子	3
		老人看護学	特論		2	亀井　智子	0
			演習		2	亀井　智子	0
	臨床看護学Ⅱ	精神看護学	特論		2	萱間　真美	0
			演習		2	萱間　真美	0
		地域看護学	特論		2	麻原きよみ・田代順子	3
			演習		2	麻原きよみ・田代順子	3
		看護管理学	特論		2	井部　俊子	1
			演習		2	井部　俊子	1
看護学特別演習				2			13
看護学特別研究				6			13

2．修了の状況（表 13～15）

本年度は、修士論文コース、上級実践コース合わせて34名が修了した（**表13**）。特別看護研究を含め32単位以上の修得が課せられているが、2008年度修了生の修得単位状況は**表14**のとおりである。

博士の学位授与は９名であった。修了生の修得単位状況は**表15**のとおりである。また、１名に論文博士の学位を授与した。

表13　大学院修了者数

修士課程		博士後期課程（学位授与）	博士後期課程（単位取得後退学者）
看護学専攻	19 うち社会人４	9（2）	0
ウィメンズヘルス・助産学専攻	15		

（　）内は学位授与者のうち単位取得後退学後再入学し学位を受けたもの

表14　博士前期課程（修士課程）　34名

看護学専攻修士論文コース　８名

	修了所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
基　礎　分　野	6以上	19	23	17
専　門　分　野		13	16	12
特別看護研究	8	8	8	8
総　計	32以上	40	47	37

看護学専攻上級実践コース　７名

	修了所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
基　礎　分　野	8以上	18	20	8
専　門　分　野	12以上	18	20	18
実　習	6	6	6	6
課　題　研　究	2	2	2	2
総　計	32以上	44	46	36

指定された科目を基盤分野、専門分野の中から取得する

看護学専攻社会人修論コース　３名

	修了所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
基　礎　分　野	6以上	14	15	13
専　門　分　野	12以上	13	16	12
特別看護研究	8	8	8	8
総　計	32以上	35	39	33

看護学専攻社会人上級実践コース　１名

	修了所要単位数	平均取得単位数
基　礎　分　野	8以上	17
専　門　分　野	12以上	20
実　習	6	6
課　題　研　究	2	2
総　計	32以上	45

ウィメンズヘルス・助産学専攻修士論文コース　４名

	修了所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
基　礎　分　野	6以上	17	21	13
専　門　分　野	12以上	21	26	18
特別看護研究	8	8	8	8
総　計	32以上	46	51	39

ウィメンズヘルス・助産学専攻上級実践コース　11名

	修了所要単位数	平均取得単位数	最高取得単位数	最低取得単位数
基　礎　分　野	8以上	13	17	12
専　門　分　野	12以上	37	44	34
実　習	6	6	6	6
課　題　研　究	2	2	2	2
総　計	32以上	58	69	54

表15　博士後期課程

	修了所要単位数	平均取得単位数
基　礎　分　野	4	6
専　門　分　野	2	4
看護学特別演習	2	2
看護学特別研究	6	6
総　　計	14以上	18

大学院修士課程上級実践コースは、2008年４月１日～2011年３月31日の期間、厚生労働省より教育訓練給付金の講座指定を受けており、入学金、授業料のうち本人が支払った額（初年度分のみ）の20%に相当する額（上限10万円）の給付金が、修了後各自手続きを行うことにより給付される。実際に教育訓練給付金を受給された者の数は把握していないが、申請のための修了証明書発行部数は、2008年度は３名であった。

３．立教大学との単位互換

立教大学との相互聴講制度では、2008年度については、社会学研究科、コミュニティ福祉学研究科ともに本学の履修者はいなかった。立教大学からの履修者もいなかった。

４．ティーチングアシスタント（TA）

1997年度より実施しているティーチングアシスタント（TA）制度では、実習、演習および試験監督等で本年度約1,096時間の採用となり（**表16**）、昨年度に比べ若干減少した。また、臨時助教の採用（20名：総時間数約1,940時間）も減少している。本年度は、教員の中途退職、産休等で臨時に採用する必要はあったが、昨年度ほどではなかったと考えられる。TAを活用し、院生教育能力を高める機会が多いにもかかわらず、TAを確保することが例年通りできていないが、過密な大学院カリキュラムの中で徐々にではあるが、実績を積んできている。

表16　チィーチングアシスタント（ＴＡ）活用状況　　修：修士課程学生　　博：博士後期課程学生

	部　　門	月	人数	時間数	内　　容
基礎科目	生涯発達論Ⅰ	10	修１	2：30	演習指導
		11	博１	3：30	演習指導
	生涯発達論Ⅱ	1	修１	2：30	演習指導
	家族関係論	7	修２	3：00	試験監督
	集団力動論	6	修１	1：50	試験監督
	計			13：20	
専門科目	看護援助論Ⅲ	4	博１	3：00	デモンストレーション補助
			修１	3：00	デモンストレーション補助
		5	博２	17：00	演習記録確認等
			修１	3：00	演習記録確認等
		6	博２	44：30	演習指導補助
			修２	23：30	演習指導補助
		7	博２	11：30	実習指導補助
			修６	50：00	実習指導補助
		11	修１	5：00	実習指導補助
		12	修１	5：00	実習指導補助
		1	修２	27：00	実習指導補助
	看護援助論Ⅳ	9	博１	24：00	実習指導
	看護提供システムⅠ	12	修１	6：00	見学実習引率
	生涯発達看護論Ⅱ	7	修１	2：00	実習指導
		9	修１	5：00	実習指導
		10	博１	2：00	実習指導
			修３	14：00	実習指導
		11	修３	28：30	実習指導
	家族発達看護論Ⅰ	4	博１	17：30	PBLチューター
		5	博２	32：00	PBLチューター
		6	博２	27：00	PBLチューター
		7	博２	24：00	PBLチューター
	地域看護論Ⅲ	4	修１	4：30	フィールドワーク補助
		5	修１	10：50	フィールドワーク補助
		6	修１	3：30	フィールドワーク補助
	慢性期看護論Ⅰ	5	博３	31：00	演習指導
		7	修１	1：50	試験監督
		8	博３	12：00	提出物添削等
	慢性期看護論Ⅱ	5	修１	2：00	授業補助
		6	修３	11：20	授業補助
		7	修２	3：50	試験監督
	ターミナルケア論	5	修１	12：00	演習指導
		6	修１	5：00	演習指導
	臨地実習	9	修３	21：00	演習指導
	臨地実習A	9	修１	7：00	実習指導
		10	修１	7：00	実習指導
			博１	16：30	実習指導
		11	修１	14：00	実習指導
			博１	16：30	実習指導
		12	修１	7：00	実習指導
			博１	36：00	実習指導
	臨地実習B	2	修１	7：00	実習指導
			博１	25：00	実習指導
		10	博１	23：30	実習指導
			修１	17：00	実習指導
		11	博２	26：30	実習指導
		12	博２	17：00	実習指導
		1	博１	7：30	実習指導
		2	博１	8：30	実習指導

	部　　門	月	人数	時間数	内　　容
専門科目	臨地実習Ｃ／Ｄ	9 10	修５ 修４	30：45 50：15	実習指導 実習指導
	臨地実習Ｆ	10 12 1 2 3	修２ 修１ 修１ 修２ 博１ 博１	29：30 4：00 16：00 24：00 23：00 5：00	実習指導 実習指導 実習指導 実習指導 実習指導 実習指導
	総合実習（精神看護）	6 7	修１ 修２	43：00 10：00	実習指導 実習指導
	計			964：00	
その他	教　　務	7 11 12 2	修６ 博１ 修２ 修５ 修４ 博１	21：00 3：00 3：40 3：35 12：55 1：30	試験監督 試験監督 試験監督 試験監督 試験監督 試験監督
	計			45：40	
大学院	助　産　学　演　習　Ⅲ	6 7 10	博１ 博１ 修６	11：30 25：00 36：00	助産過程の展開 助産過程の展開 助産過程の展開
	計			72：30	
総　　計			修83 博32	1095：50	

５．がんプロフェッショナル養成

１）はじめに

本学は、大学院修士課程がん看護専門看護師コースにおいて、毎年４～５名の修了生を輩出してきた。がんプロフェショナル養成プランにより、本学では連携大学および医療施設との教育連携を基盤として、学生の専門性に応じた実務教育の強化を行う。そのために次のような活動を計画している。がん看護 CNS コースをもつ聖路加看護大学、北里大学、慶応義塾大学による＜南関東がん看護教育トライアングル＞による協働を強め、がん看護専門看護師教育の相互交流を行う。姉妹病院である MD Anderson Cancer Center のがん看護専門看護師を臨床教授として迎え、国際的視点にたった高度実践能力の拡大を図る。インテンシブコースとして開講したがん化学療法認定看護師コースの学生(30名)に対し、連携大学の腫瘍専門医、放射線治療専門医がん専門薬剤師等の専門家による特別講義や臨床講義により総合的な学習が展開できるよう試みる。あわせて、昨年度修了した認定看護師のブラシュアップ研修を新規に行う。また、がん専門看護師認定試験へのステップアップのために、修了生を対象に、事例検討会およびコンサルテーション事業を実施する。

２）補助事業の目的・必要性

⑴　全体

本補助事業の全体の目的は、聖路加看護大学がん看護専門看護師教育課程およびがん化学療法認定看護師教育課程（インテンシブコース）におけるカリキュラム強化を図り、南関東がん看護教育トライアングルを基盤に、南関東におけるがん看護専門看護師教育およびがん化学療

法看護認定看護師教育の質を担保・向上することである。さらに、9大学の連携・協働により、南関東圏におけるがんチーム医療のリーダシップを担うがん医療専門職者の育成に資するため、合同ワークショップ、種々の学術交流を積極的に取り組む。

⑵　本年度

本補助事業の本年度の目的は、上記の全体目標を達成するために、①がん専門看護師教育課程における海外よりの特別講義の実施（メイヨークリニック、MD Anderson Cancer Center、②海外における臨床演習のための教育連携強化、③Web based learning の開発と実施、④専門シミュレーションラボにおける化学療法看護演習の強化、⑤南関東がん看護教育トライアングルを基盤に、MD Anderson Cancer Center とのがん看護交流ワークショップ開催、⑥専門看護師インテンシブコースとして、事例検討会およびコンサルテーション事業の継続開催、⑥認定看護師インデンシブコースとして、がん化学療法認定看護師のシミュレーションラボにおける実践教育を強化する。

本年度の補助事業の目的を達成するために下記の教育活動を実施した。

①　年間を通し：専門看護師教育課程および認定看護師教育課程における Web based learning の開発と実施　（南関東がん看護教育トライアングル事業）

②　７～10月：本プランの教育連携病院におけるクリニカルプラクティスと評価

③　10月および２月：南関東がん看護教育トライアングルによる MD Anderson Cancer Center とのがん看護交流ワークショップ開催

④　10月～11月：シミュレーションラボにおける化学療法看護演習の実施

⑤　７月～11月：海外姉妹校におけるノマディック演習（対象者の選考の上）

⑥　４月以降継続的に、インテンシブコースとして、事例検討会およびコンサルテーション事業の継続開催

⑦　がん化学療法認定看護師教育課程におけるシミュレーションラボにおける演習、クリニカルプラクティスの実施

３）補助事業の内容

本補助事業は、選定された南関東圏における先端的がん専門家の育成プランにおける、がん専門看護師育成事業について、高度看護がん看護実践能力の向上、がんチーム医療の質向上に資する能力の向上を目指す補助事業であり、内容は以下のとおりである。

①　南関東がん看護教育トライアングル事業により、専門看護師教育課程および認定看護師教育課程における Web based learning の開発（緩和ケア、症状コントロールなど）と実施（本学の看護ネット上にコンテンツを集積･発信）し、関東圏におけるがん看護の質向上をめざす。

②　本プランの教育連携病院におけるクリニカルプラクティスを充実するための教育連絡会を組織し、実習プログラムの検討を行う。

③　MD Anderson Cancer Center とのがん看護交流ワークショップの開催に向けて、南関東がん看護教育トライアングル参画校間で連携し、企画・実施する。

④　シミュレーションラボにおける化学療法看護演習のために演習プログラムに基づき、ラボ整備、共同演習を実施する。

⑤　海外姉妹校におけるノマディック演習を実現するために、ヨンセイ大学、UCSF、MD

Anderson Cancer Center 等と教育協定等をつめる。それらに基づいて演習を試みる。

⑥　インテンシブコースとして、事例検討会およびコンサルテーション事業の継続開催と評価を行う。

⑦　がん化学療法認定看護師教育課程の開講、教育コースの実施。教育内容の洗練、演習・実習フィールドとの調整を行う。

教育会議による評価を行う。

4）補助事業から得られる具体的な成果

上記の本年度の補助事業実施計画を実施することにより、本補助事業から得られる具体的な成果は、以下のとおりである。

①　Web based learning を開発し、本学の看護ネット上にコンテンツを集積･発信することにより、関東圏におけるがん看護の質向上に寄与できる。

②　教育連携病院との教育連携を強化することにより、がん専門看護師コース学生のクリニカルプラクティスの能力が向上する。併せて、教育連絡会の組織化により、連携病院間におけるがん看護質向上の組織連携がすすむ。

③　がん看護交流ワークショップの開催により、３大学間におけるがん看護実践能力開発に関する学術交流が深まり、最新のがん看護の知見をシェアし、均一に得ることができる。

④　シミュレーションラボにおける演習により、学生のがん看護高度実践能力としてアセスメント、根拠に基づく実践力の向上を得る

⑤　海外ノマディック演習を導入することにより、海外の最新の知見にもとづく実践能力の涵養が図られる。

⑥　インテンシブコースによる事例検討、コンサルテーション事業により、認定試験への着実な準備ができ、合格を確かなものにできる。

⑦　がん化学療法認定看護師コース開講により、がん看護の質の底上げとがん看護専門看護師教育課程希望者の裾野を広げる。

Ⅳ 生涯教育

【学　　部】

1．科目等履修生

科目等履修生の履修者数が年々減少しており、制度の見直しを行い、2008年度より夜間開講を廃止することが教授会で決定され、今年度より通常の学部の授業に受け入れることになった。

2008年度科目等履修生の応募者数は７名（夜間からの継続者は５名）であり、全員が合格となった。要項の詳細が２月に決定し、募集が遅くなったことも志願者減の原因と考えられる。志願者が大幅に減少したことに対し受講生を増やすため、研究センターで実施している認定看護師課程の科目を科目等履修生が履修することの検討を行ったが、制度上できないことがわかり、断念した。また、個別に論文指導を行う「看護研究Ⅱ」を開講して、教養科目の先生方に担当していただくことになった。

年齢層は28～49歳までと幅があるが、20歳代が14％、30歳、40歳代がそれぞれ43％で、30～40歳代が大半を占めていることは夜間開講の際と変わっていない。

開講科目および履修状況は**表１**のとおりである。

表１　科目等履修生開講科目および履修者数

	授業科目	単位数	履修者数	単位修得者数	単位未履修者
前期	心理学	2	1	1	
	生涯発達論Ⅰ	2			
	生涯発達論Ⅱ	2			
	家族関係論	2	3	3	
	集団力動論	1			
	看護提供システムⅠ	2	2	2	
	看護技術論	1	2	2	
	生涯発達看護論Ⅰ	2	1	1	
	慢性期看護論Ⅱ	3	1	0	1
	リハビリテーション看護論Ⅰ	2			
	看護研究Ⅰ	2	2	2	
	看護ゼミナール （生活行動が障害された患者とその家族への看護）	1			
	看護ゼミナール（遺伝看護）	1	2	1	1
	看護ゼミナール（性教育）	1	1	1	
	看護ゼミナール（老年看護）	1			
後期	ヒューマンセクシュアリティⅠ・Ⅱ	2	3	3	
	地域看護論Ⅰ	2	1	1	
			計	17 （89.5％）	2 （10.5％）

【大 学 院】

1．科目等履修生

大学院の科目等履修生制度は、CNSの資格取得に際し、必要科目の単位数が不足している者に対する措置として、1999年度より前期、後期にそれぞれ募集を行っている。

2007年度の応募者は２名であった。履修科目と履修者数は**表２**のとおりである。

表２　大学院科目等履修者履修状況

授　業　科　目	単 位 数	履修者数	単位修得者数
がん看護学・緩和ケア実習	6	1	1
病態生理学	2	1	1

2．研究生

論文博士規程発足と同時に、1995年度から研究生の受け入れを開始した。

今年度の研究生は、新規志願者は１名、更新志願者は４名、計５名であった。また、外国人特別研究生として２名、１月～３月の３ヵ月間受け入れを行った。年齢は40～59歳で、全員が修士課程修了者である。研究生の受け入れ状況は**表３**のとおりである。

表３　研究生の受け入れ状況

指導教授	研究生数
井部　俊子	１＊
及川　郁子	1
堀内　成子	１＋１＊
田代　順子	2
小松　浩子	1

＊外国人特別研究生

【研究センター】

1．認定看護管理者ファーストレベル講習

研究センターでは、認定看護管理者ファーストレベル講習（以下、ファーストレベル講習）を継続教育部門の事業と位置づけ、2004年の東京都看護協会による教育機関認定を経て、2005年からは日本看護協会から教育機関認定を受け、毎年８～９月にかけて開講してきた。2008年度は80名の５期生を輩出し、これまでの本講習修了者は403名となった。

102名が応募し、書類および小論文による選考の結果７月の認定看護管理者講習運営委員会で81名が選考され80名が受講した。更に80名全員が全教科目のレポート審査に合格し修了した。

講習運営においていくつかの変更を行った。

① 認定看護師（不妊症看護・がん化学療法看護・訪問看護）教育課程の開講にともない、講義・演習の一部を、アリス・C・セントジョンメモリアルホールを使用し合同で行った。多様な看護実践経験を有する受講生が活発な意見交換を通して切磋琢磨しながら学び合う場となった。

② 2007年12月の学校教育法改正を受け今年度の本講習修了者から修了証とともに履修証明書を交付することになった。今年度受講修了生80名に交付した。

③ 聖路加国際病院の好意により遠方からの受講生３名がゲストルームを利用した。

④ 経理上の変更点として本学教員には講師料が支払われないことになった。

⑤ 認定看護管理者セカンドレベル講習の３年に一度の開講が決定され、本講習はセカンドレベル講習開講年度には休講することとなった。したがって2009年度はセカンドレベル講習を開講し本講習は休講する。

1）ファーストレベル講習の概要

⑴ 教育理念

聖路加看護大学の教育理念に基づき、保健・医療・福祉分野における看護管理者として必要な基礎知識を習得し、組織やコミュニティでリーダーとして活躍できる能力を開発する。受講生との対話を中心とした、臨床現場に密着した授業を行うとともに、受講生のキャリア相談も行う。

⑵ 教育目的

(a) 看護専門職として必要な管理に関する基礎的な知識・技術を習得する。

(b) 看護を提供するための組織化ならびにその運営に必要な知識・技術を習得する。

(c) 組織的看護サービス提供上の諸問題を客観的に分析する能力を習得する。

⑶ 開講時期

2008年８月25日(月)～9月26日(金)

⑷ 開講科目（単位数と時間数）と講師

以下の６教科目、総単位数10単位/150時間。講師数は、学内７名、学外13名で合計20名であった。

① 看護管理概説（１単位/15時間） 講師:井部俊子、吉田千文

② 看護専門職論（２単位/30時間） 講師:井部俊子、山田雅子、中村綾子、吉田千文
学外講師：手島恵（千葉大学大学院)、柳橋礼子（聖路加国際病院）

③ ヘルスケア提供システム論(１単位/15時間) 講師：山田雅子
学外講師：石田昌宏（日本看護連盟）

④ 看護サービス提供論（３単位/45時間） 講師：井部俊子、山田雅子、奥裕美
学外講師：佐藤エキ子*、柳橋礼子*、高橋美賀子*、加藤恵子*、寺井美峰子*、高井今日子*、坂本史衣*、鶴田恵子（日本赤十字看護大学）＊印は聖路加国際病院

⑤ グループマネジメント(２単位/30時間) 講師：井部俊子、中村綾子、吉田千文
学外講師：高井今日子（聖路加国際病院)、別府千恵(北里大学病院)、鷹野和美（京都創成大学）

⑥ 看護情報論(１単位/15時間) 講師：中山和弘、松本直子

学外講師：美代賢吾（東京大学医学部附属病院）

⑸　学習支援

これまでと同様、大学院生のティーチングアシスタントが授業支援を行うとともに受講生に対して質問対応や学習環境整備を行った。また自己学習の時間を設け教員が待機して受講生の主体的な学習を支援するとともに、受講生一人当たり30分のレポート作成相談の時間を設けた。

レポート作成相談には、研究センター専任研究員である小口江美子、森明子、矢ヶ崎香、實崎美奈、細川恵子、および学外者石崎民子氏（前本学COE研究員）、高畠有理子氏（前本学教員）、太田加世氏（前本学教員）が担当した。

⑹　受講生によるプログラム評価

講習終了前日に、井部俊子教育課程責任者による全受講生との対話形式での評価を行うとともに、質問紙によるプログラム評価を行った。

その結果、全６教科目において、①科目内容、②講義を担当した講師、③講義資料（量・内容、④講義課題（レポート課題）のすべてで、「適切だった」「どちらかといえば適切だった」が９割を超えた。また、演習、講義室の環境、図書館、学内環境、開講の時期、１ヵ月間の集中講義、受講料についてもほとんどの受講生が満足を示し、ほとんどの受講生がこのコースを誰かに紹介したいと回答した。効果的な自己学習の方法について今後適切な情報提供や支援方法について課題が残された。

２．認定看護管理者セカンドレベル講習の開講準備

１）セカンドレベル講習開講の決定までの経緯

本学の認定看護管理者ファーストレベル講習は平成2007年度までに323名の修了生を輩出し、教育内容については修了生および看護管理者の双方から高い評価を受けており、本学の認定看護管理者セカンドレベル講習（以下、セカンドレベル講習）開講に対する社会的期待が大きくさらに修了生のニーズも高まっていた。

2008年４月の本研究センター運営委員会において、セカンドレベル開講の是非について検討することが決定され、セカンドレベル講習検討会議（座長・井部俊子、松谷美和子、奥裕美、中村綾子、吉田千文、研究支援室職員・平良智子、河合智子）が発足した。

関東甲信越地域のセカンドレベル講習認定教育機関へのヒアリング、有識者からの意見聴取を経て、セカンドレベル講習検討会議で検討後、2009年夏に開講する計画が５月の研究センター運営委員会に提出され審議された。

研究センター運営委員会では、開講に対する社会的期待に応えることは本学の使命であり、第一線の看護管理者およびその候補者を対象としたセカンドレベル教育を通してわが国の看護管理レベルを向上させ看護の発展に寄与することができること、また一定の受講料を得ることができれば、安定した経営が可能であることが確認され承認された。同月、教授会審議を経て７月の理事会で正式に開講が承認された。

２）日本看護協会教育機関認定申請に向けた準備

６月より認定看護管理者セカンドレベル講習開設準備委員会（委員長・井部俊子、松谷美和子、奥裕美、中村綾子、吉田千文、支援室職員・平良智子、河合智子）が設置され、日本看護協会の

教育機関認定申請に向けた検討が開始された。８月末の日本看護協会への書類提出までに９回の委員会を開催、開講機関、教育責任者、教育機関の理念、教育目的、カリキュラム、講師の選定、予算計画などが検討された。研究センター運営委員会の議を経て10月に最終書類が提出された。12月、本学研究センターは、日本看護協会からセカンドレベル講習教育機関の認定を受けた。

３）本学のセカンドレベル講習の特徴

本学のセカンドレベル講習の特徴は、専門領域に精通した一流の講師陣と計11回からなる少人数グループによる Problem-Based Learning（以下、PBL）である。これらを通して看護管理者として求められる看護マネジメントの専門能力、対人能力、概念化能力の開発を目指す。

４）規程の改正と新しい運営委員会組織

セカンドレベル講習開講のため、「認定看護管理者講習（ファーストレベル）運営委員会規程」を改定し、「認定看護管理者講習（ファーストレベル・セカンドレベル）運営委員会規程」となった。この新しい規程のもとで、11月に第一回認定看護管理者講習（ファーストレベル・セカンドレベル）運営委員会が開催された。新委員会メンバーには、学内から看護管理学担当教員として奥裕美、中村綾子が、また学外から外部委員として東京慈恵会医科大学附属病院本院看護部長大水美名子氏、埼玉社会保険病院看護局長関矢カズ子氏、神奈川県立がんセンター看護局長上田規子氏が加わり、11名となった。

2009年２月研究センター運営委員会でセカンドレベル講習実施細則について承認され、これをもとに募集要項が作成され、４月から関東甲信越地域の100床以上の病院および本学ファーストレベル講習修了者に配布予定である。

５）セカンドレベル講習の概要

⑴　設置主体及び設置主体者名：学校法人聖路加看護学園理事長　日野原重明

⑵　教育機関名：聖路加看護大学看護実践開発研究センター

⑶　教育期間：２ヵ月間、月曜日から金曜日、３年に１回開催

開講期間：2009年８月3日～９月25日

⑷　教育理念：

本教育機関は、看護を学ぶ人々が各人に賦与された資質を発展させ、豊かな知性と感性をともに追求して看護専門職者として成長すること、そして看護を通して公共の福祉を推進し社会に寄与することをめざす聖路加看護大学の教育理念に基づき開講するものである。

本教育機関は、学習者が保健・医療・福祉分野の看護管理者として質の高い看護を組織的に提供するために必要な基礎的能力を開発することを教育の目的とする。基礎的能力とは看護マネジメントの専門的能力、対人能力、概念化能力をいう。看護管理実践における現場の問題を取り上げ、それを発展させることを通して、学習者が看護管理者としての基盤を自ら築くことを大切にし、それが実現できるよう支援する。

⑸　教育目的：

①　第一線監督者または中間管理者に求められる基本的責務を遂行するために必要な知・技術・態度を習得する。

②　施設の理念ならびに看護部門の理念との整合性を図りながら、担当部署の目標を設定し、その達成を目指したマネジメント能力を習得し発展させる。

③　看護管理実践上の課題を多角的視点で捉え、看護管理者の基盤となる主体的な態度を養い、論理的・倫理的思考力、対人関係能力、記述能力及び発表能力の向上を目指す。

⑹　教育課程：

ａ．教育目標

①　看護管理者として情報テクノロジーを有効に活用し根拠に基づく看護実践を推進するための理論と方法について理解を深め、自組織への適用可能性を探求できる。

②　看護サービスの質向上に向けた組織マネジメントと連携･協働の理論と方法について理解を深め、自組織への適用可能性を探求できる。

③　個人を活かし､組織理念･目標を達成するための人的資源管理の理論と方法について理解を深め、自組織への適用可能性を探求できる。

④　看護組織と看護実践について医療制度および医療経済の視点から捉えるための理論と方法を理解し、自組織における適用可能性を探求できる。

ｂ．教科目

①　情報テクノロジー　30時間(講義21、演習9)

②　看護組織論　60時間(講義36、演習24)

③　人的資源活用論　60時間（講義42、演習18）

④　医療経済論　30時間（講義18、演習12）

⑺　受講定員：50名

⑻　受講要件：日本看護協会「認定看護管理者制度セカンドレベル教育機関認定および企画・運営の手引き」に記載された必須条件を満たし大学受験資格のある者

⑼　受講者選考の方法：書類審査及び小論文

⑽　修了要件：

ａ．認定看護管理者セカンドレベルに必要な教科目の所定の単位（時間数）を修得する。

ｂ．修了審査によって所定の基準以上の成績を取得する。→各科目の評価点が60点以上（C 以上)。

⑾　教育課程責任者：井部俊子

専任教育担当者：吉田千文

⑿　講師（役職略）：

学内講師10名／井部俊子、松谷美和子、山田雅子、吉田千文、江藤宏美、片岡弥恵子、奥裕美、中村綾子、松本直子、佐藤晋巨

学外講師23名／太田勝正（名古屋大学)、嶋田元（聖路加国際病院)、高林克日己（千葉大学)、美代賢吾（東京大学)、柳橋礼子（聖路加国際病院)、高井今日子（聖路加国際病院)、渡邊明良（聖路加国際病院)、古閑慎一郎（㈱ビジネスコンサルタント)、奥村元子（日本看護協会)、出口将人（名古屋市立大学)、手島恵（千葉大学)、大串正樹（西武文理大学)、高木晴夫（慶應義塾大学)、松谷有希雄（国立療養所多摩全生園)、勝原裕美子（聖隷浜松病院)、正木義博（済生横浜東部病院)、高島尚子（日本看護協会)、大道千秋（日本看護協会)、福田紀子（慶應義塾大学)、安井はるみ（神奈川県看護協会)、松岡水貴（㈱ビジネスコンサルタント)、角田由佳（韓国漢陽大学)、立花直明（聖路加

国際病院）

⒀　使用する施設・設備：本館教室、メディアルーム、図書館、アリス講堂

⒁　受講料：254,000円（内訳：授業料182,000円、出願料10,000円、レポート審査料13,000円/科目×4、修了証・履修証明書交付料10,000円）

３．認定看護師教育課程

2007年度より準備をしてきた認定看護師教育課程（不妊症看護コース、がん化学療法看護コース、訪問看護コース）について、定員どおりの75名（順に15名、30名、30名）の研修生を迎え、６月７日（土）にアリス・C・セントジョンメモリアルホールにおいて入学式を開催した。日本看護協会認定部洪愛子部長に挨拶を頂戴した。

入学検定料は５万円、入学金は10万円、授業料は80万円とした。

２月28日の最終日には、全員が最終試験に合格し（８割以上を合格とする）、それぞれに対し修了証と履修証明書が授与された。修了式には、日本赤十字看護大学の鶴田恵子教授に祝辞を頂戴した。また、2009年５月に行われた日本看護協会での認定審査には、73名が合格した（順に15名、29名、29名）。

研修者の概要を**表４**に示した。

表４　３コース別研修生の概要

		不妊症看護(15人)	がん化学療法看護(30人)	訪問看護(30人)
年齢（歳）	最小-最大	31-53	27-43	32-56
	平均	40.1	33.5	42.8
地域（人）	北海道			
	東北		2	
	関東	11	21	26
	中部	3	4	2
	近畿	1		1
	中国		2	
	四国		1	
	九州			1
職位（人）	チーフ	1		
	副主任		1	2
	主任	2	5	3
	副師長		3	
	師長	3		
	所長			16
	その他	9	20	9

教育期間は、2008年６月１日～2009年２月28日であり、その間８月25日から９月30日までは、共通科目の講義として、３コースおよび認定看護管理者講習ファーストレベル受講生が合同で学習した。以下に学事歴および共通科目の教育内容等について**表５～７**にまとめた。

表５　2008年度学事暦

課　程　開　始	2008年６月１日（日）
入学式	６月７日（土）
オリエンテーション	６月７日（土）
授業開始	６月13日（金）
夏季休暇	８月13日（水）～　８月18日（月）
共通科目集中講義期間	８月25日（月）～　９月26日（金） ※土曜日も含む
不妊症看護コース実習	1月13日（火）～２月７日（土）
訪問看護コース実習	11月25日（火）～12月26日（金）
がん化学療法看護コース （実習Ⅰ）（実習Ⅱ）	11月中旬　～　１月中旬 （上記期間のうち、実習Ⅰ：１週間、実習Ⅱ：３週間）
クリスマス（休講）	12月25日（木）
年末年始	12月29日（月）～１月３日（土）
不妊症看護コース実習	2009年１月13日（火）～２月７日（土）
大学創立記念日（休講）	１月25日（日）
修了試験	２月末　予定
修了式	２月28日（土）
課程終了	２月28日（土）

表６　共通科目の内容および担当教員

	科　　目	時間（単位）	内　　容	担当教員
1	リーダーシップ	15〔1〕	組織とリーダーシップ 組織のカタチ 組織のダイナミズム チーム医療とリーダーシップ	井部　俊子 鷹野　和美
2	文献検索・文献講読	15〔1〕	概論とEBMのステップ 文献検討 文献の吟味 臨床の疑問から文献へ	江藤　宏美 片岡弥恵子 松本　直子 佐藤　晋臣
3	情報処理	15〔1〕	看護管理と情報活用 看護情報のシステム化 看護情報管理	中山　和弘 美代　賢吾
4	看護倫理	15〔1〕	看護業務基準と看護倫理 患者の権利とインフォームドコンセント 倫理理論と生命倫理の基本原則 患者と医療者の関係	鶴若　麻理 手島　　恵 高橋美賀子
5	教育・指導	15〔1〕	自律と協働・キャリア開発	井部　俊子

			看護理論（ベナー看護論） ジェネラリストとスペシャリスト 継続教育 教育プログラムの展開	柳橋　礼子 大久保菜穂子
6	コンサルテーション	15〔1〕	ストレスマネジメント ケア・コンサルテーション 病棟という集団	梅田　　恵 別所　千恵 平井　元子

表７　共通科目講師一覧

氏　名	所　属　・　役　職
坂本　史衣	聖路加国際病院　医療安全管理室
佐藤　晋巨	聖路加看護大学　図書館司書
鷹野　和美	京都創成大学　学長
高橋美賀子	聖路加国際病院　がん看護専門看護師
鶴田　恵子	日本赤十字看護大学　教授
鶴若　麻里	聖路加看護大学　助教
手島　　恵	千葉大学大学院看護学研究科　教授
中山　和弘	聖路加看護大学　教授
別府　千恵	北里大学　看護学部　講師
松本　直子	聖路加看護大学　図書館司書
美代　賢吾	東京大学医学部付属病院　企画情報運営部　副部長
柳橋　礼子	聖路加国際病院　副看護部長

１）不妊症看護コース

本コースは、日々進歩する生殖補助技術の適用と運用をめぐる医学的・社会的な課題と議論のなか、生殖医療チームにおいて、高い実践・相談・指導力をもって、不妊の問題を抱える対象者に全人的ケアを提供することができる認定看護師の養成を目的としている。この目的を達成するための教育課程として以下の内容（**表８～21**）を提供した。2008年度は入学者、修了者ともに15名であった。

表８　不妊症看護教育内容

共通科目	90	専門基礎科目	90	専門科目	165	演習	30	実習	225
1. リーダーシップ	15	1. リプロダクティブヘルス	15	1. 不妊症看護概論	15	演習	30	実習	225
2. 文献検索･文献講読	15	2. 生殖の基礎知識	15	2. 不妊症看護の基礎理論	30				
3. 情報処理	15	3. 不妊症の診断と治療	45	3. 不妊症看護援助論Ⅰ	45				
4. 看護倫理	15	4. 不妊症と社会	15	4. 不妊症看護援助論Ⅱ	15				
5. 教育・指導	15			5. 不妊症看護カウンセリング技法	45				
6. コンサルテーション	15			6. 不妊症看護マネジメント	15				
看護管理（選択共通科目）	24								
総時間数　600時間									

表９　不妊症看護コース専門基礎科目・専門科目の内容および担当教員

	科　目	時間（単位）	内　容	担当教員
専門基礎1	リプロダクティブヘルス	15（1）	リプロダクティブ&セクシュアルヘルス/ライツの概念	森　明子
			ヘルスプロモーションと不妊症	〃
			生殖医療と法	金　亮完
			生殖医療と倫理	宮坂　道夫
専門基礎2	生殖の基礎知識	15（1）	生殖生理と妊娠の成立	塩田　恭子
			女性器の発生・分化・構造とその異常	石原　理
			性反応・性機能障害	阿部　輝夫
			生殖遺伝	佐藤　孝道
専門基礎3	不妊症の診断と治療	45（3）	不育症の診断と治療	藤井　知行
			男性内分泌と男性不妊の診断・治療	遠藤　文康
			女性不妊の不妊因子と診断法	佐藤　孝道
			女性不妊症の治療：薬物療法	浜谷　敏生
			体外受精の実際	齊藤　英和
			生殖機能温存	塩田　恭子
			腹腔鏡下手術･卵管形成術の適応と実際	古谷　正敬
			ARTラボ技術と胚培養士の役割	小松　雅博
			不妊治療とEBM・最近の不妊治療の進歩	荒木　重雄
			人工授精・非配偶者間人工授精	久慈　直昭
			遺伝相談	平原　史樹
専門基礎4	不妊症と社会	15（1）	自助グループ活動の海外の動向・提供配偶子・胚による治療の課題	仙波由加里
			不妊症の心理	赤城　惠子
			里子・養子縁組	森　和子

専門1	不妊症看護概論	15（1）	不妊症看護の現状と課題 不妊症看護の展望 不妊症看護認定看護師としての個々の課題	森　明子 實﨑　美奈
専門2	不妊症看護の 基礎理論	30（2）	ドメスティック・バイオレンス カウンセリングの基礎･不妊カウンセリング セックスカウンセリング 家族関係論 セルフケア・エンパワーメント 意思決定 危機・喪失	片岡弥惠子 平山　史朗 金子　和子 瀬戸屋　希 堀内　成子 有森　直子 森　明子
専門3	不妊症看護援助論Ⅰ	45（3）	初診時と検査期間中の看護 ステップアップ・人工授精時の看護 体外受精時の看護 治療終結期の看護 顕微授精・性支援 ストレス対処看護介入モデル 排卵誘発法と看護	實﨑　美奈 森　明子 浜崎　京子 森　恵美 浅野　明恵
専門4	不妊症看護援助論Ⅱ	15（1）	不妊治療後の母子の看護 提供配偶子を用いた治療を受ける患者の看護 遺伝看護 流産時の看護	丸山　由美 清水　清美 有森　直子 上澤　悦子
専門5	不妊症看護 カウンセリング技法	45（3）	カウンセリングの実際 心理的アセスメント コミュニケーションスキル アサーション ピアグループシェアリング 呼吸法・弛緩法・イメージ法・自律訓練法 交流分析・カップルカウンセリング	八巻　甲一 福田　紀子 保坂　隆 森田　汐生 石井　慶子 赤城　惠子 光延　京子
専門6	不妊症看護 マネジメント	15（1）	生殖医療機関における看護管理と患者ケアの基本 生殖医療チームを育てるマネジメント （セルフマネジメントを含む） 生殖医療チームにおけるリスクマネジメント （トリアージを含む） 医療機関における不妊相談室の開設と運営	小池　弘子 福井トシ子 福田貴美子 藤島由美子
	演習	30（1）	聖路加看護大学看護実践開発研究センター事業「ルカ子ウイメンズヘルスカフェ」の企画・運営（グループワーク） １．知ろう！不妊について ２．パートナーと支えあう不妊	森　明子 實﨑　美奈 大久保菜穂子
	臨地実習	225（5）		

表10　不妊症看護コース講師　　**◎コース責任者　　○専任教員**

氏　名	所　属　・　役　職
◎森　　明子	聖路加看護大学看護実践開発研究センター教授
○實﨑　美奈	聖路加看護大学看護実践開発研究センター助教
赤城　惠子	あかぎけいこカウンセリングルーム臨床心理士
浅野　明恵	医療法人社団神谷レディースクリニック看護師長　不妊症看護認定看護師
阿部　輝夫	あべメンタルクリニック院長
荒木　重雄	国際医療技術研究所所長
有森　直子	聖路加看護大学准教授
石井　慶子	NPO 法人 Fine 臨床心理士
石原　　理	埼玉医科大学病院生殖医療担当診療科長
遠藤　文康	聖路加国際病院泌尿器科医幹
大久保菜穂子	日本伝統医療科学大学院大学准教授
片岡弥恵子	聖路加看護大学准教授
金子　和子	日本赤十字社医療センター臨床心理士
上澤　悦子	北里大学准教授
金　　亮完	山梨学院大学講師
久慈　直昭	慶應義塾大学医学部産婦人科講師
小池　弘子	西垣ARTクリニック看護師長　不妊症看護認定看護師
小松　雅博	聖路加国際病院女性総合診療部　胚培養士
齊藤　英和	国立成育医療センター　周産期診療部　不妊診療科長
佐藤　孝道	聖路加国際病院女性総合診療部長生殖医療センター長
塩田　恭子	聖路加国際病院女性総合診療部生殖医療センター医幹
清水　清美	国際医療福祉大学小田原保健医療学部講師
瀬戸屋　希	聖路加看護大学准教授
仙波由加里	桜美林大学総合研究所客員研究員
浜崎　京子	医療法人三秀会中央クリニック看護師長
浜谷　敏生	慶應義塾大学　医学部産婦人科助教
平原　史樹	横浜市立大学医学部付属病院産婦人科部長・遺伝子診療部長
平山　史朗	東京HARTクリニック臨床心理士
福井トシ子	杏林大学医学部附属病院看護部長
福田貴美子	蔵本ウィメンズクリニック看護師長不妊症看護認定看護師
福田　紀子	慶應義塾大学　大学院健康マネジメント研究科博士課程大学院生
藤井　知行	東京大学医学部附属病院女性科・産科副科長
藤島由美子	医療法人越田クリニック看護師長　不妊症看護認定看護師
古谷　正敬	慶應義塾大学医学部産婦人科助教
保坂　　隆	東海大学医学部精神科学教授
堀内　成子	聖路加看護大学教授
丸山　由美	横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター
光延　京子	東海大学伊勢原校舎学生相談室臨床心理士
宮坂　道夫	新潟大学　医学部保健学科准教授
森　　恵美	千葉大学　看護学部教授
森　　和子	文京学院大学人間学部准教授
森田　汐生	NPO法人アサーティブジャパン代表理事
八巻　甲一	日本精神技術研究所臨床心理士

表11　不妊症看護コース実習施設

施　　設　　名（順不同）	
医療法人愛生会扇町レディースクリニック	国家公務員共済組合浜の町病院
医療法人越田クリニック	済生会松阪総合病院
岡山二人クリニック	特別特定医療法人生長会　府中のぞみクリニック
香川県立中央病院	トヨタ記念病院
関西医科大学附属牧方病院	西垣ARTクリニック
蔵本ウィメンズクリニック	日本医科大学付属病院
国立大学法人東北大学東北大学病院	兵庫医科大学病院

２）がん化学療法看護コース

がん化学療法看護コースの教育目的

１）がん化学療法を受けながら生活している患者・家族に対して、個別的かつ全人的な専門性の高い看護を実践する能力を育成する。

２）がん化学療法看護の優れた実践力を基盤として、他の看護職に対する相談、指導を担う能力を育成する。

３）がん化学療法看護に関わる医療状況や健康課題を把握し、それらに伴って必要となる臨床実践能力を向上する姿勢や自律的に取り組む力を育成する。

表12　専門基礎科目

科　目　名	講　義　内　容	講　師
1．がん看護学総論 （1単位）	がん看護の発展と課題 がん看護の領域と専門性①	小松　浩子
	がん看護における主要概念①	小松　浩子
	がん看護の領域と専門性②	中村めぐみ
	がん看護における主要概念②	中村めぐみ
	がん患者・家族の情報ニーズと患者・家族教育（1）	玉橋　容子
	がん患者・家族の情報ニーズと患者・家族教育（2）	玉橋　容子
2．症状マネジメント論 （1単位）	症状マネジメントの枠組み	梅田　　恵
	症状のメカニズムとアセスメント（1）	梅田　　恵
	症状のメカニズムとアセスメント（2）	高橋美賀子
	症状マネジメントの方略と評価（1）	高橋美賀子
	症状マネジメントの方略と評価（2）	塩川　　満
	症状マネジメントの方略と評価（3）	塩川　　満
3．腫瘍学概論 (1単位)	がんの疫学 細胞の分裂・増殖、細胞死のメカニズム がんの発生・浸潤・転移（腫瘍免疫を含む）	垣添　忠生
	がんの予防と検診	垣添　忠生
	がんの診断過程と診断方法（2）	中村　清吾
	がん集学的治療（1）	中村　清吾
	がん集学的治療（2）	林　　章敏
4．がん化学療法概論 （2単位）	メディカルオンコロジーの領域と専門性 がん化学療法の基礎知識 がん化学療法とEBM	渡辺　　亨
	がん化学療法の開発から標準治療の確立まで がん化学療法による治療効果の評価	渡辺　　亨
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向①：乳腺	中村　清吾
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向②：婦人科	岩瀬　春子
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向③：頭頸部 原発不明	五月　女隆
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向④：消化器（膵）	陳　　勁松
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向⑤:消化器(大腸)	松阪　　諭
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向⑥：血液（1）	坂尻さくら
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向⑦：血液（2）	坂尻さくら
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向⑧：分子標的 薬剤（1）	徳留なほみ
	主な疾患のがん化学療法/標準治療と最新の動向⑨：分子標的 薬剤（2）	徳留なほみ
5．臨床薬理の知識と 活用方法(1単位)	臨床薬理の基礎知識	加藤　裕久
	薬物動態と薬効/薬物相互作用	加藤　裕久
	薬剤情報の活用方法（1）	信濃　裕美
	薬剤情報の活用方法（2）	信濃　裕美
6．臨床試験と治験コー ディネーター(1単位)	試験の意義とその過程（1）	畠　　清彦
	臨床試験の意義とその過程（2）	横山　雅大
	臨床試験実施計画書の読み方 臨床試験デザインとデータ解析の基本用語	篠崎　英司

	臨床試験の意義とその過程（３）	末永　光邦
	臨床試験における倫理的課題 臨床試験におけるインフォームドコンセントと患者の意思決定	薄井　晶子
	治験コーディネーターの役割と実際	薄井　晶子
７．がんの医療サービスと社会的支援（１単位）	１）がんのチーム医療	梅田　　恵
	２）がん患者と家族が活用できる社会資源	山田　雅子
	３）がんの医療政策	垣添　忠生
	３）がんの医療政策	高井今日子

表13　専門科目

科　目　名	講　義　内　容	講　師
１．がん化学療法患者・家族のアセスメント（１単位）	がん患者と家族の置かれている状況（１）	川地香奈子
	がん患者と家族の置かれている状況（２）	川地香奈子
	がん患者と家族の置かれている状況（３）	矢ヶ崎　香
	がん化学療法と身体的アセスメント（肝臓機能、免疫など）	矢ヶ崎　香
	がん化学療法と心理的アセスメント(関連理論を使用して) がん化学療法と家族・社会的アセスメント	矢ヶ崎　香
	事例検討	細川　恵子
２．主要ながん化学療法薬レジメンとその看護（２単位）	主要ながん化学療法レジメンとその看護①	長谷川久巳
	主要ながん化学療法レジメンとその看護②	長谷川久巳
	主要ながん化学療法レジメンとその看護③	金井　久子
	がん化学療法の施行前、施行中、施行後の看護のポイント①	細川　恵子
	主要ながん化学療法レジメンとその看護④：大腸がん	川地香奈子
	がん化学療法プロトコールに関する看護スタッフ指導（大腸がん）	川地香奈子
	主要ながん化学療法レジメンとその看護⑤：血液	近藤　美紀
	がん化学療法プロトコールに関する看護スタッフ指導①	近藤　美紀
	がん化学療法の施行前、施行中、施行後の看護のポイント②	細川　恵子
	がん化学療法プロトコールに関する看護スタッフ指導②：乳がん	金井　久子
	がん化学療法プロトコールに関する看護スタッフ指導③：まとめ	矢ヶ崎　香
３．がん化学療法薬の投与管理とリスクマネジメント（２単位）	血管アクセス用具（VADs）の種類と特徴、適応、取り扱い上の注意点	細川　恵子
	経静脈的投与の管理（１）血管のアセスメントと穿刺手技	金井　久子
	血管のアセスメントと穿刺手技	細川　恵子
	血管のアセスメントと穿刺手技	細川　恵子
	血管のアセスメントと穿刺手技	細川　恵子
	主要ながん化学療法薬/レジメンの経静脈投与の実際	細川　恵子
	経静脈的投与・その他の経路からの投与の管理	細川　恵子
	がん化学療法薬の安全な取り扱いの実際	細川　恵子
	がん化学療法薬の安全な取り扱いの実際	矢ヶ崎　香
	がん化学療法薬のリスク分類と健康への影響	信濃　裕美
	がん化学療法薬のリスク分類と健康への影響	信濃　裕美
	がん化学療法薬の与薬における事故防止	寺井美峰子
	血管外漏出時のアセスメントと処置の実際 がん化学療法薬の安全な取り扱い・経静脈投与に関する看護スタッフ指導	矢ヶ崎　香

４．がん化学療法に伴う身体の変化と症状緩和技術（２単位）	がん化学療法薬によってひきおこされる主な副作用症状の機序、アセスメント①	矢ヶ崎　香
	がん化学療法薬によってひきおこされる主な副作用症状の機序、アセスメント②	矢ヶ崎　香
	フィジカルアセスメント	林　ゑり子
	栄養のアセスメントと栄養管理	林　ゑり子
	がん化学療法を受ける患者の体験とその理解	矢ヶ崎　香
	症状マネジメントの実際	本田　晶子
	症状マネジメントの実際	本田　晶子
	症状マネジメントの実際	矢ヶ崎　香
	症状マネジメントの実際	矢ヶ崎　香
	マネジメントのために必要な知識と技術①	林　ゑり子
	マネジメントのために必要な知識と技術②	矢ヶ崎　香
	マネジメントのために必要な知識と技術③	矢ヶ崎　香
	マネジメントの評価方法（QOLなど）	矢ヶ崎　香
	事例検討（GW）症状マネジメントの実際など	矢ヶ崎　香
	事例検討（発表）症状マネジメントの実際など	矢ヶ崎　香
５．がん化学療法患者へのセルフケア支援（１単位）	セルフケア理論にそった患者アセスメント①	外崎　明子
	セルフケア理論にそった患者アセスメント②	外崎　明子
	入院、外来、在宅などの療養の場の特性を踏まえたセルフケア支援計画の立案①	中村めぐみ
	入院、外来、在宅など療養の場におけるセルフケア指導の方法と実際①	中村めぐみ
	入院、外来、在宅などの療養の場の特性を踏まえたセルフケア支援計画の立案②	矢ヶ崎　香
	がん化学療法をうける患者・家族への教育（服薬指導、教材開発を含む）	矢ヶ崎　香
６．がん化学療法に伴う患者・家族の意思決定を支える看護援助（１単位）	患者・家族の意思決定プロセス	有森　直子
	インフォームドコンセントにおける看護師の役割 意思決定に関する要因のアセスメント	小松　浩子
	意思確認のコミュニケーション	小松　浩子
	治療情報（がんの最新治療など）の提供における看護師の役割	中村めぐみ
	がんの代替・補完医療における看護師の役割	中村めぐみ
	がん看護における倫理的問題	矢ヶ崎　香
７．外来/在宅がん化学療法と看護援助（1単位）	外来/在宅におけるがん化学療法看護の現状と課題（治療環境等、ソーシャルサポートを含む）	矢ヶ崎　香
	外来/在宅におけるがん化学療法を受ける患者の相談とトリアージ（オンコロジックエマージェンシー）	矢ヶ崎　香
	外来/在宅化学療法をうける患者・家族の心理的支援の方法	矢ヶ崎　香
	外来/在宅がん化学療法をうける情報提供の方法	矢ヶ崎　香
	外来/在宅がん化学療法における看護師の役割と他部門との協力	矢ヶ崎　香
	治療環境の整備と支援	矢ヶ崎　香
	継続看護の体制について（入院から外来/在宅治療への移行）	矢ヶ崎　香
演習（２単位）		小松　浩子 矢ヶ崎　香 細川　恵子
臨地実習Ⅰ（１単位）		小松　浩子 矢ヶ崎　香 細川　恵子
臨地実習Ⅱ（３単位）		小松　浩子 矢ヶ崎　香 細川　恵子

表14　がん化学療法看護コース講師　　◎コース責任者　○専任教員

氏　名	所　属　・　役　職
◎小松　浩子	聖路加看護大学教授
○矢ヶ崎　香	聖路加看護大学看護実践開発研究センター助教
○細川　恵子	聖路加看護大学看護実践開発研究センター助教
垣添　忠生	国立がんセンター名誉総長、聖路加看護大学特任教授
有森　直子	聖路加看護大学准教授
外崎　明子	聖路加看護大学准教授
中村めぐみ	聖路加国際病院がん看護専門看護師
高橋美賀子	聖路加国際病院がん看護専門看護師
玉橋　容子	聖路加国際病院ナースマネージャー
金井　久子	聖路加国際病院アシスタントナースマネージャー
高井今日子	聖路加国際病院ナースマネージャー
中村　清吾	聖路加国際病院乳腺外科部長
塩川　　満	聖路加国際病院薬剤部チーフ
林　　章敏	聖路加国際病院緩和ケア科医長
寺井美峰子	聖路加国際病院セーフティマネージャー
信濃　裕美	聖路加国際病院薬剤部
畠　　清彦	財団法人癌研究会有明病院化学療法科部長
末永　光邦	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
岩瀬　春子	財団法人癌研究会有明病院婦人科医員
陳　　勁松	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
五月女　隆	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
横山　雅大	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
坂尻さくら	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
松阪　　諭	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
篠崎　英司	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
徳留なほみ	財団法人癌研究会有明病院化学療法科医員
渡辺　　亨	浜松オンコロジーセンター院長
川地香奈子	財団法人癌研究会有明病院外来治療センターがん看護専門看護師
長谷川久巳	虎の門病院外来看護師長
林　ゑり子	済生会横浜市南部病院がん看護専門看護師
加藤　裕久	昭和大学薬学部医薬品情報学教室教授
近藤　美紀	国立がんセンター中央病院がん化学療法看護認定看護師
本田　晶子	国立がんセンター東病院がん看護専門看護師
薄井　晶子	財団法人癌研究会有明病院リサーチナース室
大坂千重子	財団法人癌研究会有明病院リサーチナース室

臨地実習

臨地実習Ⅰ（１単位）は研修生の自施設にて、臨地実習Ⅱ（３単位）は下記の14施設にて行った。

表15　実習施設

施　　設　　名（順不同）	
聖路加国際病院	埼玉県立がんセンター
国立がんセンター中央病院	神奈川県 県立がんセンター
国立がんセンター東病院	東海大学医学部付属病院
癌研究会有明病院	社会福祉法人三井記念病院
国立国際医療センター	慶應義塾大学病院
東京大学附属医科学研究所病院	昭和大学病院
北里大学病院	済生会横浜市南部病院

表16　がん化学療法看護教育内容

共通科目	90	専門基礎科目	120	専門科目	150	演習	60	実習	180
1. リーダーシップ	15	1. がん看護学総論	15	1. がん化学療法患者・家族のアセスメント	15	総合演習	60	実習Ⅰ	45
2. 文献検索･文献講読	15	2. 症状マネジメント論	15	2. 主要ながん化学療法薬レジメンとその看護	30			実習Ⅱ	135
3. 情報処理	15	3. 腫瘍学概論	15	3. がん化学療法薬の投与管理とリスクマネジメント	30				
4. 看護倫理	15	4. がん化学療法概論	30	4. がん化学療法に伴う身体の変化と症状緩和技術	30				
5. 教育・指導	15	5. 臨床薬理の知識と活用方法	15	5. がん化学療法患者へのセルフケア支援	15				
6. コンサルテーション	15	6. 臨床試験と治験コーディネーター	15	6. がん化学療法に伴う患者・家族の意思決定を支える看護援助	15				
（選択共通科目）		7. がんの医療サービスと社会的支援	15	7. 外来/在宅がん化学療法と看護援助	15				
看護管理	24								
						総時間数　600時間			

３）訪問看護コース

今後急速に展開されていくことが予測されている地域完結型医療提供システムを動かしていく力をもつ訪問看護認定看護師を養成することに焦点をおき、30名の研修生に対して以下の教育プログラムを提供した。本コースの実施にあたり、日本財団の医師・看護師などホスピス緩和ケア従事者の育成に関する助成金を頂戴し、研修生全員に対して授業料の30万円分を補助した。

表17　訪問看護教育内容

共通科目	90	専門基礎科目	90	専門科目	180	演習	60	実習	180
1. リーダーシップ	15	1. 訪問看護概論	15	1. ケースマネジメント	45	演習	60	実習	180
2. 文献検索・文献講読	15	2. ｹｰｽﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ概論	15	2. 訪問看護技術	135				
3. 情報処理	15	3. 訪問看護対象論	15						
4. 看護倫理	15	4. 家族支援の概論	15						
5. 教育・指導	15	5. 在宅ｹｱｼｽﾃﾑ	15						
6. コンサルテーション	15	6. 在宅医療概論	15						
（選択共通科目）									
看護管理	24								
								総時間数	600時間

表18　訪問看護コース専門科目の内容及び担当教員

科　　目	時間（単位）	内　　容	担当教員
訪問看護概論	15（1）	地域における看護活動の変遷 人口動態、疾病構造と保健医療福祉制度及び在宅ケアの動向 訪問看護制度 訪問看護事業の経営管理 諸外国の地域ケアの動向と看護活動 地域ケアにおける看護職の役割・機能・特性	山田　雅子
ケースマネジメント概論	15（1）	ケースマネジメントの概要、意義、必要な対象者及び実施場面 ニーズの判断（スクリーニング） 援助技術（インテーク、アセスメント、計画、実施、評価） ケアマネジメント、ケアコーディネート、チームアプローチ	竹森　志穂
訪問看護対象論	15（1）	医療ニーズの高い訪問看護対象者の概要 　医療ニーズの高い退院患者 　在宅医療を継続している対象者 　終末期にある対象者 セルフケア能力の向上と自立支援、社会参加	竹森　志穂
家族支援の概要	15（1）	家族看護概論 家族支援に関連する諸理論 家族支援の方法論	吉田　千文
在宅ケアシステム	15（1）	在宅ケアの概念 地域における保健・医療・福祉サービスの理解 24時間365日ケア体制の構築 訪問サービス、通所サービス、入所・入居サービスにおける看護職の役割 看護職の確保及びリーダーの育成 在宅ケアシステムの評価	竹森　志穂 沼田　美幸

在宅医療概要	15（1）	在宅医療の動向と関連する法律・制度 在宅医療関連機関との連携・医師等との連携 在宅医療処置管理 医療材料・薬剤等の供給システム、安全対策	竹森　志穂 沼田　美幸
ケースマネジメント	45（3）	訪問看護の展開過程 医療ニーズを有する退院患者のケースマネジメント 　退院連携 　呼吸管理を必要とする利用者 　栄養管理を必要とする利用者 　皮膚・排泄ケアを必要とする利用者 　精神科訪問看護 在宅医療を継続している対象者のケースマネジメント 　呼吸管理を必要とする利用者 　栄養管理を必要とする利用者 　皮膚・排泄ケアを必要とする利用者 　精神科訪問看護 終末期の病態にある対象者のケースマネジメント ＜特別講義＞ 認知症ケアを必要とする利用者 小児に対するケースマネジメントの特徴	竹森　志穂 沼田　美幸 卯野木　健 山藤　里美 川戸　由美 梅田　　恵 萱間　真美 沢田　　秋 宇都宮宏子 得居みのり 及川　郁子
訪問看護技術	135（9）	在宅医療の種類別看護技術及び管理 　終末期ケア：認知症ケアと看取り 　呼吸管理 　栄養管理 　終末期ケア 　スキンケア 　排泄ケア 　ＢＬＳ 　精神科訪問看護 　実施基準の整備、プロトコールの活用、医師との連携 　対象者及び家族への在宅医療技術支援 　医療器材・薬剤等の管理 　看護技術管理 　小児への訪問看護技術の特徴 　退院連携に必要な看護技術 　フィジカルアセスメント 　スキンケア セイフティマネジメント 　合併症予防 　感染防止 　事故防止対策 　緊急時の対応	竹森　志穂 沼田　美幸 得居みのり 卯野木　健 川戸　由美 梅田　　恵 三宮由美子 沢田　　秋 及川　郁子 宇都宮宏子 横山　美樹 岡安　裕之 衛藤　　光 安井はるみ
演習	60（2）	グループワーク	
臨地実習	180（4）		

表19　訪問看護コース講師　　**◎コース責任者　　○専任教員**

氏　　名	所　属　・　役　職
◎山田雅子	聖路加看護大学看護実践開発研究センターセンター長
吉田千文	聖路加看護大学看護実践開発研究センター准教授
○竹森志穂（主任）	聖路加看護大学看護実践開発研究センター非常勤講師
○沼田美幸	聖路加看護大学看護実践開発研究センター非常勤講師
井部俊子	聖路加看護大学学長
石田昌宏	日本看護連盟幹事長
宇都宮宏子	京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部看護師長
卯野木健	聖路加看護大学助教
梅田恵	オフィス梅田がん看護専門看護師
江藤宏美	聖路加看護大学准教授
衛藤光	聖路加国際病院皮膚科部長
及川郁子	聖路加看護大学教授
大久保菜穂子	日本伝統医療科学大学院大学総合医療研究科准教授
岡安裕之	聖路加国際病院神経内科部長
片岡弥恵子	聖路加看護大学准教授
加藤恵子	聖路加国際病院ナースマネジャー
萱間真美	聖路加看護大学教授
川戸由美	愛全診療所居宅療養管理指導事業訪問管理栄養士チームリーダー
倉田慶子	社会福祉法人鶴風会東京小児療育病院・小児看護専門看護師
小西優子	セコム医療システム株式会社訪問看護ステーション部研修室室長
三宮由美子	聖路加国際病院訪問看護ステーションがん性疼痛看護認定看護師
得居みのり	姫路聖マリア病院地域連携室室長・老人看護専門看護師
平井元子	慶應義塾大学看護医療学部助教
安井はるみ	神奈川県看護協会医療安全対策課長
山藤里美	セコム医療システム株式会社訪問看護ステーション部看護部長
横山美樹	国際医療福祉大学小田原保健医療学部准教授

表20　訪問看護コース実習・演習施設

実　　習　　施　　設	
あすか山訪問看護ステーション	足立区包括支援センター千寿の郷
おもて参道訪問看護ステーション	大塚地域包括支援センター
北千住訪問看護ステーション	神奈川県立がんセンター
聖路加国際病院　訪問看護ステーション	京橋おとしより相談センター
セコム川口訪問看護ステーション	ケアサポートセンター千住
セコム吉祥寺訪問看護ステーション	月島おとしより相談センター
セコム駒込訪問看護ステーション	日本橋おとしより相談センター
セコム新宿訪問看護ステーション	柳原病院
セコム成城訪問看護ステーション	柳原リハビリテーション病院

セコム高輪訪問看護ステーション	
セコム千葉訪問看護ステーション	
セコム田園調布訪問看護ステーション	
セコム練馬訪問看護ステーション	
セコム船橋訪問看護ステーション	
白十字訪問看護ステーション	
訪問看護ステーションけやき	

４）研修生の募集

表21　2009年度研修生の募集状況

		不妊症看護	がん化学療法看護	訪問看護
募集定員		15	30	30
１次募集	受験者数	10	54	14
８月30日・９月１日	合格者数	9	30	12
２次募集	受験者数	6	－	9
１月７日・８日	合格者数	5	－	5
３次募集	受験者数	2	－	5
３月16日	合格者数	2	－	5
辞退者		0	0	2
入学予定者		16	30	20

－：募集せず

V 社会貢献

1．企業等との連携－産学共同プロジェクト

大学の使命の根幹は社会貢献にある。その社会貢献のうちには、優れた人材を育成して社会に送り出す教育活動があり、社会に貢献する成果を世に送り出す研究活動などがある。また、狭義の意味での直接的な社会貢献活動としては、市民に対して生涯にわたり学びの場を提供する市民生涯教育活動などの地域貢献がある。このような社会貢献活動の理念の基に聖路加テルモ共同研究事業が始まった。

テルモ株式会社よりの寄付金をもとに、産学共同プロジェクトとして、2007年12月より新たに「聖路加・テルモ共同研究事業」が立ち上がった。その中には新規事業として2008年度よりスタートした「聖路加・テルモ　新健康カレッジ」や、2007年度で終了した21世紀COEプログラムを継続実施する「ナースクリニック」の中の６つの事業および健康ナビスポット「るかなび」でのさまざまな事業がある。

2008年度には聖路加・テルモ共同研究事業の一環として「2008聖路加･テルモ　新健康カレッジ」と称した一般市民向けの様々な健康支援セミナーを開講し、健康についての学びの場を提供している。「新健康」のコンセプトは、「無病息災ではなくても、たとえ持病があっても、上手くそれをコントロールしながら、心身ともによりよく心豊かに生きることを目指す」という日野原重明理事長の提唱によるものである。

１）聖路加･テルモ　新健康カレッジ

「聖路加・テルモ　新健康カレッジ」はテーマにより以下の３つに大きく分けられ、2008年度は全７回の講演とセミナーが開催された。市民アカデミーを中心として、その前後に春期セミナーシリーズと秋期セミナーシリーズを市民対象に実施した。

以下実施の順に掲載する。

⑴　「もっと知ろう、自分のカラダ！　はつらつキャリアウーマン編」（５月、６月、７月の３回実施）

⑵　市民アカデミー「生活習慣病予防のための健康チェック」10月

⑶　「もっと知ろう、自分のカラダ！　はつらつシニアステージ編」（11月、12月、１月の３回実施）

⑴　「もっと知ろう、自分のカラダ！　はつらつキャリアウーマン編」（３回）

セミナーでは、①「妊娠を迎える女性の体づくり・健康づくり」、②「体のサインに気づいて病気を未然に防ごう」、③「キャリアウーマンに増加している若年性更年期障害とは」をテーマに、それぞれ2008年５月21日㈬、６月18日㈬、７月16日㈬の18:30～20:00に開催した。

講師には、森明子教授（聖路加看護大学　母性看護・助産学）、関根さおり氏（ウィミンズ・ウェルネス銀座クリニック）、吉野一枝氏（よしの女性診療所院長）をお迎えし、それぞれの講師から大変わかりやすいご講演をいただいた。女性特有の病気に関する現状の問題と受診の仕方や日常のケアなどを整理して情報を提供していただき、フロアとの意見交換を交えて、女

性の年齢の節目節目の病気の予防やケアについて理解を深めることができた。

それぞれに①30名、②30名、③36名の参加者があった。会社帰りの女性が勉強に立ち寄るケースが多く見られた。なかには仕事が終わらずにやむを得ず遅刻や欠席となるケースもあった。本シリーズの２回参加者は17名、３回参加者は６名であり、回を重ねるにつれフロアからの質疑応答も活発になった。また、それぞれのセミナーでは①28名、②26名、③33名からアンケート回収があった。アンケートによると、テーマに好意的で「学びたいと思いながらもなかなか学ぶ機会がなかったので大変ありがたい」「今後も勉強を続けたいので継続してほしい」という意見が多く寄せられ、働く女性たちは、体のことが気になりながらもなかなか勉強する時間や機会に恵まれず、今回のセミナーを大変好意的に受け止めている様子がうかがえた。

⑵　市民アカデミー「生活習慣病予防のための健康チェック」

この市民アカデミーは、21世紀COEプログラムの一つとして過去４年間に毎年実施されてきたものを、聖路加･テルモ共同研究事業の一環として継承したものである。講演は、①「新健康の考え方～健やかに生きるとは～」、②「健康診断の上手な活かし方～主体的健康管理のために～」をテーマに、2008年10月10日13:30～16:00に開催された。

講師には、日野原重明理事長（聖路加国際病院・同名誉院長，聖路加看護学園理事長）、平松園枝氏（聖路加国際病院附属クリニック・予防医療センターセンター長）をお迎えし、大勢の高齢の参加者の方々に大変わかりやすい講演をいただいた。生活習慣病に関する特定検診の数値の読み方と対策を整理して情報を提供していただき、生活習慣病の予防について理解を深めることができた。講演後の恒例のミニコンサートでは、歌手の坂爪いちお氏によるイタリア民謡のカンツォーネの歌声が会場に響き渡った。

これまでは毎年土曜日開催であったが、今回は平日にもかかわらず、292名の参加者があり、ボランティアスタッフ等を含めると参加者は340名余となった。市民アカデミーは、毎年楽しみに参加する人も多くおられ近隣に限らず遠方の市民の中にさえ定着した様子がうかがわれた。参加者のうち173名からアンケートが寄せられ「大変充実した内容でした。毎回楽しみにしております。生きる励みになります。ありがとうございました」「日々の生活習慣を考えるよい機会になりました。また来年も参加したいと思いますので続けられることを希望致します。中身の濃い充実した催しでした」「元気の出るお話で前向きになります。帰りの足取りが軽くなりそうです」などの感想が寄せられた。また今回は遠方からの聴覚障害を持つ方の要請により、手話通訳付で講演が進められ、参加者の方々に大変喜ばれた。

⑶　「もっと知ろう、自分のカラダ！　はつらつシニアステージ編」（３回）

セミナーでは、①「身近におきる高血圧症とその対策」、②「健康診断で見つける糖尿病や糖尿病予備軍とその対策」、③「知っておくべき腎臓の働きや慢性腎臓病」をテーマに、それぞれ2008年11月１日㈯、12月６日㈯、2009年１月10日㈯の14:00～15:30に開催した。

講師には、林田憲明氏（聖路加国際病院副院長・内科チェアマン統括部長）、門伝昌己氏（聖路加国際病院内分泌代謝科医長）、小松康宏氏（聖路加国際病院腎臓内科部長）をお迎えした。聖路加国際病院の講師の方々は、各講演内容を関連づけて引き継ぐ形で３回シリーズを繋げて下さり、大変わかりやすい講演をしていただくことができた。各セミナーではそれぞれの病気に関する現状の問題と対策を整理して情報を提供していただき、フロアとの意見交換を交えて、

身近な病気の予防やケアについて理解を深めることができた。

それぞれに①40名、②36名、③37名の参加者があった。２回参加者は18名、３回参加者は11名であり、近隣からの複数組の夫婦の参加や聖路加国際病院の患者さんの参加があった。またそれぞれのセミナーでは①37名、②32名、③35名からアンケート回収があり、「わかりやすくて参加して有意義でした」「事例や画像を使ってのお話がよくわかりました」「２回目、３回目の２回参加しましたが、身近の問題でもあり、注意深く受講させて頂きました」「今後も講師の方やテーマを参考に参加したいと思います」など、次年度のセミナーを心待ちにする近隣住民が少なくなく、この「聖路加・テルモ　新健康カレッジ」は地域住民に定着した様子がうかがわれた。

「はつらつキャリアウーマン編」「はつらつシニアステージ編」とも参加者の中には前回のテーマについての資料を請求する人もいて、病気予防や健康管理に関する市民の方々の学びに対する熱心さが伝わり、セミナーのニーズが高いことがうかがわれた。

前述のように2008年度よりテルモ株式会社の寄付金をもとに、2007年度で終了した21世紀COEプログラムからの継続事業として、「ナースクリニック」の中の次の６つの事業、および研究センター１階での聖路加健康ナビスポット「るかなび」での次の様々な事業が引き続き運営され、市民のニーズに合った活動を展開するとともに、新たな看護実践を開発する場となっている。

２）「ナースクリニック」

・天使の保護者ルカの会
・自分の歩調を大切に―乳がん女性のためのサポートプログラム
・子どもと家族中心のケア、子どもの健康、知ろう、考えよう―子どもの健康を家族と考える学習・交流会
・転倒骨折予防体操教室
・出張介護講座
・ルカ子　ウィメンズヘルス・カフェ

３）聖路加健康ナビスポットるかなび

「健康相談」「健康チェック」「健康情報の提供」「闘病記の提供」＝平日は毎日実施
「ランチタイムミニ健康講座・コンサート」＝第３木曜日実施
「ＣＨＡＤＯ（茶道）」＝第２水曜日提供
「ハーブティーサービス」＝毎週木曜日提供

なお２）、３）の詳細については129ページを参照いただきたい。

２．社会活動－まちかどクリーンデーに参加

2008年７月10日、本学は「まちかどクリーンデー」に初めて参加した。まちかどクリーンデーは中央区が推進するキャンペーンで、毎月10日に自宅や周辺など身近な場所の清掃をいっせいに繰り広げ、「住みたい、働きたい、訪れたい」清潔で楽しいまちを目指すことを目標としている。中央区の多くの団体（婦人会、ボーイスカウト、町内会･自治会、商店街、企業、個人など）が自主的に登録し参加していた。

このキャンペーンに呼応して本学も中央区（窓口：環境部環境保全課）に登録し、毎月10日（休暇期間、土日祝日を除く）午前８時から30分間ほど、大学周辺の道路や敷地内、また築地川公園などの範囲をクリーンアップする活動を始めた。

活動実績は以下のとおりである。

第１回　2008年７月10日㈭　参加：教職員８名、学生15名

（８月は夏期休暇中のため中止）

第２回　９月10日㈬　教職員７名、学生１名

第３回　10月10日㈮　教職員14名

第４回　11月10日㈪　教職員８名、学生２名

第５回　12月10日㈬　教職員８名、学生１名

（１月10日は雨天のため中止）

第６回　2009年２月10日㈫　教職員９名、学生１名

第７回　３月10日㈫　卒業式当日のため20分間に短縮、教職員11名、当日卒業する学生１名

これまで教職員が中心の活動であったが、学生のより多くの参加を促したい。

Ⅵ 研究活動

1．研究活動

1）教員の研究業績・実践活動

本年度より教員の「教育研究活動・社会活動業績」は、図書館の「聖路加看護大学研究成果リポジトリ（SLCN e－Quilt)」に掲載する。

http://arch.slcn.ac.jp

2）博士論文・修士論文

・修士論文（2008年９月修了）

【看護学専攻】

氏　　名	題　　名
寺井美峰子	医療事故発生後に看護職能団体が支援した医療機関における医療事故への対応と組織再建過程に関する記述的研究

・修士論文（2008年９月修了）

【ウィメンズヘルス・助産学専攻】

氏　　名	題　　名
光武　智子	ダウン症児を出産した母親に関わった助産師のケアとその背景

・修士論文（2009年３月修了）

【看護学専攻】

氏　　名	題　　名
伊東美奈子	中堅看護師が転職前に行う予測と転職後に遭遇する現実との相違の構造化
井ノ下　心	化学療法を受ける再発白血病患者の有害事象へ対する対処行動の構造化
小泉　　麗	重症心身障害児の胃瘻造設に関する母親の意思決定過程の理論化
三瓶舞紀子	精神科看護師が認識する自傷行為を行った患者に対して行う意図を含む看護行為の理論化 －パーソナリティ障害・適応障害等の障害をもつ患者への看護を中心に－
関根小乃枝	交替制勤務の病棟看護師に対するワーク・ライフ・バランス施策導入の成功要因に関する考察
関根　由紀	人工呼吸器離脱過程における心不全患者の取り組みの構造化
三浦友理子	新卒看護師の学びの構造
山口　綾子	カンボジア王国シェムリアップ州の５歳未満児を持つ母親の育児行動
岡本　典子	SBS（social behaviour schedule)日本語版の信頼性・妥当性の検証 －訪問看護サービスを利用する精神障害者の社会行動の評価－
吉川奈緒美	看護基礎教育における「日常生活の援助技術」に関するミニマム・エッセンシャルズ －体位変換、清拭、寝衣交換について－

【ウィメンズヘルス・助産学専攻】

氏　　名	題　　名
青柳　優子	不妊治療後の産婦に対する助産師の意識と実践
飯田真理子	当事者による妊娠中の“女性を中心としたケア”の認識
清水　　彩	家族のエンパワーメントをサポートする NICU 看護 －家族の認識に基づいて－

・課題研究（2009年３月修了）

【看護学専攻】

氏　　名	題　　名
柏田　孝美	終末期がん患者の療養場所における意思決定
鈴木　理恵	皮膚表面に露出した腫瘍－Malignant Fungating Wounds－をもつ 進行がん患者のアセスメントと看護ケアについて：文献レビュー
竹田　佳子	病院看護職に対する児童虐待の継続教育支援について
福宮　智子	国外におけるリエゾン精神看護の有用性に関する文献レビュー －効果量の観点から－
本井　多希	同種造血幹細胞移植を受ける患者の栄養に関するアセスメントとケアについて：文献レビュー
片岡　　光	抗がん剤誘発遅延性悪心・嘔吐を発症した患者のアセスメント：文献レビュー
龍　　里奈	65 歳以上高齢者におけるうつに関連する要因の分析 －特定高齢者判定項目を中心に－
宮本千恵美	がん末期患者を支える在宅緩和ケアチームの構築過程と訪問看護師のかかわり

【ウィメンズヘルス・助産学専攻】

氏　　名	題　　名
新井　香里	周産期における児童虐待の早期発見に向けたケンプ・アセスメントの実用の可能性
吉沢　文芳	周産期における在日中国人女性に対するケア　－事例を通して－
大橋　澄子	周産期医療事故時の対応と再発防止に関する助産師向け学習教材の開発
菅原　真澄	分娩に立ち会う幼児の行動
鈴木　安代	PRECEDE－PROCEED モデルを用いた都市部の妊婦への出産準備クラスの開発
仙波百合香	腰痛を持つ妊婦に対するエビデンスに基づいたケアの検討
新田　祥子	看護職者の遺伝及び遺伝教育に対する捉え方 －いのちの教育を実施している看護職者のフォーカスグループインタビューを通して－
福富　規子	助産師主導ケア実践施設における妊婦の受入れ基準インデックスの開発
古川　直美	母乳育児に関する文献レビュー －母親の意思決定を支えるエビデンスに基づいたケア－
松本　千香	DV 対策に組織的に取り組んでいる医療機関の実際と課題
涌井　恵美	聴覚障害を持つ産婦に対する分娩期ケアの考察

・博士論文（2008年９月修了）

氏　　名	題　　名
辻　　恵子	出生前検査を考慮する妊娠中の女性のための決定支援プログラムの効果
大金ひろみ	末期がん患者の配偶者への『情報提供ガイドを用いた在宅移行支援プログラム』の開発

・博士論文（2009年３月修了）

氏　　名	題　　名
石村佳代子	地域で単身生活を維持している男性統合失調症患者の対人関係の構造
小野若菜子	家族介護者に対して行うグリーフケアと先行要因、アウトカムの関連 －訪問看護ステーションに勤務する看護師への全国質問紙調査から－
谷口　珠実	下部尿路症状を有する女性患者における骨盤底筋訓練の継続に関する因果モデルの検証
小林　康江	妊娠末期から産後４か月にいたる母親同一性の獲得に影響する要因
藤原ゆかり	Evaluating Quality of Childbirth Care by Women from Culturally Diverse Backgrounds Living in Japan: Towards Developing Culturally Congruent Care in Becoming a Multicultural Society
太田　尚子	ペリネイタル・ロスのケアに関する看護者教育プログラムの効果 －ランダム化比較試験－
西田みゆき	排便障害児の母親のためのエンパワーメント看護介入プログラムの開発

・論文博士（2008年９月）

氏　　名	題　　名
村上　好恵	遺伝性大腸がんに関連した遺伝子検査の結果開示後の精神的苦痛と罪責感

３）学部卒業論文

・総合看護・看護研究Ⅱ（2009年３月卒業）

氏　　名	題　　名
青野　睦子	病院ランキング本の役割と課題について
新井麻奈美	デートＤＶに関するピアエデュケーションの試み
有路　幸恵	Centering Pregnancy に関する文献検討
猪俣亜紀子	不妊当事者自助グループ、サポート・グループの効果や特徴及び看護職との協働の在り方に関する文献検討
今泉　綾乃	ナラティブによる自己認識変容の分析
上野真由美	肺がんを告知され化学療法を受ける患者の心理過程に応じた効果的な看護援助の検討
浦巽　　文	高齢者の終末期がん患者のその人らしい日常生活行動の実現のための看護師の関わり方 －緩和ケア病棟の看護師の視点から－
枝　　晃司	親子キャンプに参加した子どもの成長と自然体験活動が親子関係に与える影響に関する研究

氏　　名	題　　名
緒方　綾乃	子どもにとって効果的な診察前プレパレーションの考察－自作の紙芝居を用いた診察前プレパレーションにおける、幼児期の子どもとその家族への看護援助とその影響から－
荻野由加里	壮年期男性の健康に対する考え方と運動習慣について
長田詩穂理	一般病棟における高齢者終末期ケアの質の向上に関わる要因
織田　瑛子	AEDによる救命活動推進のための一考察－救命活動に対する意識調査から－
加島　千愛	ICU環境における騒音と照明の実態調査
加藤　章子	障害を持った子どもの取り組みと看護師の関わり
加藤亜紗子	リンパ浮腫のある終末期がん患者の全人的苦痛を軽減させ、QOLを高める看護援助の検討
金重　亜子	National Health Education Standards と日本の性教育における課題についての研究
神山　純子	持続経腸栄養中の ICU 患者における胃残量の増加と人工呼吸関連肺炎発生の関係に関する検討
木原　未稀	看護実習における学生の沈黙の感じ方と対処行動－実習経験の違いに焦点をあてて－
木村真紀子	日本のプリセプターシップにおけるプリセプターに関する研究の動向とその現状
草深　志帆	満足な出産に関わる要因の検討－夫婦で出産を経験した３組の事例から－
小松　美緒	若者が STD（性感染症）に関する情報源として遭遇する検索上位サイトの信頼性の分析と課題
近藤　華子	長期子どもキャンプでみられた子どもたちの変化に関する研究 －自然・大人・子ども同士の関わりが子どもたちに与える影響について－
坂　　温子	訪問看護における満足度の高いターミナルケアの検討 －療養者･家族と訪問看護師の思いを通して－
榊原　杏子	不安の強い統合失調症患者に対する看護支援
佐藤　　鏡	アダルトチルドレンの回復に向けた、看護師の治療的な関わり方の考察
佐藤真以子	健康推進員と保健師の協働関係－健康推進員の抱く認識に焦点を当てて－
志賀　紀恵	手記からみたアルコール依存症者の子どもの心理の変化
篠　真優子	フィリピン・スラム在住の成人の高血圧とその知識について
篠田奈緒子	患者-看護師間における信頼関係構築のための「自己開示」というコミュニケーション方法について
下田　絢子	在宅療養希望がある終末期がん患者とその家族に対する在宅への移行期における効果的な退院調整の検討
杉山　　愛	日本において外国人看護師との協働についての課題と適応要素の明確化、及びより良い関わり方についての研究
鈴木　綾乃	アルツハイマー型認知患者の専門外来初診までの経緯と看護援助を考える －家族と受け持ち看護師へのインタビュー調査をもとに－
鈴木　美穂	痛みや苦痛を伴う検査や処置における自閉症児に対するプレパレーション －採血場面におけるプレパレーションの検討－
高野瀬まり	新卒看護師が半年間で経験した死後のケアにおける精神的・技術的変化とその要因

氏　　名	題　　名
高橋　理沙	手術室看護師が仕事でやりがいを感じるとき －手術室看護の良さとは何か－
高山　友子	医師が回答するQ&Aサイトにみる患者の家族の病い体験を中心としたコミュニケーションのあり方
田中　優美	日本人青年渡航者の健康不安と携行医薬品
谷岡　佑紀	ペアレンティングプログラム　－その実際と看護への応用－
玉置　真緒	Blogから見た、妻の妊娠期における夫の思いの考察
塚野　理実	話すという行為が障害されたことによって失語症患者に生じる因子の検討
土屋早野佳	遷延性意識障害患者における入眠を促す援助としての足浴の効果の検討
綱渕　奈緒	青年期の同性愛者におけるカミングアウトとセクシャリティへの認識のプロセス
長井　理恵	入院患児のきょうだいへの援助のあり方を考える －小児病棟での実習を通して－
長江麻友子	男性高齢者の生きがいを見出すプロセス
滑川　沙織	がんターミナル期にある患者と関わる看護学生の心理的体験とその対処 －ブログ記事と看護教育関連の文献による分析－
新見　博子	看護師経験が１年目から２年目になるときの気持ちや行動の変化についての研究
西之宮千春	妊婦健診における開業助産師の父親への支援
野々山いづみ	青年期女性における月経随伴症状の頻度・程度とそれに対するセルフケア状況についての文献検討
橋口　由依	入院患者の思いの伝えやすさと看護師の関わり方の検討
浜岡　亜衣	先天性心疾患が出生後に明らかになった児の母親と家族に対して行われているケアと看護者の思い
日田このみ	遺伝サポートグループのメンバーが医療者との交流、また遺伝サポートグループ同士の交流で得られたこと
平戸　　藍	マニラのスラム地区のDOTSパートナーの活動と困難
福田　　彩	入院することがきょうだいに与える影響ときょうだいへの支援の在り方の検討
藤澤　朋美	オンライン・コミュニティからみた海外駐在員妻の孤独感の要因と支援
船津　幸恵	配偶者と死別後の高齢女性が新しい一人の生活をつくりあげていくプロセスと家族以外の身近な他者との交流関係－死別後２年半を経過した１事例を通して－
松村　奉子	小児がんの子どもの看取りを経験する看護師の支えとなるもの －看取りを経験した看護師の思いから－
南澤　ゆい	一般病棟で骨転移の告知を受けたがん患者の主体性の発揮を促す看護の考察
宮崎　里美	ICU環境における騒音と照明の実態調査
宮田ゆりえ	在宅ホスピスにおける患者と家族の自然な生活を支えるチームケア
村岸　美沙	低出生体重児の母親が児の退院後に抱く思いに関する文献検討

氏　　名	題　　名
柳橋　千明	保健室登校における養護教諭に求められるもの －保健室登校児の母親と図工室登校を受け入れた教師へのインタビューを通して－
山田　知美	背面開放座位が自律神経活動に及ぼす影響 －両足底を床面に設置させ、頸部自力保持した背面密着座位との比較－
吉松　佑佳	認知症高齢者に対する音楽療法を日常生活に活かす看護師の役割
若林　絵美	学童前期（７歳～９歳）の喘息児に対する、内服治療継続のセルフケア行動獲得に向けた看護援助
若宮　智美	救命救急センターICU における人工呼吸管理中の患者の不穏発生率と鎮静期間に与える影響
脇阪　美帆	在宅難病療養者の主介護家族の介護負担感と介護継続要因に関する質的研究 －療養者と主介護家族の続柄の違いから－
堀川　　麗	社会生活を送るオストメイトに対する看護支援についての一考察
三橋真理子	児童期の身体的被虐待児の心理適応過程とアタッチメント関係形成について
宮本　祐里	父親との子育てをうまく行うためには？ －夫婦協働の子育てについての文献検討－
五十嵐明子	シフト勤務をする女性の看護職と国際線客室乗務員の比較によるシフト・ローテーション・パターンと職業継続についての一考察
石井　千尋	ナラティブの視点から看護師が患者にパートナーとして期待される役割についての文献検討
上田　直子	市民における一般知識としての遺伝情報の理解に関する一考察
大野富美子	看護職とケアマネジメント
小峰みゆき	HIV 感染者が医療機関で受ける不快な体験とそれに対する看護支援
紺野　　恵	自己管理困難な高齢 CAPD 患者を介護する配偶者の心理状況
白田千佳子	３年次臨地実習における学生の捉え方と現状
関田佳代子	男性看護師の歴史的変遷から見る、病棟での男性・女性看護師のニーズと男性看護師の看護ケアの実態に関する文献検討
丹沢　美樹	フィリピンのスラムにおけるヘルスボランティアの活動 －ボランティア活動を継続する理由と辞めたくなる理由－
塚田　友香	意識レベルの低い高齢患者に対し、看護師が日常的ケアに生活史を組み込んだケアの構造 －QOL 向上を目指して－
徳武　郷子	帝王切開術を体験した褥婦の心理的変化と、褥婦が心理的危機状態を対処していく過程で影響があると考えられる要因および看護ケアについての考察
内藤加奈恵	結腸ストーマをもつ高齢者の自己適応過程における思いの内容とソーシャルサポートについて
中川　理恵	高機能広汎性発達障害の子どもを持つ親が抱く辛い気持ちや苦悩と看護職の役割 －子どもが障害の診断を受けるまでの体験に焦点を当てて－
野田　浩代	A 病院における災害時の対応に関する教育の現状と今後の課題について
肥後直生子	男子大学生における性交時のコンドームの使用状況とその前後の意識及び性教育経験
松木　聡子	救命救急センターICU における気管チューブのカフ圧設定と、抜管後に発症する喘鳴の関係に関する検討
三田由美子	高齢糖尿病患者の自己管理における家族による支援及び家族に向けた看護支援に関する文献検討

氏　　名	題　　名
毛利奈々子	母親が子どもの障害を受容する過程における、看護師が行う心理的ケアと、障害受容に対する認識－より効果的な障害受容の支援のあり方を目指して－
渡邊　麗子	在宅高齢者の足への関心とフットケアミニ講座受講後の変化 －高齢者グループにおけるフットケアミニ講座の実践を通して－

4）受賞論文

・日本私立看護系大学協会　平成20年度研究助成　受賞

［看護学研究奨励賞］（応募５件、採択２件）

堀内成子、片岡弥恵子、江藤宏美、松本直子

受賞論文：　Development of an evidence-based domestic violence guideline: Supporting perinatal women-centred care in Japan

［若手研究者助成］（応募16件、採択６件）

小林真朝

研究テーマ：「伴侶動物の介在による地域健康推進プログラムの開発」

・JA共済総研研究助成

大久保暢子

「自動車事故による頭部外傷を起因とした遷延性意識障害患者に対する背面開放座位の効果」

助成金額：100万円

助成期間：2008年10月～2009年９月）

（千葉療護センター、東北療護センター、中部療護センター、岡山療護センター、自動車事故対策機構）

・パラマウントベッド株式会社研究助成

大久保暢子

「脳卒中患者に対する背面開放座位保持具の改良を含めた“からだを起こす看護ケアプログラム”の修正」

助成金額：50万円

助成期間：2008年４月～2009年３月

（パラマウントベッド株式会社、札幌麻生脳神経外科病院、日本赤十字看護大学（川嶋みどり））

・平成20年度ホスピス緩和ケアにおけるQOLの向上に関する研究助成（日本財団　笹川医学医療研究財団）

鶴若麻理

「老人介護施設の看取り介護をめぐる意思決定に関する研究

助成金額：60万円

助成期間：2008年度

共同研究者：仙波由加里（桜美林大学総合研究機構研究員）

・国立高度専門医療センター等研究費

国際医療協力研究委託費20指定５　分担

田代順子

「大学院修士課程の「ウィメンズヘルス・助産・看護人材開発協力のカリキュラム、教材開発研究」

助成金額：24万円

助成期間：2008年度～2009年度

主任研究者：沖佐　保（国立国際医療センター）

分担研究者：堀内成子

・Megumi & Shigeo Takayama Foundation

亀井智子

「St. Luke's College of Nursing, Geriantric Care Project, Intergenerational Day Program 'St. Luke's Nagomi-no-kai' 2008 Annual Report」

助成金額：100万円

2009年３月

・財団法人明治安田こころの健康財団

亀井智子

「都市部における多世代交流型デイプログラムの実践的開発研究－高齢者の心の健康と小学生の高齢者観形成についての継続的比較」

助成金額：50万円

2008年10月

・花王株式会社

菱沼典子

「温罨法に関する共同研究」温罨法研究会を実施

助成金額：100万円

2008年９月

５）　特許等の申請

2008年度には、2件の特許申請、1件の実用新案申請を行った。

・特許願　整理番号SLUK08002　　受付番号50802372508

提出日　平成20年11月10日　　出願番号通知　特願2008-287590

発明者　亀井智子

特許出願人　　学校法人聖路加看護大学

「測定データ読取装置及びこれを用いたデータ読取・送信システム」

・実用新案願　整理番号SLUK08001　受付番号50802463093

提出日　平成20年11月21日　　出願番号通知　実願2008-　8176

考案者　亀井智子

実用新案登録出願人　　学校法人聖路加看護学園

「転倒事故予防教育用住宅模型」

・実用新案願　整理番号SLUK08003　受付番号50900407685

提出日　平成21年２月27日

出願番号通知　特願2009-　44938発明者　梶井文子

特許出願人　学校法人聖路加看護学園

「ケアサービスに関する情報を処理する装置および方法、並びにプログラム」

２．研究費の取得状況

１）文部科学省科学研究費補助金

平成20年度の文部科学省科学研究費の取得状況は、下表のとおりである。

2008年度文部省科学研究費交付内定一覧表　（単位：千円）

研究種目	継 新	氏　名	研　究　課　題	金額
基盤研究（A） （一般）	継 4 （２）	小松　浩子	患者と医療者が分かり合えるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性検証	35,500 14,200
究（B） （一般）	継 4 （４）	田代　順子	看護学でのサービスラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価	15,700 1,100
基盤研究（B） （一般）	継 4 （４）	片岡弥恵子	アジア文化圏に生きる女性へのＤＶ支援ガイドライン創生と検証	15,500 3,800
基盤研究（B） （一般）	継 3 （３）	萱間　真美	質的研究方法を用いた看護学の学位論文評価基準の作成に関する研究	15,000 2,500
基盤研究（B） （一般）	継 4 （３）	及川　郁子	子どものヘルスプロモーション促進への基礎教育における外来看護実習と外来看護の構築	14,600 2,000
基盤研究（B） （一般）	継 4 （３）	森　明子	排卵誘発剤を使用する女性が安楽に安心して過ごすためのセルフケア支援モデルの効果	15,300 3,800
基盤研究（B） （一般）	継 4 （３）	梶井　文子	認知症高齢者の学際的チームアプローチに関するケアの質評価システムの開発	15,500 1,800
基盤研究（B） （一般）	継 4 （２）	菱沼　典子	少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発	10,500 4,500
基盤研究（B） （一般）	継 4 （２）	中山　和弘	インターネット情報に翻弄される患者、家族を支援する看護職のためのｅラーニング開発	11,300 3,100
基盤研究（B） （一般）	継 3 （２）	井部　俊子	サービスマネジメントをフレームワークとした看護管理学の体系化に関する研究	7,400 3,200
基盤研究（B） （一般）	継 4 （２）	江藤　宏美	乳幼児の睡眠分析システム情報共有プラットホームの構築	12,200 2,700
基盤研究（B） （一般）	継 3 （２）	亀井　智子	急増する在宅慢性呼吸不全患者の入院を予防するテレナーシングの日本への実践的導入	14,300 3,500
基盤研究（B） （一般）	継 4 （２）	麻原きよみ	地域看護における体系的倫理教育ラダーの開発と評価	12,600 3,800
基盤研究（C） （一般）	継 3 （３）	平林　優子	子どもの医療的ケアの自律的日常生活行動への導入に関する看護支援プログラムの作成	2,400 600
基盤研究（C） （一般）	継 4 （３）	大森　純子	前期高齢女性の近隣他者との交流関係を活用した主体的健康増進プログラムの開発	3,500 500
基盤研究（C） （一般）	継 2 （２）	小野　智美	日帰り手術に向けての幼児の自律性を支援する看護介入プログラムの評価への段階的研究	2,900 1,000
基盤研究（C） （一般）	継 2 （２）	永森久美子	生後 14 日間における母乳育児支援のための哺乳行動アセスメントツールの開発	3,600 500

研究種目	継 新	氏　名	研　　究　　課　　題	金額
基盤研究（C）（一般）	継 4（2）	長松　康子	アスベスト関連相談に関する保健師向けガイドラインの構築と評価	3,300 900
萌芽研究	継 2（2）	片岡弥恵子	Quality Indicator の開発：社会に対し出産ケアの質を保証するために	3,300 1,100
萌芽研究	継 2（2）	有森　直子	出生前検査の選択を考慮する女性をエンパワメントする包括的意思決定支援の介入研究	3,200 900
萌芽研究	継 2（2）	堀内　成子	ユビキタス IP-TEL 産科医療通訳システムの開発	3,200 2,000
若手研究（B）	継 3（3）	佐居　由美	看護師の「安楽なケア」実践を促進するためのプログラムの開発と評価	3,300 900
若手研究（B）	継 3（2）	大熊　恵子	病棟看護師が認識している統合失調症患者への退院支援の困難さの分析	1,100 200
若手研究（B）	継 3（3）	佐居　由美	看護師の「安楽なケア」実践を促進するためのプログラムの開発と評価	3,300 900
若手研究（B）	継 3（2）	大熊　恵子	病棟看護師が認識している統合失調症患者への退院支援の困難さの分析	1,100 200
若手研究（B）	継 3（2）	大久保菜穂子	市民との協働による健康支援ボランティア教育プログラムの開発	3,200 1,100
若手研究（ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ）	継 2（2）	糸井　和佳	都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流を促進する支援の開発	2,680 1,350
基盤研究（A）（一般）	新３	柳井　晴夫	臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験（CBT）の開発的研究	33,100 11,200
基盤研究（B）（一般）	新５	外崎　明子	がんサバイバーの身体活力回復プログラムの構築と評価研究	13,100 3,200
基盤研究（B）（一般）	新３	堀内　成子	貴重児妊娠の不安を軽減するための就寝中胎動ホームモニタリングの実用化開発	15,000 6,700
基盤研究（B）（一般）	新４	有森　直子	女性のリプロダクション健康課題の意思決定支援教育コンソーシアムとプログラム検証	15,000 4,400
基盤研究（C）（一般）	新３	矢ヶ崎　香	がん医療における EBN と臨床実践の gap と波及モデルの開発	3,500 1,700
萌芽研究	新１	田代　順子	開発途上国看護職の国家間移動を押し止めるホールドファクターとしての現任教育の検討	1,500 1,500
若手研究（B）	新４	鶴若　麻理	アジアの高齢者の終末期医療をめぐる事前指示に関する国際比較研究	2,700 800
若手研究（B）	新３	佐竹　澄子	寝たきり患者の副交感神経優位を導く聴覚刺激	1,800 100
若手研究（B）	新３	大久保暢子	慢性期脳血管障害患者の寝たきりを防ぐ背面開放座位ケアプログラムの開発	3,300 2,100
若手研究（B）	新２	奥　裕美	夜勤から始める新人看護師オリエンテーションプログラムの開発とその評価	2,300 1,100
若手研究（B）	新３	市川和可子	がん体験者が伴走する Web 版乳がん患者サポートグループの開発	2,900 900
若手研究（B）	新４	平野　優子	在宅人工呼吸器装着 ALS 患者の困難と人生再構築支援ガイドライン作成への縦断的研究	3,200 600
直接経費				95,350

間接経費　26,955（分担者への配分金含む）

総件数　37 件　（継続　25　件　　新規　12　件）

注1）新欄の上段は研究年数を表示、下段カッコ書きは研究年次を表示しています。

注2）金額欄の上段は研究総額を表示、下段は2008年度分の研究費を表示しています。

2）厚生労働科学研究費補助金

2008 年度は、以下のとおり７件が採択された。

（単位：千円）

研究事業名	継　新	氏名	代表・分担	研究課題	金額
地域医療基盤開発推進研究事業	継 3（3）	萱間　真美	代表	精神科疾患を有する人の地域生活を支えるエビデンスに基づいた看護ガイドラインの開発	2,500
地域医療基盤開発推進研究事業	継 3（3）	小松　浩子	代表	市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価	4,000
がん臨床研究事業	継 3（3）	山田　雅子	分担	がん対策の実施基盤及び推進体制に関する国際比較研究	3,500
がん臨床研究事業	継 3（3）	廣岡　佳代	分担	がん対策の実施基盤及び推進体制に関する国際比較研究	2,000
第３次対がん総合戦略研究事業	継 3（2）	中山　和弘	分担	患者・家族・国民の視点に立った適切ながん情報提供サービスのあり方に関する研究	1.000
障害保健福祉総合研究事業	新 3（1）	萱間　真美	分担	精神障害者の退院促進と地域生活のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究	3,000
厚生労働科学特別研究事業	新 1（1）	萱間　真美	代表	精神障害者の訪問看護におけるマンパワー等に関する調査研究	5,000
当年度総合計					21,000

総件数　　７件

（注１）継新欄の上段は研究年数を表示、下段カッコ書きは研究年次を表示

3．研究活動を支える基金等

1）補助金の獲得

教員の研究活動を支える外部資金の獲得は、年々充実している。下表は過去10年間における文部科学省科学研究費補助金の獲得実績である。これによると、採択件数および金額ともに年々増加の一途を辿っており、また。新規採択率も50％を超え全国平均よりかなり高い率になっている。また厚生労働省科学研究費はじめ各種の研究助成にも積極的に応募し、研究費の獲得を目指している。

年度	採択件数	金額（千円）	申請件数		備考	新規採択率％
			継続	新規		
1999	14	21,100	7	11	継続１件辞退、 新規１件転入、継続１件転入	64
2000	16	30,400	9	13	継続１件転入	54
2001	16	44,000	10	12	間接経費 4,800 千円含む	50
2002	22	60,250	10	20	間接経費 5,250 千円含む	60
2003	24	61,040	15	16	継続１件辞退、継続１件転出、 継続１件転入、 間接経費 4,140 千円含む	56
2004	28	96,410	17	20	継続１件辞退、継続１件転出、 間接経費 6,270 千円含む	55

2005	29	85,970	19	15	継続 1 件辞退、間接経費 6,270 千円含む	67
2006	29	91,890	18	11	継続 1 件辞退、新規 1 件転出、継続 1 件転出、間接経費 12,090 千円含む	75
2007	34	105,670	18	21	継続 2 件辞退、新規 1 件転出、継続 2 件転出、継続 2 件転入、間接経費 21,570 千円を含む	81
〃 ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ	1	1,330		1		100
2008	38	123,384	25	14	継続 2 件転出、間接経費 26,955 千円（分担者への配分金を含む）	71
〃 ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ	1	1,070		2		50

2）サバティカルリーブ

教員の研究休暇制度としてサバティカルリーブ規程がある。本年度は菱沼典子教授および外崎明子准教授が取得した。

3）聖路加看護大学ミセス・セントジョン記念教育基金

聖路加同窓会の寄付によって設けられている本基金は、教職員の海外研修、海外からの大学人や看護専門職者の招聘を目的としている。1999年度より年間300万円程度を海外での学会発表、研修等に積極的に利用してきた。この基金の運用については、５年ごとに見直すことになっており、2009年３月31日まで５年間の延長が承認されている。

本年度は教員４名が海外出張の支援を受け、また海外からの招聘（海外間の派遣を含む）４件が適用され、総額2,726千円を支出した。詳細は下表のとおりである。

2008 年度ミセス・セントジョン記念教育基金実績

【派遣】

氏　　名	所　属	期　間	目　　的	費用実績（円）
外崎　明子	成　人 看護学	2008/2/14　～ 2008/2/19	2008 BMT Tandem Meetings (2008 American Society for Blood and Marrow Transplantation Research Meetings) に参加し研究成果を報告（訪問先　米国サンディエゴ）	498,118 円
江藤　宏美	研　究 センター	2008/5/26　～ 2008/6/6	第 28 回 The International Confederation of Midwives(ICM) (Glasgow, UK)の ICM 評議員会と ICM 大会に参加（訪問先　英国グラスゴー）	340,930 円
卯野木　健	成　人 看護学	2008/5/3～ 2008/5/8	American Association of Critical Care Nurses & National Teaching Institute への参加・研究発表（訪問先　米国シカゴ）	184,024 円
大久保暢子	基　礎 看護学	2008/8/10　～ 2008/8/24	Mayo Clinic において Certified Neuroscience Nurse Core Curriculum の概要を学ぶ（訪問先　米国ミネソタ州）	388,905 円

4 件　合計　1,411,977 円①

【招聘】

氏　　名	所　　属	期　　間	目　　的	費用実績（円）
堀内　成子	ウィメンズヘルス・助産学	2008/1/22　～　2008/1/24	2005 年に学術交流協定を締結したマヒドン大学スリラート校およびラマティボディ校（タイ）の両校学部長交代を期に、新学部長を本学に招聘する	476,569 円
亀井　智子	老　年看護学	2008/12/8　～　2008/12/14	大学院修士課程において、アルツハイマー病の第一人者を招聘し、老年看護学特論Ⅱの特別講義を行う 招聘者：Prof. Peter J. Whitehouse. MD. PhD. Case Western Reserve University, Department of Neurology, Integrative Studies.	337,750 円
堀内　成子	ウィメンズヘルス･助産学 研究科長	2008/6/3～　2008/6/12	本学前客員教授 Dr. Sarah E. Porter を招聘し、院生および教員との交流、論文作成のアドバイス、また専門分野である'INTRODUCTION TO HEALING TOUCH'について講義を行う	411,951 円
卯野木　健	成人看護学 NP 研究会	2008/7/13～　2008/7/18	ノースフロリダ大学大学院麻酔看護（Nurse Anesthetist Program）　John McDonough 教授を招聘し、米国の麻酔看護師の現状や課題、本邦における課題等について検討するため、日本における麻酔看護師の実現性を考慮する	88,675 円

４件　合計　1,314,945 円②

①＋②　　８件　合計　2,726,922 円

４．研究倫理審査委員会

本年度、菱沼典子（委員長）、伊藤和弘（副委員長）、亀井智子、白木和夫、森明子、山田雅子（以上学内）、桑原博道、小松康宏、関正勝（学外）、鶴若麻理（書記）で委員会が構成されたが、菱沼のサバティカル期間は及川郁子が交代した。12回の委員会を開催し、提出された研究計画書について審査を行った。通常審査93件、簡易審査4件（うち１件は通常審査扱い）計新規申請97件、期間延長･一部修正等12件の申請があった。新規申請者の内訳は教員44件（うち３件が簡易審査）、博士後期課程院生17件、修士課程34件（うち１件が簡易審査）、研究センター２件であった。審査の結果、新規申請について承認42件、条件付承認48件、保留４件、非該当１件、審査不能１件であった。条件付承認については、すべて修正が確認され、保留、審査不能についてはあらためて新規申請がされ、承認されている。期間延長･一部修正等の審査については、承認された。

また、４月に教員･大学院生対象の研究倫理審査セミナーを開催した。本年度より、大学院学生便覧に研究倫理に関する資料を掲載し、確認しやすい体制になった。

５．紀要

紀要委員会（委員：深谷計子・鶴若麻理・實崎美奈・田口瞳）では2009年３月に紀要第35号を発行（600部）した。原著１編、総説２編、論説１編、報告10編からなるものである。今年度は印刷業者と見積もり・別刷りに関して行き違いがあり、別刷りの表紙は論文名・著者名のないものとなってしまい、委員・事務局・業者との連絡を密にすることが次年度の課題の１つとなった。また、本学の紀要の質の向上のために、次年度からは論文の種類を①原著（査読有）、②研究報告（査読有）、③総説（査読有）、④論説（査読有）、⑤短報の５つとすることになった。

Ⅶ 国際活動

１．ＷＨＯプライマリーヘルスケア看護開発協力センター

１）センター５期目の再委嘱

本センターは、2008年４月15日付で、５期目の再委嘱をWHO, Regional Office for the Western Pacific の Regional Director Dr. Shigeru Omi によりなされた。

今期（2008年４月から2012年３月）の目標は下記のとおりである。

⑴　ミレニアム開発目標達成と少子高齢化社会に貢献するプライマリーヘルスにおける看護実践モデルを評価し、発展させること

⑵　プライマリーヘルスケアにおける看護のリーダーシップを開発し、増進させること――地域看護専門看護師、専門看護助産師の育成に関して定期的にモニターし強化すること

⑶　個人、家族、地域のエンパワーメントを目指した、エビデンスに基づく実践、“Best Practice”を研究、開発し、国内外のネットワークや関連機関への普及に努めること

⑷　プライマリーヘルスケアにおける看護・助産についての教育と実践を向上するために、研究やシステム改革を支援すること

これらの目標を明記した本センターのパンフレットを新たに作成した。

２）グローバル・ネットワーク総会

⑴　６月23～24日、バンコクでグローバル・ネットワークの総会が開催され、世界の30余のセンターが参加し、本センターから堀内成子センター長と田代順子副センター長が出席した。

⑵　新事務局、ブラジル、サンパウロ大学にグラスゴーカレドニアン大学から引き継ぎがなされた。

⑶　西太平洋地区では、日本から、本センター（PHC）、兵庫県立大学地域ケアセンター（災害看護）、韓国からヨンセイ大学（PHC）、カトリック大学（緩和ケア）、フィリピンからフィリピン大学（PHC）、それ以外に、センター委嘱を考えている香港、オーストラリアの施設からも参加した。

⑷　会期中、アフリカでの看護人材育成に対して、WHO 本部のシニアサイエンティスト Dr. Jean Yan の呼びかけで、南アフリカ、ボツワナ、日本の協働で活動ができないかの第１回の検討会が開かれた。

３）アフリカ：サブサハラ諸国の看護人材強化のための協働

クワズールナタール大学、南アフリカ大学、ボツワナ大学、および日本の２センターで今後、協働するために協働申請書作成会議をクワズールナタール大学で９月22日、23日に開催し、田代副センター長が参加した。日本国際協力機関（JICA）に助成を申請することを前提に、協働計画を立案し、11月４日に代表の Dr. Leana Uys と本校の田代副センター長が JICA 東京本部を訪問し、申請に関する助言と申請要領や時期等の情報を得た。2009年度６月に申請書を提出こととなった。

4）活動報告書（Annual Report 2008）の作成

⑴　2008年度の Annual Report を、本センターの目標（Terms of Reference）と WHO Key Result Area にそって聖路加看護大学看護学部教員の研究活動の実績をまとめた（添付資料参照）。

5）研究活動

国際医療協力研究委託費20（指定）５「国際保健人材育成のための研修制度、カリキュラム、教材に関しての研究」の分担班として、大学院修士課程の「ウィメンズヘルス・助産・看護人材開発協力学」に参画した。研究活動として、大学院で国際助産・看護・保健に関する専攻を持つ大学院、学部に呼びかけ、11月３日に記念ワークショップを開催し、各教育機関での教育に関して情報を共有し、加えて、同意をした教員で、国際助産・看護コンソーシアムを形成し、今後協力してカリキュラム、教材を強化していくことになった。

この記念ワークショップの講演者として、南アフリカのクワズールナタール大学副学長　Dr. Leana Uys を招聘して、「Collaboration to Strengthen Nursing and Midwifery in Africa」（「アフリカの助産・看護の強化における日本の看護・助産職への期待と育成」）と題して講演していただいた。

6）国内外への情報提供

⑴　雑誌『看護』に「WHO　NEWS」を隔月掲載し、本センターホームページにも公開している。掲載は下記のとおりである。なお、（　）は執筆者である。

2008年５月60巻５号（平野優子）、７月９号（田代順子）、９月11号（田代順子）、11月13号（長松康子）、2009年１月61巻１号（小黒道子）、３月３号（眞鍋裕紀子）

7）国際協力活動

⑴　非政府組織との海外派遣協力

財団法人家族計画国際協力財団（ジョイセフ）が JICA から委託を受けミャンマーで実施する「地域展開型リプロダクティブ・ヘルス・プロジェクト」に本学教員（小黒道子センター員）が助産教育専門家として、計３回派遣された。派遣期間はそれぞれ以下のとおりである。

a.　平成20年８月11日～９月10日

b.　平成20年10月11日～10月19日

c.　平成20年12月23日～平成21年１月10日

計３回の派遣で、プロジェクト地区における Skilled Birth Attendant の助産技能アセスメントおよび助産技能研修の実施に関わる技術指導を行った。

⑵　日本看護系大学協議会主催で、第12回 East Asian Forum of Nursing Scholors の 学術大会および理事会が、３月13日㈮・14日㈯で聖路加看護大学を会場に開催された。海外から119名、日本から134名、計253名の参加があった。会場が本学であり、WHO看護開発協力センター員も運営・実行に参加した。

⑶　海外からの研修支援として３回、計49名受け入れ

a.　国際交流協会受け入れの看護指導者育成コースおよび母子保健管理コースの研修を５月29日に23名と10月16日に12名をそれぞれ受け入れ、日本における看護研究に関して講義・施設見学を支援した。

b.　国際医療センター受け入れのベトナム、ハイズゥーン医療技術大学教員６名の看護教育の実

際に関して、12月５日に受け入れ、研修支援を行った。

c. State Islamic 大学学長・教員および宗教省役人の計８名の日本研修を11月７日に受け入れ本学教育の説明を行った。

８）委員会組織(役割)

堀内成子（センター長）

田代順子（委員長）、小黒道子（Annual Report）、眞鍋裕紀子（広報・ウェブ管理）

平野優子（会計）、長松康子（コーディネーター）

[添付資料]

World Health Organization

Collaborating Centres
PROGRESS REPORT

Institution Name	St. Luke's College of Nursing		
Name of Department, unit, section or area of the institution designated as WHO.CC	Department of Nursing		
City	Tokyo		
Country	JAPAN	**Country ID**	JPN-58
Title	WHO Collaborating Centre for Nursing Development in Primary Health Care		
Report Year	04/2008 to 04/2009		

1. Implementation of the work plan. For each main activity briefly explain how the activity was implemented, the outcome and impact and, if available, the results of the evaluation (e.g. evaluation of a course by the participants). Also explain difficulties (if any). Do not provide technical results in this form (technical results, if applicable, are to be sent directly to the WHO Department you work with).

Activity 2 Health Information Service Center for Community People

Explanation

In 2008, a Health Information Center called "Luke-Navigation" provided mainly: "Health Counseling", " Quick Health Examinations (blood pressure, bone density, physical measurement and BMI)", "Health Information Provision", "Open Health Library", as well as "Lunch time Mini Health Lecture and Music Concert", and "Relaxation Tea Lounge (herb tea, and tea ceremony)" In addition, the center services participated in several events in our community such as health and social well-fare festival and other festivals.
Project leader: Dr. Michiko Hishinuma

The number of user of the services in 2008 was 1,140 and approximately 10% increased compared with the year of 2007. Approximately 80% of our users were female and half of users were middle aged people in their 50s and 60s.

1) The team members of the Center were: two coordinators(one nurse and one librarian) , volunteers (nurse and 21 community members, trained by our community training program), faculty members and staff (librarians), graduate students, psychologists, and nutritionists. The role of the two coordinators is very important in providing coordination among professionals and community health volunteers.

2) Graduate students (master's and doctorate) interested in health communication participated actively in those services. Our under-graduate students also visited the center periodically and develop pamphlets on health information as a part of class activity for fundamental nursing.

3) Evaluation
- We asked users about their satisfaction with our services provided by using a post card questionnaire. Response rate was 76%. The mean score of satisfaction of our services was 9.24 with 10-point scale.
- We focused on osteoporosis prevention and conducted a needs survey on knowledge and lifestyle behaviors related bone density because of large number of middle aged users. We received 360 responses. We are analyzing and developing learning materials for middle-aged community members.

Activity 3 The Elderly-Centered Care Models based on an interdisciplinary approach

Explanation

The name of this project was "Effectiveness of an Intergenerational Day Program for the Mental Health of Older Adults and Intergenerational Interactions in an Urban Setting: A Twelve Month Prospective Study Using Mixed Methods". Project leader: Dr. Tomoko Kamei

We created a weekly intergenerational day program for community dwelling elderly and school age children and evaluated the effectiveness of an intergenerational day program in an urban community. A mixed-methods data collection was used with a longitudinal study. Faculty members, nurses, health volunteers, nursing students participated in this project.

Are findings were:

1.An intergenerational day program in an urban community for older adults and school age children prevents elder's isolation, gives provision of positive effects in mental health and improved elder's quality of life (QOL) and decrease depression.

2.For children, positive perception for the elderly was observed.

3. For both elders and children, positive effects were the mutually beneficial social relationships and communication, meaningful destinations (to the center) and the mutual beneficial exchange and solidarity between generations.

Activity 4 Community Based Palliative Care (Hospice Care at Home) Project

Explanation

We, home visiting nurses and social workers, formed a group named "First Step for the Tomorrow" consisting of volunteers who finished a training course on hospice care. We, professionals and hospice volunteers had been working as a team in a community. In 2008 there were 24 working members. We visited and listened to three elderly living alone in our community. In 2009, we are planning to further develop an activity standard and improve home visiting care with collaborative activity of professionals and community volunteers.

Activity 5 The Development of Child and Family-Centred Care in the Community

Explanation

We provided four seminars with parents with children having chronic diseases and disabilities, and their teachers, social workers, and medical and health care workers. Total participants were 95 people. Topics were 1) fist-aide and resuscitation for child, 2) children's food and nutrition, 3) health care for children in the winter, and 4) let's understand children with difficulties in communicate or responding to touch. Core members organizing the seminars were clinical nurses, pubic health nurses, school nurses; they developed 'identifying how we work with parents, school teachers and social workers'. We will continue this project and study how we can develop child and family-centered care in community.

Activity 6 Development of Systematic Nursing Service Management Education

Explanation

We provided a series of educational programs for undergraduate students, graduate students and approved continuing education first level, and second level of nursing administration.

Undergraduate education of nursing service management: Basic courses were provided to sophomore and senior students as a compulsory subject. Basic theory and the current context of nursing are taught in the sophomore year; they understood how nursing systematically provides care to people. For senior year students, while deepening their knowledge, which they studied in the sophomore year, they studied to identify some management problems of nursing and they also learned how to solve those problems. After this theoretical phase, we provided ward practice, called "Team Challenge", for the senior students as an elective subject. The features of "Team Challenge" were, (1) students have training according to the actual nurse's shift schedule, including night shift, and (2) they take charge of two or more patients. (It is very rare to provide night-time practice and/or an opportunity to take charge of multiple patients in Japanese nursing institution.) Students became an actual member of the nursing team, instead of just nursing students, through this practice. They can also grasp the reality of providing hospital-nursing care and learn about the various resources and team-work needed for 24-hour patient care.

We also provided nursing administration for master's and doctoral students and a continuing education course for nurse administrators. The continuing education course was called nursing administrators' "first level", carried out with the approval of the Japanese Nursing Association. It was an intensive course offered in the summer, for clinical nurses, ward supervisors, managers and administrators who both work and study.
We are planning to initiate a more advanced course called "second level" for nursing administrators in 2009.

Unification of these systematic education programs, from under graduate to continuing education, fosters the development of ('growing our own') talented nursing administrators in Japan.

Activity 7 Use of Quality Indicators to assure midwifery care standards

Explanation

Dr. Horiuchi and her doctoral students developed a questionnaire to examine mothers perceived quality of care for pregnancy, delivery, and post partum. The questionnaire was developed based on a qualitative study on mothers, Quality of care was measured using 31 items in pregnancy, 35 items in delivery, and 37 items in post partum. Domains of quality of care were: explanations with supportive methods, individual respect and faithful relationships, and warm attitude of care providers.

Activity 8 Dissemination of Genetic Nursing Program

Explanation

1.We visited two primary schools in our community, and one day care center for school children and provided an educational program to scholars and their parents about our life and birth. Approximately one hundred children participated in 2008. Educators were midwives working for St. Luke's International Hospital. Our undergraduate students also attended this life-education. Graduate students and faculty interviewed children to provide evaluation data of our educational program. Our participants reported that they understood how babies were born and how their own life was important as well as other people's life.
We plan to continue and develop this life education program for primary scholars, and will develop our training program for midwife educators, which will be augmented by sharing their educational experience using video-tapes.

2.1 We held an educational workshop about 'genetic nursing at our institutions'. Approximately 20 professionals participated. The evaluations indicated satisfied with the program. They indicated a high degree of interest in bringing this educational program to train nurses at their health care institutions. However, the funding ends in 2009, Our concern is how to continue this successful online education program after the funding ends.

2.2 We formed a consortium for educators supporting women's decision-making on reproduction. We met periodically in order to further develop this education. We conducted a concept analysis of "decision-making support". Next we explored the background of issues concerning decision-making and identified common issues related to three health problems: reproductive health, terminal care and oncology care. Our consortium consists of nurses, midwifes, a health statistician, medical coordinator, and researchers in technology. In addition, we visited Ottawa Health Research Institute and learned their educational program for nurses. We will strengthen our consortium for education for supporting women's decision-making on reproduction.

2.3 We provided an open lecture for the community about genetic medicine. Approximately two hundred people participated. A majority of community people reported that terms used in genetic medicine were difficult to understand, although those individuals who had some kind of experience in genetic medicine, sought information on genetics. The participants requested provision of more cases or examples. Our undergraduate students also participated and learned about the health needs of individuals in the community.
We also had an exchange meeting with a consortium consisting of twenty groups of patients with genetic diseases. Patient groups appreciated this meeting with nurses because genetic diseases were not commonly recognized; therefore, care systems and financial supports are not well established . Patient groups shared with us the difficulties of their life. Our graduate students described issues reported by patients with genetic disease.
Genetic nursing is not an established discipline in nursing; thus, we educated our undergraduate students through meeting with patient groups.

Activity 9 Dissemination of Health Resource Digital Contents and E-learning Program

Explanation

"Kango-net" has been receiving approximately 20,000 hits per month and is increasing. [Online Health Consultation] has so far received approximately 60 inquiries. The majority of inquiries were concerning [Nursing schools (by high school students)], and [Nursing topics: nursing skills, definition of nursing].

Activity 10 Forming an Consortium for Facilitating International Nursing Collaboration Contributing to Obtaining the MDGs

Explanation

We formed a Consortium for Global Health, Nursing &Midwifery in Japan.
We first conducted a mail questionnaire survey about current curriculum and issues of Global Health Nursing & Midwifery in Japan. Second, we invited faculty members teaching International or Global Nursing and Midwifery of master's as well as under-graduate programs, and formed a consortium for the study and continued development of Global Nursing education.
Three of the four higher educational institutions of master's level midwifery, and eight out of fifteen institutions which have International or Global Nursing agreed to be members of this consortium. We recognized that Global Nursing and Midwifery was an emerging discipline and we needed to share information and opportunities to learn from each other.

2. Other information related to the Collaboration between the centre and WHO. Briefly describe visits by WHO staff to the centre, visits by the centre staff to WHO (HQ and/or Regional Office), use of the centre staff by WHO, support provided by centre staff for courses cosponsored or organized by WHO (HQ and/or Regional Office), WHO financial support to the centre through contractual or Technical Services Agreement or other type of support provided by WHO, any other collaborative activities. Please mention any difficulties encountered in the collaboration and suggestions for increased and improved collaboration with WHO.

Dr. J, Tashiro worked as a resource person at both Bi-Regional Forum of Medical Training Institutions on People-Centered Health Care held in July 1-2, 2008 at The Bay View Hotel, Manila, and Bi-Regional Forum of Health Care Organizations on People-Centered Health Care held in March 26-27 at Manila Pavilion Hotel, Manila. She presented on Domain 1 of People-Centered Care; Informed and empowered individual, family, and community based on the outcome of People-Centered Care Project conducted by St. Luke's College of Nursing, Tokyo.
Stop TB & Leprosy Elimination Unit of Western Pacific Regional Office was visitied by center staff and students for latest strategy of TB control in Aug, 2008.

3. Collaboration with other WHO Collaborating Centres: Briefly describe the nature and outcome of the collaboration and the name(s) of the other WHO collaborating centre(s) with which the centre has collaborated. If applicable, please mention the name of the network of WHO CCs to which the centre belongs. Also include suggestions for increased and improved collaboration with other WHO CC

WHO C. C. at St. Luke's College of Nursing worked with Mahidol University in Thailand, Siriraj Hospital, WHO C.C. for Research in Human Reproduction, Yonsei University (Korea), WHO C.C. for Research and Training for Nursing Development in Primary Health Care, University of California at San Francisco (USA), WHO C.C. for Research & Clinical Training in Nursing , Columbia University (USA), WHO C.C. for Advanced Practice Nursing ,and University of Natal, University of South Africa, and Botswana University, WHO C.C. for Educating Nurses and Midwives in Community Problem-solving.

２．国際交流

2008年度は、学術交流協定を締結しているタイ・マヒドン大学及び韓国・延世(ヨンセイ)大学からの短期交換研修生受入プログラムを実施した。

５月７日から20日まで、マヒドン大学より４名の研修生〔看護学部学生２名(Supattra Sangkusolwong, Ananya Muktharagosa)、医学部看護学科ラマティボディ看護学校学生２名(Suphalak Hongsri, Sarinee Matem)〕、６月29日から７月12日まで、延世大学より４名の研修生(Shin Sun Hye, Hong Won Tae, Kim Anes, Park Young Shin)をそれぞれ受け入れた。

滞在期間中、各研修生は英語による特別講義や本学の演習授業、医療施設での見学実習などの学習プログラムに参加し、日本の看護や保健福祉医療についての知識を深めた。また、学生国際交流委員会が企画・運営する交流イベントを通じて本学学生との親交を結び、異文化の尊重・理解を通じて、双方の学生が国際的視野を広げる機会を得た。あわせて、週末には同窓生・在学生の協力のもとホームステイ・プログラムを実施し、日本の家庭生活に触れる貴重な体験となった。

本学からの海外派遣プログラムでは、８月18日から８月29日までの期間、交換研修としては初めてタイ・マヒドン大学看護学部に４名の学生（３年：荒居康子，山野辺恵子，小池沙織、２年：村田麻喜恵）を派遣した。また、９月１日から12日まで、４名の学生（３年：今井敬子，斎藤由紀恵，山田由美、学士11：小塩佳奈）が延世大学にて研修を行い、日韓の文化・看護の違いを学ぶとともに、韓国学生の旺盛な学習意欲に強い刺激を受けて帰国した。

今後、タイ・韓国の両大学との交換プログラムの実施を重ねていくことで、協定校間の交流を促進するとともに、本学学生の異文化体験・理解を通じて、国際性豊かな人材の育成の一端を担うことが期待できるものと考える。

３．研修生の受け入れ

外国よりの研修生の受け入れは、５件42名であった（**表１**）。

表１　外国よりの研修生受け入れ

研修期間	氏　　名	国　　名	研修、内容または分野	受入機関 担当教員
2008. 4. 24	瀋陽医学院関係者３名	中国遼寧省 瀋陽医学院	本学の看護教育の概要について	NPO 法人日中の環境と健康を考える会 本学 松谷美和子教授
2008. 5. 29	Ms. LAVOR	ブラジル	看護リーダーコース A の10名およびアフリカ各国母子保健看護管理コース９名に対し、看護実践・管理の向上（専門職化）のための看護研究の重要性を理解する。 ・ 日本の看護研究・実践・教育の発達と専門職化 ・ 看護研究者の教育について	国際交流協会 本学　田代順子教授
	Ms. MAPPQUEZ	ホンジュラス		
	Ms. KHANCHALWEN	ラオス		
	Ms. DOPSIE	パプア・ニューギニア		
	Ms. KUDA SINGHASW	スリランカ		
	Ms. ALI	エジプト		
	Ms. KOLUBA	ウガンダ		
	Ms. MUGANGA	ウガンダ		
	Ms. ANIS-JSEPH	バヌアツ		
	Mr. NGUYEN	ベトナム		
	Ms. BARGESEM	ケニア		

研修期間	氏　　名	国　　名	研修、内容または分野	受入機関 担当教員
	Ms. OGRERO	ケニア		
	Ms. CHIWAULA	マラウィ		
	Ms. KAURUKA	マラウィ		
	Ms. BESSARIONE	スーダン		
	Ms. OMAR RAKIS	スーダン		
	Ms. NAKALYNGO	ウガンダ		
	Ms. MBANGWETA	ザンビア		
	Ms. SILONDWA	ザンビア		
2008. 6. 30 ～7. 11	Mr. Cory Lunn	アメリカ ノースフロリダ 大学大学院 専門看護師専攻	訪問看護	聖路加国際病院 本学　堀内成子学部長
	Mr. Daniel McEwen			
2008. 7. 14 ～7. 25	Mr. Michael Seneca		成人看護	
	Mr. Jesse Adams			
2008. 10. 8 10. 16	Mr. Yaqootshah Mahmood	アフガニスタン	開発途上国の看護指導者の看護管理知識と実践力を向上させ、看護の質を高めるための実施可能な計画を策定し、実行することにより参加者の所属先の看護管理及び看護サービスの質の向上を図る目的で来日。 ①　「学習する組織の構築と看護管理者の役割」 ②　「看護研究」	国際協力機構 JICA 国際看護交流協会 本学 ①　井部俊子学長 ②　田代順子教授
	Ms. RIVAS Marlene Mardel	ベリーズ		
	Mr. YORK Sottha	カンボジア		
	Mr. LABLAH Evans Mewon Nya	リベリア		
	Ms. SHRESTHA Ishwari Devi	ネパール		
	Ms. NIRAULA SHRESTHA Goma Devi	ネパール		
	Ms. MAINSOU Natacha Fresnel	ハイチ		
	Mr. KHAMEES Ayad Mohammad	イラク		
	Ms. MAMATA Rani	バングラデシュ		
	Mr. Hosneara Klatan Khathn Hosneara	バングラデシュ		
2008. 12. 5	Dr. VC Chinh Dinh	ベトナム ハイズゥーン医療技術大学学長	日本の看護大学・大学院での教育管理・運営を聖路加看護大学により理解する。	国際協力機構 JICA 国立国際医療センター 本学　田代順子教授
	Dr. NUGYEN Lan Hang	同大学基礎医科学科科長		
	Dr. DINH Hang Thi Dieu	同大学管理科学・国際協力科科長		
	Dr. TRAN Tam Thi Minh	同大学研修科科長		
	Dr. NGUYEN Loi Minh	ベトナム保健省科学研修局専門家		
	Dr. VC Thu Ha	同省国際協力局専門家		

４．国外への派遣

延べ63名の教職員が下表のとおり国外へ出張した。

氏　　名	現　　職	期　　間	出張国名	経　　費
卯野木　健	助教（ｼﾆｱ）	2008．5．3～2008．5．8	アメリカ	自費
堀内　成子	学部長	2008．5.27～2008．6．1	イギリス	その他
江藤　宏美	准教授	2008．5.27～2008．6．6	イギリス	ミセスセントジョン記念教育基金
亀井　智子	教授	2008．5.29～2008．6．1	韓国	招聘
小松　浩子	教授	2008．6．1～2008．6．6	アメリカ	文科省科研
堀内　成子	学部長	2008．6.22～2008．6.25	タイ	校務
畠山　小巻	職員	2008．6.22～2008．6.26	タイ	校務
小山千香子	職員	2008．6.22～2008．6.26	タイ	校務
田代　順子	教授	2008．6.22～2008．6.27	タイ	校務
大久保暢子	准教授	2008．6.24～2008．6.28	タイ	ミセスセントジョン記念教育基金
江藤　宏美	准教授	2008．6.25～2008．7．4	アメリカ	ミセスセントジョン記念教育基金
田代　順子	教授	2008．6.30～2008．7．3	フィリピン	その他（SEAMEO&TROPMED NETWORK）
森　　明子	教授	2008．7．5～2008．7.10	スペイン	文科省科研
實﨑　美奈	助教	2008．7．5～2008．7.10	スペイン	文科省科研
瀬戸屋　希	准教授	2008．7.13～2008．7.18	アメリカ	文科省科研
大久保菜穂子	客員研究員	2008．7.14～2008．7.29	ブラジル	文科省科研
江藤　宏美	准教授	2008．8．6～2008．8.17	アメリカ	ミセスセントジョン記念教育基金
山田　雅子	教授	2008．8.10～2008．8.14	タイ	厚労科研
小松　浩子	教授	2008．8.10～2008．8.14	タイ	その他（がんプロ）
廣岡　佳代	助教	2008．8.10～2008．8.14	タイ	その他（がんプロ）
大久保暢子	准教授	2008．8.10～2008．8.24	アメリカ	その他（アリスセントジョン）
小黒　道子	助教	2008．8.11～2008．9.10	ミャンマー	その他（ジョイセフ）
矢ケ崎　香	助教	2008．8.17～2008．8.20	シンガポール	文科省科研
山田　雅子	教授	2008．8.17～2008．8.21	シンガポール	厚労科研
小松　浩子	教授	2008．8.17～2008．8.21	シンガポール	文科省科研
金森　亮子	助教	2008．8.17～2008．8.23	シンガポール	ミセスセントジョン記念教育基金
鶴若　麻里	助教	2008．8.17～2008．8.23	台湾	文科省科研
廣岡　佳代	助教	2008．8.18～2008．8.23	シンガポール	厚労科研
市川和可子	助教	2008．8.18～2008．8.23	シンガポール	文科省科研
長松　康子	助教（ｼﾆｱ）	2008．8.24～2008．9．3	フィリピン	校務
田代　順子	教授	2008．9.19～2008．9.25	南アフリカ	その他（国際医療協力研究委託費）
外崎　明子	准教授	2008．9.26～2008.10．6	アメリカ	文科省科研
長松　康子	助教（ｼﾆｱ）	2008．9.29～2008.10．6	イギリス	文科省科研
松本　直子	職員	2008.10．2～2008.10．6	ドイツ	文科省科研

氏　　名	現　　職	期　　間	出張国名	経　　費
堀内　成子	学部長	2008.10.　2～2008.10.　6	ドイツ	文科省科研
片岡弥恵子	准教授	2008.10.　2～2008.10.　8	ドイツ	文科省科研
江藤　宏美	准教授	2008.10.　2～2008.10.　8	ドイツ	文科省科研
小黒　道子	助教	2008.10.11～2008.10.19	ミャンマー	その他（ジョイセフ）
矢ケ崎　香	助教	2008.10.20～2008.10.22	中国	文科省科研
有森　直子	准教授	2008.11.　7～2008.11.12	アメリカ	文科省科研
外崎　明子	准教授	2008.11.10～2008.11.18	イギリス	文科省科研
江藤　宏美	准教授	2008.11.29～2008.12.　6	カナダ	その他（文科省委託研究費）
堀内　成子	学部長	2008.11.29～2008.12.　6	カナダ	その他（文科省委託研究費）
佐居　由美	准教授	2008.12.　3～2008.12.　7	アメリカ	文科省科研
小黒　道子	助教	2008.12.23～2009.　1.10	ミャンマー	その他（ジョイセフ）
鶴若　麻里	助教	2009.　1.14～2009.　1.17	台湾	文科省科研
萱間　真美	教授	2009.　1.24～2009.　1.29	アメリカ	文科省科研
麻原きよみ	教授	2009.　2.10～2009.　2.15	アメリカ	文科省科研
小林　真朝	助教	2009.　2.10～2009.　2.15	アメリカ	文科省科研
田代　順子	教授	2009.　2.11～2009.　2.14	韓国	その他(Dr.Ogchel Lee)
鶴若　麻里	助教	2009.　2.12～2009.　2.15	台湾	文科省科研
有森　直子	准教授	2009.　3.　4～2009.　3.　8	カナダ	文科省科研
菱田　治子	教授	2009.　3.12～2009.　3.19	アメリカ	研究費
深谷　計子	准教授	2009.　3.12～2009.　3.19	アメリカ	ミセスセントジョン記念教育基金
小松　浩子	教授	2009.　3.24～2009.　3.26	台湾	文科省科研
矢ケ崎　香	助教	2009.　3.24～2009.　3.26	台湾	文科省科研
市川和可子	助教	2009.　3.24～2009.　3.26	台湾	文科省科研
平林　優子	准教授	2009.　3.24～2009.　3.29	アメリカ	その他(兵庫県立大学科科片田科研)
及川　郁子	教授	2009.　3.24～2009.　3.29	アメリカ	文科省科研
小野　智美	准教授	2009.　3.24～2009.　4.　5	アメリカ	文科省科研、 ミセス・セントジョン記念基金
眞鍋裕紀子	助教	2009.　3.24～2009.　4.　5	アメリカ	文科省科研、 ミセス・セントジョン記念基金
田代　順子	教授	2009.　3.25～2009.　3.28	フィリピン	その他(SEA MEO,TROPMED)
大久保暢子	准教授	2009.　3.26～2009.　4.　2	アメリカ	文科省科研

Ⅷ　ファカルティ・ディベロップメント

１．教員の研修

本学教職員の教育・研究活動能力および実務能力の向上を目的として、教職員研修会などを企画・運営した。

１）教職員研修会の開催

2008年度は、研修会を２回、講演会を１回実施した。詳細については、以下のとおりである。

⑴　第１回FD・SD研修会（原則として教職員参加）

日　時：2008年８月１日㈭　13：30～16：00

会　場：301教室

13:30～13:40　講義「情報編集術とは」
大川　雅生（ISIS 編集学校）

13:40～16:00　グループワーク
「おかしな自己紹介」「ブレインマップ」「スピードアナライズ」
「ポストイットメソッド」
大川　雅生（ISIS 編集学校）

⑵　第２回FD・SD研修会

日　時：2009年３月12日㈭　10：00～15：30

会　場：301教室

①午前の部（原則として教職員参加）

10:00～　研修会のオリエンテーション　オリエンテーション／FD・SD委員会

10:10～10:30　講義「聖路加看護大学の活動とBSC」
井部　俊子（本学学長）

10:30～11:30　講義と意見交換「聖路加看護大学の広報戦略について」
増田　英明（電通パブリックリレーションズ）

②午後の部（原則として教員参加）

13:00～14:00　講義「学生の学習を促すシラバス作成のコツ」
秦　敬治（愛媛大学准教授）

14:10～15:30　ワークショップ「担当する科目のシラバスを修正・改善してみよう」
秦　敬治（愛媛大学准教授）

⑶　第１回講演会

日　時：2008年12月２日㈫　17：00～18：00

会　場：302教室

テーマ：「Globalization of Health & Nursing」

講　師：William L. Holzemer, PhD, RN, FAAN
（Professor and Associate Dean, School of Nursing, University of California）

2）新任教職員ガイダンス

2008年度４月に採用された教職員を対象として、関係部署の協力の下に、新任教職員ガイダンスを実施した。

日　時：2008年４月１日㈫

内　容：大学の理念と概要、学部教育と大学院教育、教務部、学生部、事務部、看護実践開発研究センター、その他

2．職員の研修

事務職員の学内研修としては、OJT のみである。

学外研修については文部科学省および日本私立大学協会の総務、経理、教務担当者研修ならびに日本私立学校振興・共済事業団の事務担当者研修会、全国大学保健管理協会等が主な研修である。

図書館司書の研修については国立情報学研究所、私立大学図書館協会、日本私立大学協会、日本看護図書館協会等が主な研修である。

新人研修については私立大学庶務課長会主催の新人基礎研修などに参加している。

Ⅸ 図 書 館

1．サービスと利用

1）利用者

サービス対象者数は、学内利用者が633人で、内訳は学部生344人、院生120人、教職員172人であった。研究生・研修生・科目等履修生の利用者登録は合わせて12人、学外からの利用者では、聖路加国際病院職員214人、卒業生は117人の希望に応じ登録した。病院職員の登録数は、昨年度に比べ39人増と、昨年に引き続き増加傾向である。

2）閲覧

⑴　入館者・開館日数

年間開館日数は281日であった（**表１**）。年間の入館者総数は95,704人、１日平均では343人と前年度より増加している。

３年目となった学部生・院生と聖路加国際病院職員に対する夜間の開館延長についても利用が伸びている。夜間20～22時の利用をみると、１日の平均が32人、年間推移では６月の利用が47人と最も多く、次いで12月42人、７月と２月が39人であった（**図１**）。

表１　開館日数と入館者数

（　）内の数字は前年度数

開館日数　（日）	281	(279)
うち土曜開館		(48)
入館者数　（人）	95,704	(88,474)
１日平均入館者数	343	(317)
(夜間) １日平均入館者数	32	(25)

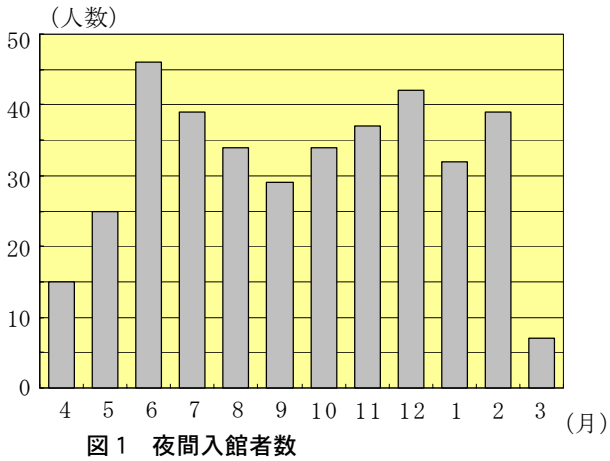


図１　夜間入館者数
（日平均、2008年4月～2009年3月）

⑵　館内複写、機器の利用

館内には利用者用としてコピー専用機が２台、他にプリンターとの共用機が１台設置されている。合わせると利用枚数は233,225枚、前年度の100.4％と微増した（**表２**）。一方、プリンターは専用機が２台あり、合わせた利用枚数は200,530枚で、こちらは前年度比 1.2 倍で、増加率は2006/2007年度と同じであった。

表２　館内複写、機器の利用（枚）　　（　）内の数字は前年度数

複写機	233,225	(232,288)
月平均	19,435	(19,357)
プリンター	200,530	(166,638)

館内の検索用PCは８台、図書館内専用の貸出用ノートPC３台を備えている。ノートPCの貸出総数は413件であり（**表３**）、前年度に比べ、大幅に減少した。

表３　ノートＰＣの貸出（件）　　（　）内の数字は前年度件数

学部生	院生	教職員	その他	計
260(537)	136(127)	14(22)	3 (8)	413(694)

３）貸出

資料別の貸出数をみると、図書と雑誌は前年度より減少し、ビデオは増加した（**表４**）。すべての資料を合わせた総件数は、17,142件で前年度の105％と増加し（**表５**）、一日の平均貸出数は61件で３件減少した。一人あたりの年間貸出し件数では、学部生(342人)は26件、院生(135人)は32件と減少した。全体的に減少の傾向であったが、学部４年生、院生、教職員、研究センター研修生は増加しており、この傾向も前年と同様であった。

表４　資料別の貸出し数　　（　）内は前年度数

	学部生	院生	教職員	その他	総計
図書　（冊）	7,090 (7,409)	3,561 (2,837)	1,177 (875)	1,593 (1,176)	13,421 (12,297)
雑誌　（冊）	1,852 (1,964)	772 (878)	400 (312)	562 (635)	3,586 (3,789)
ビデオ（巻）	35 (94)	3 (4)	97 (78)	0 (0)	135 (176)

表５　利用者別貸出し総件数　　（　）内は前年度数

１年生	２年生	３年生	４年生	修士	博士	教職員	
858 (918)	1,608 (2,471)	4,120 (3,710)	2,391 (2,368)	3,551 (3,266)	785 (453)	1,674 (1,265)	
科目等 履修生	研究生	研修生	卒業生	聖路加国際 病院職員	研究センター 研修生	その他	総計
26 (34)	1 (26)	16 (24)	278 (274)	1058 (943)	764 (380)	12 (44)	17,142 (16,262)

分野別の図書貸出し冊数では、「看護学（WY)」が前年度同様１位であった。全体に占める割合は、前年度46.5％に対し、今年度59.4％であった（**表６**）。1994年度に調査を開始して以降、上位にランクされる分野は、順位が多少入れ替わる程度で大きな変動はない。

表６　分野別貸出し冊数ベスト５　　（冊）

年度	１位	２位	３位	４位	５位
2008	看護学(WY) 7,868	公衆衛生(WA) 639	医業(W) 565	心理学（BF) 558	産科学(WQ) 553
2007	看護学(WY) 5,724	小児科学(WS) 546	産科学(WQ) 534	公衆衛生（WA) 493	精神医学(WM) 486

４）レファレンス・サービス

⑴　カウンターにおけるレファレンス

前年度に比べ全体的に減少した（**表７**）。環境やツールの整備、新しいサービスの開始のために質問の必要がなくなったのか、質問の希望はあるが何か聞きづらい原因があるのか、周知が足りず利用者がサービスを知らないのか、理由を明らかにすることが課題である。

表７　カウンターにおけるレファレンス件数　　（　　）内は前年度数

	学生・院生	教職員	その他（学外者、研究生、博士研究員など）	計
所在・所蔵調査	368（85)	42（3)	36（85)	446(173)
事 項 調 査	139（15)	7（2)	18　(2)	44（19)
利 用 指 導	217（37)	24（3)	67（30)	308（70)
そ　の　他	59（13)	4（1)	66　(2)	129（16)
計	783(150)	77（9)	187(119)	1047(278)

⑵　文献検索相談

司書が個別に相談を受け、利用者とともに検索の過程を見直し、データベース検索を実地に行いながら、アドバイスを行うサービスである。昨年に比べ、４分の１に減った（**表８**）。原因として２点が考えられるが、一つは改善すべき点として相談受付システムの不備があり、二つ目は評価すべき点として後述する利用教育サービスの充実である。可能性として、文献検索の講座開催によって習得の機会が増え、個別の相談に至らなかったのではないかと考えられる。今後の動向に注意し、原因を明らかにしていく必要がある。

表８　文献検索相談件数　　（　　）内は前年度数

学部生	院生（修士）	院生（博士）	教員	その他	計
1（2)	26（104)	3（9)	0（13)	2（13)	32（128)

5）相互利用

⑴　来館による利用

本学の学生が他機関の図書館を利用するために、発行した紹介状は43件で前年度の減少を上回る32件の増加があった。また、他館からの紹介で来館した学外利用者は、昨年に引き続き減少した（**表９**）。

表９　来館した学外利用者数　　（　　）内は前年度数

	学生・院生	教職員	その他	総計
人　　数	69（49）	12（15）	38（35）	119（99）
複写件数	381（268）		156(111)	537(379)

⑵　郵送による複写物の提供

他館から依頼された文献複写の受付件数は、前年度の84.5％となった（**表10**）。2003年度を境にそれまでの増加傾向から減少傾向に転じている。当館から他館への申込みは、2006年度は急激に増加、前年2005年度の165.3％となったものの、今年度は減少し、2002～2003年度並の件数となった（**図２**）。

表10 相互利用(文献複写)件数　（ ）内は前年度数

当館から他館への申込件数		2,588 (2,574)
申込者別内訳※	学部生	197 (305)
	院　生	1,467 (1,329)
	教職員	918 (919)
	その他	6 (21)
申込先館種別内訳	大学･短期大学	1,879 (2,199)
	NDL	31 (9)
	聖路加国際病院	552 (83)
	海外(BLDSC)	50 (68)
	その他	76 (132)
他館から当館における受付件数		3,519 (4,166)
受付館種別内訳	大学･短期大学	2,270 (2,577)
	その他	1,249 (1,589)

※前年度数は聖路加国際病院の申込件数を含んでいない。

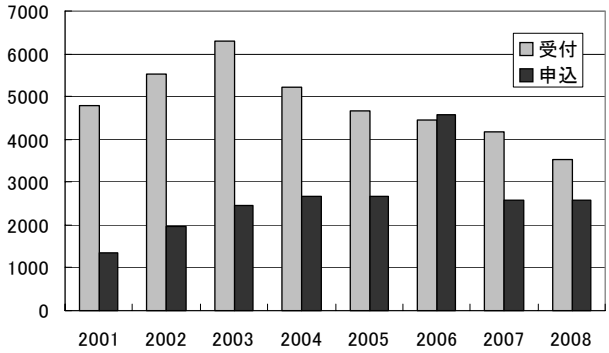


図２　相互利用（文献複写）件数

6）利用教育サービス

⑴　学部・大学院の教育のなかで

新学期のオリエンテーション、授業との連携を通じて、学生が学習段階に応じて、文献の検索、利用のスキルを身につけられるようにプログラムを組んでいる（**表11**）。学部１年生に対しては、４月、オリエンテーションにて図書館の基本的な使い方、また「看護学概論」の授業で、図書の探し方を教えている。５月からの「情報処理演習」では、インターネット上にある健康情報を知り評価する内容を演習し、専門職として情報を利用し提供するための準備とした。学部３年生に対しては、Problem-based learning 方式で行う「家族発達看護論」の一環として、具体的なシナリオのもとに実践における文献の検索・利用について行い、また学部４年生に対しては、看護研究における系統的な文献検索について行った。

授業で対応できない、個別的な案内は文献検索相談の中で対応した。また、各データベースについての操作方法については、聖路加国際病院医学図書館と連携している libil 講座で案内した。また、要望に応じてグループ単位で演習を行った。

表11　利用教育実施状況（学部・大学院）

		対　　象	内　　容	日　　時
オリエンテーション		学部１年生、 学士編入２年生	【図書館利用案内】利用時間、貸出し、複写、資料の配置、OPAC、利用できるデータベース名。聖路加国際病院医学図書館の利用。	４月10日㈭
		大学院修士課程１年生、 博士課程１年生	【図書館利用案内】利用時間、貸出し、複写、資料の配置、OPAC、利用できるデータベース名。聖路加国際病院医学図書館の利用、国会図書館の利用、図書館相互利用によるサービス。	４月17日㈭、18日㈮
		学部１年生、 学士編入２年生	【図書館ツアー】館内資料の配置、利用説明、るかこデスクの利用方法。	４月14日～18日
授業との連携	看護研究Ⅰ	学部４年生	【さあ看護研究！図書館をより使いこなすには？】文献を探すための情報源、医中誌の使い方を思い出そう、PubMed を使って：キーワードの選択から検索まで（思ったようにキーワードが見つからないとき、キーワードが集まってきたら、学術情報の進展と文献を探す順序）、文献管理ソフト RefWorks の使い方。	４月21日㈪、24日㈭
	看護学概論	学部１年生	【図書をさがす】　架でさがす（分類法）、るかこ（OPAC）でさがす、国会図書館でさがす、全国の大学図書館でさがす（以上、授業内30分）。	４月25日㈮
	看護学研究法	大学院修士・ 博士１年生	【さあ看護研究！図書館をより使いこなすには？】　文献を探すための情報源、医中誌 Web、PubMed を使って：キーワードの選択から検索まで（思ったようにキーワードが見つからないとき、キーワードが集まってきたら、学術情報の進展と文献を探す順序）。	４月26日㈯
	家族発達看護論Ⅰ演習	学部３年生	【エビデンスを探す・見つける】EBM のプロセス（以上、教員）、（以下、司書）情報収集はじめの一歩：キーワードを見つけるための取り掛かり、文献を探すための情報源、学術情報の進展と文献を探す順序、医中誌・PubMed でエビデンスを探す方法、情報収集のコツ。	５月12日㈪
	情報処理演習	学部１年生・ 学士編入２年生	【図書館資料を使うこと】　学術情報を使った情報収集行動の理解。 【インターネットで健康情報を収集する】QUICK を使ったサイト評価。 【図書を探す】るかこ、Webcat-Plus、NDL-OPAC 【雑誌論文を探す】シナリオから疑問を整理し、キーワード抽出、医中誌 Web の検索法。 【資料入手・著作権・図書館サービス】文献の入手（リンクリゾルバ、るかこデスク、著作権法の理解。 【発表会】探した情報をまとめて発表する。 【文献情報の整理】RefWorks の使い方。	５月27日～ ７月８日 （毎週火曜日）

libil（聖路加国際病院・看護大学図書館連携）講座	大学院生・教員・病院職員	【医中誌 Web】医中誌 Web を利用すると何が検索できるのか、どうやって検索するのか、検索結果の読み方、シソーラスを使って検索するには、検索結果が多かった場合の絞り込み方法、文献管理ソフトを使って管理するには。	５月19日(月)
		【PubMed 入門】PubMed とは、検索の進め方の基本。検索結果の見方、表示・印刷・保存・メール送付の方法、シソーラス：MeSH とは。	５月26日(月)
		【臨床実践で活用する PubMed 】研究デザインと有効なキーワード、エビデンスを探す、Clinical Queries、知っていると便利な上級機能。	６月9日(月)
		【看護研究に活用するPubMed 】　看護研究で文献を系統的に探す場合のQ&Aを事前に募集し回答。	６月16日(月)
		【検索ざんまいコース】 医中誌 Web, PubMe*d* 入門、PubMed 応用を1日でマスターするコース。	９月27日(土)
		【EBM ツール活用】The Cochrane Library, UptoDate, EBMR, Dynamed。	10月28日(火)
		【初めての CINAHLplus 】CINAHLplus とは、検索、結果の見方、保存、印刷	11月25日(火)
		【JDreamII 入門】 JDreamII とは？、 JMEDPlus の使い方（検索の進め方の基本、検索結果の見方、表示・印刷・保存・メール送付の方法）、日本語インターフェース対応の MEDLINE。（申込者ゼロのため開催せず）。	１月19日(月)

⑵　libil 講座

今年度は両館で提供しているデータベースを含め、全８回予定し７回実施した。前年度、要望が多かった PubMed に関するプログラムを増やした。当館では、おもに大学院生、教員を対象とし広報した。参加者は、全７回を合計すると延べ171人、うち56.7％(97人)が看護大学の学生・教員であった。最も多かった回は、９月に実施した検索ざんまいコースの「PubMed 入門」で32人（看護大学13人、病院19人）であった（**図３**）。

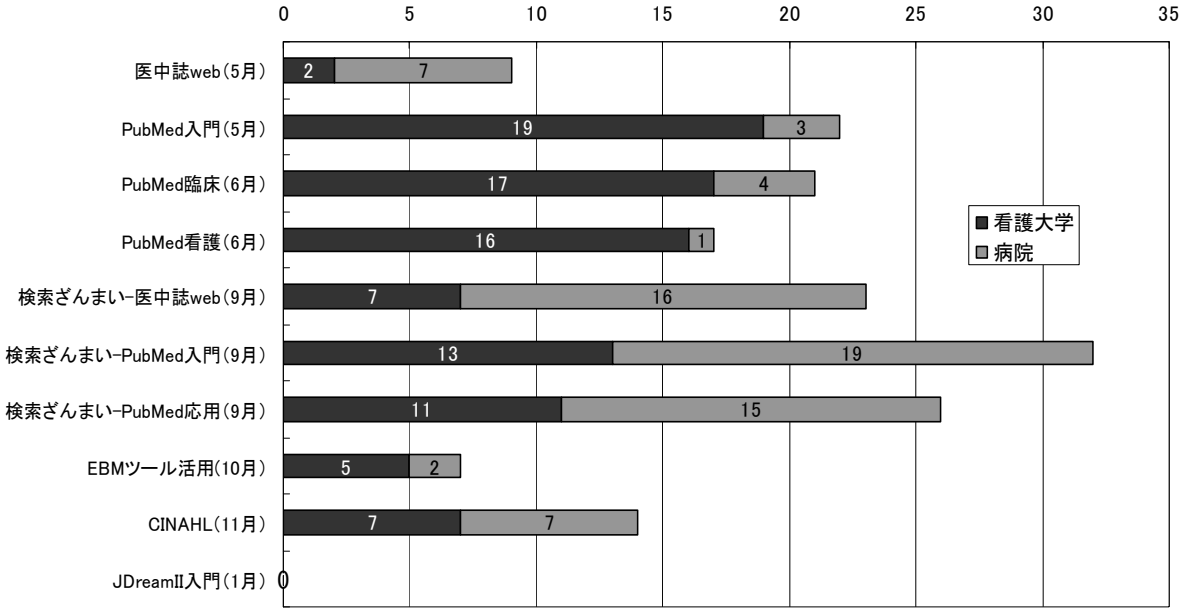


図３　libel 講座参加人数

⑵　生涯教育のなかで

看護実践開発研究センターが実施する生涯教育のプログラムに協力している(**表13**)。ナーススキルアップ講座におけるEBNの講座は、前年度は臨床の場に出張して実施する計画を立てたが応募がなかった。

2008年度より認定看護師教育課程の３コースが開始し、共通科目である「文献検索・文献講読」の授業の一部を担当することとなった。この科目と連動して、図書館がよく活用された。

表13　利用教育実施状況（生涯教育）

	対　　象	内　　容	日　　時
認定看護管理者ファーストレベル看護情報論「文献検索」	コース受講者（看護師）	【エビデンスを入手するために臨床で活用するデータベース】臨床上の疑問を明確にし、情報収集を行うツールを知る。 【エビデンスを探そう！】最新看護索引 web,JDreamII を使ってエビデンスを検索。	８月26日㈫
認定看護師教育課程「文献検索・文献購読」	コース受講者（看護師）	【エビデンスを探そう！】 シナリオから導きだしたキーワードを使って、医中誌と PubMed を検索し、エビデンスを探す。	８月28日㈭

２．コレクション

１）受入資料

⑴　図書・視聴覚資料

図書館における受入れ冊数は、2007年度に引き続き減少している（**表13**)。2008年度は購入782冊、寄贈238冊、計1,020冊で、前年度比56.5％となった。これは、まず前年度、寄贈図書の受入れに人員を充て集中的に整理したことがある。次に看護実践開発研究センターにて認定看護師教育課程が開始し、その予算による購入119冊が増加したことがあった。

９月に実施した見計らい選書会では346冊を選定、図書委員会での検討の結果、337冊を購入した。購入図書における選書会選定の割合は37.0％であった。

⑵　逐次刊行物・電子ジャーナル

逐次刊行物は白書、統計類などを含め854誌を受け入れた（**表14**)。

2008年度は購読雑誌の見直しを行った。まず、図書館内で利用調査を2007年11月１日～2008年８月31日まで実施した。次に一度も利用のなかったものから、学会誌やデータブックなどを除き、洋雑誌21タイトル、和雑誌３タイトルを対象とし、全教員にアンケート調査を行った。調査をもとに図書委員会で検討した結果、洋雑誌１タイトル、和雑誌１タイトルの購読中止が決まった。これに加え、インターネットにおいて無料で閲覧できるもの、電子ジャーナルを契約したものについて中止することとなった。最終的に2009年１月より35タイトルを中止することとなった（**表15、16**)。

電子ジャーナルは、パッケージとして、Blackwell 社の STM コレクション、EBSC*O* 社の CINAHL with Full text に含まれるコレクション、Elsevier 社 ScienceDirect Health Sciences を契約、また、無料の電子ジャーナルも積極的に登録し、合わせて5,134タイトルを提供した。2009年度から、LWW 社系列出版社刊行の看護雑誌コレクション Ovid Nursing Full Text Plus

を契約することになっている。

⑶　文献データベース

国内は、医中誌 web、MAGAZINEPLUS、聞蔵、CiNii の４タイトルを契約している。*最新看護索引*は長らく冊子が刊行されていたが、web 版が３月12日にリリースされ、こちらも契約した。外国は、Ovid 社と契約し、PsycINFO、BNI(British Nursing Index)を提供、特約で MEDLINE も提供されている。このほか、The Cochrane Library (Wiley InterScience) と、CINAHL Plus with Full text　(EBSCO Information Services) を合わせ、全部で６タイトルを提供している。

表14　受入資料　　**(　　)内は前年度数**

			和		洋		合計	
図 書（冊）	購入	図書館	616	(870)	166	(40)	782	(910)
		研究室	97	(130)	18	(23)	115	(153)
		研究センター	287	(56)	2	(11)	289	(67)
		教育予算	3	(16)	0	(0)	3	(16)
		助成金等	0	(4)	0	(1)	0	(5)
		製本雑誌	100	(214)	153	(156)	253	(370)
	寄贈	図書館	236	(827)	2	(68)	238	(895)
		研究室	50	(22)	3	(0)	53	(22)
		助成金等	494	(459)	84	(56)	578	(515)
	合　計		2,043	(2,598)	428	(355)	2,471	(2,953)
視聴覚資料（巻）	購入	図書館	36	(16)	0	(1)	36	(17)
		研究室	0	(0)	0	(0)	0	(0)
		教育予算	9	(16)	1	(0)	10	(16)
		助成金等	0	(14)	0	(0)	0	(14)
	寄贈	図書館	12	(9)	0	(0)	12	(9)
		研究室	0	(0)	1	(0)	1	(0)
		助成金等	17	(34)	0	(0)	17	(34)
	合　計		76	(89)	2	(1)	78	(90)
逐次刊行物（誌）	全タイトル		707	(703)	147	(164)	854	(867)
	新規		4	(9)	4	(1)	増減-13	(-44)
	中止		0	(54)	21	(0)		
電子ジャーナル（誌）			5,134 (5,041)					
文献データベース			8	(8)				

表15　新規購読が決まった雑誌（2009年１月より）

	誌　　名	出版者
1	臨床スポーツ医学	文光堂

（研究室のみで新規購読となった雑誌）

2	（柳井研）　Psychometrika	Psychometric Society

表16　購読中止が決まった雑誌（2009年１月より）

	誌　　名	出版者
1	The Social service review	University of Chicago Press
2	Community mental health journal	Human Sciences Press
3	World Health Organization technical report series	WHO
4	Bulletin of the World Health Organization	WHO
5	Home Health Care Management & Practice	Aspen Publications
6	Journal for Specialists in Pediatric Nursing	Nursecom
7	The International journal of psycho-analysis	International Psycho-Analytical Press
8	Advances in nursing science	An Aspen Publication
9	The American journal of nursing	J.B. Lippincott
10	Cancer nursing	Masson
11	Computers informatics nursing	Lippincott Williams & Wilkins
12	Clinical nurse specialist	Williams & Wilkins
13	Critical care nursing quarterly	Aspen Publishers
14	Dimensions of critical care nursing	Lippincott
15	Holistic nursing practice	Aspen Publishers
16	Journal of nursing administration	Journal of nursing administration
17	Journal for nurses in staff development	Lippincott-Raven
18	The Journal of cardiovascular nursing	Aspen Publishers
19	The Journal of neuroscience nursing	The Association
20	Journal of nursing care quality	Aspen Publishers
21	Journal of WOCN	Mosby-Year Book
22	MCN : the American journal of maternal child nursing	American Journal of Nursing Company
23	Nurse educator	Nursing Digest
24	Nurse practitioner : American journal of primary health care	Health Sciences Media and Research Services
25	Nursing administration quarterly	An Aspen Publication
26	Nursing management	S-N Publications
27	Nursing research	American Journal of Nursing Company
28	Nursing : the journal of clinical excellence	Intermed Communications
29	Orthopaedic nursing	National Association of Orthopaedic Nurses
30	日経サイエンス：Scientific American 日本版	日経サイエンス社
31	国民健康･栄養調査報告	第一出版（発売）
32	子ども白書	緑星社
33	助成団体要覧 ： 民間助成金ガイド	助成財団資料センター
34	白書の白書	木本書店
35	福祉・衛生 統計年報	東京都福祉保健局
36	文部科学省科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧	ぎょうせい

2）除籍資料

内容が古くなり研究室から返却された研究図書、閉架書庫へ移動した図書の複本など 500 冊を除籍した（**表 17**）。

表17　除籍資料　　（　　）内は前年度数

	和	洋	合計（冊）
図　　書	472（267）	28（66）	500（333）
製本雑誌	0　（0）	0　（0）	0　（0）
計	472（267）	28（66）	500（333）

3）蔵書点検結果

３月に行った蔵書点検の結果、雑誌54冊が不明であることがわかった（**表18**）。これまで図書と雑誌の点検を交互に行っており、2008年度は図書の点検の年にあたり、2006年４月より2009年３月までの３年間の間に不明となった図書が明らかになった。前回の件数に比べると倍以上の図書が紛失している。不明資料は一覧表を掲示して返却を呼びかけており、除籍は保留している。

表18　不明資料　　（　　）内は前回2006年度の件数

	和	洋	合計（冊）
図　　書	49（17）	5（2）	54（23）

4）所蔵資料総数

2007 年度の蔵書数に受入資料、除籍資料を増減した結果、2008 年３月末日現在の所蔵数は、蔵書（図書・視聴覚資料）72,377 冊、所蔵雑誌数は 2,023 誌となった（**表 19**）。

表19　所蔵資料総数

図書　（冊）			視聴覚(巻)	合計	学術雑誌　（誌）		合計
和	洋	製本雑誌			和	洋	
52,343	10,120	8,583	1,331	72,377	1,623	400	2,023

3．環境

1）設備

1996年９月に新校舎移転以来、10年を経過し、環境・設備面で様々な不具合が出てきており、閲覧席の拡張および整備を必要になってきている。

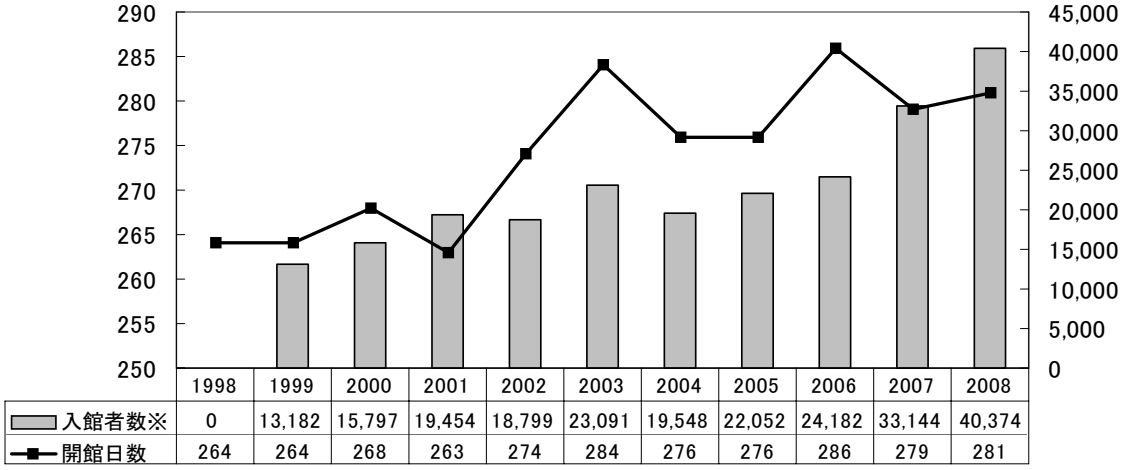
⑴　閲覧環境の整備

全体的に入館者数が増えており、閲覧席に足りなくなってきている。統計をみると、1998 年度は55,330 人であったが、2008 年度は95,704 人と当時に比べて約1.7倍に増えている（**図３**）。特に最近３年間の増加が顕著である。前年度報告したが、前期（4月～7月）の入館者数が多い

時期には、授業中以外は閲覧席が常に満席に状態であった。これまで、夏季休暇中は利用が落ち込んだが、卒業研究を準備する学部４年生、認定看護師教育課程３コース、認定看護管理者ファーストレベル受講生によって常に８割程度利用されていた。

また、夜間は、実習のため夕方から来館する学生、聖路加国際病院医学図書館との連絡通路によって、病院職員の利用も引き続き増加している。

学生図書委員会においても、度々、閲覧席が足りないという意見が出されており、解決策として、ゆとりのスペースとなっているブラウジング・コーナー、ロッカールーム等の見直しを検討していきたい。



	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
入館者数※	0	13,182	15,797	19,454	18,799	23,091	19,548	22,052	24,182	33,144	40,374
開館日数	264	264	268	263	274	284	276	276	286	279	281

図３　過去 10 年間の入館者数の推移

※数字は 1998 年度（55,330 人）を 0 とした増加数

⑵　書架増設の必要性

当館の収容力は書架の棚板をすべて合わせた長さが1,861m、ここから積算される収容可能冊数は51,694冊（棚板の長さ÷0.9×25）であり、すでに蔵書数は、これを上回っている。過去10年間の経年の増加実績から計算しても、2010年度には、収容冊数を超えてしまう。さらに、最近、年間2,000冊弱の研究図書が移管対象とされるようになった。これは、1980年代の大学院設置時、または「特色ある教育研究」等の補助金で購入した図書が役割を終えたためと考えられる。現在、保存スペースの確保の方法として、「書架の増設」と「倉庫への委託」の２案を検討したが、このうち「倉庫への委託」についてはランニングコストの面から適切ではないと判断された。「書架の増設」について2010年度予算化に向けて準備をすすめている。

２）図書館システム

図書館システムは、2004年度に新システム *LVZ* を導入したが、Web 上で動作するアプリケーションの進歩等の変化に伴い、陳腐化していく傾向にある。前システムは７年間使用したが、そのときよりも環境の変化が早くすすんでおり、2010年度予算化に向けて準備をすすめている。CARIN（京セラ丸善システム）、NeoCILIUS（日本事務器）、e-Cats library (NEC)、limedio (リコー) についてデモンストレーションを実施した。

電子図書館システム、研究成果リポジトリは、21世紀 COE プログラムの成果公開のために Dspace を導入し強化が図った。OpenURL 化をすすめ、Google などの検索エンジンからもアク

セスしやすくした。また、研究者が業績データを自ら登録しやすくするための機能を追加し、学内全体の研究成果情報を集積するシステムを整えた。

４．組織と連携

１）職員

１日あたり、専任職員４名、委託職員２名、パート職員１名の体制となった。このうち、専任４名、委託２名は司書資格を有する。専任職員は平日午前８時～午後４時まで２名、午前10～午後６時まで２名、委託職員は平日の午後12時～８時、パート職員は午前10時～午後６時までの勤務である。土曜日は午前９時～５時まで専任・委託１名ずつとなる。図書館が大学史編纂・資料室事業を担当することとなり、現在の体制となった。

２）委員会

⑴　図書委員会

委員：中山和弘（委員長、図書館長）、有森直子、田代順子、矢ヶ崎香、安ヶ平伸枝、松本直子、金澤淳子

回次	日　　時	内　　容
1	４月７日（月）	2007年度蔵書点検(雑誌)結果報告、新任職員採用 2008年度委員会計画、2008年度図書館暦(案)の検討
2	５月13日（火）	2007年度図書館運営報告 出張報告（松本：日本看護図書館協会総会・著作権フォーラム）
3	６月３日(火)	認定看護師教育課程研修生へのサービス 出張報告（新沼：NII 目録システム講習会）
4	７月１日(火)	資料費執行状況報告（4月～6月） ロッカー点検報告、雑誌の利用調査中間報告 見計らい選書会実施計画検討、夏季休暇中の予定
5	９月２日(火)	研究業績登録インターフェース（リポジトリ）の進捗状況報告 雑誌の見直し手順検討
6	10月７日(火)	リポジトリ業績データ入出力モニター調査報告 見計らい選書会アンケート集計報告 雑誌の見直し：購読中止雑誌の決定、2008年新規購読雑誌検討 見計らい選書会購入図書決定
7	11月４日(火)	出張報告（松本：16th Cochrane Colloquium)、雑誌発注報告 図書館教育予算案の検討
8	12月２日(火)	「聖路加看護大学電子図書館システム規程」改正検討
9	１月６日(火)	ロッカー点検報告
10	２月４日(水)	「図書館における個人情報取り扱い内規」改正検討
11	３月４日(水)	「図書館における個人情報取り扱い内規」改正検討 「聖路加看護大学事務組織及び事務分掌規定」図書館部分確認 リポジトリで公開する業績データの取り扱い

⑵　学生図書委員会

委員：各クラスより２名ずつ選出された委員、司書で構成

内容：５回開催

各クラスへの図書館活動の連絡および意見収集などを行った。2008年度は図書館に対するアンケート調査を行った。

３）連携

⑴　看護実践開発研究センター

看護実践開発研究センターが実施する、看護専門職向け、市民向けの生涯教育のプログラムに協力している。また、共同して市民に向けて健康情報の提供を行う事業を行い、『るかなび：聖路加健康ナビスポット』の活動に参画している。その一環として、2008年度は、研究センターホームページのリニューアル作業の支援を行った。

⑵　聖路加国際病院

libil プロジェクトによってこの他に両館で提供しているデータベースを含め、全７回実施した。また、各データベースの書誌データから電子ジャーナルの全文データへとリンクするリゾルバーを共同して運用した。2009年度は双方の条件が折り合わず別のシステムを契約することとなった。

⑶　他機関への協力

図書館司書として看護界における情報リテラシー向上の一助として、他機関からの依頼により、文献検索等の講義を行った（**表20**）。

表20　他機関への協力

対象機関	担当者	時限数
東邦大学　医学部　看護学科	松本直子	1
聖母大学　大学院	〃	2
東京都ナースプラザ	〃	1

５．経費・資産

文献データベースなど電子媒体資料の契約料は、資料費とは別に、図書館運営費の中で予算計上している。逐次刊行物の価格が下がったのは、Elsevier 社の前年度に続いて電子ジャーナルの契約費用も予算を圧迫している。教育・研究に必要な情報源を整備するため、補助金申請をするなどの策を講じて購入できるよう努力していきたい。

表21　決算額　　（　　）内は前年度数

図書館資料費				教育予算（図書館運営費）		
図書	逐次刊行物	視聴覚資料	資料費合計	製本雑誌	文献データベース	電子ジャーナル
3,544,194 (3,493,673)	7,637,807 (10,340,710)	533,295 (287,856)	11,715,296 (14,122,239)	544,582 (741,195)	2,822,375 (36,668,005)	2,712,250 (1,559,210)

X　大学史編纂・資料室

大学におけるアーカイブ事業の重要性に鑑み、本学は、2006年度に大学史編纂･資料室検討委員会（図書委員会委員が兼任）を発足させ、１年半の検討と活動を経て「大学史編纂･資料室の事業のあり方についての提案」を学事協議会および教授会に提出した。それを受けて、2008年４月には大学史編纂･資料室が設置され、渡部尚子客員教授（1962年卒）が室長に就任した。また、大学史編纂･資料室の諸事業を審議し、運営等を支援する委員会として大学史編纂･資料室委員会（大学史編纂･資料室検討委員会を改変）が置かれた。

大学史編纂･資料室に関連した組織・施設・規則は以下のとおりである。

大学史編纂･資料室の組織上の位置づけ：学長直轄

場　　所：本館６階608号室

職　　員：室長１名（客員教授）、職員１名（図書館員兼務）、臨時職員１名（同窓生）

諮問機関：大学史編纂･資料室委員会（委員：教員５名、同窓生３名、職員３名）

関連規則：聖路加看護大学大学史編纂･資料室委員会規程（2009年度、学事協議会および教授会承認まち）

個人情報保護方針

2008年度における大学史編纂･資料室の活動について、以下に報告する。

１．大学史編纂･資料室業務

１）オーラルヒストリーの聞き取り

⑴　個人インタビュー

2008年度のインタビューを開始するにあたり、多様な背景をもつ対象者をより広く、また公平に選出するため下記の申し合わせを行った。

対象者については、①地方や外国で活躍した人、②外国人卒業生（戦前）、③看護以外の分野（福祉・団体・国際援助等）でも活躍・貢献した人を、またその選出は、①全国都道府県看護協会および②同窓会クラス委員（聖路加女子専門学校1945年～1956年卒）に依頼することとした。

その結果、都道府県看護協会から４名、クラス委員から28名、大学史編纂･資料室委員会から11名、計42名がリストされた。年度内に実施可能な人数を考慮して13名に協力を依頼し８名から承諾が得られた。そのうち、下記６名の方にインタビューを行った。

日比野路子（1941年卒、５月19日）、井上幸子（1945年卒、６月21日）、小池明子（1941年卒、８月８日）、藤門政子（1937年卒、10月22日）、高橋百合子（1939年卒、10月29日）、金子房代（1934年卒、11月24日）

⑵　フォーカスグループインタビュー（2007年度実施）についてのグループ討議

12月６日、昨年実施したフォーカスグループインタビューの内容について、修正・補足のグループ討議を行った。また、大学史編纂事業への協力・支援を得るため、大学史編纂･資料室

委員会および編纂･資料室から下記テーマについて報告した。

「大学史編纂事業について」：中山和弘（大学史編纂･資料室委員会委員長）

「インタビューの進捗状況について」：渡部尚子（大学史編纂･資料室室長）

「前回のフォーカスグループインタビューのまとめ」：有森直子（大学史編纂･資料室委員会委員）

⑶　インタビューマニュアルの作成

委員間の共通理解を図るため「聖路加看護大学 Interview マニュアル（案）」を作成した。マニュアルは、①Interview 準備から実施･保管･開示のフローチャート、②「個人ファイルボックス」申し合わせ、③逐語録整理申し合わせ、④同意書･履歴書･資料借用書等用紙類の４つから構成されるが、その活用については試行中である。

⑷　インタビューについての今後の課題

過去２年半に13名のインタビューを実施したが、下記２点については次年度以降の課題となった。

①時間･予算･人手等の制約の中で、より多くの対象者を効率的にインタビューする方法の検討

②記憶違い、誤解、略名表現等のある生の逐語録を、正確で迅速に校正･校閲する方法の検討

２）資料収集

今年度、大学史編纂･資料室が収集した資･史料総数は、寄贈52、借用26の計78点である。その中には、1923年卒河村郁氏の自叙伝（VHS）、1934年卒金子房代氏使用の感染看護プリント（GHQ看護課関係者作成の英文プリント）、1935年卒金子光氏の回想録（DVD-R）、同年卒高橋シュン氏の八ヶ岳農村診療記録（1946年･1947年、自筆記録）等の貴重資料が含まれている。

３）写真パネルの整理

大学に保管してある写真パネル類112枚について､キャプション整理とデータベース化を図った。また、保管･管理面からガラスケース（額縁）入り写真のパネル化の準備とその経費について検討した。

２．広報・普及業務

１）聖路加看護大学ブックレット

自校教育の一環として、また創立90周年記念資料として聖路加看護大学ブックレット（「聖路加看護大学の歩み（仮称）」）の制作を学事協議会および教授会に提案し了承された（2008年７月）。以下、その活動経過を記す。

７月～９月：

教職員を対象にブックレットの内容および体裁についてアンケート実施

９月～10月：

①アンケートをもとに、大学史編纂資料室委員会・学長・学部長・元教員等に、内容についての助言要請

②26項の内容と、執筆者を学内教職員および同窓生にすることを決定

③ブックレットワーキンググループの設置（佐居由美・大森純子・中村綾子・渡部尚子・新沼久美・進藤務）

11月：ワーキンググループおよび大学史編纂･資料室委員会で執筆者の選出。学長・学部長に助言要請。執筆要領作成

12月：執筆者に原稿依頼（文書およびファカルティスタッフミーティングで口頭依頼）

１月～３月：ワーキンググループにおいて、タイトル名・体裁・使用写真・校正枠組・奥付内容・予算・業者選定等検討

２）写真展示

2009年度聖路加同窓会総会、日本看護歴史学会第23回学術集会、創立90周年記念において大学保管の写真パネルを展示することについて検討、その準備に入った。

３）展示室の設置

展示室設置については種々の状況から一時検討を保留していたが、本年２月、2009年度事業計画の中で大学のミッション達成のための教育強化として簡易展示室の設置が示され、その具現化に向けて準備を進めている。その活動は次のとおりである。

⑴　業者との話し合い：内田洋行から展示室に関連しての説明を受け、設計･予算･作業過程等についての相談と案作成の依頼（11月20日、12月12日）

⑵　施設見学：東洋学園大学資料室（本郷および流山校舎）の展示室を視察（12月11日、３月31日）

⑶　展示室の検討：候補場所として図書館前のブラウンジング、ロッカー室、その他学内廊下等を検討

⑷　展示方針の検討：臨時委員会を開催し、展示についての目的･対象者・内容･方法等を話し合った。また、2010年１月の創立90周年での簡易展示を目指し、そのコンセプトと見積依頼条件等を検討した。

４）ホームページの構築

創立90周年事業の一環として、『聖路加看護大学85周年記念誌』をもとに、ホームページを作成する案が出ている。次年度活動に取り上げる予定。

３．渉外活動業務

１）自校教育事業への協力

自校教育の一環として、本学卒業生であり、台湾看護界において指導的役割を果たした鍾信心先生を招聘する計画を立てた。なお、この事業はミセス・セントジョン記念教育基金を得て実施される。

２）研究・学会発表等

⑴　学会発表（日本看護歴史学会第22回学術集会、2008年８月、於九州大学）

テーマ：「聖路加看護大学同窓生による学生生活の変遷～フォーカスグループインタビューによる語りを通して～」：聖路加看護大学大学史編纂・資料室検討委員会（有森直子・中山和弘・内田卿子・岩間節子・菅原文子・田代順子・麻原きよみ・安ヶ平伸枝・松本直子・梶とみ子・進藤務）

⑵　シンポジウム参加（2009年１月24日、於立教大学）

テーマ：「自校教育の到達点と今後の課題」

参加者：田代順子・有森直子・渡部尚子・新沼久美

３）他組織機関との連携

⑴　全国大学史資料協議会への入会および研究会参加

上記協議会に次年度より入会するための手続きをとった（2008年６月）。また、同協議会開催の下記研究会にオブザーバーとして参加した。

・2009年１月22日（於武蔵野美大新宿サテライト）:「日本の建築アーカイブの現状と課題」
参加者：新沼久美

・2009年３月19日（於武蔵野美大新宿サテライト）:「東海大学学園史資料センターにおける資料整理の現状と課題について」
参加者：渡部尚子・新沼久美

⑵　2009年度聖路加同窓会総会における本学写真パネルの展示協力の準備（再掲）

⑶　日本看護歴史学会第23回学術集会開催（2009年８月20･21日）への協力･支援

本学同窓会会長内田卿子氏（大学史編纂･資料室委員会委員）が会長を務める上記学術集会の開催にあたり、大学史編纂･資料室委員会および委員、大学史編纂･資料室が下記の形で協力・支援をすることになった。

①学術集会企画委員会委員：田代順子・有森直子・安ヶ平伸枝・矢ケ崎香・渡部尚子

②研究発表：「高橋シュン記『八ヶ岳農村診療報告』にみる戦直後・八ヶ岳南麓地域における巡回医療活動」（田代順子・有森直子・安ヶ平伸枝・矢ケ崎香・渡部尚子・松本直子・新沼久美・内田卿子）

③聖路加看護大学写真パネルの展示協力（上掲）

４．その他

⑴　研修派遣：「平成20年度　アーカイブズ・カレッジ(資料管理学研修会、６週間)」（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館主催）に新沼久美大学史編纂･資料室職員が３週間参加。

⑵　大学史編纂･資料事業等の経済的支援：2008年12月、聖路加看護大学への寄付項目に「大学史編纂･自校教育･史料保存展示事業募金」が創設された。寄付金は本事業の人件費・調査費･資料収集費・史料展示経費等へ当てられる。

⑶　規程等の整備：「大学史編纂･資料室規程」・「聖路加看護大学 Interview マニュアル」（上掲）

XI　看護実践開発研究センター

開設６年目を迎えた看護実践開発研究センターは、看護実践開発、研究支援、実践、生涯学習支援、交流、情報発信の機能を有し、看護ケア研究部門、教育研究部門、国際看護研究部門、政策研究部門、継続教育部門を構え、研究センター運営委員会のもと活動を行った。

１．研究センターの運営および構成員

研究センター運営委員会（以下、運営委員会）は、センター運営に関する重要事項を審議するために設置され、2008年度の委員会メンバーは、センター長（山田雅子教授）、研究科長（堀内成子教授）、各部門長（看護ケア研究部門長；小松浩子教授、教育研究部門長；菱沼典子教授、国際看護研究部門長；田代順子教授、政策研究部門長；井部俊子教授、継続教育部門長：松谷美和子教授）、専任研究員（森明子教授、小口江美子教授、吉田千文准教授、矢ケ崎香助教、細川恵子助教、實崎美奈助教）とオブザーバー（山口喜義事務局長）で構成した。なお今年度は、聖路加・テルモ共同研究事業の実施に関連して教授１名（2007年12月から配置）、認定看護師教育課程開講に関連して、教授１名、助教３名、非常勤講師２名（竹森志穂、沼田美幸）が追加され、常勤の専任研究員はセンター長を含め、昨年度の３名から７名に増員された。

運営委員会は、毎月１回、計11回開催され、主な検討事項は、研究センターの事業運営、認定看護師教育課程の開講・運営、看護管理者養成セカンドレベル講習の開講・運営、各種研究員の承認、各部門の活動報告などであった。

運営委員会に関連する会議には、センタースタッフミーティング、るかなび運営委員会、研究センターHP検討会（新）、認定看護師教育課程教員会・入試委員会、認定看護管理者講習（ファーストレベル・セカンドレベル）運営委員会がある。

2008年度に新たにスタートした事業は、ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ、リンパ浮腫ケアステーション、新健康カレッジ、ストレスマネジメントヨーガ、在宅ケアコンサルテーション、退院調整看護師養成プログラムと活動支援、認定看護師教育課程の３コースであり、合計30事業が展開された。なお、リンパ浮腫ケアステーションの実施に関しては、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律に則った施術所としての届出を東京都に行い、保健所から視察を受けた後６月10日に認可された。

2．研究実績

1）専任・兼任研究員および研究テーマ一覧

◎はセンター長，○は専任研究員，＊は部門長

部門	氏　名	研　究　テ　ー　マ	補助金名
看護ケア研究	有森　直子	女性のリプロダクション健康課題の意思決定支援教育コンソーシアムとプログラム検証 出生前検査の選択を考慮する女性をエンパワメントする包括的意思決定支援の介入研究	文部科学省科研費
	市川和可子	がん体験者が伴走する Web 版乳がん患者サポートグループの開発	文部科学省科研費
	糸井　和佳	都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流を促進する支援の開発	文部科学省科研費
	卯野木　健	気管挿管・人工呼吸器使用患者における簡便なせん妄評価法の信頼性・妥当性の検討	文部科学省科研費
	江藤　宏美	乳幼児の睡眠分析システム情報共有プラットホームの構築	文部科学省科研費
	及川　郁子	子どものヘルスプロモーション促進への基礎教育における外来看護実習と外来看護の構築	文部科学省科研費
	大久保暢子	慢性期脳血管障害患者の寝たきりを防ぐ背面開放座位ケアプログラムの開発	文部科学省科研費
	大熊　恵子	病棟看護師が認識している統合失調症患者への退院支援の困難さの分析	文部科学省科研費
	大森　純子	前期高齢女性の近隣他者との交流関係を活用した主体的健康増進プログラムの開発	文部科学省科研費
	小野　智美	日帰り手術に向けての幼児の自律性を支援する看護介入プログラムの評価への段階的研究	文部科学省科研費
	梶井　文子	認知症高齢者の学際的チームアプローチに関するケアの質評価システムの開発	文部科学省科研費
	片岡弥恵子	アジア文化圏に生きる女性への DV 支援ガイドライン創生と検証 Quality Indicator の開発：社会に対し出産ケアの質を保証するために	文部科学省科研費
	亀井　智子	急増する在宅慢性呼吸不全患者の入院を予防するテレナーシングの日本への実践的導入	文部科学省科研費
	萱間　真美	精神科疾患を有する人の地域生活を支えるエビデンスに基づいた看護ガイドラインの開発 精神障害者の退院促進と地域生活のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究	厚生労働科研費 厚生労働科研費
	＊小松　浩子	患者と医療者が分かり合えるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性検証 市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価	文部科学省科研費 厚生労働科研費
	佐居　由美	看護師の「安楽なケア」実践を促進するためのプログラムの開発と評価	文部科学省科研費
	佐竹　澄子	寝たきり患者の副交感神経優位を導く聴覚刺激	文部科学省科研費
	外崎　明子	がんサバイバーの身体活力回復プログラムの構築と評価研究	文部科学省科研費

	長松　康子	アスベスト関連相談に関する保健師向けガイドラインの構築と評価	文部科学省科研費
	永森久美子	生後14日間における母乳育児支援のための哺乳行動アセスメントツールの開発	文部科学省科研費
	平野　優子	在宅人工呼吸器装着 ALS 患者の困難と人生再構築支援ガイドライン作成への縦断的研究	文部科学省科研費
	平林　優子	子どもの医療的ケアの自律的日常生活行動への導入に関する看護支援プログラムの作成	文部科学省科研費
	堀内　成子	貴重児妊娠の不安を軽減するための就寝中胎動ホームモニタリングの実用化開発 ユビキタス IP-TEL 産科医療通訳システムの開発	文部科学省科研費
	○森　　明子	排卵誘発剤を使用する女性が安楽に安心して過ごすためのセルフケア支援モデルの効果	文部科学省科研費
	○矢ヶ崎　香	がん医療における EBN と臨床実践の gap と波及モデルの開発	文部科学省科研費
教育研究	麻原きよみ	地域看護における体系的倫理教育ラダーの開発と評価	文部科学省科研費
	奥　　裕美	夜勤から始める新人看護師オリエンテーションプログラムの開発とその評価	文部科学省科研費
	萱間　真美	質的研究方法を用いた看護学の学位論文評価基準の作成に関する研究	文部科学省科研費
	中山　和弘	インターネット情報に翻弄される患者、家族を支援する看護職のための e ラーニング開発 患者・家族・国民の視点に立った適切ながん情報提供サービスのあり方に関する研究	文部科学省科研費 厚生労働科研費
	＊菱沼　典子	少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発	文部科学省科研費
	柳井　晴夫	臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験（CBT）の開発的研究	文部科学省科研費
国際看護研究	＊田代　順子	看護学でのサービスラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価 開発途上国看護職の国家間移動を押し止めるホールドファクターとしての現任教育の検討	文部科学省科研費
政策研究	＊井部　俊子	サービスマネジメントをフレームワークとした看護管理学の体系化に関する研究	文部科学省科研費
	萱間　真美	精神障害者の訪問看護におけるマンパワー等に関する調査研究	厚生労働科研費
	廣岡　佳代	がん対策の実施基盤及び推進体制に関する国際比較研究	厚生労働科研費
	鶴若　麻理	アジアの高齢者の終末期医療をめぐる事前指示に関する国際比較研究	文部科学省科研費
	◎山田　雅子	がん対策の実施基盤及び推進体制に関する国際比較研究	厚生労働科研費

2）客員研究員および研究テーマ一覧

部門	氏名	研究テーマ	共同研究者	所属
看護ケア部門	石井　慶子	死産を経験した家族への支援	堀内　成子	お空の天使パパ＆ママの会（WAIS）関東支部
	太田　風子	リンパ浮腫ケアステーション	小松　浩子	学校法人後藤学園附属リンパ浮腫研究所
	尾形美奈子	リンパ浮腫ケアステーション	小松　浩子	学校法人後藤学園附属リンパ浮腫研究所
	片桐麻州美	周産期病棟におけるセルフマネジングチーム制の評価	堀内　成子	社会保険中央総合病院
	川北　智子	リンパ浮腫ケアステーション	小松　浩子	広田内科クリニック
	小林　紀子	母乳育児	永森久美子	ルカ子母乳育児相談研究所
	相良-ﾛｰｾﾞﾏｲﾔｰ みはる	看護研究の方法論としての現象学の追及	堀内　成子	旭川医科大学医学部看護学科 聖路加国際病院小児科
	佐藤佳代子	リンパ浮腫ケアステーション	小松　浩子	学校法人後藤学園附属リンパ浮腫研究所
	田中　明恵	リンパ浮腫ケアステーション	小松　浩子	学校法人後藤学園附属リンパ浮腫研究所
	中川　有加	Women-centered Care	堀内　成子	大阪赤十字病院
	矢形　寛	リンパ浮腫ケアステーション	小松　浩子	聖路加国際病院
教育研究	大久保菜穂子	市民との協働による健康支援ボランティア教育プログラムの開発	菱沼　典子 山田　雅子	日本伝統医療科学大学院大学
政策研究	内田千佳子	市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価	山田　雅子	在宅ホスピス協会
	大久保菜穂子	市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価	山田　雅子	日本伝統医療科学大学院大学
	霜田　美奈	市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価	山田　雅子	ボランティアグループ・パリアン

3．研究事務支援

研究助成金他情報提供、文部科学省科学研究費補助金、厚生労働科学研究費補助金、聖路加・テルモ共同研究事業、日本学術振興会特別研究員、府省共通研究開発管理システムについての支援を行った。

具体的な支援内容は以下のとおりである。

⑴　研究助成金他情報提供

研究助成金、研究員募集について29件の情報提供と内容相談を行った。

⑵　文部科学省科研費事務

本年度は、39件［基盤研究23件、萌芽研究４件、若手研究（Ｂ）９件、若手研究（スタートアップ）２件、特別研究員奨励費１件］の事務を行った。

① 申請業務

・前年度実績報告書（４月）

・当年度交付申請書（５月）

・前年度成果報告書（６月）

・次年度研究計画調書（11月）

② 手引きの作成

・「文部科学省科学研究費補助金の取扱いについてー平成20年度版ー」

・「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づき、「文部科学省科学研究費補助金の取扱いについてー平成21年度版ー」の作成にあたり、改訂に向けての作業を行った。

③ 会計業務

・提出書類の確認、出納業務

・収支簿作成

④ 相談業務

⑤ 説明会等の開催

2008年５月20日、27日㈫	取扱いについての説明会
〃 10月３日㈮	研究計画調書申請公募要領等説明会
2008年12月17日㈬	会計監査報告会

⑶ 厚生労働科研費事務

本年度は、７件について事務を行った。

① 会計業務

・通帳作成

・個人別会計書類作成、配付

・提出書類の確認、出納業務

・収支簿作成

② 相談業務

⑷ 聖路加・テルモ共同研究事業

① 会計業務

・プロジェクト別会計書類作成、配付

・物品発注

・プロジェクト、全体書類の作成・確認、出納業務、予算管理

・収支簿作成

② 相談業務

③ セミナー等のサポート

＜セミナー等＞

・ナースクリニック

るかなび

乳がん女性のためのサポートプログラム

こどもの健康、知ろう、考えよう！

－子どもの健康を家族と考える学習・交流会－

出張介護講座

転倒骨折予防体操教室

ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ

天使の保護者ルカの会

・市民健康講座

新健康カレッジ

⑸　日本学術振興会特別研究員

①　申請業務

・新規申請１件（DC１件）

⑸　府省共通研究開発管理システム（e-Rad）の管理、運用

①　研究機関申請

②　研究者情報

４．実践

研究センターにおける市民との協働により開発されてきている看護提供方法としては、るかなびとナースクリニックに分類されている11事業が該当する。以下にそれらの概要を記す。

１）聖路加健康ナビスポット；るかなび

聖路加健康ナビスポット『るかなび』は、2004年５月から健康情報サービスを始め今年で５年目を迎えた。2008年度は聖路加・テルモ共同事業の一つとして運営されている。市民一人ひとりが主体的に健康生活を送るために、質の高い健康情報を提供することを目指している。ここ『るかなび』では、市民を対象に、パンフレットや図書の提供、およびインターネットによる情報検索、看護師・保健師・助産師などによる健康相談と、血圧測定、骨密度測定、身長・体重・体脂肪測定などの健康チェックサービスを行っている。

『るかなび』の運営は、るかなびコーディネーター２名（看護師・司書、各１名）を中心に、るかなびボランティア（看護師など医療専門職・市民）と、教員、職員（司書）、本学大学院生で構成されるるかなび運営委員会で議論し進められてきた。るかなびボランティアには、医療専門職として本学卒業生や、本学教員の関係者、また、サイコセラピスト、管理栄養士といった有資格者がボランティアとして登録している。さらに、センター事業である「健康支援ボランティア講座」を修了した市民も市民ボランティアとして活動に加わり、今年度８名の新規登録者を含め総勢21名の市民が活動に参加している。

『るかなび』の主な活動は、「健康相談」「健康チェック」「健康情報の提供」「闘病記の提供」である。加えて「ランチタイムミニ健康講座・コンサート」「CHADO」などのイベント開催、「中央区福祉祭り」「白楊際」「聖公会フェスティバル」に参加し、るかなびを理解してもらう活動をしている。

『るかなび』の健康相談などの利用状況は、年間約1,140名の利用者となり、昨年度より157名増加した。1,140名の内訳は、女性が８割以上であり、年齢層は50代、60代が５割を占めている。

中でもリピーターの利用者が４割だった。今年度は５月から1月の間、利用者に健康相談の評価をしてもらうため、はがきを使ったアンケートを行った。221枚配布し回収された168枚（回収率（76.0%）の結果では、健康相談の満足点（10点満点）は平均9.24点、そのうち10点満点が100名（59.5%）だった。再利用の希望者は159名(94.6%)だった。

「健康チェック」では骨密度測定を行っている。今年度は骨粗鬆財団の研究助成を受け、年代別の課題を踏まえた骨粗鬆症ならびに骨粗鬆症から生じる障害の予防のための教材作成に取り組んだ。まず360名に骨粗鬆症に関するアンケートを行い、年代別に骨粗鬆症に関する知識、骨密度に影響する生活習慣等を把握したうえで、年代の特徴に合った教材を作成している。教材は来年度早々から『るかなび』で使えるようになる予定である。

闘病記コーナーでは、新たに410冊を加え、1,417冊となった。冊数がふえたことで、新しく「闘病記文庫ブックリスト2008」を作成し、病名、書名検索をしやすくした。

また、ランチタイムミニ健康講座・コンサートは９回開催し、参加人数は延べ441名だった（**表１**）。リピーターが毎回半数を占めており、イベントが地域に定着してきていることがうかがえる。ミニ講座では、るかなび市民ボランティア３名がそれぞれの闘病体験や育児体験を市民の目線で講演し、会場からも質問や意見が出され好評だった。さらにその講演をきっかけにして別の施設での講演依頼が入り、市民ボランティアの活躍の場が広がっている。

表１　2008年度　ランチタイムミニ講座＆ミニコンサート開催覧

ミニ講座演題/演者	ミニコンサート/演奏者	参加者数
ナースがすすめる良い病院の見方/奥裕美・中村綾子	ソプラノ独唱/野村浩子・ピアノ伴奏/大久保礼子	55
地域で育てる子育ての輪/中村佳子	アイリッシュハープ/吉田清子	50
高血圧が気になるあなたにちょっと食事アドバイス/鈴木孝子	落語/三朝亭半゛左　（山上伸治）	48
特定健診について/溝口千鶴	ラテンハープ/高橋麻由	40
自らの命は自らのもの―賢い患者になろう/秋元君男	クラリイネット･ニューフォニューム演奏/ラーボ・ラ・ガンバ	69
赤ちゃんの話―子育てのちえ―/江藤宏美	ソプラノ独唱/畑野良子・ピアノ伴奏/安久津素子	48
病を得て想うこと―闘う―/福田茂代	合唱/聖路加看護大学聖歌隊	53
アメリカの国立公園の旅から―お湯があるのに温泉宿はない！！/菱沼典子	落語/三朝亭半゛左　（山上伸治）	42
介護ヘルパーの一週間/木村務子	アイリッシュハープ/吉田清子・朗読/長谷川百合子・ピアノ/堀江晃子	36

CHADO は、通常の図書閲覧コーナーを簡易の茶室に設営して行っている。今年度は11回開催した。

地域との連携として、中央区の健康福祉祭りにるかなびボランティアと共に参加し、骨密度測

定や体脂肪測定、結果を基にした食事のアドバイスを行った。また、「自分のからだを知ろう」キャラバンが創作した「からだ踊り」「からだ紙芝居」を屋外の舞台でも披露した。骨密度測定にはたくさんの人が訪れ、大盛況だった。

さらにるかなびは、大学の事業として教育研究の役割も担っている。今年度は本学の「生涯発達看護論Ⅱ」「看護援助論Ⅰ」の実習で計10名の学生を受け入れた。また、「看護形態機能学」の学習の一環で、学生が市民向けのパンフレットを作成しており、今年度も４種類のパンフレットを市民に配布している。

『るかなび』は、市民ボランティアと専門職ボランティアが協働して活動をすることを目指してきた。現在、健康相談は専門職ボランティアが行い、その他の受付や、利用者の目的に応じた案内、健康チェック、地域への広報活動などは市民ボランティアが担って活動している。また、定期的に会議やミーティング、事例検討会を開催している。さらに市民ボランティアの発案で、ボランティア同士のコミュニケーションを円滑にするため、年に４回のボランティアニュース作りを始めた。専門職と市民が互いに自由に意見を出し合うまでにはまだ至っていないが、徐々にコミュニケーションを重ね人間関係ができてきている。来年度は、ボランティアが新たな役割をもって『るかなび』活動により主体的に参加していくことを目指していく。

２）ナースクリニック

ナースクリニックは、看護師がもつ専門的な知識を背景に、個人相談やケア、サポートグループなどを行っている。2008年度に実施されたナースクリニック事業の概要を**表２**に示した。2008年度に新たに開設されたものは、リンパ浮腫ケアステーション、ルカ子ウィメンズヘルス・カフェの２事業である。

リンパ浮腫ケアステーションは、聖路加国際病院と連携し、施術所として乳がん患者のためのケアを多職種連携の中で提供している。また病院看護師を対象とした教育プログラムも開講している。ルカ子ウィメンズヘルス・カフェは、認定看護師教育課程（不妊症看護コース）を開講するに当たり、実践および教育の場として設置された。

これらのナースクリニックは、教育との連携という側面で、学部学生の臨地実習、大学院生の研究フィールドとして貢献している。しかし各種研究費を財源として実施しているのが特徴であるため、財源の継続的な確保が大きな課題となっている。

表２　ナースクリニック事業の概要　　**2008年4月～2009年3月実績**

形 態	名　称	目　　的	対　　象	実施回数	実 施 者	年間利用者数
集団	赤ちゃんがやってくる	新しく赤ちゃんを迎える家族、特に兄姉が、妊娠・出産・新生児について学ぶことで、赤ちゃんを迎えるこころの準備ができる。また兄姉になる子どもたちが、生命の誕生について学び、体験を共有することで、自分の生・性を大切にできるようになる	兄姉になる子ども、次子を妊娠中の女性／家族	６回／年	開業助産師・大学教員他	175

個人相談・ケア	ルカ子母乳育児相談室	子育て中の母親を対象に母乳のケアを中心とした育児相談事業を行う。学部学生が子育て中の母と子に出会い、母乳育児相談の実際を学ぶ機会とする。また、子育て支援の一端を担う助産師のかかわりを知る機会とする	育児中の女性	毎週月･水曜日	大学教員･大学院生	383
集団	ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ	①リプロダクティブ・ヘルス（妊娠・出産や子育て）をめぐるテーマで、学び語り合う場の提供を通じ、女性が正しい知識・安心と信頼のもとで自分らしいリプロダクティブ・チョイスができるようにサポートする ②不妊症看護認定看護師教育課程の研修生の教育（演習を含む）の場・機会とする	女性	６回／年	大学教員･ピアグループ･研修生	39
集団	乳がん女性のためのサポートプログラム	乳がんをもつ女性が主体的・効果的に治療を継続し、治療を受けながら充実した生活が送れるよう、個々の体験を分かち合う場となる	乳がん治療中の女性	９回／年	大学教員・看護師・大学院生	422
集団	子どもの健康、知ろう、考えよう！	子どもの健康に関心のある子どものご家族や、子どもに関連した保健、福祉、教育に従事している人々との交流や学集会を通して、子ども健康サポートのためのネットワークを広げていく	中央区に関係する方で、お子様の健康に関わる方	４回／年	大学教員他	60
集団	天使の保護者ルカの会	流産・死産・新生児死亡などで子どもを亡くした母親や家族のセルフヘルプ・ミーティングやグリーフ・ケアに関する催し物を実施し、体験者を支援する。周産期におけるビリーブメントケアについて学習した大学院生･学部学生が、体験者の思いや立場、セルフヘルプ・グループ活動の実際と看護者のかかわりについて学ぶ機会とする。病院で実際に、流産・死産・新生児死亡で子どもを亡くした母親や家族をケアしている看護者に、セルフヘルプ活動に参加する機会を提供し、看護者が、体験者の思いや立場、ケア、退院後の支援などについて学習できるよう支援する	流産・死産等を体験した女性／家族	９回／年	大学教員･大学院生他	143
個人相談・ケア	リンパ浮腫ケアステーション	がん治療に伴うリンパ浮腫の予防、早期発見、適切なケアに関する、セルフケア教育および専門的ケアを実施し、がん体験者が治療を受けながら充実した生活が送れるよう支援することを目的とする	乳がんの治療により、リンパ浮腫の予防や改善を必要とする方	毎週火曜日	大学教員･あん摩マッサージ指圧師	150

個人相談・ケア	高齢者のための栄養相談・心理カウンセリング	①加齢や生活習慣病ならびに慢性疾患、障害等に伴う食生活ならびに栄養に関する相談に対して情報提供を行うことにより、高齢者およびその家族が、毎日の食事について安心して継続的に送ることができるように支援する ②高齢者およびその家族が抱える「不安やストレス」を「新しい自分」を発見するカウンセリングによりリフレッシュできるように支援する	高齢者とそのご家族	①栄養・食事相談：木曜日 ②真意カウンセリング：火・木曜日	大学教員、カウンセラー	18
集団	聖路加　和みの会	多世代の近隣区民が安心して参加でき、世代間交流を通じて、高齢者の“知恵”および“日本文化の継承”を促進するデイプログラムを創設し、提供する	高齢者・認知症を持つ方、介護者・学齢児、区民等	毎週金曜日	大学教員他	975
個人相談・ケア	出張介護講座	地域のニーズに応じて町内会・婦人会・高齢者クラブ等に出張し、介護講座を行うことにより、希望に沿った関心あるテーマで実際に役立つ情報提供を行う	高齢者とそのご家族	随時	大学教員	115
集団	転倒骨折予防実践講座	転倒・骨折予防に関する教育や、継続実践可能かつ効果的な体操の実践により、高齢者の転倒や骨折を防ぎ、日常生活を継続できるようなプログラム提供を行う	高齢者	５回／年	大学教員他	55

５．生涯学習支援

１）看護専門職向け（ナーススキルアップ講座）

『ナーススキルアップ講座』は、忙しい看護職が通いやすい時間を設定し、生涯学習の契機となること、また受講者同士、そして大学教員・研究員との交流の場として機能することを目的としている。これまでのプログラムに引き続き、関心の高い内容と受講しやすい時間帯を検討し、以下のようにコースを設定した。

コースの概要は、各々のコースが短期間で気軽に受講できるように、夜間の毎週同じ曜日に集中して行う講座、２週間に１回開講する講座、また１年を通して学ぶことができるよう１ヵ月に１回など定期的に行う講座を設けた。2008年度は、「看護管理コンサルテーション」「緩和ケアコンサルテーション」「在宅ケアコンサルテーション」「がん看護 事例検討会」「精神看護 事例検討会」「退院調整看護師養成プログラムと活動支援」「EBN～さがす・よむ・つかう臨床研究～出張講座」「英文献を読もう！パートⅠ～基礎編～」「英文献を読もう！パートⅡ～構文理解強化コース～」の９講座を開講した。講座の講師は、大学の教員およびセンターの専任研究員を中心に、昨年度から依頼している外部講師が加わった。このうち、「緩和ケアコンサルテーション」「がん看護事例検討会」は文部科学省がんプロフェッショナル養成プランの一環で行われている事業であり、無料で実施した。

今年度から新たに開始した事業としては、「在宅ケアコンサルテーション」「退院調整看護師養

成プログラムと活動支援」があり、退院調整に力を発揮できる看護師の養成を目的として、個別相談や、参加型講義を通じて活発なディスカッションが展開された。

また、参加者が少ない「英文献を読もう！パートⅡ～構文理解強化コース～」については、今後、「英文献を読もう！パートⅠ～基礎編～」 との日程の組み方の工夫や、授業内容の違いの明文化など、新たな方法を模索することとなった。

【2008年度開講コース】

＜看護管理コンサルテーション＞

開 催 日：2008年５月～2009年２月　第２・４木曜日

講　　師：井部俊子（聖路加看護大学教授）

相談者数：１名

＜緩和ケアコンサルテーション＞

開 催 日：2008年４～2009年３月　随時

講　　師：梅田　恵（がん看護専門看護師・聖路加看護大学客員研究員）

相談者数：９名

＜在宅ケアコンサルテーション＞

開 催 日：2008年４～2009年３月　随時

講　　師：山田雅子（聖路加看護大学看護実践開発研究センター教授）

相談者数：４名

＜がん看護　事例検討会＞

開 催 日：2008年４月19日、５月７日、６月11日、７月２日、９月３日、
10月１日、11月５日、2009年２月４日、３月４日/水曜日

講　　師：小松浩子（聖路加看護大学教授）
梅田　恵（がん看護専門看護師、聖路加看護大学客員研究員）

参加者数：40名

＜精神看護　事例検討会＞

期　　間：2008年４月18日、５月23日、７月18日、９月26日、
10月24日、11月28日/金曜日

スタッフ：萱間真美（聖路加看護大学教授）
瀬戸屋希（聖路加看護大学准教授）
大熊恵子（聖路加看護大学助教）

参加人数：141名／６回

＜退院調整看護師養成プログラムと活動支援＞

期　　間：2008年12月４日・18日、2009年１月８・22・29日/木曜日

講　　師：山田雅子（聖路加看護大学看護実践開発研究センター教授）
吉田千文（聖路加看護大学看護実践開発研究センター准教授）
平野優子（聖路加看護大学助教）
長江弘子（岡山大学保健学研究科教授）
宇都宮宏子（京都大学医学部附属病院看護師長）

受講者数：41名

＜EBN～さがす・よむ・つかう臨床研究～出張講座＞

開 催 日：申込施設に応じる

講　　師：片岡弥恵子（聖路加看護大学准教授）

江藤宏美（聖路加看護大学准教授）

松本直子（聖路加看護大学図書館司書）

佐藤晋巨（聖路加看護大学図書館司書）

八重ゆかり（東京大学大学院博士課程）

申込施設数：０箇所

＜英文献を読もう！パートⅠ～基礎編～＞

・開 催 日：①2008年７月３・10・17・24・31日/木曜日

②2009年１月８・15・22・29日、２月５日/木曜日

講　　師：園城寺康子(前聖路加看護大学教授)

受講者数：①13名，　②11名

＜英文献を読もう！パートⅡ～構文理解強化コース～＞

期　　間：①2008年７月３・10・17・24・31日/木曜日

②2009年１月８・15・22・29日、２月５日/木曜日

講　　師：田代順子(聖路加看護大学教授)

受講者数：①３名，　②４名

２）市民向け講座

市民向け講座は、地域に開かれた大学として、幅広い知識、教養を得る場を市民に提供するとともに、大学と一般市民との交流を深めることをめざして、「聖路加市民アカデミー」や「健康支援ボランティア講座」、中央区との連携企画「中央区民カレッジ～まなびのコース」「朗読の会」「ストレスマネジメントヨーガクラス」「新健康カレッジ もっと知ろう自分のカラダ！ はつらつキャリアウーマン編」「新健康カレッジ もっと知ろう自分のカラダ！はつらつシニアステージ編」の７講座を開講している。中央区との連携企画である中央区区民部文化・生涯学習課主催の「中央区民カレッジ～まなびのコース」（前後期の２コース）においては学内教員が講義を行い、それをふまえた実習としてヨーガを取り入れ、これを外部講師に依頼した。さらに、後期には「中央区民カレッジ～シニアコース（クラブ学習）」が行われ、学内講師およびるかなびボランティアスタッフを講師として迎え、調理実習、ヨーガなどの実習を新たに取り入れた。また、家庭教育支援総合推進事業の一環として「妊娠中から子育てを楽しみましょう～マタニティヨーガ」も開講され、市民向け健康講座は計９事業となった。

今年度の実績は以下に示したとおりであるが、市民アカデミーは今年度から株式会社テルモとの共同事業となった。

市民アカデミーは、平日に行ったためか、昨年度より参加者の大幅な増加は見られなかったが、定期事業として着実に認識されてきているようである。朗読の会は固定の参加者が定着し、新規参加者も開始時に比べると増えてきている。また、中央区との連携企画に関しては、全コースとも定員以上の応募があり、抽選が行われたということからも、おおむね参加者からの評価が高い

ことがうかがえた。またアンケートの結果からもヨーガを講義の中に組み込むことで、参加者に自分の健康についてより身近に感じてもらうことができたようである。

来年度は引き続き聖路加・テルモ共同研究事業の継続、新たに２つの講座も開講予定である。市民に向けた健康支援事業がますます増えることとなる。しかしながら、限られたスタッフによる時間や場所のマネジメントが年々難しくなってきているのが現状であり、今後の検討課題である。

a．聖路加市民アカデミー

開催日時：2008年10月10日（金）　13：30〜16：00

講　　師：日野原重明（医師、聖路加看護学園理事長）

平松園枝（聖路加国際病院附属クリニック・予防医療センターセンター長）

テ　ー　マ：生活習慣病予防のための健康チェック

コンサート：ピアノとカンツォーネ（独唱）

参　加　費：2,000円

参加人数：205名

b．健康支援ボランティア講座

開　催　日：2008年①９月20日、②10月18日、③11月15日、④12月20日　（各土曜日）

講　　師：①島内憲夫（順天堂大学教授）、②八木英之（中央区社会福祉協議会職員）、

③高橋恵子（聖路加看護大学 COE 研究員）、④大久保暢子（聖路加看護大学助教）

テ　ー　マ：①小さな健康哲学―WHO ヘルスプロモーションの視点から―

②ボランティアを考える

③話の聴き方・話し方

④自分のからだ、自分でする健康チェック

参加人数：36名／４回コース

c．中央区民カレッジ

〔まなびのコース：前期〕

開　催　日：2008年①５月28日、②６月11日、③６月25日、④７月9日、⑤７月23日

講　　師：①菱沼典子（聖路加看護大学教授）、②④⑤花村睦（ハタヨーガ・ティーチャー）、

③大久保菜穂子（日本伝統医療科学大学院大学准教授）

テ　ー　マ：①「からだ」を知ろう

②自分のからだをみつめよう　ヨーガ　からだがかたいって本当？

③健康の新しい考え方―ヘルスプロモーション―

④自分のからだをみつめよう　ヨーガ　深呼吸をしよう

⑤自分のからだをみつめよう　ヨーガ　リラクゼーションと瞑想

参加人数：25名／５回コース

〔まなびのコース：後期〕

開　催　日：2008年①10月15日、②10月29日、③11月12日、④11月26日、⑤12月10日

講　　師：①②大久保菜穂子（日本伝統医療科学大学院大学准教授）

③④⑤花村睦（ハタヨーガ・ティーチャー）

テ　ー　マ：①発見！私の健康習慣づくり―生活マップを作ろう―
②健康なまちづくり
③からだを動かそう　ヨーガ（部位別）
④からだを動かそう　ヨーガ（下肢）
⑤からだを動かそう　ヨーガ（上肢）
参 加 人 数：24名／５回コース

d．中央区民カレッジ（シニアコース・クラブ学習）

開　催　日：2008年①９月18日、②９月16日、③９月30日、④10月７日、⑤10月21日、⑥11月11日、⑦11月18日、⑧12月２日、⑨12月９日、⑩12月16日（各火曜日）
講　　師：①⑤⑧ 白木和夫（聖路加看護大学客員教授）
②⑥⑨花村睦（ハタヨーガ・ティーチャー）
③⑩鈴木孝子（管理栄養士、聖路加健康ナビスポット・るかなびボランティア）
④萱間真美（聖路加看護大学教授）
⑦松本女里（保健師・看護師、聖路加健康ナビスポット・るかなびボランティア）
テ　ー　マ：①健康ってなあに？病気ってなあに？
②心やからだの内面に意識を向けよう「ストレッチ＆ヨーガ」１
③からだにやさしい食事を作ってみよう１
④うつの不安―身近な心の不調―
⑤がんは誰でもなる病気
⑥心やからだの内面に意識を向けよう「ストレッチ＆ヨーガ」２
⑦生活と健康について考えよう
⑧内外から自分のからだを見てみよう
⑨心やからだの内面に意識を向けよう「ストレッチ＆ヨーガ」３
⑩からだにやさしい食事を作ってみよう２
参 加 人 数：19名／10回コース

e．家庭教育支援総合推進事業「妊娠中から子育てを楽しみましょう」

開　催　日：2008年６月21日、７月19日、９月20日、10月18日、11月15日、12月20日（各土曜日）
講　　師：花村睦（ハタヨーガ・ティーチャー）、本学教員
参 加 人 数：76名／６回

f．朗読の会～文学の中にみるいのち

開　催　日：2008年４月～2009年２月（毎月第２木曜日）
講　　師：宮里和子（武蔵野大学教授）、堀内成子（聖路加看護大学教授）
参 加 人 数：93名／９回

g．ストレスマネジメントヨーガクラス

開　催　日：Ⅰ期　2008年10月16日・23、11月13日・27日、12月11日・18日
Ⅱ期　2009年１月８日・22、２月12日、26日、３月５日・12日
それぞれ全６回（各木曜日）
講　　師：小口江美子（聖路加看護大学看護実践開発研究センター教授）

参 加 人 数：77名／12回

h．新健康カレッジ　もっと知ろう自分のカラダ！はつらつキャリアウーマン編

開　催　日：2008年①５月21日、②６月18日、③７月16日

講　　師：①森明子（聖路加看護大学看護実践開発研究センター教授）

②関根さおり（ウィメンズ・ウェルネス銀座クリニック　医師）

③吉野一枝（よしの女性診療所院長）

テ　ー　マ：①妊娠を迎える女性のからだづくり、健康づくり

②体のサインに気づいて病気を未然に防ごう

③キャリアウーマンに増加している若年性更年期障害とは

参 加 人 数：96名／３回

i．新健康カレッジ　もっと知ろう自分のカラダ！はつらつシニアステージ編

開　催　日：2008年①11月１日、②12月６日、③2009年１月10日

講　　師：①林田憲明（聖路加国際病院循環器内科部長）

②門伝昌己（聖路加国際病院内分泌代謝科）

③小松康宏（聖路加国際病院腎臓内科部長）

テ　ー　マ：①身近に起きる高血圧症とその対策

②健康診断で見つける糖尿病や糖尿病予備軍とその対策

③知っておくべき腎臓の働きや慢性腎臓病

参 加 人 数：113名／12回

XII　情報ネットワーク

1．情報システムの運用状況

本年度情報システム委員会の構成メンバーは、教員３名、図書館職員１名、事務部職員１名、研究支援室職員１名の計６名で、委員会は年間11回開催した。また、教職員のみの委員会活動に加え、本学学生の情報システム委員を各学年１～２名選出し、学生との合同委員会も活動の一つと位置づけ、学生合同情報システム委員会を年間４回開催した。さらに、情報システムを専門とするチューター１名やシステムエンジニア(SE, 派遣職員）１名にも必要時に委員会に参加してもらい、これら全体の協働により、情報システムの適正な運用を図った。

新入生については、昨年度に引き続き、新入生を対象としたコンピュータ利用に関するオリエンテーションをカリキュラムの一環として位置づけられた「情報処理演習」の講義の中で、コンピュータネットワークの利用方法や注意点等を教育する時間を設け、適正な利用のための働きかけを行った。在校生には、５月に本学派遣 SE による新サーバシステム特別説明会を開催し、新システムの情報の利用について理解を促した。

また、学生懲戒処分規程と「聖路加看護大学コンピュータネットワーク倫理規程違反行為に対する調査および処分についての申し合わせ」の整合性を再検討し、「聖路加看護大学コンピュータネットワーク倫理規程」を見直した。

この倫理規程の見直しに伴い、情報倫理の教育活動を目的として、利用者が陥りやすい問題を例示するなどの工夫をしながら作成した「情報倫理ガイドブック」を改訂した。「情報倫理ガイドブック」は学生便覧の中に入れ込み、倫理規程の周知と遵守について全学生への徹底普及を図った。

このほか、情報システム委員会規程を新たに作成した。委員会活動がこれまで以上に組織的で円滑に行われるものと期待される。

これらの取り組みによりコンピュータおよび情報の利用について教職員および学生への啓発が図られた。

また、情報システム環境の整備に関しては、SE との協働のもと、継続して統計ソフト(SPSS)のライセンス契約、クライアント PC の入れ替え、およびターミナルサーバ環境の改善を行った。また、新システム（シンクライアントシステム）の導入準備として、特別説明会（１回50分）を３回開催し、より多くの学生が講習会を受けることができるよう配慮した。このことから、今年度の学生との合同情報システム委員会では、新システム（シンクライアントシステム）導入をスムーズに行うために、各学年の委員を窓口とし学生全員に対する導入の周知徹底を図るとともに、新システム移行後の利用状況に関する意見を聴取した。また、論文提出時期の４年生に対するコンピュータルーム優先席の設定を行うことができた。

以上のような委員会活動を通して、学生や教員という利用者の立場と、ネットワークを管理・運営する立場からの意見を統合しながら委員会を運営することができ、本学ネットワークの適切な運用に意義ある活動が行えたと実感している。

２．情報システム環境の整備内容

本年度における情報システム環境整備の中心は学生利用環境の改善（シンクライアント・システムの本稼動）であった。

シンクライアントとは、シン(英語で Thin : 薄い・軽い)という意味からも想像できるようにクライアント側のコンピュータは“軽く・薄く”するためにハードディスクやメモリ等を搭載せず（もちろんアプリケーション・ソフトなどの機能もない)、従来クライアント側に備えていたほとんどどの機能をサーバ側に集約したクライアント・システムである。

このシステムのメリットを下記にあげる。

＜メリット＞

・アプリケーション・ソフトの更新や修正プログラムなど迅速な対応が可能

本学には学生用クライアント・パソコンとして約200台が設置されている。従来のシステムでは、クライアント側に OS やアプリケーション機能が備わっていたため、ソフトの更新やバージョンアップ，セキュリティ・パッチのインストールは、１台ずつ設定・確認作業が必要であったため、作業完了までにかなりの手間と時間がかかった。

シンクライアント・システム化の導入により、今後これらの作業は機能を実装しているサーバ４台のみに行えばよいため、更新時間の大幅な短縮が期待できる。

・システムの保全や情報漏洩等のリスクを回避するためのセキュリティ強化

従来のシステムではクライアント側に機能が備わっていたため、セキュリティ対策としてすべてのクライアント・パソコンにウィルス対策ソフトをインストールすると同時に、OS のバグ対策（セキュリティ・パッチの対応など）が必須であった。

また、ウィルス対策ソフトの機能をフルに活用するためには、パソコンごとにこのソフトのパターンファイルが最新版に更新されていなければならないという条件もあり、本学のように夏季休講期間など長期にわたって学生のパソコン利用率が下がる時期にはパターンファイルの更新が行われないことが原因で次回利用したユーザが新型のコンピュータ・ウィルスに感染してしまうという危険もあった。

シンクライアント・システムではクライアント側に機能や情報を持たせないため、基本的にはウィルス対策ソフトや OS のバグ対策も不要であり、かつ、データをローカルに保存できないためウィルス感染による情報漏洩などの危険性もほとんどなくなった。更にクライアント機能を集約したサーバ側にウィルスを検知・駆除する機能を一元化したことにより、パターンファイルは常に最新の状態を保つことができるため、従来に比べて学生ユーザがウィルスに感染する危険性も大幅に減らせる。

・コスト削減

前述したように、アプリケーション・ソフトのバージョンアップ作業や OS のセキュリティ・パッチ対応，ウィルス対策ソフトのインストールなどの作業負担の軽減はもちろんのこと、ハードウェアに関しても一部のクライアント・パソコンを除けばクライアント側にハードディスクやメモリを搭載していないため、部品劣化による故障率も大幅に減ると予想される。このことからも、メンテナンスに関係するコスト削減もできる。

しかし、シンクライアント・システムはサーバ負荷の大きな処理には向かないため、今後は授業における SPSS の利用や e-learning 活用時の対策が必要である。

なお、このシンクライアント・システムを実現するために購入したクライアント・パソコンは、平成20年度文部科学省私立学校施設整備費補助金により補助を受けて整備したものである。

下記にその内容を示す。

パソコン設置場所	型　番　・　仕　様　等	数量(台)
本館４階コンピュータルーム	Wyse 製　Winterm　V10L	40
本館２・３階図書館	Wyse 製　Winterm　V10L	24
本館地下実習準備室	Wyse 製　Winterm　V10L	1
２号館２階メディアルーム	Dell 製　Vostro 1000※	61
	Dell 製　Optiplex 740	2
２号館６階修士ラウンジ１	Wyse 製　Winterm　V10L	6
	Dell 製　Optiplex 740	1
２号館６階修士ラウンジ２	Wyse 製　Winterm　V10L	6
	Dell 製　Optiplex 740	1
２号館７階博士ラウンジ	Wyse 製　Winterm　V10L	6
	Dell 製　Optiplex 740	1
２号館８階修士ラウンジ	Wyse 製　Winterm　V10L	6
	Dell 製　Optiplex 740	1
※シンクライアント用ノート型 PC として利用		156

３．教育研究活動への対応の現状と将来構想

本学の情報システムは、サーバーの容量を向上させることにより、一元化した利用環境の管理やファイル保存機能の設定が可能となり、メールサーバーの機能も向上した。この規模の大学としてはかなり充実した機能を有しており、本学の質の高い教育・研究レベルを支えていると評価できる。

現在の充実した機能とシステムのセキュリティを確保・維持し、さらにリポジトリ機能などの拡張を考えるためには、相応の管理機能が必須である。しかしながら、現在もまだシステム管理は派遣職員(SE)が中心となって、専任の部門や職員が存在しない。このことは、大学の教育・研究機能の発展には不可欠なシステム機能について統合的なビジョンを持って恒常的に関心を払う存在が固定化されていないということである。情報システムのネットワーク運営・管理とその発展に向けて専門的な知識を持ち、かつ大学の情報について明確な責任を持つ専任スタッフが不可欠であることを強調したい。

本年度は委員会規定および倫理規定が大学の懲戒規定との整合性を考慮して整備された。これによって委員会の権限は一応明文化されたが、前述したように、大学全体のビジョンの中で、明確な権限と責任を示すには至っていないと考えられる。

本学が早急に取り組むべき課題は以下である。

1）情報システムのネットワーク運営・管理とその発展に向けて専門的な知識を持ち、かつ大学の情報管理について明確な責任を持つ専任スタッフ、および組織が不可欠であること

2）上記と関連して、大学全体の教育活動や予算と連動し整合性を持った情報システム整備計画を策定すること

本学の教育･研究活動をより活性化させ、機能を向上させることに、情報システム委員会の活動が寄与することを願っている。

XIII　学生生活への配慮

【学　　部】

1．学生部

学生部は、学生が本学の教育目標をいっそう効果的に達成し、豊かな大学生活を過ごすことができるように、その私的・公的生活を支援することを目的としている。2008年度の学生部の担当は、教員６名（うち学生部長１名）、健康管理担当保健師１名および学生課職員２名である。

主な活動は、次のとおりである。

- 学生生活を有意義にする支援：自治会、課外活動、行事(白楊祭、クリスマスの集い、創立記念行事)、チャペルアワー、キャンパスマナー、ボランティア、福利厚生など
- 学生生活の支援：奨学金、アルバイト、健康管理、心の相談、保険共済制度、紛失･盗難・拾得物の取扱い、 生活安全（マルチ商法･ストーカーなどからの自己防衛)、よろず相談窓口など
- 将来の進路への支援：進路(進学･就職)ガイダンス， 進路相談， 就職情報資料提供など
- 調査協力：外部からの調査依頼， 学内学生対象の調査など

本年度は、「適切なコミュニケーションによる学びの環境の実現」をスローガンに、他者を思いやりながら、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境の醸成を学生および教職員全員で共に考える機会をもつ初年度とした。こうした取り組みの背景には、核家族化、コミュニティの崩壊、生活習慣の変化などによる人とのつながりの減少、適切なコミュニケーションや人としての基本的なマナーを学ぶ機会の減少がある。適切なコミュニケーションや基本的なマナーは、社会生活を営む上でより良い人間関係を築くための基本であり、かつ看護専門職としても求められる重要な資質である。臨地実習などにもこれらの取り組みの成果が出ることを期待して、学園全体で取り組むことになった。

また、学園の危機管理対策システムの整備に関して、学生部は学生生活を支援する立場からかかわりをもつ。この役割を認識し、「聖路加看護大学新型インフルエンザ対策（案）」を健康管理室と共同で作成し、2009年２月17日に学事協議会での検討資料として提出した。これを契機に、危機管理対策のための組織化が次年度より行われることになった。

さらに、本年度は、学生の生活実態調査を2008年11月～１月に行った。学部生338名に配布し、149名から回答を得た（回収率44％）。調査の結果、学生の往復通学時間は平均82.7±13.6分（最小５分、最大260分)、睡眠時間は平均5.7±1.1時間（最小２時間、最大８時間)、実習中の睡眠時間は平均3.7±1.3時間（最小１、最大７時間)、自己学習時間は平均1.6±0.4時間（最小０、最大10時間）であった。課外活動は、アルバイト、サークル活動、ボランティアなどを実施しており、回答者の94％の学生が１～４種類の課外活動を行っていた。経済面では、仕送りを受けている学生の１ヵ月の平均仕送り額は104±60千円であった。小遣いは月30千円が最頻値であった。また、経済状態について“かなり心配”あるいは“危機的”と答えた学生は26名（18％)、身体的な健康問題が“いつもある”と答えた学生は13名（９％)、精神的な健康問題が“いつもある”と答えた学生は12名（８％)、

気心の通じる人が“いない”と回答した学生は２名であった。これら問題があると思われる回答をした学生の数は、実際の相談件数などから把握している数よりもやや多い印象がある。今後も学生部、よろず相談および健康相談を利用するように呼びかけていく。

２．自治会活動

自治会活動に関しては、学生の主体性と自主性を大切にする支援体制をとっている。自治会は、会長１名、副会長２名、会計１名、書記１名、議長１名、会計監査１名の役員が運営の中心を担い、学生全員が自治会員を構成している。本年度も自治会規程に基づき、公正な役員選挙と総会運営が行われた。５月には、聖路加看護大学学生自治会定期総会が開催され、決算報告ならびに予算案の承認、学内クラブの設立承認等が行われた。

学生部は、学生代表らと月２回の定例ミーティングを開き、①学生生活上の問題についての意見交換、②学生からの要望の大学側窓口機能、③大学から学生への伝達内容の確認と伝達、④必要に応じた学生自治会活動の支援などを行った。本年度からは、学部の学生だけではなく、大学院生の代表も適宜定例ミーティングに参加し、学園生活支援について意見交換を行った。自治会の主な活動は次の通りである。

- 新入生歓迎会（各クラブ、サークルの紹介）の開催
- 学生総会の招集・議事進行
- 大学主催の新入生学内オリエンテーションの模擬チャペルアワーの実施
- 大学主催の新入生オリエンテーションセミナーへの協力
- 大学説明会(オープンキャンパス)への協力
- 白楊祭の開催
- クリスマスの集いの企画・運営；学生部、チャペルアワー委員会との協働
- 卒業生へのお祝いの品の贈呈
- ユニフォーム、参考書のリサイクル
- 「適切な学びの環境の実現」のための活動の一環としての、学園生活を支える人々（食堂の増井洋子氏、設備管理の越敏治氏）のお話を聞く会の開催

３．課外活動

１）白楊祭（学園祭）

１・２年生を主体に組織された白楊祭実行委員会の企画・運営により、2008年11月１～２日に第32回白楊祭；テーマ「個性～キラリと光る何かをみつけて～」が行われ、２日間に、1,156名の来場者を迎えた。主な企画として、実習着試着コーナー、肺活量測定、AED 講習などを設けた看護企画や、７年連続となる献血では71名の申し込みがあり最終的には49名が献血を行った。またバザーでは売り上げが54,628円ありユニセフに寄付されたほか、軽音楽部バンド演奏、聖歌隊・手話部、ダンス・演劇などの発表が行われた。講演会は、女優の忍足亜希子氏と本学の萱間真美教授を演者に迎え２回行われた。また、受験を考える来場者向けには「受験生相談コーナー」が開かれ好評であった。更に、学生自治会と学生部共催で、「適切な学びの環境の実現」キャンペーンの一環として、マナーコンテストを開催した。具体的には、マナーに関するポスター、ロゴマ

ーク、標語を広く学内から公募し、投票によって賞を選定した。学園賞には３年生の今井敬子さんが作成したロゴマークが選ばれた。

２）クラブ、同好会・サークル、ボランティア

2008年度のクラブは、農村医療研究会、軽音楽部、手話部、聖歌隊、ルカバイブルスタディ、ダイジョ部が活動した。ボランティアは病院やホスピス、老人ホームなどの施設、難病者や障害者のホームケア、障害者（児）のキャンプなど、幅広く行われている。海外へのボランティア旅行など、個人あるいはグループでの単発・短期的なものから、先輩学生より代々受け継がれている長期的なものまで多岐に渡っている。学生が2003年10月に創始した聖路加国際病院小児病棟でのボランティア活動は、他大学学生にも活動者が広がり、ニーズに即応した責任のある活動として年間を通じて行われ、新聞社からのインタビューが行われるなど、周囲からも高く評価されている。

３）聖路加ほっとストリート

学年を超えた学生主体の活動として６年目を迎えた月刊新聞「聖路加ほっとストリート」は、発行のたびに学内と大学近隣のおよそ30店舗に配布され、定着している。A4版手書きイラスト入りの新聞内容は、特長ある学生生活の一コマや健康に関する豆知識など看護学生ならではの紹介や、聖路加国際病院や本学を含む築地界隈の歴史を紐解いたもの、地元町内会の行事や店の紹介といった地域密着記事などである。折々の時節にふさわしく、また歴史や伝統を振り返るような趣のある内容で、地域住民と学生教職員の読者から好評である。病院および大学で開催される一般市民向けの活動案内・報告などを載せており、地域と「聖路加」との交流に貢献している活動といえよう。

４）HAS（Health Association of Students）

1993年から2006年まで13年間続いた看護学生弁論大会は、運営者が少人数となったことに加え、弁論応募が少なかったことから2007年度に中止となり、HAS も解散となった。創設から閉幕までの経緯については、『紀要2008』「高畠有理子、芹澤沙弥佳(2009). HAS 看護学生弁論大会の軌跡－「創める」ことの意義－. 聖路加看護大学紀要. 35. 76-85.」に詳しい。

５）災害支援

本年度は、支援ボランティア募集の対象となる災害がなかった。

６）アルバイト活動

学生部では、大学に求人のあった学内及び学外のアルバイト・ボランティア活動を紹介している。特にアルバイトは、学業と健康に支障のない範囲をよく考慮し、自ら選択し、決定すること、そして、気持ち良くアルバイトをするには、契約時に労働条件を確認するよう指導している。労働基準法では、使用者は労働者の雇い入れに当たり、労働条件を明示しなければならない（労基法15条）などの情報も提供している。

４．学生相談

１）学生相談

学生が快適に安心して学生生活を送ることができるように、さまざまな問題についての相談の窓口として学生部教員と職員が随時対応している。健康に関することは健康管理担当の保健師が

相談にあたり、学生部の教員や校医と連携をとりながら必要時各カウンセリングや医療機関の情報提供と学生からの希望に応じた紹介を行っている。新入生には入学時にマナーを守って快適な大学生活を送れるように呼びかけるとともに、ストーカーやマルチ商法などの被害にあわないよう、自らの判断力を養うために、通商産業省から借り入れしたビデオを用いて学習を行った。さらに、学生間ハラスメントなどの防止や学生証の紛失などについて自治会や掲示板などを通じて随時注意を呼びかけている。

昨年度に実施した学生相談に関するアンケート調査から、学生相談の充実を求める声が多く寄せられたため、2008年度より「よろず相談事業」を開始し、様々な角度から学生支援の改善と充実を図っていった。よろず相談事業は、2008年５月～７月、10月～２月の毎週火曜日11:00～12:30に２階学生部室にて開催し、本学卒業生の高畠有理子さんが相談員として対応した。小さなことでも気軽に相談できる窓口として開始したが、学生からの相談の中には深刻な相談もあり、抱えていた思いをじっくりと聴くことが多かった。年度末には教員・学生に「よろず相談」に対するアンケートを実施し、取り組みの評価を行った。その結果、開催時間や場所の再検討、相談方法の多様化、学生・教員に対する具体的な広報活動等についての意見を得た。次年度はこれらの課題を再検討して、学生のニーズに対応した相談体制の充実を図っていきたい。

５．奨学金

本学で扱う主な奨学金を**表１**に示す。その他に経済的援助が必要な学生に対して、**表２**に示すような奨学金制度の適用ができるよう支援している。

日本学生支援機構の奨学金について、今年度は定期採用で学部１年次内示数第一種５名、２年次以上は第一種１名、１・２年次以上第二種12名の募集があった。学内選考の際、適格者であっても推薦されなかった者を日本学生支援機構へ報告することによって得られる追加採用制度の募集は、今年度はなかった。

給付奨学金では新たに「聖路加同窓会奨学金」が創設された。これは、聖路加同窓会より寄贈された資金により、対象は「本学学生で、将来母校を大切にし、看護を通じて、社会に貢献したいと学業に励む志を持つ者」とされる。学部生からの申請はなかった。

「高島君子記念看護奨学基金」について昨年度応募がなかったが、今年度、学生部長による作文の相談・指導を受け付けたことにより、２名の申請があり採用に至った。

奨学生採用に関しては情報の周知徹底を図るために、募集情報が届いた場合には即時掲示を行っている。応募者個々にそれぞれの奨学金の特徴や申請条件および書類の書式などを説明後、応募者各自が学生課に申請書類を提出する。必要時、学生部長が面接を行っている。申請後は、書類と面接結果などに基づき奨学生選考委員会で推薦順位を決定し申請している。

奨学金全体についての説明会を毎年４月に実施しており、学部生約100名が参加している。終了後に個別に相談に応じているが編入生の相談が多い。

また、返還についての説明会を12月に奨学金ごとに実施している。とくに日本学生支援機構は卒業生の奨学金返還率が在校生の内示数に反映され、また、聖路加看護学園貸与奨学金についても、返還率が在校生の貸与へ影響するので、いずれも規程通り返還するよう強く指導している。

表１　主な奨学金

名　　称	対　象	貸　与　月　額	
日本学生支援機構	学　部	第一種／定額型	第二種／選択型
		自宅外 64,000円 自　宅 54,000円	30,000円、50,000円、80,000円、100,000円 120,000円から選択
東京都看護師等修学資金	学　部	第一種　36,000円　　第二種 一口25,000円（二口まで）	
聖路加看護学園貸与奨学金	学　部	30,000円＊緊急採用奨学金（学納金の額を限度とする）	
小澤道子記念奨学金	学部３年以上	1,200,000円（年額）	

表２　2008年度奨学生採用状況

奨　学　金　の　種　類	配　布	申　請	採　用
交通遺児育英会	掲示のみ	自己申請	0
あしなが育英会	掲示のみ	自己申請	0
朝鮮奨学会	掲示のみ	自己申請	2
青峰奨学財団奨学生	0	自己申請	0
茂木本家教育基金	9	1	1
石川県奨学生	0	－	－
電通育英会	0	－	－
東京都看護師等修学資金（学部）第１種	10	2	2
東京都看護師等修学資金（学部）第２種		2	2
丸和育英会	16	7	2
高島君子記念看護奨学基金	5	2	2
日本学生支援機構（１年）第２種＜予約＞	－	－	9
日本学生支援機構（１年）第１種	説明会	⑤	5
日本学生支援機構（１年）第２種	説明会	⑫	8
日本学生支援機構（２年上）第２種	説明会		2
日本学生支援機構（２年上）第１種	説明会	①	1
山口県人づくり財団奨学生	0	－	－
川崎市大学奨学生	0	－	－
聖路加看護学園貸与奨学金（学部）	11	5	5
安田記念医学財団奨学生	3	3	0
岡村育英会	14	7	7
守谷育英会	5	0	0
小澤道子記念奨学金	3	0	0
聖路加同窓会奨学金	1	0	0
山田長満奨学金	6	自己申請	0
廣瀬育英会	0	自己申請	0

○は内示数　2009.3.31現在

表３　奨学生内訳表　学生総数477名（学部学生342名・大学院生135名）

学　年	日本学生支援機構			東京都看護師等修学資金	聖路加看護学園貸与奨学金	その他奨学金	計
	一　種	二　種	小　計				
4	5	9	14	1	4	4	23
学編４	1	0	1	0	3	2	6
3	7	13	20	2	2	6	30
学編３	1	4	5	0	2	4	11
2	8	16	24	2	2	5	33
学編２	1	1	2	0	3	1	6
1	5	17	22	3	——	1	26
小　計（学　部）	28	60	88	8	16	23	135
	8 ％	18 ％	26 ％	2％	4％	7％	39％
小　計（大学院）	※23	4	27	11	28	10	76
	17 ％	3 ％	20 ％	8％	21％	7％	56％
総計	51	64	115	19	44	33	211
	11 ％	13 ％	24 ％	4％	9％	7％	44％

※辞退１名　　2009. 3. 31 現在

表４　奨学生受給状況

奨学金の種類／年度	日本学生支援機構	東京都看護師等修学資金	東京都育英資金	聖路加看護学園貸与奨学金	その他奨学金	受給総数／全学生数	受給率（%）
1989（H1）	41	11	7	11	6	76／280	27
1990（H2）	47	24	8	13	7	99／280	35
1991（H3）	48	27	6	14	7	102／284	36
1992（H4）	*1 56	43	8	15	13	135／289	47
1993（H5）	58	*2 62	7	17	18	162／295	55
1994（H6）	*3 65	67	7	17	17	173／301	57
1995（H7）	*4 75	79	11	20	14	199／311	64
1996（H8）	*5 63	90	11	20	8	192／340	56
1997（H9）	*6 64	104	10	23	6	207／361	57
1998(H10)	*7 61	101	5	26	10	203／358	56
1999(H11)	*8 73	89	2	30	15	209／382	55
2000(H12)	*9 80	*10 67	2	42	21	212／397	53
2001(H13)	*11 67	46	1	40	24	178／382	46
2002(H14)	*12 64	*13 35	1	*14 41	25	166／386	43
2003(H15)	*15 84	*16 25	1	*17 39	26	175／402	44
2004(H16)	*18 92	*19 18	—	35	25	170／428	40
2005(H17)	*20 101	*21 7	—	34	25	167／455	37
2006(H18)	*22 112	*23 10	—	41	26	189／476	40
2007(H19)	*24 111	13	—	40	29	193／480	40
2008(H20)	*25 115	19	—	44	33	211／477	44

2009. 3. 31 現在

表４　脚注

＊１　1992年より看護に関して特別枠により増加

＊２　1993年度　補欠繰上げ採用あり

＊３　２年次以上で追加推薦２名(編３)

…内示数の外、阪神大震災による特別(災害)採用１名(３年生)

＊４　応急採用　２名（２種１名、１種２種併用１名)、

阪神大震災による特別(災害)採用２名（２種１名、１種２種併用１名)

＊５　１種２種併用　２名

＊６　１種２種併用　２名

＊７　１種２種併用　１名，移行(２種→１種)　３名，補欠(２種)　３名，内示数外１種１名

＊８　１種きぼう21プラン併用１名，移行(きぼう21プラン→１種)１名

＊９　移行(きぼう21プラン→１種)１名

＊10　制度改正

＊11　併用貸与１名

＊12　併用貸与１名、緊急貸与２名、緊急応急併用貸与１名

＊13　２口貸与２名

＊14　緊急貸与１名

＊15　併用貸与２名、緊急貸与２名、緊急応急併用貸与１名、予約採用４名、期中辞退２名

＊16　２口貸与１名

＊17　緊急貸与１名、期中辞退１名

＊18　予約採用２名、期中辞退３名

＊19　期中辞退１名

＊20　期中辞退２名

＊21　期中辞退１名

＊22　予約採用５名、追加採用４名、緊急貸与１名、期中辞退者３名

＊23　２口貸与１名

＊24　期中辞退者５名

＊25　期中辞退者１名

６．福利厚生

１）学外施設

⑴　鎌倉アリスの家

鎌倉市稲村ガ崎にセミナーハウス「鎌倉アリスの家」があり、学生の実習、研修、グループ活動に利用している。

学生は都心を離れた風光明媚な場所での集いを楽しんでいると述べており、毎月のように定期的に利用するグループもある。利用の時期は夏季・９月、休暇の12月・１月、そして卒業期の３月に集中している。

⑵　大井テニスコート

埼玉県ふじみ野市大井にテニスコート２面およびコートハウス１棟がある。

⑶　大井ターゲットバードゴルフ場

テニスコートと敷地内にターゲットバードゴルフ場がある。体育Ｉの授業に使用している。

⑷　スポーツクラブ「オアシス」

聖路加国際病院に隣接する聖路加ガーデン地階にあるスポーツクラブ（東京近郊にある他の支店も利用可）で、25ｍプール、マシンジム、レッスンスタジオ（エアロビクス等）を利用できる。大学が、施設を経営する東急スポーツオアシスと法人年間契約を結び、学生（教職員も利用可）は、学生課窓口で利用券を受け取り、施設受付で520円支払って利用するシステムである。例年、契約更新時期が近づく５、６月頃には利用券の残余が不足していたため、今年度から利用券枚数を増加する契約をした。年間利用者数は次表のとおりである。

表５　オアシス利用者数　　（延べ人数）

年　　度	利 用 者 数
2002	121
2003	357
2004	426
2005	259
2006	586
2007	596
2008	494

⑸　清泉寮

山梨県北杜市高根町清里高原に(財)キープ協会が所有する清泉寮があり、本学学生教職員は通常正規料金の10％割引で利用できる。

2002年度からは体育Ⅱの野外活動実習が行われており、また今年度からは新入生のオリエンテーションセミナーが行われた。

２）学生食堂

本館２階の学生ラウンジは昼休み時には外部委託による学生食堂となる。

学生は月曜日から金曜日、午前11時30分～午後1時の間利用できる。

昼食として、定食470円（２種類)、カレーセット350円、小鉢80円（４～５種類）から選ぶことができる。デザートは果物、プリン、ゼリー等を日替わりで提供している。

３）自動販売機

本館２階ラウンジに自動販売機４台（飲料２台、パン・食品・デザート等２台)、２号館３階に１台（飲料）を設置している。

４）アパート・学生会館等の案内

新入生に対し、合格発表時にアパート・学生会館・不動産業者等のリストを作成し、配布している。在校生に対しては２階学生部室に案内書類等を置き対応している。

５）各種申請・届出

学生課窓口に以下の申請・届出用紙を備え、受理している。

・学内団体結成・更新・解散届　　・印刷物配布寄付募集届
・講師招へい届　　・対外活動届
・学外団体加入届　　・合宿届
・学内集会届　　・調査研究申請書
・紛失・盗難届　　・海外渡航届

6）日本看護学校協議会共済会共済制度「WILL」

「WILL」は看護学生の傷害・賠償責任・感染事故に対応できる補償制度であり、学部学生は入学時に全員が加入する。また、病棟実習に出る教員についても加入している。2008 年度は 8 件の適用があった。

7．健康管理

1）年間業務内容

休養室を備えた健康管理室は、専任保健師１名が中心となって、校医、学生部の教職員や各学年の学生保健委員と共に学生の心身の健康保持・増進を進めている。本年度は健康に関する学生支援充実のため、非常勤保健師を授業期間中に雇用し、健康管理室の運用を実施した。

本年度も昨年度に引き続き、機能的で利用しやすい健康管理室を目指し、特に心身の健康相談の充実を計るため、①健康相談予約制の継続、②校医や他部門との連携の充実、③近隣の精神科医、心療内科医、内科医らとの連携、④ライフ･プランニング・センター臨床心理相談室カウンセラーによる学内カウンセリングの実施に加えて、⑤後期にメンタル・ハラスメントを中心とした健康状態調査票の記入を開始した。これらを組み合わせて活用しながら、年間を通して学生への対応を行っている。

年間業務として、健康管理室が行っているものは下記のとおりである。

⑴　入学時の健康管理オリエンテーション

入学時の健康管理オリエンテーションでは健康管理室の利用方法、健康診断の日程などの連絡、カウンセラーの紹介、カウンセリングの利用方法などの説明を行っている。オリエンテーションでの身体的調査とあわせて心の健康に関して交流分析のエゴグラムテストを行い、その後の保健師との個別面接の際に結果を説明し、入学時の不安や生活面、身体面の問題をあわせて相談にあたっている。また、学生がセルフケア能力を向上する手段として、自身の健康状態を管理できる健康手帳を配布している。この健康手帳では、タバコの害・アルコール・STD などについての知識も提供している。

⑵　定期健康診断

定期健康診断は４月～６月に行っている。聖路加国際病院予防医療センターと連携しながらスケジュールを組んでいる。学生保健委員による学生への日程の周知などの情報伝達を行っている。この健康診断後には、学生全員に対して校医と保健師との面談･内科健診を行っている。この健診でも学生からの心身の相談ができる機会となっている。全学生に健診結果を通知し、再検査や受診などの相談に応じている。

⑶　海外旅行中の健康管理方法の知識の普及

近年、国際看護の総合実習や長期休暇の間に国際ボランティアへ参加するためにアジアの途上国を訪れる学生が増えている。帰国後の病院実習などに影響がないように相談に対応し、知識の普及・予防接種の推奨を日頃から行っている。夏季休暇直前には、全学生を対象に日本渡航医学会評議員佐藤菜保子氏（本学卒業生）を招き、旅行中の注意点などの講習を実施した。

⑷　Ｂ型肝炎予防接種

今年度より、実習中の感染のリスクや医療職としての感染のリスクから身を守るためにＢ型肝炎予防接種の推奨を大学から行うこととした。対象は全学生であるが、今年度はワクチン製造管理に不備があった製薬会社がワクチン自主回収を行ったため、在庫が少なくなり大学院助産課程の院生と学部４年生が優先的に接種した（今年度は大学院生７名、４年生20名、学士４年生１名が接種した）。

⑸　インフルエンザ予防接種

今年度も昨年と同様にインフルエンザ予防接種を実習中の学生のみならずすべての学生に接種を推奨した。校医によりインフルエンザ予防接種が新型インフルエンザに効果を示す場合もあるとの連絡を受け、学生・教職員の接種を促した。今年度は高尾クリニックにて学生277名、教職員43名が接種している。

⑹　後期健康状態調査票の実施

来室する機会が少ない大学院生や学部生の生活状況・日常生活の中での不安や問題などを把握して適切な支援を行うため、今年度より後期健康状態調査票を実施した。これにより、学生の身体およびメンタル面の健康状態を把握でき、学生の求めている医療機関やカウンセリングを紹介することにつながった。

⑺　新型インフルエンザ対策

大流行が危険視されている「H5N1型鳥インフルエンザ」に対する学園における対策として、学生および教職員が正しい知識と危機意識を共有し、感染予防と事前準備を普段から行えるように教育することが健康管理室の役割である。そこで、「聖路加看護大学新型インフルエンザ（H5N1）対策行動計画（案）」を作成した。また、新型インフルエンザに対する正しい知識の普及のために、2009年２月23日に中央区保健所の東海林文夫所長を講師として「新型インフルエンザの問題と対策」を講演していただき、68名の学生および教職員が参加し、情報を得た。その後、学生部と健康管理室が協力して、リーフレット「新型インフルエンザに備える」を作成し、新型インフルエンザの正しい知識の普及を計画した。次年度も引き続き新型インフルエンザに対する大学全体の対応システムの整備を検討し、リーフレットを再度見直すこととなった。

２）2008年度定期健康診断の結果

⑴　健康診断で実施項目と対象者

健康診断で実施している項目ごとの対象学年及び対象者については**表６**のとおりである。

昨年度より、感染症対策として、新入生全員に実習前に獲得すべき免疫、麻疹、水痘、ムンプス、風疹の抗体検査を行い、免疫獲得できていない者に対しては予防接種を勧奨した。

表６　健康診断実施項目と対象者

項　　目	新 入 生	学部2年以上	学士3年以上	助産課程選択者	大学院新入生	大学院2年以上
一　般　検　尿	○	○	○	○	○	○
身　体　測　定	○	○	○	○	○	○
血　圧　測　定	○	○	○	○	○	○
Ｃ　Ｂ　Ｃ　血　液　検　査	○	○	○	○	○	○
ＨＢ・ＨＣ抗原抗体検査	○	○	○	○	○	○
麻疹･水痘･ﾑﾝﾌﾟｽ･風疹抗体検査	○					
ツ ベ ル ク リ ン 判 定 検 査	○	陰性者	陰性者	○	○	陰性者
胸 部 レ ン ト ゲ ン 検 査	○	○	○	○	○	○
内　科　健　診	○	○	○	○	○	○

⑵　項目別受診者数

内科健診、一般検尿の受診者は、該当対象者（大学院社会人を除く）全員である（**表７**）。内科健診には、校医の古川恵一医師のご尽力によって、授業スケジュールにあわせて実施することが実現した。ツベルクリン判定検査は、新入生全員と助産課程選択者、前年度判定結果「陰性」者に継続的に実施している。

⑶　一般検尿、CBC、HB･HC 血液検査、ツベルクリン判定検査、胸部レントゲン検査

有所見者は尿検査：26名（うち院生４名）、CBC検査：11名（うち院生４名）、胸部レントゲン検査は全員正常範囲であった。

⑷　健康診断後のフォロー

健康状態調査と検診時の検査結果により、外来受診を助言した者は、内科27名（うち院生５名）、皮膚科13名、婦人科12名（うち院生２名）、整形外科４名、精神科及びカウンセリングが９名（うち院生２名）であった。

表７　項目別受診者数

対象学年	１年	２年	３年	４年	編入2年	編入3年	編入4年	修士1年	修士2年以上	博士1年	博士2年以上	合計
（人数） 項　目	(72#)	(68)	(71)	(69)	(21#)	(22#)	(19)	(42*)	(43**)	(13)	(37)	(477)
内　科　健　診	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
一　般　検　尿	71	66	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
Ｃ Ｂ Ｃ　検　査	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
HB/HC 血液検査	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418
麻疹･水痘･ﾑﾝﾌﾟｽ･風疹抗体検査	71				20							169
ツベルクリン判定検査	71	3	1		20			34		11		142
胸部レントゲン検査	71	68	71	69	20	21	19	34	32	7	12	418

＃うち１名休学中　　*うち８名社会人入学　**うち11名社会人入学

３）聖路加国際病院受診状況

聖路加国際病院受診者数は66名で、受診状況は感染症内科（校医）（34件）、WIC（９件）、皮膚科（８件）、整形外科（６件）、女性診療部（３件）、内科（２件）、呼吸器内科（１件）、口腔外科（１件）、眼科（１件）、耳鼻科（１件）であった。学年別の受診状況は、３年生が最も多く、

ついで１年生、２年生の順である。月間でみると、10、11月に受診者数が最も多くなっている。このことより、実習中に体調不良を訴える学生、感染性の疾患の心配から校医の受診を必要とする学生が多いことがわかる。また、聖路加国際病院の受診を希望する場合には、校医の受診を経てからの紹介受診となるため年間を通して校医の利用が非常に高いと考えられる。校医の受診が困難な場合や緊急度の低い場合には、近隣の婦人科・眼科・内科・心療内科などの紹介もしている。

表８　各診療科の受診者数　（人）

診療科	校　医	WIC	皮膚科	女性診療部	整形外科	内　科	口腔外科	呼吸器内科	眼　科	耳鼻科
人数	34	9	8	3	6	2	1	1	1	1

※校医を受診している割合が非常に多いことが特徴としてあげられる。

表９　各学年及び教職員の受診者数

学年	1	2	3	4	学士２	学士３	学士４	修士	博士	教職員
人 数	13	8	14	8	4	2	0	5	5	7

表 10　各月の受診者数　（人）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
人 数	6	2	3	1	1	9	10	13	5	5	5	5

４）免疫獲得状況について

予防接種の抗体検査結果で抗体が不十分だった人数は下記のとおりである。新入生に対して抗体検査を実施した。本年度までは２年生の「援助論Ⅳ実習」までに免疫を獲得しておくことになっている。しかし、来年度より１年前期の病棟見学実習までに免疫を獲得できるように予防接種を済ませることを徹底する。新入生の抗体検査結果を見ると、全国で免疫のないことが問題となっている麻疹よりも、本学では、ムンプスの免疫が獲得されていないことに注意をしていく必要がある。

表 11　免疫獲得不十分者数とその割合

学　　年	水痘（人）	(%)	麻疹（人）	(%)	風疹（人）	(%)	ムンプス（人）	(%)
1 年生	4	(6.0)	26	(36.6)	5	(7.0)	40	(56.3)
学士 12 回	0	(0)	3	(15.0)	3	(15.0)	10	(50.0)

５）たばこ喫煙の実態について

健康状態調査票に記載されたデータを以下に示す。喫煙しているという回答は24名であった。この結果は昨年度と同様である。今後は、入学時から禁煙教育を行う必要性があると考えている。

表12　各学年のたばこ喫煙者数　（人）

学　年	1年	2年	3年	4年
人　数	4	2	11	7

6）健康管理室利用状況

健康管理室で行われた相談・処置の状況は、全数750件であり、**表13**に示した。健康管理室の利用は、特に４、５、６、７月、そして 9、10、１月に多い。これは、健康相談件数が多い時期と重なってくる。４、５月は新学期の始まりの時期、６、７月は定期健診の相談、9、10、１月は３年生の実習による心身の不調・予防接種に関する相談というように、時期によってそれぞれの理由で利用が増えていると考えられる。利用者数は、３年生が最も多く、次いで１年、２年、４年、院生の順である。クラス人数の割合からすると、３年生の利用件数（217件/71人）の割合が多い。健康相談件数も３年が最も多く、１年、２年、４年の順である。１年は４、５月、２年は４月と６月、３年は４月から７月までと実習が始まる９月、４年生は10月の学業・進路の相談件数が多い。相談者の多くは、くり返しやってくる特定の学生である。

相談内容を分類すると、身体面・精神面・人間関係・学業面の順で、学生生活と深く関係し、複合された問題を抱えていた。特に、サークルやアルバイトと学業の両立のための多忙による身体的負担や家族、友人との人間関係によるストレスを訴える学生が多い。傾向としては、体調不良の訴えから日常生活の話、精神的ストレスなどの相談に話が展開していくことが多い。

身体の不調に関する利用は『胃・腹痛』『風邪』『外傷』『月経痛』『頭痛』の順になっている。したがって、胃薬・総合感冒薬・鎮痛薬の使用量が多く、昨年度と同様の傾向である。症状によっては、校医や近医を紹介している。

表14、15からも明らかなように、健康管理室の利用数は精神面に関する悩みによる利用数と比例しており、カウンセラーや校医との連携を含めたメンタルケアが重要となっている。身体面のみならず、精神面に関する悩み、様々な不安を抱える学生が、社会資源を活用しながら自身の心身のケアを卒業後も継続的に実行できるようにサポートをしていく必要が再確認された。

7）健康相談予約制の継続

学生からの相談には、いつでも開かれている健康管理室を原則としてきているが、学生が相談のため健康管理室を訪れた際、他の学生が利用している場合もあるので、メールによる予約制を導入し、相談時間をしっかりとれるようになり、相談が非常に充実するようになった。申込み方法は、事前にメールで名前・学生番号・希望予約時間を連絡し、予約の確認を返信した。相談時間の目安は30分とし、予約の状況によっては時間を延長できる。また、次回の相談日時を約束して､継続相談も可能である。相談場所はカウンセリング室で行い、予約は学生の授業時間にあわせてとれるようになっている。また、一昨年度より専門カウンセラー福井みどり氏による学内カウンセリングがスタートし、カウンセリングを受けるに当たっての事前相談を希望する学生も増加している。

表13　健康管理室利用状況（2008年度）

	頭痛								胃・腹痛								月経痛								かぜ								外傷								相談								その他								小計								合計
	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	1年生	2年生	3年生	4年生	編2年	編3年	編4年	院生	
4月		1		2						1	1						3		2	1				1	2		2	1					3	1		1					14	10	11	4	2	0	1	3	9	9	3	4				1	30	22	19	13	2	0	1	5	92
5月	1		2		1	1		1	4		2	1					1	1	1						7	3	1	1				1	2	1		2	1	1		1	18	3	15	4	2	0	0	2	7	3	4	2					40	11	25	10	4	2	0	5	97
6月	2		4	2					1	2		5					3	1	1	1					1	2	2	1					1	2		1					4	8	12	1	1	2	1	0	9	9	14	1				2	21	30	33	12	1	2	1	2	102
7月	5		4						4		5	1						1	1														1	8		1					15	6	13	4	1	0	0	4	15	15	10					1	42	22	37	5	1	0	0	5	112
8月																	1	1	1	1				1									3		4						0	0	5	2	1	0	0	0			1	2				2	1	2	6	5	1	0	0	5	20
9月	1	1	2						1	1	2			1				2	1							2								2						2	3	0	16	5	0	1	0	5		1	6	1		1		1	6	6	29	7	0	3	0	6	57
10月		0	1						2		1	2	1				2		1	1	1				3	4	1		1				1	1		1					3	2	4	12	2	0	1	4	6		5	2				1	18	7	14	21	5	0	1	6	72
11月			2	1					4		2	2	1			1	1	4	1						2	2	1						2	1	1	4				1	1	4	2	1	1	1	0	1	1		1		2	1		1	10	10	9	4	5	2	0	2	42
12月	1	1	1	1				1	1		2						1	1	3						2								1			1	1				1	0	4	3	0	1	0	1	3	2	2			1			9	6	12	4	1	2	0	2	36
1月			2						1	3	1						3		1						3	4	1							2			1				6	4	4	2	0	4	1	5	3	2	9	1			1	3	18	14	18	3	0	4	2	8	65
2月	3		1			1			1			1				1	1	2	1						1			2		1				1							1	3	6	0	2	0	1	3	2	1	2				1		9	6	12	1	2	2	2	4	38
3月									1			1																													3	0	1	2	1	0	0	2			2	2			1	1	4	0	3	5	1	0	1	3	17
小計	13	3	19	5	1	2	0	2	20	7	16	13	2	1	0	1	16	12	13	4	10	0	0	2	20	15	12	3	1	1	0	1	13	17	5	10	3	1	0	4	69	40	93	40	13	9	5	30	50	42	95	15	2	3	3	13	206	136	217	90	23	17	8	53	
計	45								60								48								53								53								299								192																750

８）後期メンタル健康状態調査票の実施

2008年度の後期は、全学生を対象にメンタル健康状態調査を実施した（**表14**）。調査の目的は、来室する機会が少ない大学院生や学部生の生活状況・日常生活の中での不安や問題などを把握して適切な支援を行うためである。質問項目は「Ⅰ.日常生活」「Ⅱ.メンタルヘルス」「Ⅲ.周りの人などからのハラスメント（DV・アカデミックハラスメントを含む）」「Ⅳ.月経・月経関連症状」「Ⅴ.自由記入欄」という５つに分けて記名式で実施した。「Ⅰ.日常生活の項目」では、運動・食事・睡眠・体調・飲酒・喫煙についての13の質問に３件法によって回答を得た。「Ⅱ.メンタルヘルス」の項目はSDSより抽出した10項目の質問を行った。「Ⅲ.周りの人などからのハラスメント」では身体的・性的・言葉・心理の４項目について、過去・現在・知人が受けている、の３段階で回答を得た。「Ⅳ.月経関連症状」では、月経の規則性・間隔・月経関連症状の有無・月経関連症状の対処法について尋ねた。

全学生477名のうち、回答は375名（回答率78.6％）であった。そのうち、各項目にて下記に該当する学生には心身の状態について個別に聞く必要があると考え、面談またはメールで相談に応じ、その場で解決することもあったが、場合によっては校医または嘱託カウンセラーとの連携によって、適切な医療または専門家による心理的対応につなげた。

⑴　気がかりな回答のあった学生

回答者のうち、①日常生活について体感しているストレスと発散とのバランスが取れていない学生、②３項目以上の生活の問題点があり、SDSを参考にした質問項目からメンタルヘルスに注意が必要と判断した学生、③ハラスメントを受けた・受けているという記載のある学生、④婦人科系の問題やその他の相談で受診やカウンセリングを希望する学生について、心身の状態を個別に聞く必要があるとし、メールなどで連絡した（**表15**）。

表14　学年別メンタル健康状態調査結果

学年	回答者数	ストレス アンバランス	受診 カウンセリング必要	ハラスメント 受けた	ハラスメント 現在受けている	メンタルヘルス 要注意
１年	(57)	25	3	13	2	10
２年	(66)	10	11	7	3	8
３年	(62)	23	6	15	1	5
４年	(63)	12	17	14	1	9
学士２年	(21)	5	2	3	0	2
学士３年	(19)	8	0	4	0	5
学士４年	(15)	5	1	5	0	2
修士１年	(31)	16	12	5	1	11
修士２年	(26)	12	9	6	2	9
修士３年	(2)	1	1	0	1	1
博士	(13)	3	0	1	1	2
合　　計	375	120	62	61	12	64

体感しているストレスと発散できているストレスのバランスが取れていない学生は120名（回答者の32.0%）。３項目以上の生活の問題点があり、SDS を参考にした質問表からメンタルヘルスに注意が必要と判断した学生は64名（回答者の17.1%）、ハラスメントを受けたという記載のある学生は61名（回答者の16.3%）、現在も受けている学生は12名。婦人科系の問題やその他の相談で受診やカウンセリングを希望する学生は62名（回答者の16.5%）。

⑵　後期健康状態調査票結果に対する対応

ストレスのバランスやメンタルヘルスについて、学生からは実習期間中・卒業論文・修士論文・研究によるものという一時的なものが多く、保健師との面談で解消されることが多いが、慢性的な訴えの学生についてはカウンセリングを勧めた。ハラスメントを受けた学生については既に解消されている学生も多いが、現在も受けているという学生については相談を促しても来室しないケースが多い。受診やカウンセリングを希望する学生にはメールにてクリニックや病院を紹介しているが、不安が聞かれる学生には事前に相談を実施した。

ストレス発散がうまくできない学生には本年度から看護実践研究センターで小口江美子教授が開催したストレスマネジメント・ヨガクラスを紹介し、１年生１名、２年生２名、４年生２名、大学院生２名が参加した。参加した学生全員がストレス発散につながったと感想を述べていた。

連絡した全学生のうち受診先（校医・婦人科など）やカウンセリングの紹介をメールで行ったのは180名。メール・メモ掲示後に保健師と個別に面談した学生は42名。平均面接時間21分。面接での内容は、調査票に記載されていた体調・メンタル・ハラスメントについてである。メール・メモの掲示後に、学生からのメールによる相談・来室につながった学生は18名である。身体的相談（婦人科・整形外科など）について、具体的なクリニックの名前などをメールに記載して受診を促した学生は57名である。「健康管理室からのメール連絡により受診した」と申告してきた学生は18名に至る。

表15　学年別メンタル健康状態対応状況

学　年	回答者数	個別メール返信数	保健師面談	面談時間平均（分）	メールにて身体的受診紹介	受診につながる（本人の申告より）
１年	57	31	7	27.8	10	3
２年	66	26	7	15.7	7	3
３年	62	31	9	18.9	9	1
４年	63	31	12	19.2	12	9
学士２年	21	7	0	0	4	0
学士３年	19	8	1	27	0	0
学士４年	15	7	3	31.7	2	1
修士	31	16	1	15	7	0
修士２年	26	19	0	0	6	1
修士３年	2	2	1	10	0	0
博士	13	2	1	15	0	0

この調査後の個別メール配信により、健康管理室の利用率が少ない大学院生の様子の把握ができ、学生が抱える問題の解決へつなげるきっかけをつくることができた。学生からは「国家試験前や実習中のメールは励ましになった」「メールがもらえて嬉しかった」という意見が聞かれた。健康管理室の存在を身近に感じてもらえ、個々の学生との距離がいっそう縮まったようである。また、健康管理室から学生全員にメールを配信することで、健康管理室へのアクセスは来室のみならずメールでも可能であることが周知された。これにより、学生からのメールによる問い合わせ・メモのようなショートメッセージなどが増え、学生のための健康管理室の利便性が高くなったと考える。また、健康管理室としても学生と関わる方法が増えたため、受診やカウンセリングなどのサポートにつなげやすくなったと考えられる。個人面接に20分の時間を費やし、留学生を含む500名近くの学生への対応、また、後期の同時期におけるインフルエンザ予防接種の予約約300名の学生への対応について、本年度は非常勤保健師による対応のサポートによって実施することができた。次年度以降の課題としては、メール添付して回答した大学院生への質問項目の記入方法の簡易化、質問項目の明確化、返信の迅速化が求められる。

9）校医、他部門との連携

⑴　校医との連携

現在、感染症や身体的な緊急時対応は、適確に行われている。定期健康診断時、校医による内科健診が学部学生全員に行われるため、気になる学生や、心や身体の訴えをもつ学生の情報に関して、校医と共有することができ、その後の校医との連携が非常にスムーズに行われている。また、大学内で校医による健康相談の時間があれば学生・教職員の健康維持に望ましいという要望に対し、前向きに考えていきたい意向が校医から示されている。

⑵　聖路加国際病院他部門の連携

学生の医療機関への紹介は、電話や窓口で行われ、聖路加国際病院あるいは近隣の各クリニックへ連絡している。B型肝炎やインフルエンザ、麻疹などの予防接種は健康管理室より近医である高尾クリニックに依頼し、今年度は年間348名の学生が利用している。また、当日外来など聖路加国際病院で受診できない場合などには、眼科では佐久間眼科、婦人科ではほそのレディースクリニックを紹介している。個人の受診の紹介後の経過については、医師から連絡が入る場合もあるが、個人情報であるので、基本的には直接学生本人から健康管理室へ報告するように働きかけている。また、身体面に関する受診の場合は、校医が他部門および他科の医師と医療情報の交換を行っているため、学生へのヘルスサポートが充実している。しかし、精神的な問題に関しては本人のプライバシーの問題もあり、どの学生がどのような相談状況にあるかの把握が難しい。そこで、学生が受診している医療機関の方々との連絡会を年に１～２回開催し、本学の教育へのご理解とご協力をいただく機会を作り、本学と医療機関の連携をスムーズにとれるように図りたい。

10）近隣の精神科医、心療内科医との連携

学生の人間関係などの精神的な問題が深刻化し、充実したメンタルヘルスサポートが必要となってきている。そのため、学生部が作成した、学生向け「こころとからだの健康相談」というパンフレットを新入生健康管理オリエンテーションで配布し、相談方法を具体的にわかるようにした。また、近隣の精神科医、心療内科医として紹介リストにあげたクリニックへは、健康管理室

保健師から学生の現状を説明して学生の理解を深めた後、学生本人または健康管理室から予約の電話を入れるようにした。紹介リストによって、学生のクリニック選択の幅ができ、安心して利用できるという思いから専門医を受診しやすくなったという声が聞かれている。

11）ライフ・プランニング・センター臨床心理相談室専門カウンセラーとの学生相談

学生たちはさまざまな悩みを抱えて、誰かに相談したくなった時、ライフ・プランニング・センター（LPC）臨床心理相談室専門カウンセラーに無料でカウンセリングを受けることができる。2008年度の学生相談利用年間件数は48件（2007年度58件）で、月平均４件となっている（**表16**）。

表 16　カウンセリング回数

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	計
件数	4	5	6	3	3	4	5	7	5	3	1	2	48

LPC の福井みどりカウンセラーからの報告によると、これまで大学から離れた砂防会館でのみ行っていた学生カウンセリングを月２回大学内で実施するようにした結果、これまで相談内容がうつなどの深刻なケースが多かったが、彼氏のことや人間関係など「こんなこと相談しても良いですか」といって気楽にカウンセリングを利用する学生が来室するようになった。また、相談室側では継続してフォローがしやすくなり、フィジカルな面での問題で今まで以上に健康管理室や校医との連携がとりやすくなったと感じている。カウンセリングが自殺やうつなど深刻な問題となる前の予防あるいは前兆の把握として役に立てれば良いと考えている。

2008年度の学生の相談内容は昨年と同様、①実習でのこと、②家族や彼氏との関係も含めた対人関係のトラブル、③個人の性格に起因すること、④うつなど気分障害を呈していることなどであるが、性に対する悩みも多くあることがわかり、デート、DV の問題など、健康管理室と協力して学生の心身の保健対策に協力をしていきたいと述べている。

12）本学学生の喫煙行動の実態および関連要因について

大学生は、未成年から成年となり、法的に喫煙が認められる年齢に至るなど環境の変化が多い時期である。国民の健康を担う専門職を育成する大学として、本学看護学生がどのような要因によって喫煙を開始するのか、看護大学生はどのような禁煙教育によって禁煙することが可能なのか、喫煙の実態を把握する必要性があると考えられた。その実態調査結果から、看護大学における健康管理室としての防煙・禁煙対策を検討した。

⑴　対象と方法

本学に2007年度在籍していた学部生345名中、研究への参加に同意した128名を対象とし、無記名による自記式アンケート調査を2008年１月下旬に実施した。

⑵　結果

①アンケートに回答した本学の喫煙経験者は42名（32.8％）、喫煙未経験者は86名（67.2％）であった。

②禁煙教育が印象づけられている時期は、喫煙経験者では、小学生19.0％、中学生35.7％、高校生33.3％、大学生35.7％、未経験者では、小学生32.6％、中学生65.1％、高校生37.2％、大学生24.4％となっており、禁煙教育が学生に最も印象づけられているのは中学生時代であることがわかった。

③喫煙による健康被害を授業で学んだと答えた者が喫煙経験者90.5%、未喫煙者では96.5%、喫煙者自身や他者への影響を認識している者は、喫煙経験者も未経験者もともに100%であった。また、喫煙と様々な疾患との関連についての正解率は、未喫煙者と比較して喫煙経験者のほうが高かった。この対象では、タバコの知識は禁煙とはつながっていなかった。

④喫煙経験者の「喫煙のきっかけ」は、「友人の影響（50.0%）」「好奇心（38.1%）」であった。タバコは害であるという知識を持つ者が喫煙する理由は、今回の結果より「友人の影響」「好奇心」が最も多く、学生の喫煙のきっかけとなっていることがわかる。したがって、友人同士の影響・好奇心に対して、大学が何らかの働きかけを行うことが有効と考えられる。

⑶　まとめ

①禁煙の知識を小学生・中学生時代に得た者は、喫煙するリスクが低かった。したがって、早い時期での喫煙に関する教育が有効だと考えられる。

②大学生の年代になると禁煙に対する知識の有無より、他者との関係が大きく影響しており、ピアグループなどの相互の影響力や集団の力を利用した禁煙を促す方法が有効であると推察された。

8．チャペルアワー委員会

主な委員会活動は、週３回のチャペルアワーの担当・運営、自治会や聖歌隊と連携しながらのクリスマスの集いの準備・運営、クリスマスツリーの飾りつけ、聖路加国際病院礼拝堂クリスマスイブ礼拝でのプロセッション参加学生との連絡調整ならびに準備などであった。また、昨年度より開始した企画として、新入生にチャペルに親しんでもらおうというねらいから、今年度も引き続き新入生学内オリエンテーションのなかで模擬チャペルアワーを開催した。

毎週水曜日のチャペルアワーは、聖路加国際病院の礼拝堂で、学生の司会により開催されている。今年度から基本的に第３水曜日は「お話会」と題して、学内や聖路加にかかわりのある先生方をお呼びして、お話をしていただく会を実施した。今年度は、上田憲明主任チャプレン、ケビン・シーバーチャプレン、中村めぐみ氏（聖路加国際病院）、押川真喜子氏（聖路加国際病院・訪問看護ステーション）、八木正言氏（立教大学チャプレン）の「お話会」を行った。話していただくテーマは、学生自身が考え、講師依頼や当日の運営なども学生が主体となって行った。第１、２、４水曜日は、新約聖書を読み進め、またオルガニストのご協力を得て、聖歌を共に歌う機会をもった。月曜日・金曜日は、学生の参加が少ないことや10分という短い時間ということをかんがみ、今年度は本学の310教室で、「デイリーブレッド」（RBC ミニストリーズ）を読み進めた。これらを読み進めながら自分の生活を振り返り、上田憲明主任チャプレンやケビン・シーバーチャプレン、友人や教員と感じたこと、考えたことを共有しながら、神の御心を問う貴重な時と場となっている。

しかしながら、チャペルアワーへの毎回の参加人数も数人程度であり、特に後期は実習などの関係で、参加人数が少なくなっている。礼拝堂で心の声に耳を傾け、本学の理念を振り返るチャペルアワーと、学業を両立するためには、引き続きチャペルアワーの意味を考えていくことを求められていると思われる。

聖路加国際病院礼拝堂クリスマスイブ礼拝のプロセッションには、21名の学生が参加した。昨年同様に参加学生はチャペルアワーの時間に、上田主任チャプレン、シーバーチャプレンよりクリス

マス礼拝の意味について学んだ上でプロセッションに臨んだ。

チャペルアワー委員は、委員長をはじめとして主体的に活動し、チャプレンや教員と協働して、チャペルアワーの運営、クリスマスの礼拝等の準備を担っていた。

チャペルアワー開催場所・時間

場　所：聖路加国際病院礼拝堂

時　間：水曜日　12：30～13：00

ミニチャペルアワー開催場所・時間

時　間：月曜日・金曜日　11：50～12：00（本学310教室）

9　オリエンテーション・セミナー

1）セミナーの開催

本学学部入学生を対象として、本学の理念およびカリキュラムへの理解、上級生や教職員との交流、さらに、新入生相互の交流などの促進を目的に、2008年度新入生オリエンテーション・セミナーを、財団法人キープ協会清泉寮において開催した。なお、本セミナーは、多数の上級生ならびに教職員の協力の下に実施されたものである。

日　時：2008年４月12日(土)，13日(日)　１泊２日

場　所：財団法人キープ協会清泉寮（山梨県北杜市高根町清里３５４５）

参加者：新入生90名，上級生ボランティア25名，教員28名

プログラム

４月 12 日(土)	
９：00	大学出発(バスで清里まで移動)
	昼食後
14：00－14：45	キープ協会専務理事講話「ポールラッシュ先生のミッション」（正木　実）
	ポールラッシュ記念センター見学
15：00－17：00	グループワーク「春を探そう、自分を探そう、仲間をつくろう」
17：30－	夕べの祈り（上田　憲明）
18：00－19：00	夕食
19：00－	上級生企画

４月 13 日(日)	
７：10－	朝の祈り（ケビン・シーバー）
７：30－９：00	朝食
９：30－10：30	学長講演「本学の歴史と理念」（井部　俊子）
11：00－12：20	レクリエーション（大濱　あつ子）
	昼食後
14：00－15：15	グループワーク発表会（分かち合い）
15：15－15：45	学部長講演「無駄に見えるもの・無くなればいいと思うこと」（堀内　成子）
16：00－	清泉寮出発（バスで大学まで移動）

2）オリエンテーション・セミナーレポート

新入生オリエンテーション・セミナーに参加した新入生の感想とグループワークの結果をまとめたレポート（冊子）を2008年５月30日付で発行し、新入生および教員に配布した。

3）オリエンテーション・セミナーの評価

⑴　新入生へのアンケート結果について

オリエンテーション・セミナーに参加して、「多くの人と知り合うことができた」「大学の雰囲気がつかめた」と回答した学生の割合は、いずれも90％以上と多く、さらに、セミナーに参加して満足でしたか」「セミナーは必要であると思いますか」のいずれの問いについても、平均4.6点以上の高得点が得られている。「上級生企画」「レクリエーション」「学長・学部長講演」

と、「宿泊すること」への高いニーズとあわせて、新入生たちは、上級生や教員とともに宿泊型のプログラムへの参加を希望していることが顕著にうかがえる。

⑵　教員へのアンケート結果について

「学生が多くの人と知り合えた」「セミナーは必要であると思うか」の問いに対して、いずれも 4.4 点以上の高得点を得ており、教員もオリエンテーション・セミナーの必要性を感じていることがわかる。さらに、本年度から、宿泊施設を清泉寮に変えた点については概ね好評であったが、往復の交通渋滞によるプログラムの変更等を余儀なくされた、土日での開催については改善の要望が寄せられており、これは来年度に向けての課題である。

⑶　上級生へのアンケート結果について

「新入生が多くの人と知り合えた」「新入生は大学のイメージがつかめた」「セミナーは必要であると思うか」の問いに対して、いずれも 4.4 点以上の高得点を得ている。清里のフィールドを散策しながらのグループワークについては、歩きながら話すことは人数が多いために難しく、したがって、通過するポイントの数を減らして、じっくりと話し合う時間をとるほうが効果的であろう、との指摘があった。さらに、土日型の日程では、月曜日が代休とならないため上級生への負担が大きく、したがって、来年度については、日曜日を避けた日程で実施すべきである。

10. 就職･進学に対する支援体制

1）就職情報の提供

募集求人に関する情報提供（求人票および掲示板）

随時大学に集まる求人の資料は、求人票（学生部室内の専用棚に番号を添付しておき、看護師・保健師・助産師と職種別に一覧表にしたもの）および掲示板により学生への情報提供を行った。求人票の利用方法について３年次の就職ガイダンスにおいて学生に説明し、さらに使い方の手順を作成することで、より学生が有効に活用できることを図った。年々、就職関連雑誌の種類が急速に増えていること、求人施設側のインターネットでの情報公開、ホームページ、さらには就職ガイドの WEB サイトなどの就職関連情報網が拡大しつつある。次々に送られてくる就職情報誌は、そのつど学生が入手できるようにした。求人資料の管理については、学生の活用状況と、情報管理に要する作業量を考え、より効率的な方法を再検討した。

2）就職活動をささえる支援

⑴　進路ガイダンス

学生が、就職活動を円滑にまた主体的に行うことができるように、就職ガイダンスの準備と運用を行った。就職ガイダンスでは、国家資格を有する専門職として自身の将来を見据えたキャリアプランを描き、就職に関する情報収集、自己の適性判断、就職先選択、就職試験対策、最終的な内定受理まで、段階を追って各時期に応じ、基本的な姿勢および知識・ルールなどを提供し、主体的に就職活動を行えるようガイドした。

就職ガイダンスは、３年生の後期から４年生の前期にかけて計４回のシリーズで行った。今年度の実績としては、４年生を対象に、前年度から引き続き第３回目（４月）と第４回目（６月）を、また、３年生を対象に第１回（12月）と第２回目（２月）を開催し、毎回の参加者数

は60～70名程度であった。近年の傾向として就職活動や求人が早まっていることを考慮し、より早い時期に学生が主体的に将来のキャリアプランや具体的な就職先について考えることができるように、時期を設定した。

今年度の第１回目就職ガイダンスにおいては、「就職活動ガイドブック（初版2006年11月発行・第３版2008年12月改訂）」を配布するとともに、10年後の自分について考え、キャリアプランを描き始める動機づけを重視した内容とした。就職活動に関する１回目アンケート調査として「10年後の自分について考えたことはあるか？」「自分の就職について考えはじめているか？」「就職ガイダンスに関する具体的要望」などを問う機会を設けた。３年生の学生にとっては、アンケートに回答することにより、就職活動を自分のこととして捉え、具体的に考え始める機会になったと思われる。

第２回就職ガイダンス（２月）は、総合実習のオリエンテーションと同じ日に開催した。４年生の１年間の流れを紹介し、見通しをもって計画的に過ごせるよう情報提供した。加えて、「私の就活・進学スケジュール」として自分で書き込めるスケジュール表を配布した。また、近年大学院への進学者が増加していることを考慮し、大学院に進学した先輩２名から体験談を聞く機会を設けた。

４年生を対象とした第３回就職ガイダンス（４月）では、具体的な就職活動準備として、各種の問題集、自己分析、推薦書の依頼の仕方などの情報を伝えた。第４回就職ガイダンス（６月）では、卒業生７名を招き、就職活動体験談や現在の職場の様子などを語ってもらった。また６施設より就職担当者が来校した。ガイダンスの後半は、卒業生や施設担当者と懇談の時間を設け、詳しい情報収集を行える機会となっていた。今後の予定は下記のとおりである。

＜2008～2009年度＞

３年次12月　さあ、未来の扉を開こう―10年後の自分を想像してみよう！―

３年次２月　就職活動のスケジュールを立てよう！

４年次４月（予定）　就職活動の実際と就職試験の受験対策

４年次６月（予定）　私の就職活動（先輩との交流会）

⑵　個別相談

４年生に対して就職活動の過程で個別の相談を受けた。本年度の個別相談の主なものは、就職先の相談、就職試験の勉強・対処方法、内定を受けた後の辞退の仕方、複数合格し選択する際のアドバイス、就職試験に失敗した学生の支援等であった。同時に複数の内定通知を受け取り、その後の対応として、内定を受けた後の辞退の仕方に悩んで相談に訪れる場合が多くなってきている。

⑶　就職活動ガイドブックの改訂

「就職活動ガイドブック（初版2006年11月発行・第３版2008年12月改訂）」を刷新し、第１回目就職ガイダンスにおいて配布した。ガイドブックの内容は、これまで年間を通して行ってきた「就職ガイダンス」ならびに「個別相談」を参考に、①就職活動を進める上で特に重要と思われ学生部担当教職員から説明を行ってきたこと、②個別相談やアンケート調査の結果から学生が必要としている情報、を含めるようにした。以下、冊子の目次を示す。

＜目次＞

はじめに：学長からの言葉
Ⅰ．さあ、未来への扉をたたこう！：就職するということ、専門職業人として働くこと等について
Ⅱ．自分の人生をデザインする：年間の就職活動スケジュールを図示
Ⅲ．就職活動：情報収集の方法、就職先の絞込み、応募方法、受験対策、内定の受け方
Ⅳ．就職活動支援体制：利用できるリソース（人、物）
Ⅴ．わたしの就職活動体験：先輩からのメッセージ

第３版（改訂版）では、個別相談の内容でも増えている、内定を受けた後の辞退の仕方について、基本姿勢とともに具体的な対処方法について盛り込んだ。また、今後のキャリアプランとして、専門看護師、認定看護師、認定看護管理者などに関する具体的な情報を紹介した。

⑷　就職活動体験記の閲覧ファイル

これまで就職活動の体験記が卒業生から寄せられてきたが、今年度はこれらの資料を一括して綴り、「就職活動体験記」という名前を付けて閲覧ファイルを作成し、学生部室内の棚に常設した。毎年、最新の情報を取り入れ、更に内容を充実させていく予定である。今年度についても、内定が決まる時期に様々な職種や領域に就職を決めた４年生に呼びかけ、就職活動体験記の投稿を募集し、「就職活動体験記ファイル」に加えた。今後も就職活動体験記の投稿を募り、情報を蓄積し、一部は就職活動ガイドブックにも掲載していく予定である。

３）就職状況

学部生の採用資格は、看護師73名、保健師３名、進学その他12名であった(**表17**)。看護師での就職は全体の83％であった。なお、学部での助産師養成課程が終了したことにより、助産師での就職は大学院生のみとなった。

表17　2008年度 学部卒業生進路(就職・進学)状況　　学部卒業生88名（学部生69名、編入生19名）

看護師

聖路加国際病院（37）　虎の門病院（10）　杏林大学医学部附病院（6） 東京大学医学部附属病院（5） 東京大学医科学研究所附属病院（1）　昭和大学病院（1）　昭和大学横浜市北部病院（1） 長谷川病院（1）　神奈川県立こども医療センター（1）　済生会横浜市東部病院（1） 東京武蔵野病院（1）　東邦大学医療センター大森病院（1）　大森赤十字病院（1） 医療法人財団秀行会阿部クリニック（1）　NTT 東日本関東病院（1） 癌研究所有明病院（1） 東京北社会保険病院（1）　横浜市立大学附属市民総合医療センター（1） 地方公務員（東京都松沢病院）（１）	73

保健師

江戸川区（1） 地方公務員（柏市）（1） 東芝ヒューマンアセットサービス株式会社（１）	3

進学

聖路加看護大学大学院（7） 東京医療センター附属東ヶ丘看護助産学校（1） 高崎助産師学院（1） 山形大学養護教諭特別科（1） 岡山大学大学院保健学研究科（1） 日本赤十字大学看護大学大学院（1）	12
計	88 人

【大　学　院】

1．学生部

学生部は、学生が本学の教育目標をいっそう効果的に達成され豊かな大学生活を過ごせるようにその私的・公的生活を支援することを目的としている。2008年度の学生部の担当は、教員６名（うち学生部長１名）と学生課職員２名、健康管理担当保健師１名である。

大学院学生は自立して生計を営む者が多く、そのうち社会人学生は職場での責務を担いながら課程での学びを続けている。大学院、職場、地域、家庭など複数の場における役割を担いながら本学に学ぶ大学院学生に対して、学生部は次の内容に関して情報提供と個別相談支援活動をしている。

- 学生生活を有意義にする情報提供：行事（クリスマスの集い・創立記念・７チャペルアワーなど）、キャンパスマナー（紛失･盗難･拾得物扱い、挨拶、マルチ商法･ストーカーなど自己防衛）、ボランティア、アルバイト、福利厚生など
- 学生生活を支援：奨学金、アルバイト、健康管理、心の相談、保険制度など
- 将来の進路相談：進路相談、就職情報資料提供など
- 調査協力：学内学生対象の調査

2．自治会活動

学生部は大学院学生が運営する自治会を院生の代表窓口としてとらえ、連携を図っている。これまで、学生の学修環境をより良いものにするために、大学院学生自治会が取りまとめた意見が学生部に寄せられている。学生部は、大学院学生の要望内容の確認と、要望内容を取り扱う部署の紹介、また、その伝え方などをアドバイスし、コミュニケーションによる問題解決をめざして調整の役目をとっている。

3．奨学金

本学で扱う主な奨学金を**表18**に示す。その他に経済的援助が必要な学生に対して**表19**に示すような奨学金制度の適用ができるよう支援している。

日本学生支援機構の奨学金について今年度は定期採用で修士１年内示数第一種７名､第二種５名、修士２年第一種１名、博士１年第一種６名、第二種１名の募集があった。

また、平成16年度以降の大学院第一種奨学生採用者対象の｢特に優れた業績による返還免除｣制度については、今年度該当する修了生８名のうち修士４名、博士２名が学内選考委員会へこの適用への申請を行った。その結果、内示数の修士２名、博士１名を日本学生支援機構へ推薦した。

学園奨学金の募集は６月上旬としており、他の奨学金と募集時期をずらすことで奨学金を希望する大学院生に、少しでも多く奨学生となってもらうよう支援している。

給付奨学金では、今年度新たに「青木奨学金」と「聖路加同窓会奨学金」が創設された。「青木奨学金」は、本学卒業生で本学園理事・評議員の青木康子先生から寄贈された資金により創設された給付奨学金制度である。対象は、修士２年次生で将来助産師として実践で活躍する、あるいは助産教育・研究に携わることを目指す人材を対象とし、大学院２年生３名が採用された。今後も毎年３名採用される。「聖路加同窓会奨学金」は、聖路加同窓会より寄贈された資金により創設された制

度である。対象は本学学生で、将来母校を大切にし、看護を通じて、社会に貢献したいと学業に励む志を持つ者とされる。採用者は大学院生１名である。

これまで採用の実績のなかった守谷(もりたに)育英会給付奨学金については、2005年度より応募して以来初めて大学院生１名が採用された。

奨学生採用に関しては募集について随時掲示をしている。応募者に個々の奨学金の特徴や申請条件および書類の書式などを説明後、応募者各自が学生課に申請書類を提出する。必要時、学生部長が面接を行っている。申請後は、書類と面接結果などに基づき奨学生選考委員会で推薦順位を決定し申請している。

また、返還については12月に大学院生個々に提出書類の説明をしている。とくに日本学生支援機構は卒業生の奨学金返還率が在校生の内示数に反映され、また、聖路加看護学園貸与奨学金についても、返還率が在校生の貸与へ影響するので、いずれも規程通り返還するよう強く指導している。

今後も広く大学院生に奨学金制度の存在を理解してもらい、経済的な不安を抱かずに学業に専念できる環境を整えられるように支援していくことが肝要である。

表18　主な奨学金

名　　称	対　　象	貸　　与　　月　　額	
		第一種/定額型	第二種/選択型
日本学生支援機構	大学院（修士）	88,000 円	50,000 円、80,000 円、100,000 円、130,000 円、150,000 円から選択
	大学院（博士）	122,000 円	
東京都看護師等修学資金	大学院（修士）	第一種　83,000 円　　第二種一口 25,000 円（二口まで）	
聖路加看護学園貸与奨学金	大学院（修士）	50,000 円	
	大学院（博士）	100,000 円　（1998 年度より貸与月額改定）	

表19　2008年度奨学生採用状況

奨　学　金　の　種　類	配布	申請	採用
東京都看護師等修学資金（修）　第１種	13	7	5
東京都看護師等修学資金（修）　第２種		1	1
日本学生支援機構(修１年)第１種	27	⑦	7
日本学生支援機構(修１年)第２種		⑤	3
日本学生支援機構(修２年)第１種		①	1
日本学生支援機構(博１年)第１種		⑥	1
日本学生支援機構(博１年)第２種		①	0
日本学生支援機構(修１年)第１種＜追加＞		②	2
聖路加看護学園貸与奨学金（院）	18	15	15
木村看護教育振興財団 CNS 奨学金（修）	4	自己申請	―
東京水天宮助産師育成支援制度	7	3	2

守谷育英会	5	1	1
岡村育英会	4	3	3
交通遺児育英会	掲示のみ	自己申請	―
国際看護師協会東京大会記念奨学基金	掲示のみ	自己申請	―
青木奨学金	9	8	3
聖路加同窓会奨学金	3	1	1

○は内示数　2009.3.31 現在

表20　奨学生内訳表　学生総数477名（学部学生342名、大学院生135名）

学年	日本学生支援機構			東京都看護師等修学資金	聖路加看護学園貸与奨学金	その他奨学金	計
	1　種	2　種	小　計				
博３	3	0	3	―	4	0	7
博２	4	0	4	―	7	0	11
博１	1	0	1	―	7	0	8
修２	6	1	7	5	2	8	22
修１	※9	3	12	6	8	2	28
大学院小　計	23	4	27	11	28	10	76
	17％	3％	20％	8％	21％	7％	56％
学　部小　計	28	60	88	8	16	23	135
総　計	51	64	115	19	44	33	211
	11％	13％	24％	4％	9％	7％	44％

※辞退１名　　2009.3.31 現在

４．アルバイト

大学院生のアルバイトについては外部から求人があった場合に掲示している。

また、大学では、TA（ティーチングアシスタント）規程および RA（リサーチアシスタント）規程を設けており、これらは大学院学生本人の申請を受け、研究科委員会での承認を経て実施されている。時給については**表21**のとおりである。

表 21　ＴＡおよびＲＡ規程

	時　　給
ＴＡ規程	修士　　1,200 円
	博士　　1,300 円
ＲＡ規程	学内研究費の場合　1,300 円
	学外研究費の場合は当該研究費の規程による金額

５．福利厚生

学外施設、学生食堂等の福利厚生施設については、本章【学部】6.福利厚生で記した内容と重複するので、ここでは省略する。

６．健康管理

本館には、休養室を備えた健康管理室があり、専任の保健師１名が常駐し、学校医とともに健康診査、健康相談、応急処置、必要時医療機関などへの紹介を行っている。大学院生が使用している２号館には、救急箱と応急手当用のカッターベッド（担架用）が常備してある。今年度、小さな傷のための救急箱使用のみであった。

入学した修士、博士へは、健康管理オリエンテーションを行い、健康手帳を配布し、「自分の健康は自分で守る」ことを強調している。６月までに定期健康診断を聖路加国際病院予防医療センターと連携しながら実施している。

定期健康診断の実施項目は、学校保健法と結核予防法に準じ、**表 22** のとおりである。内科健診、一般検尿の受診者は、該当対象者（社会人を除く）全員である。健康状態調査と健診時の検査結果により、外来受診を助言した者は、内科５名、婦人科２名、精神科及びカウンセリングが２名であった。

健康管理室での健康相談に来談する者は主に修士生で、内容的には、学業面と身体面、そして人間関係など、学生生活の困難さと深く関係し、複合された問題を抱えていた。学内カウンセリングがスタートし、嘱託カウンセラーに相談を申し込む修士生、博士生も増加した。

表22　項目別受診者数

対象学年(人数)／項目	修士１年 (42*)	修士２年以上 (43**)	博士１年 (13)	博士２年以上 (37)	合　計 (135)
内　科　健　診	34	32	7	12	85
一　般　検　尿	34	32	7	12	85
Ｃ　Ｂ　Ｃ　検　査	34	32	7	12	85
ＨＢ／ＨＣ血液検査	34	32	7	12	85
ツベルクリン判定検査	34		11		45
胸部レントゲン検査	34	32	7	12	85

*うち８名社会人入学　**うち11名社会人入学

７．就職・進学に対する支援

募集求人に関する情報は、学内掲示板、学生部室の募集書類の専用棚などで提供している。

また教員公募の関係は、２号館掲示版に情報提供をしているが、いつでも閲覧できる広報の方法を検討する必要がある。

個別相談は、随時行う体制を整えている。大学院生の多くは、各専門領域の教員と相談している場合が多く、本年度は学生部に持ち込まれる相談はなかった。

就職状況は、大学院修士課程修了生は保健師２名、助産師７名、看護師８名、看護教員７名、進学その他10名であり、博士課程修了生は看護教員８名、その他1名であった（**表23**）。修士課程修了生は23.5％が看護師、20.6％が看護教員での就職であり、博士課程修了生は88.9％が現職のままあるいは新たに教職に就いている。

表23　2008年度大学院修了生進路（就職・進学）状況

大学院　博士前期課程修了生34名

看護師

聖路加国際病院（3）　杏林大学医学部附属病院（1）　東邦大学医療センター大森病院（1） NTT 東日本関東病院（1）　順天堂大学医学部附属練馬病院（1） 日本赤十字医療センター（1）	8

助産師

聖路加国際病院（1）　日本赤十字医療センター（1）　大森赤十字病院（１） 済生会横浜市東部病院（1）　横浜旭中央総合病院（1）　医療法人足立病院（1） 済生会宇都宮病院（1）	7

保健師

文京区（1）　青年海外協力隊 21 年度 1 次隊派遣国インドネシア（1）	2

看護教員

順天堂大学（2）　聖路加看護大学（1）　慶応義塾大学（1）　杏林大学（1） 神奈川県立保健福祉大学（1）　横浜創英短期大学（1）	7

進学その他

聖路加看護大学大学院博士後期課程（3）　厚生労働省（看護系技官）（1） 諸事情により就職せず（5）　未定（1）	10
計	34人

大学院　博士後期課程修了生９名

看護教員

静岡県立大学（2）　聖路加看護大学（1）　東海大学健康科学部看護学科（1） 東京女子医科大学（1）　杏林大学（非常勤）(1)　順天堂大学医療看護学部（1） 山梨大学大学院医学工学総合研究部（1）	8

その他

聖路加看護大学博士研究員（1）	1
計	9人

XIV 広報活動

1．学園ニュース

1）2008年度委員会の開催

第１回　４月７日　14:00～15:00　新旧委員の引き継ぎ、退任中村綾子委員出席、第281号の校正
第２回　５月13日　14:00～15:00　第282号企画
第３回　６月10日　14:00～15:00　第282号編集・第283号企画
第４回　７月８日　14:00～15:00　第283号編集
第５回　９月９日　14:00～15:00　第283号編集
第６回　10月14日　14:00～15:00　第284号企画
第７回　11月11日　14:00～15:00　第284号編集
第８回　12月９日　14:00～15:00　第284号校正
第９回　１月13日　14:00～15:00　第285号編集
第10回　２月10日　14:00～15:00　第285号編集、286号企画
第11回　３月11日　14:00～15:00　第286号企画、編集

委員構成：教員３名（伊藤和弘、片岡弥恵子、沢田　秋）、事務局１名（稲田昇三）

2）2008年度の主な活動

⑴　281号から285号まで５回発行した。各号の企画内容は下表のとおりである。
⑵　巻頭写真のテーマは「旧校舎の風景シリーズ」とした。
⑶　今年度に取り上げた主な特集・話題は次のとおりである。

ａ．第282号　西村哲郎先生の追悼特集
ｂ．第285号　創立記念講演会特集

【2008 年度学園ニュースのテーマと内容】

	テーマ・内容	発行日	原稿執筆者
281号	１面　伝統と革新 ２～４面　ルカのお仲間　熱烈歓迎 ５～７面　新入教職員からのひとこと ８～10面　INFORMATION 学生部･健康管理室・事務局・教務部・図書館・看護実践開発研究センター・21世紀 COE プログラム チャペルアワー 折込　校舎見取図、２号館見取図、2008年度学部卒業生・大学院修了生進路（就職・進学）状況	４月28日	学長　井部　俊子 新入生 新入教職員 11名 委員長　黒臼　夏妃
282号	１面　本学の社会貢献－市民に開かれた看護サービス ２～３面　追悼・西村哲郎先生	７月10日	教授　菱沼　典子 学長　井部　俊子 司祭　上田　憲明 教授　田代　順子 准教授　有森　直子 聖路加国際病院 がん看護専門看護師 中村めぐみ

	４面　聖路加看護大学の地域貢献 多世代交流型デイプログラムの実践 中央区民カレッジ報告 「赤ちゃんがやってくる」に学生ボランティアとして参加して 聖路加・テルモ共同事業について ４面　2008年度自治会役員決定 ６～７面　2008・体育 DAY・３つの特徴 私の体育 Day 体育 Day と私 体育 Day2008 ８面　日本看護系大学協議会 平成20年度総会について ５月オープンキャンパス 着任挨拶 国際交流「タイ・リベリア・日本の”アロイ”で″デリシャス″な″おいしい”夕ご飯 ９面　追悼　評議員　野邉地篤郎先生 ９～10面　INFORMATION 学生部・健康管理室・事務局・教務部・図書館・看護実践開発研究センター・チャペルアワー		教授　亀井　智子 准教授　廣瀬　清人 ３年　鈴木　彩加 教授　小口江美子 体育 Day 委員長3年 花島　彩子 学士10回生 上田　直子 ２年　藤田　祥子 武居英里子 １年　添田　桜 教授　山田　雅子 広報委員会 助教　糸井　和佳 客員教授 渡部　尚子 学士11回生 林　儀一 委員長　黒臼　夏妃
283号	１面　ボランティア活動の再認識と地域社会への貢献を ２～３面　私たちのボランティア活動 みんなで作ってきた「いちごフレンド」 ともだち（ナイトフレンド） Kさんのボランティア（だいじょ部） 野外を楽しむ－YMCA-SMILE－の活動 ボランティアに関わる看護ネット・ホームページの紹介 ４～５面　私の夏休み 夏休み、バスの中での出会い 密やかな愉しみ 私の夏休み アーカイブス・カレッジで学んだこと アメリカの看護学生の臨地実習について －ヴィラノバ大学垣交換研修に参加して－ タイ・マヒドン大学での研修 かけがえのない思い出 ６面　41年間の歴史に幕－学部助産課程閉講記念パーティを催す 新たな出発を期して 日本の HIV・エイズケアー文化・習慣の違いから見えてくるもの	10月30日	教授（国際看護学） 田代　順子 ３年　長澤　裕美 ３年　宇田川　愛 ４年　新井麻奈美 ４年　今泉　綾乃 准教授(基礎看護学) 大久保暢子 准教授(母性看護･助産学) 江藤　宏美 図書館司書 新沼　久美 ３年　若松　香織 ３年　荒居　康子 ３年　小池　沙織 ３年　山野辺恵子 ３年　村田麻喜恵 助教(母性看護･助産学) 大隅　香 卒業生(Class of 2004) 櫻井佐知子 カリフォルニア大学サンフランシスコ校大学院 神谷英美子

	７面　８月オープンキャンパス ７～８面　INFORMATION 学生部・健康管理室・事務局・教務部・新入教職員紹介・図書館・看護実践開発研究センター・チャペルアワー		広報委員会 廣岡佳代 （成人看護学助教） 委員長　黒臼　夏妃
284号	１面　今日このクリスマスに ２面　クリスマス？だからなぁに？ 聖路加の思いと立教のクリスマス 思い出のクリスマス 今年のクリスマスに向けて ４～５面　第32回白楊祭“2008ｽﾝ11月１・２日 「個性～キラリと光る何かを見つけて～ 白楊祭実行委員、ダンス部部員としての白楊祭を終えて 個性 フリーマーケット チャレンジに悔いなし！青春 again☆2008 ６～７面　素敵なナース 実習を終えたところで、実習で出会った素敵なナースを紹介していただきました 私の出会った素敵な“スーパー★ナース” パワフル助産師さん 私の出会った素敵なナース	12月17日	学生部長 松谷美和子 （看護教育学教授） チャプレン ケビン・シーバー 事務局長　山口 喜義 研究センター 助教　實﨑　美奈 ２年　黒臼　夏妃 実行委員長 ２年　横川　彩夏 ２年　平木　彩子 １年　岸本　梨沙 ２年　里見　全代 学士10回生 白田千佳子 ３年　草深　志帆 ４年　宮田ゆりえ
	７面　21世紀 COE プログラムの事後評価を頂きました 「適切な学びの環境の実現」にむけた標語・ロゴマーク・ポスターコンテスト 各賞決まる ７～８面　INFORMATION 学生部・健康管理室・事務局・教務部・図書館・看護実践開発研究センター・ チャペルアワー		教授（成人看護学） 小松　浩子 学生部 委員長　黒臼　夏妃
285号	１面　「できる」壁、「できない」壁 ２面　2008年度聖路加看護大学創立記念講演会 「看護教育者としての私の人生」 ３面　表彰システムについて 各賞受賞者より 学長賞（グッドプレゼンター） ベストティーチャー賞 Dr.Holzemer 賞 ４～６面　卒業・修了にあたってのひとこと さ・よ・う・な・ら　私の学舎 面　学園の敷地内禁煙の実現 ７～８面　INFORMATION 学生部・健康管理室・事務局・教務部・図書館・看護実践開発研究センター・チャペルアワー	３月５日	学部長･研究科長 堀内　成子 永井敏枝先生 教授　山田　雅子 ４年　近藤　華子 助教　卯野木　健 助産上級実践コース 佐藤友美、白井　希 園田　希、中山智恵 舩津美帆、水島祐子 卒業生・修了生 教授　松谷美和子 委員長　黒臼　夏妃

２．受験生への広報

委員長：森　明子

委　員：廣瀬清人，大森純子，糸井和佳，廣岡佳代，進藤　務，河合智子，新沼久美

2008年度広報委員会は、大学入学広報に焦点を当て、学部・編入学、また、大学院をめざす受験生やそのご父母および予備校等に本学の選択と入試について役立つ情報の提供を念頭において今年度予算5,460,000円で下記の活動を行った。

１）見学者への対応

毎週火曜日と金曜日の午前10時と午後２時から本学見学を熱心に希望する個人を対象に資料を配布して学内を案内している。これとは別に中学校や高校などを単位とした見学依頼に対応している。これは本学の施設を見学してもらうというだけでなく、将来的に本学を受験する可能性を念頭におく、あるいは本学志望者数の増加拡大を念頭においたものである。見学の受け入れ先、受け入れ人数は2008年４月から2009年３月までで以下のとおりである。

・個人対象　　87名

・2008年４月30日	千葉市立稲毛高校	6
10月８日	広島県立呉宮原高校	12
〃	広島県立賀茂高校	6
10月16日	旭川藤女子高校	2
10月23日	群馬県立伊勢清明高校	30
11月20日	沖縄球陽高校	7
12月３日	大分県立竹田高校	19
12月11日	宮崎県立妻高校	4

２）大学案内パンフレット改訂版の作成

2006年度版から栄美通信㈱と３年契約で作成してきた白い表紙で十字架の１号館と本学校舎をイメージしたパンフレットを全体の構成は従来どおり、学生の取材写真など一部を入れ替えて表紙デザインも一新して大幅な修正を行った。また、詳細に内容確認を行い、公開セミナーの説明を削除して看護実践開発研究センターの内容を増やしたり、クラブ・サークル活動の活動状況などを訂正した。パンフレットの改訂にあたっては普段から年間を通じて大学周囲の風景や植栽、あるいは学生生活や年中行事などを写真撮影しておくことが大切である。今後大学広報の重要性がますます叫ばれるなかでホームページと同様に大学案内パンフレットの充実がさらに重要になると思われる。

発行部数：6500部　発注先：栄美通信㈱

３）情報誌『ウエルカム』改訂版の作成

昨年版の『ウエルカム』をベースに表紙のデザイン、表紙裏の行事の写真などを入れ替えて改訂版を作成した。５月のオープンキャンパスに間に合わせるべく入学したばかりの新入生に原稿を依頼して受験生の目線で本学の紹介を行った。『ウエルカム』は大学案内パンフレットとは別に在校生の生の声を直接知ることができるという点で受験生に大変好評である。作成にあたっては学生広報委員と学生の新聞部「ほっとストリート編集部」に多大な協力を得た。

増刷部数：2,000部，発注先：瀬見証券印刷㈱

4）広告掲載について

今年度広告掲載を依頼した主な先は以下のとおりである。

キリスト教年鑑、高校生新聞、産経新聞都内版、聖公会手帳、聖公会新聞、キリスト新聞、教育学術新聞、新宿セミナー「プログレス」、プレナーシングなど

5）聖路加国際病院「一日看護体験」での資料配布

７月28日に聖路加国際病院で行われた高校生などを対象とした「一日看護体験」の参加者を対象に大学案内パンフレット、大学グッズなど資料を配布して８月のオープンキャンパスの参加を勧誘した。

6）学士編入学、大学院に関する広報活動

オープンキャンパスで一般入試志望の受験生とは別に学士編入の受験生席を設けて専用の資料を準備した。また、学士の学生が懇談会で説明にあたるよう配慮した。白楊祭での大学説明コーナーでも同様の対応をして受験生のニーズに応えた。大学院に関する広報活動は各専攻と各領域に委ねられており、大学院志望者に対するオープンキャンパスなどの対応は行っていない。今後他の看護系大学で大学院設置が増えるにしたがって広報委員会として志願者を増やす取り組みがますます必要となると思われる。

7）オープンキャンパス・大学説明会

⑴　オープンキャンパスの実施

昨年度に引き続き、本年度も夏休み初旬の２日間に加えて５月17日にも開催し、８月２日、３日の合計３日間にわたり、学部ならびに学士編入学を希望する受験生を対象にオープンキャンパスを実施した。当日のプログラムの内容は、①資料配布後、講堂で本学および入試全般に関するガイダンスと公開模擬授業（５月精神看護学、８月２日小児看護学、８月２日成人看護学)、②学内およびチャペル見学、③学生ボランティア受験生との懇談会などである。

参加人数は、５月が128名、８月が初日が502名、２日目が427名、２日間の合計が929名であった。アンケート回答者のなかでは高校３年生が49％、高校２年生が31％、高校１年生が７％と上位であった。年々保護者の参加者数が増加している傾向がある。学生ボランティアの協力者は５月が68名、８月２日が66名、３日が68名であった。受験生へのアンケート結果では、在校生との懇談会が参考になった、公開授業は大学の雰囲気がよくわかりよかったなどの意見がみられ、受験生に大変好評であった。

⑵　白楊祭への参加

11月１日㈯、２日㈰開催の白楊祭において「受験生何でも相談コーナー」が開催された。今年度は大学ホームページで相談コーナーの開催予告を行った。受験生が気軽に訪れやすい相談コーナーとなることを目指して、企画段階から学生広報委員が主体的に取り組み、広報委員と共に準備を行った。302教室で学校紹介のスライド上映、看護ネットなどのウエブサイトの閲覧、本学の資料展示、在校生による PBL と懇談、入試相談などを行い、両日をあわせて109名の参加者があった。在校生による PBL と懇談は特に好評で、和やかな雰囲気の中、学生ボランティアが PBL の問題を活き活きと設定し、また、数多くの学生ボランティアが具体的な学生生活などの本学入学後の生活をはじめ、本学の魅力について熱心に説明した。受験生も真剣で、

学生ボランティアに個別に質問をし、それを受け、学生ボランティアは真剣に対応していた。広報委員も適宜助言をし、学生ボランティアの取り組みを援助した。春夏のオープンキャンパスにすでに来校していた受験生も多く、その中でも高校１、２年生も数多くみられ、早い段階での広報活動が可能になった。

８）予備校等での入試相談会等

今年度参加した予備校等への説明会は下記のとおりである。

実　施　日	場　　所	相談者数	本学出席者
７月12日	新宿セミナー新宿校	53名	糸井、廣岡、進藤
13日	東京アカデミー池袋校	26名	進藤
18日	新宿セミナー立川校	19名	廣岡、河合
18日	新宿セミナー千葉校	21名	江藤、進藤
19名	新宿セミナー横浜校	12名	進藤
19日	新宿セミナー大宮校	12名	大森、新沼
８月２日	新宿セミナー柏校	12名	進藤
12月13日	新宿セミナー横浜校	8名	進藤
17日	新宿セミナー柏校	8名	進藤
18日	新宿セミナー新宿校	30名	菱田、佐居
19日	新宿セミナー立川校	8名	廣瀬
19日	新宿セミナー大宮校	5名	安ケ平
20日	新宿セミナー千葉校	8名	稲田、進藤
	延べ13ヵ所	222名	

看護系大学が増設されるなかで他の大学は入試相談会に２人あるいは３人など派遣して一人でも多くの受験生を確保したいという姿勢が窺える。受験生側も１年、２年の早い段階から入試相談会に出席して志望校の情報を得たいという情熱が感じられる。受験生に直接本学の特長やセールスポイントなどをアピールできる入試相談会は今後も大いに活用すべき機会である。

９）大学院募集要項のインフォメーション記事掲載

大学院修士・博士課程の募集要項の内容を㈱照林社発行の「エキスパートナース」などにインフォメーション記事として掲載してもらうよう依頼、無料で掲載された。

10）高校生新聞全国版への広告掲載

高校生新聞臨時増刊号に広告掲載を行った。また、これにより本学資料を希望する受験生に大学案内パンフレット、募集要項などを送付した。

発行部数：約55万部

11）大学グッズの作成について

今年度はオープンキャンパス用に前回作成した不織布バッグを2,000枚、ロゴ入りボールペン、シャープペン、図書カードを作成した。図書カードについては多摩美術大学のオブジェが太陽を燦々と浴びる病院一号館前の芝生に設置されているデザインのものとし、オープンキャンパスの際の学生ボランティアに協力謝礼として配布したり、大学を来訪されたお客様などに記念として

配布し、大変好評であった。今後受験生に興味を持ってもらい、同時に本学のイメージをよい感じでアピールできる大学グッズの作成が期待される。

12）大学広報・入試研究会などへの出席

６月６日六本木アカデミーヒルズで行われたゴートウースクール・ドットコム㈱による2008年度第１回大学入試・広報セミナー、７月５日ニューピアホールにおいて朝日新聞社主催で開催された大学トップマネジメントフォーラム、10月６日2008年度第２回大学入試・広報セミナーに進藤務委員が出席した。大学入試・広報セミナーにおいては最近の模擬試験を通して受験生の志望動向や受験情報収集の方法の傾向など具体的な情報を学ぶことができた。大学トップマネジメントフォーラムにおいては大手大学の学長が揃ってそれぞれの大学の特長や大学における人材育成の具体例や最近の動向などの報告がなされ、本学も学ぶべき点も多々あり、大いに参考になった。

また、７月12日に新宿セミナー新宿校で開催された2008年度看護医療系入試総括では予備校の職員による看護系受験生の具体的な動向について詳細な事例説明があり、その内容は今後の受験生対策の示唆に富むものであった。

13）学生広報委員会との協働

昨年度に引き続き各学年２名ずつからなる学生広報委員会に毎回教職員の広報委員も参加し、オープンキャンパスや大学グッズに関する意見や情報交換などの活動が行われた。今後さらに学生広報委員会との協働が期待される。

14）高校での資料頒布会への資料送付

㈱ライセンスアカデミーの要請により目白学園高校に本学願書を20部送付した。このほかにも地方の予備校から資料送付の依頼があり大学パンフレット、願書一式を送付した。

15）高校への出前授業

㈱ライセンスアカデミーの企画による大学模擬授業のため、11月10日に千葉市立稲毛高等学校に出張し、模擬授業と大学案内の広報活動を行った。模擬授業のテーマは「出産と家族」で、森明子委員長が担当した。男子学生２名を含む12名の生徒が参加。千葉県の母子保健統計データを知る、パソコンの分娩機転の動画に見入る、布製の赤ちゃん人形や胎盤に触れるなどの機会となり、興味深そうな様子であった。弟妹の出産に立ち会ったという生徒もいた。半数以上が看護系大学への進学を検討しているとのことだった。

16）大学ポスターの作成

受験生および高校１、２年生に対して本学の理念や雰囲気をより広く周知するため、今年度より新たに大学ポスターを作製することになった。㈱プリカに依頼し、大学案内パンフレットの写真と連動させ、Ａ３サイズ1,000枚の作成（99,750円）を行った。完成後は学生広報委員が夏休みに訪れた母校に送付した。今後はオープンキャンパス案内などと共に送付するなど、活用が期待される。

17）その他

大学のホームページの大学案内資料請求を通じて年間を通して711件の資料送付を行った。また、ベスト進学ネットからは年間175件の大学案内や過去問題送付を依頼する申し込みがあり、それぞれ対応した。インターネットを活用した手軽な資料請求はますますニーズが高まると思われる。

18）まとめ

本年度は、入試委員会(2008.6.3付)より学部入学生を、研究科委員会(2008.6.17付)より大学院受験生を獲得するための方策検討の依頼があった。これらに対し、広報委員会独自には、新たに、在校生による母校訪問を利用した広報活動を実施し、大学や在校生により親しみを感じ、深く知ってもらうためのホームページの活用(動画挿入)、大学院案内パンフレットの作成を提案し、進めた。そして、体系的・多面的で戦略的な広報活動と、そのための専門家によるコンサルテーションの必要性について答申した。

その結果、全学的な意識啓蒙の取り組みとして、電通パブリックリレーションズによる FD 研修会での講義「戦略広報・PR について～聖路加看護大学の広報戦略立案に向けて～」につながった。事務部には広報室が開設されることになった。『学園ニュース』を学内外広報誌としてとらえ、広報委員会と学園ニュース委員会との連絡を深めていくことなども委員長部課長会議で話し合われたことを付け加えておく。

3．ホームページ管理室

1）現状および活動状況

本学ホームページは、昨年度まで『広報委員会』と統合された形で活動していたが、今年度からは広報委員会と切り離され新体制でスタートした。

情報更新作業などの運営管理は大学事務局が担当し、各ページに掲載されている内容についての情報管理は下表に示した部署が担当した。

トップメニュー	サブメニュー名（担当ページ）	担当部署
大学案内	ごあいさつ	事務局
	建学の精神・理念	
	本学のあゆみ	
	組織	
	海外との学術交流	教務・国際担当
	大学情報	事務局・経理
	大学周辺ガイド	広報委員会
大学［看護学部］	カリキュラム	教務
	学士編入制度	
	姉妹校・留学制度	
	立教大学との単位互換制度	
	教育スタッフ紹介	
	資格・免許	
	シラバス	
大学院	修士課程（看護学専攻）	教務
	修士課程（ウィメンズヘルス・助産学専攻）	
	カリキュラム（修士課程）	

	博士課程	
	カリキュラム（博士課程）	
	社会人入学制度	
	ＴＡ・ＲＡ	
	大学院［科目等履修生］	
	研究員制度	
	教員スタッフ紹介（専門分野）	
	教員スタッフ紹介（基盤分野）	
	シラバス	
継続教育	科目等履修生	教務
	研究センターの紹介	センター
	公開講座（公開セミナー）	公開セミナー委員会
入試・入学案内	学校見学・説明会	広報委員会
	資料請求	教務・広報・総務
	大学［看護学部］	教務・総務
	大学院［修士課程］	
	大学院［博士後期課程］	
	学費一覧	経理
	入試の情報開示について	教務
キャンパスライフ	年間行事	教務・総務
	学生窓口案内	総務（学生課）
	各種証明書の申請	
	各種相談	学生課・教務課・広報委員会
	奨学金制度	総務（学生課）
	クラブ･サークル活動	学生部
	在学生の声	広報委員会
	施設利用ガイド	管財課
	学園祭	学生部
	国際交流	教務（国際担当）
	健康生活	健康管理室
	福利厚生	総務（学生課）
	防災	学生部
	卒業後の進路	
	関連機関（リンク関係）	事務局
※英語サイトについては、広報委員会・教務(国際担当)が担当。		

なお、今年度は約 37 件の記事掲載または更新の申請があり、記事の作成・更新を行った。

２）今後の課題

年々、大学においてホームページは受験生獲得のための広報ツールとして重要視されてきてい

る。本学もより多くの受験生を獲得するために、ホームページは広報活動の一環として効果的に組み込まれ、活用されることが望ましく、広報活動及びホームページを担う専任職員または部門の設置は悲願である。

掲載情報についていえば、第一のターゲットである受験生に対しての情報は最低限足りているといえるが、より多くの受験生を獲得するためには聖路加看護大学ならではのプラス材料として生かせる情報を効果的に掲載するような更なる取り組みが必要である。

しかし、これらの企画やWebページ作成業務を日々の業務に追われている兼任のスタッフで対応するには限界があるため、大学として今以上にホームページによる広報活動を期待するのであれば先に述べたような専門部門の設置またはアウトソーシングによる広報業務の委託など新たな管理体制が必要だろう。

また、将来的に向けての活動としては、本学ホームページを受験生だけをターゲットにしたサイト運営ではなく、看護大学として地域社会に貢献できるような情報の提供や、本学卒業生・修了生に向けた有益な情報提供などサービスの拡大が必要となってくることも視野においた取り組みが望まれるであろう。

XV　施設・設備

1．施設・設備の整備状況

1）現状の説明

本学は東京都と埼玉県と神奈川県の３カ所に施設を所有している。本部は東京都中央区明石町で、5,074.81㎡の校地があり、校舎の延べ面積は8,403.93㎡である。

本部校舎から地下鉄築地駅寄り徒歩２～３分ほどのところに地下１階、地上８階建てのビルの大学２号館がある。２号館の校地面積は435.20㎡で、校舎の延べ面積は3,106.00㎡である。

本部がある東京都中央区明石町地区から電車で１時間ほどの埼玉県ふじみ野市に運動場があり、テニスコートが２面ある。また、テニスコートに隣接した敷地には18ホールのターゲットバードゴルフ場がある。

この他に神奈川県鎌倉市稲村ガ崎には実習施設「鎌倉アリスの家」があり、各種研修会、実習、クラブ・サークルの合宿、レクリエーション等に広く利用されている。

2）校地

校地の現状は以下のとおりである。

区　　分	面　積（㎡）	所　　在　　地	権利の所有
明石町地区本部校舎敷地 ２号館敷地	4,639.61 435.20	東京都中央区明石町10番1号 東京都中央区築地3丁目8番5号	自己所有 自己所有
計	5,074.81		
ふじみ野市地区　運動場用地	11,505.00	埼玉県ふじみ野市大井中央１丁目	自己所有
計	11,505.00		
鎌倉地区校舎敷地	2,524.26	神奈川県鎌倉市稲村ガ崎３丁目５番６号	自己所有
計	2,524.26		
合　　計	19,104.07		

3）建物

⑴　本部校舎

校舎建物の各階ごとの施設内容・面積は以下のとおりである。

校舎は鉄筋コンクリート(一部鉄骨)造りで地下１階、地上６階、床面積8,403.93㎡に、教室、研究室、実習室等の教育用施設および法人事務局、大学事務室等の管理部門がある。

（単位：㎡）

階	主　な　室　名	教　室	研究室	図書館	その他	階面積合計
6	講義室、研究室、演習室、ラウンジ	272.31	0	0	937.80	1,088.07
5	科学実験室、研究室、共同研究室、教員ラウンジ	214.00	357.00	0	517.07	1,088.07
4	講義室、コンピュータ室、研究室等	464.49	259.74	0	363.84	1,088.07
3	講義室、図書館、演習室等	494.03	0	304.57	289.47	1,088.07
2	図書館、ラウンジ、学生自治会室等					
1	学長室、事務部室、教務部室、健康管理室、会議室、ロッカー室、倉庫等	0	0	0	1,018.26	1,591.54
	講　堂				573.28	
B	アーツルーム、更衣室、倉庫等	373.11	0	0	937.80	1,310.91
	合　　計	1,817.94	1,003.63	772.93	4,809.43	8,403.93

⑵　２号館　（単位：㎡）

階	主　な　室　名	教　室	研 究 室	管理関係	階面積合計
9	空調室、機械室等			64.58	64.58
8	演習室、ラウンジ等	139.0		107.65	246.65
7	共同研究室、演習室、ラウンジ等	244.0		106.10	350.10
6	講義室、修士ラウンジ等	244.0		106.10	350.10
5	研究支援室、研究オフィス、ミーティングルーム等		244.0	106.10	350.10
4	共同研究オフィス、研究オフィス、ミーティングルーム等		244.0	106.10	350.10
3	交流ラウンジ、多目的ルーム等		244.0	106.10	350.10
2	メディアルーム、システム支援室、サーバー室等	244.0		106.10	350.10
1	事務室、ぽるかルーム、ロビー(市民健康情報センター)等			330.42	330.42
B	ロッカールーム、倉庫、ポンプ室、空調機械室			363.75	363.75
	合　　計	871.0	732.0	1,503	3,106.00

⑶　教室・演習室等

①本　部

学内教室・演習室等の施設の内訳は、2008年４月末現在、講義室13室、コンピュータ室２室、視聴覚教材室１室の構成となっている。そのうち３階の301，302教室はそれぞれ100名収容できる教室で、AV 機器を備え、講堂とサテライト方式で映像を結ぶことが可能で、卒業式やオープンキャンパスなどの行事の際に出席者が多いときに有効に活用されている。コンピュータ室には学部と大学院用にコンピュータが52台設置されており、専属のチューターが常時学生にコンピュータの操作技術を指導している。

教室には OHP や OHC、電子黒板などの視聴覚機材が配置されており、学習上効果が上がるよう行き届いた配慮がなされている。

研究室は45室あり、原則として教授・准教授はそれぞれ個室、助教は２人で１室を利用している。

②２号館

２号館は地階がロッカールーム、倉庫、空調機械室、受水槽ポンプ室等、１階は事務室、聖路加ナビスポットるかなび、ぽるかルーム、２階はメディアルーム、システム支援室、サーバ

ー室、３階から５階は看護実践開発研究センターが設置され、３階は交流ラウンジ、多目的ルーム、相談室がある。４階は研究オフィス、WHO、聖ルカ看護学会、ミーティングルーム等、５階にはセンター長・専任研究員室、研究支援室、研究オフィス等がある。６階から８階は大学院で使用しており、６階には講義室、修士ラウンジ、７階は研究室、演習室、博士ラウンジがある。８階は演習室と修士のラウンジがあり、大学院生に有効に活用されている。

⑷　鎌倉アリスの家

鎌倉市稲村ガ崎３丁目５番６号に実習施設「鎌倉アリスの家」がある。木造スレート葺２階建て、スウェーデンハウスの瀟洒な建物である。

１階の演習室には視聴覚機材、ホワイトボードを備え、２階には10名の宿泊が可能なベッドルームと和室があり、少人数のグループワークや実習、レクリエーションにも利用されている。

階	室　　名	階 面 積（㎡）
1	演習室、１・２、管理人室、台所等	66.11
2	宿泊室、和室、浴室、洗面所等	62.36
	合　　計	128.47

４）機器備品の受入状況について

2008年度の機器備品の受入状況は以下のとおりである。

	購入によるもの	寄贈されたもの	合　　計
教育研究用機器備品	25点	23点	48点
その他の機器備品	2点	0点	2点

５）体育施設について

①埼玉県ふじみ野市大井中央にテニスコートが２面とターゲットバードゴルフ場があり、ロッカーを備えたコートハウスが設置されている。

②本部のある明石町には体育施設はないので、体育の実技は近隣にある築地魚市場厚生会館体育館および聖路加ガーデン内にあるスポーツクラブと契約して水泳等の授業を行っている。

２．施設・設備の維持管理

１）現状の説明

①本部

建物の清掃保守、消防設備の点検保守、エレベータ、中央監視盤，空調設備の管理等は専門業者に委託して保守管理を行っている。施設設備の点検も細かいチェックリストを作成して定期点検を行っている。

電気設備保守点検は関東電気保安協会に委託して毎月の検針、検査を行っており、電気設備、高圧受変電設備の定期点検等の保守も行われている。

警備については，中央区シルバー人材センターに依頼して警備員１名が平日午後５時より８時まで、また、講演会、研修会等の行事、催し物の際に正面玄関の守衛と学内巡回警備を行っ

ている。

②２号館

２号館についても１階事務室の受付業務、清掃、空調設備、警備など管理全般について専門の業者に委託している。

２）点検・評価および課題

①本部

施設・設備全般の保守管理について，電気・空調・消防・水槽等をコントロールする中央監視盤の管理、保守整備など本来なら維持管理専門の現業担当者を配置しなければならないところを事務職員が日常の業務の合間に対応しており、専任の施設設備要員の確保は是非とも必要である。

警備体制については、夕方玄関の出入りが多い時間帯にのみ警備担当を置いて夜間８時以降は警備員を置いていない。火災時の対応は中央監視盤を通じて聖路加国際病院施設課・防災センターに依頼している。

大学の敷地面積、施設・設備、収容人数等を勘案すると管理体制は決して万全とはいえない。専任の担当者を置くか、外部のビル管理会社等に委託するなどして管理体制を万全にすることは早急に対応を要する緊急課題である。

②２号館

施設・設備全般の保守管理について、電通ファシリテイ㈱に依頼している。

管理体制については１号館同様午後８時以降警備員を置いておらず、火災発生や空調、エレベータなどの保守の面でも十分とはいえず、今後の対応を検討することが必要である。

Ⅻ 管理・運営

1．組　織

1）学校法人聖路加看護学園役員・評議員一覧

① 2008年５月１日現在、学校法人聖路加看護学園の役員・評議員は以下のとおりである。

理事長　日野原重明

理　事　井部　俊子　福井　次矢　青木　康子　岡堂　哲雄　助川　尚子
内田　卿子　鴨下　重彦　長　清子　小島　操子　細谷　亮太
山口　喜義　上田　憲明

監　事　田邉　国夫　岩井　郁子

評議員　堀内　成子　山口　喜義　助川　尚子　菱沼　典子　白木　和夫
青木　康子　内田　卿子　深田　清香　井部　俊子　長濱　晴子
岩間　節子　渡部　尚子　小松美穂子　鶴田　恵子　日野原重明
鴨下　重彦　岡堂　哲雄　野辺地篤郎　押見　輝男　江尻美穂子
西村　哲郎　船本　弘毅　林田　憲明　佐藤エキ子　熊谷三樹雄
石川　陵一　上田　憲明

② 理事会・評議員会

開　催　日	場　所	議　題
2008年５月30日	東京新阪急ホテル築地	・2007年度決算・監査報告 ・2008年度入学生の学納金 ・学則変更 ・理事・評議員選任 ・青木奨学金規程制定 ・認定セカンドレベル開設
2008年９月26日	銀座東武ホテル	・寄附行為変更 ・学則改正 ・公益通報者保護規程 ・寄付募集 ・事務局長雇用継続 ・評議員選任
2009年２月25日	銀座東武ホテル	・2009年度学費 ・学則および大学院学則変更 ・2009年度事業計画・予算案 ・評議員選任 ・特待生奨学金制度 ・規程改正

教員組織一覧（2008. 5． 1.現在）　　（単位：人）

学長			井部　俊子				(1)
			教授	准教授	助教(シニア)	助教	
教養			菱田　治子 伊藤　和弘	深谷　計子 菊田　文夫 廣瀬　清人		鶴若　麻理	6
基礎医学			中山　和弘				1
専門	基礎系看護学	基礎看護学	菱沼　典子	大久保暢子	佐居　由美 安ケ平伸枝	石本亜希子 佐竹　澄子	6
		看護教育学	松谷美和子				1
		国際看護	田代　順子		長松　康子		2
	臨床看護学Ⅰ	小児看護学	及川　郁子	平林　優子 小野　智美		眞鍋裕紀子	4
		母性看護・助産学	堀内　成子	有森　直子 江藤　宏美 片岡弥恵子	永森久美子	大隅　香 小黒　道子	7
		成人看護学	小松　浩子	外崎　明子 飯岡由紀子	卯野木　健	市川和可子 廣岡　佳代 金森　亮子	7
		老年看護学	亀井　智子	梶井　文子		糸井　和佳	3
	臨床看護学Ⅱ	地域看護学	麻原きよみ	大森　純子		小林　真朝 平野　優子 留目　宏美	5
		精神看護学	萱間　真美	瀬戸屋　希		大熊　恵子 沢田　秋	4
		看護管理学	井部　俊子			奥　裕美 中村　綾子	3
大学院			柳井　晴夫 垣添　忠生				2
看護実践開発研究センター			山田　雅子 森　明子 小口江美子	吉田　千文		矢ケ崎　香 實﨑　美奈 細川　恵子	7
計			18	15	5	20	58
兼任教授			福井次矢、佐藤エキ子、上田憲明				3
客員教授			白木和夫、渡部尚子、Holzemer、Garfield				4

臨床教授　26	臨床准教授　10	臨床助教　4	40
川名　典子　小柳　仁　佐藤　孝道 中村めぐみ　藤村　尚宏　細谷　亮太 毛利多恵子　神谷　整子　高屋　尚子 桑田美代子　鴫原　操　中村　清吾 高橋美賀子　Joyce L. Neumann 川越　博美　内富　庸介　若尾　文彦 栗下　昌弘　黒川寿美江　濱口　恵子 Peter J.Whitehouse　Jennifer Merritt-Hackel 佐々木静子　小竹久美子　草川　功 神保　恵子	甲斐ユウ子 岡　有美 金子　美紀 安元　三枝 安藝佐香江 倉田　慶子 渡邊　輝子 須藤　裕子 松本　美香 川地香奈子	寺岡征太郎 大山　明子 本田　晶子 林　ゑり子	
非常勤講師			39
総　計			144

職員組織一覧　（単位：人）

事務局長	山口喜義（法人事務局長兼務）				1
	課　長	係　長	事務員	図書館司書	
事務部	島田　裕司 進藤　務 稲田　昇三	髙鳥　直人	高木　裕也 天岡　幸 豊島　景子 田口　瞳 畠山小巻（秘書）		9
教務部	髙橋　昌子	森川　雪絵 櫛田智恵美	鏑木　洋子		4
健康管理室			中山　久子		1
図書館		松本　直子		金澤　淳子 佐藤　晋巨 新沼　久美	4
看護実践開発研究センター		森島久美子	平良　智子 岡部　陽子 河合　智子		4
計	4	5	10	3	※ 23

※事務局長含む

２．財政

１）財政の執行状況

当年度は、大学院博士課程の定員増が認可されて３年目を迎え、博士課程の定員がすべての学年で10名となり、数年にわたった大学院拡充計画が完成年度を迎えた。施設整備については、昨年度に引き続きネットワーク・コンピュータ整備事業を行い、ターミナルサーバや学生用 Thin クライアント PC 156台を購入し、また、講堂の情報機器の更新整備も行った。これらには2,200万円の費用がかかったが、学生、教員の教育・研究環境がさらに充実した。

一方、看護実践開発研究センターにおいては、認定看護管理者ファーストレベルに続き、認定看護師教育課程３コース（不妊症看護・がん化学療法看護・訪問看護）を開講し75名が受講した。この受講料収入の増加に加え、学納金収入、補助金収入、寄付金収入も予想外に増加し、退職給与引当金戻入もあり収入が増加した。支出においては本学も百年に一度といわれる世界的な大不況の影響を受け、有価証券評価損を計上した。その他の支出についてはほぼ予算どおりに執行され、基本金組入前の消費収支差額では2,399万円の赤字となり、最終的な当年度の消費収支計算は40,082,498円の支出超過となった。しかし、当初の予算と比較して赤字額が大幅に少なく抑えられる結果となった。

⑴　収入においては、学納金収入は大学院の定員が、博士課程で6名増加したことや、３年で修了しない学生が多数いたこと。また、入学辞退者が非常に多かったことにより、予算より3,141万円増加した。国庫補助金収入は国の経常費補助金の減額政策が続いているが、教職員数や学生定員が増加したこと、増減率（配点）がよかったこと、特別補助を多く獲得したことにより、予算対比4,140万円増加した。また、「がんプロフェッショナル養成プラン」や文部科学省の施設整備費補助金を獲得し、予算対比4,725万円増加した。事業収入では前述のとおり認定看護師教育課程３コースが開講し増収となった。また、外部研究費である文部科学省科学研究費補助金で2,629万円の間接経費を獲得し、印税の寄付もあり、雑収入が588万円増加した。寄付金収入では、今年度から寄付者の意思が反映されるように寄付募集の方法を変えたこと、日本財団から認定看護師教育課程の助成金を獲得したことなどにより、1,600万円増加した。

⑵　支出においては、人件費はほぼ予算どおりの支出であったが、認定看護師教育課程関係の教職員の人件費が増加しており、前年度対比では5,117万円の増加となった。教育研究経費は取得したコンピュータの価額が10万円を下回り消耗品費処理をしたため、予算より1,355万円増加しているが、これは設備関係支出で予定していたものであり、ほぼ予算どおりとなった。また、管理経費については競争的資金の事務管理要員の委託費や消費税が増加し予算対比242万円の増加となった。補助活動支出は認定看護管理者講座及び認定看護師教育課程に専任担当職員を配置したため臨時職員の委託費等が不要となり688万円の減額となった。

また、本学も百年に一度といわれる世界的な大不況の影響を受け、保有している債権の期末時価評価額が大幅に下落したため、有価証券評価損を計上した。

⑶　当年度の特徴としては、看護実践開発研究センターにおいて、継続教育部門として、認定看護管理者ファーストレベルに続き、認定看護師教育課程３コース（不妊症看護・がん化学療法看護・訪問看護）を開講し75名の受講者全員が無事修了したことが上げられる。これにより、収入も増加し、また、看護専門指導者の育成という本学のミッションの一つを果たしつつある

と思われる。しかし、一方では人件費や諸経費を考えると財政的には厳しい状況が続いている。これをステップにして、また次の教育・研究活動を展開していく必要がある。

２）今後の課題

大学院博士課程の定員増が認可されて３年目を迎え、博士課程の定員がすべての学年で10名となり、数年にわたった大学院拡充計画が完成年度を迎えた。これで学納金収入の増収策はすべて終了した。一方では1号館も新築してから13年が経過し、建物や施設の修繕の必要箇所がいくつも出てきている。本学の財政基盤の中心である学納金収入の安定確保及び他の増収策、そして経費の削減策を早急に考える必要がある。

３．文部科学省学校法人運営調査委員による実地調査

文部科学省の学校法人運営調査委員による実地調査が2008年7月28日に実施された。

日　　時　　2008年７月28日㈪　13時40分から18時15分

委　　員　　西村太良（慶應義塾常任理事）

　　松本　香（公認会計士）

事 務 官　　大谷（おおや）　智（文部科学省高等教育局参事官付学校法人調査官）

時　　程　　13時40分から14時15分　事務打合せ（小会議室）

　　14時15分から15時35分　面接調査（会議室）

　　15時40分から16時55分　施設等調査（本館、2号館、チャペルほか）

　　17時00分から18時15分　事務官のみによる調査（会議室）

事前提出資料（６月26日を期限として提出した）

⑴　平成20年度学校法人の管理運営等に関する自己点検リスト

⑵　寄附行為

⑶　学校法人実態調査票（平成20年度）

⑷　平成19年度決算書（学校法人の監査報告書、資金収支計算書、消費収支計算書、貸借対照表）

⑸　平成19年度末の財産目録、事業報告書、監査報告書

⑹　平成20年度収支予算書

⑺　設置する学校の内容

⑻　パンフレット、入学案内、学生募集要項

⑼　規程集（学則、大学院学則、就業規則、給与規程、経理規程）

⑽　会場出席予定者

本学側面接調査出席者

日野原理事長、山口事務局長、堀内学部長・研究科長、小島常任理事、田邉監事、岩井監事、島田経理課長、進藤管財課長、稲田総務課長（井部学長は出席予定であったが都合により欠席した）

当日、委員および事務官より指摘された事項

①評議員の欠員が違法状態であるので、改善するよう「助言」に載せざるを得ないこと

②評議員会に監事が出席するべきであること

③理事会、評議員会への委任状は、議案ごとに出すべきこと

④財産目録の備付および閲覧は、5月末までに行うべきこと

⑤公益通報者保護規程を整備すること

2008年10月15日付文部科学省高等教育局長名の文書「学校法人運営調査委員による調査結果について(通知)」により、本学は、上記指摘事項のうち①について「第３号評議員の欠員を速やかに補充すること」という通知を受けた。これについては2009年７月31日（金）までに、「改善状況報告書」により報告することになっている。

施設等調査案内箇所および説明内容（説明担当者）

案内役　堀内学部長・研究科長、山口事務局長、島田経理課長、稲田総務課長

1　１階講堂（高鳥）スクリーンに映写

2　Ｂ１階　男子ロッカールーム

3　Ｂ１階　アーツルーム（佐居）　自己学習、支援者等の説明、文科省補助金

4　６階　アーツルーム、演習室、講義室、井部研究室

5　５階　科学実験室（高橋）、ラウンジ

6　４階　コンピュータ・ルーム（石渡）

7　３階　講義室（櫛田）

8　２階　学生ラウンジ・学食

9　図書館（松本）蔵書数、病院医学図書館との連携、ナイチンゲール直筆書簡

10　２階　病院への連絡通路を経由

11　病院チャペル　入学・卒業礼拝、学長就任式など

12　病院１階（山口）壁面・床面のレリーフの説明、公衆衛生・保険所機能の説明

13　トイスラー・ハウス（齋藤）大学の歴史的写真、理事長文化勲章親授式写真

14　屋外　外国人居留地、慶應義塾発祥・立教発祥の碑、解体新書の碑

15　大学２号館へ　るかなび（石川）闘病記図書、活動

16　８階・７階・６階　院生ラウンジ（森川）

17　５階　研究センター・研究支援室（森、森島）

18　４階　講義室、ミーティングルーム

19　３階　多目的ルーム

４．プロジェクト活動

１）慶應義塾大学薬学部(旧共立薬科大学)との学術交流

2006年11月２日に本学と共立薬科大学(当時)間に学術交流協定が締結されて以来、本学に共立薬科大学(現慶應義塾大学薬学部)との学術交流委員会が設置され、学術交流を図ってきた。

今年度は慶應義塾大学薬学部が申請し、文部科学省から採択されている「社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム(平成18年度～平成20年度)」(医療人 GP)により行われている「保健医療福祉系学生交流合同セミナー」の最終年度であった。このセミナーは、慶應義塾大学薬学部が主催し、聖路加看護大学、首都大学東京、日本医科大学、杏林大学医学部、慶應

義塾大学医学部、慶應義塾大学看護医療学部の共催により開催されてきたものである。保健医療福祉にわたる多様な領域の学生に焦点をあて、共にケーススタディ、及びグループワークなどを行いながら、学生自身が自己について知り、専門性を認識したり、高めながら、職種間のコミュニケーション能力や視野を向上することをねらいとした、１日のワークショップ形式による合同セミナーである。

2008年度は、本学から５名の委員が選出され、慶應義塾大学薬学部において開催された合同セミナー準備委員会に２回参加した。準備委員会では、共催する各大学の教員らと今年度のセミナーの目的、日時、メインテーマ、内容、講師の選出、ケーススタディに用いる事例、参加者募集方法などについて討議した。メインテーマは、「在宅医療の未来設計」と決まり、この準備委員会での役割分担にもとづき、本学の委員は、ケーススタディに用いる「在宅認知症高齢者と家族の事例」の作成を担当することとなり、委員間の頻繁な意見交換により、事例を作成した。また、当日のフィードバックレクチャーを担当する認知症患者への在宅診療を実践している往診医、および訪問看護師の講師選定、および交渉を担当した。セミナー当日には、提示した事例の説明、学生のグループワークを担当するチューターの役割を本学委員が担った。

本学の学生・院生には、パンフレットをコピーして学部学生には全員に直接配布し、参加を呼びかけた。セミナー全体の参加者は99名であったが、うち本学からは23名と多くの学生が参加し、参加者の23.2%を占め、各グループにおいて書記を務めたり、活発な討議を行うなど積極的にセミナーに参加していた様子が印象的であった。

参加者アンケートからは、「このセミナーは将来役立つと思う」(平均4.63ポイント／5ポイント中以下同様)、「在宅医療に興味をもった」(4.26ポイント)、「グループのディスカッションに参加できた」(4.15ポイント)などの評価が高く、自由意見からは、「多職種間の連携が必須だということがわかった」、「多職種のそれぞれの専門からみた様々な意見が聞けて貴重な時間であった」などの感想があげられ、参加者の満足度は高いものとなった。

日　時	テーマ	参加学生数	本学委員
2008年8月8日㈯ 10時～17時30分	第３回保健医療福祉系学生交流合同セミナー 「在宅医療の未来設計」－医療系多職種間のより良いコラボレーションを求めて－	99名（うち、本学より23名参加）	亀井　智子 永森久美子 小野　智美 卯野木　健 細川　恵子
準備委員会（◎印は委員長） ◎江原吉博、小林静子、望月真弓、福島紀子、福島統、石川さと子(慶應義塾大学薬学部) 天野隆弘、佐藤徹、中島理加(慶應義塾大学医学部) 木下正信、大嶋伸雄(首都大学東京健康福祉学学部) 小池智子(慶應義塾大学看護医療学部)			

5. 規程の新設ならびに改正

2008年度における規定の新設ならびに改正は下記のとおりである（施行日)。

1）新　設

①聖路加看護大学認定看護師教育課程教員会規則（2008年４月１日）

②学校法人聖路加看護学園資産運用規程（2008年４月１日）

③学校法人聖路加看護学園競争的資金に関する管理規程（2008年４月１日）

④学校法人聖路加看護学園内部通報規程（2008年４月１日）

⑤学校法人聖路加看護学園外国旅費規程（2008年４月１日）

⑥学校法人聖路加看護学園外国旅費支給基準（2008年４月１日）

⑦学校法人聖路加看護学園学外者等旅費規程（2008年４月１日）

⑧学校法人聖路加看護学園学外者等旅費支給基準（2008年４月１日）

⑨学校法人聖路加看護学園外国旅費（招聘）規程（2008年４月１日）

⑩学校法人聖路加看護学園外国旅費（招聘）支給基準（2008年４月１日）

⑪聖路加看護大学認定看護師教育課程規則（2008年４月１日）

⑫青木奨学金規程（2008年４月１日）

⑬青木奨学金規程細則（2008年４月１日）

⑭学校法人聖路加看護学園における公益通報者保護等に関する規程（2008年９月26日）

⑮聖路加看護大学カリキュラム運用委員会規程（2009年２月24日）

⑯聖路加看護大学情報システム委員会規程（2009年２月24日）

⑰がんプロフェッショナル養成プラン交付金による特任助教の雇用に関する規程（2009年２月25日）

2）改　正

①寄附行為（2008年11月14日）

②聖路加看護大学学則（2008年４月１日）

③聖路加看護大学大学院学則（2008年４月１日）

④学校法人聖路加看護学園特別奨学金規程（2008年４月１日）

⑤学校法人聖路加看護学園国内旅費規程（2008年４月１日）

⑥学校法人聖路加看護学園国内旅費支給基準（2008年４月１日）

⑦聖路加看護大学看護実践開発研究センター認定看護師教育課程規則（2008年９月26日）

⑧聖路加看護大学コンピュータネットワーク倫理規程（2008年９月26日）

⑨学内ハラスメント対応システムに関する規程（2009年２月10日）

⑩聖路加看護大学紀要委員会規程（2009年２月24日）

⑪図書館における個人情報取り扱い要領（2009年３月４日）

６．教員の学位取得に対する支援対策

「看護学専門科目の准教授･助教(シニア)の博士号取得に対する、支援策に関する規程」に則り、2008年度現在は、平林優子准教授が支援を受けて本学大学院博士後期課程に在籍している。

2009年度に向けて、新たにこの制度の適用を希望する教員はいない。

７．加盟団体および協会

本学が加盟している団体・協会は以下のとおりである。

大学基準協会（JUAA）
日本私立大学協会
日本看護系大学協議会（JANPU）
日本私立看護系大学協会
全国助産師協議会
全国保健師教育機関協議会
日本看護教諭養成大学協議会
私立大学図書館協会
日本看護図書館協会
全国保健管理協会
私立大学庶務課長会
私学経営研究会
京橋法人会
日本聖公会
教育学術新聞維持員会
日本 WHO 協会
NPO 生涯学習＝大学人会議
ライフ・プランニング・センター（LPC）
私立大学環境保全協議会
財）日本電信電話ユーザ協会
明石町町会
築地自治会

８．教職員の活動に対する評価

教職員の活動に関する評価システムは、自己評価委員会で検討をしてきた（参照：XⅦ　自己点検・評価の４項）。2007-2008年度と継続して検討してきた教員評価ならびに職員評価の実施に関して自己評価委員会で提案した原案が2009年３月24日の臨時教授会で承認され、2009年度に実施する運びとなった。

実施目的は、「PDCA サイクル[plan-do-check-action]に乗せて、個人やその個人の所属する組織、さらには大学全体のレベルの改善や改革に結びつける」ことである。教員評価の対象項目は、①教育活動、②研究活動、③学内活動、④社会活動となっている。職員の対象項目は、①専門性、②創意工夫、③学内活動、④社会活動、となっている。この評価システムを通じて、すべての教職員が上司と対話を行うことを意図しており、2009年度に試行した結果を踏まえてよりよい教職員の評価システムを確立したいと考えている。

2008年度よりすべての教員の業績は図書館よりシステム化されたリポジトリに掲載することになっており、教育活動、研究活動、社会活動の実際を公表している。同僚教員の１年間の業績をお

互いに自由に見ることができるため、学内の様々な交流の中で、ある意味自然な形の Peer Review を行う雰囲気になっていると考える。

9．人権委員会

2008 年 9 月 25 日、2008 年度第 1 回の人権委員会を開催した。

出席は、岩間節子、田光信幸、上田憲明、及川郁子、伊藤和弘の各委員で、細谷亮太委員は欠席した。

議題、決定事項は次のとおりであった。

１．学長挨拶ならびに(1)新任委員の紹介、(2)規則、細則、成果物についての説明

新委員として、上田憲明客員教授（教授会）、及川郁子教授（研究科委員会、サバティカルリーブ中の菱沼典子教授の交代）、伊藤和弘教授（研究倫理審査委員会）が就任したことが紹介された。また人権委員会規程、同運用細則、学内ハラスメント対応システムに関する規程について説明された。

２．新委員長選出

新委員長として聖公会（東京教区）より委員に就任いただいている田光信幸司祭が互選で選ばれた。

2009年１月21日、委員長の招集により、第２回の委員会を開催した。

出席は、田光信幸委員長、岩間節子、上田憲明、及川郁子の各委員で、細谷亮太、伊藤和弘の各委員は欠席した。議題は、委員長宛に送られた申立書についてであり、大学院修士課程の学生２名から CNS 受験資格についての質問および苦情であった。委員長により指名された１名の委員が個別に２名の学生に会い、話を聴くことを取り決めた。

第３回の委員会は、委員長の招集により2009年３月18日に開催した。

出席は、田光信幸委員長、伊藤和弘、岩間節子、上田憲明、及川郁子、菱沼典子の各委員で、細谷亮太委員は欠席した。また井部俊子学長が陪席した。前回の委員会での取り決めどおり、１名の委員がそれぞれの学生に会って話を聴いた結果についての報告があった。委員の説明に対して、２名の学生はそれぞれ納得したことが報告された。委員会での議論の結果、今後、申立書が提出された場合には、人権委員会として取り扱う事項であるかどうかをまず審議することとした。また任期満了となる第２号（研究科委員会）、第３号（研究倫理審査委員会）の２名の委員の選出をそれぞれの委員会委員長に要請した。

10. 教授会・研究科委員会

教授会は、学則および教授会規程によりその運用が定められている。学長、教授、准教授をもって構成され、必要ある場合は構成員以外の者を出席させることができる。

教授会は定例会と臨時会とし、学長が主宰する。毎月１回の定例会の他に、学長が必要と認めた時（入学試験入学者決定を含む）、また、全構成員の過半数の連名による要請書の提示により学長が招集する。

審議事項は下記のとおりである。

①学則に関する事項

②教育課程に関する事項

③研究および教授に関する事項

④学生の入学、退学、転入学、休学、編入学、再入学、卒業および賞罰に関する事項

⑤その他学長が諮問する事項

教授会で審議するため上程される案件は、主に学長の諮問機関である学事協議会において提案、審議の後上程され、審議、決定される。また、教員の採用および昇任のための選考は、教授の場合は人事委員会、それ以外は直接学事協議会の議を経て、教授会で決定される。教授の場合は、助教授を除く教授会での投票により決定される。

2008年度は、学長１名、教授20名、准教授15名、計36名で構成された。佐居由美助教が10月１日付准教授に昇任したため、10月（第６回教授会）より准教授が16名となり、計37名となった。

ただし、サバティカルリーブのため、菱沼教授は第５回～第９回、外崎准教授は第３回～第２回臨時教授会まで長期欠席となった。

11回の定例会と４回の臨時会が開催され、議事録確認者として、菱田治子教授、有森直子准教授が互選された。議事録は事務局が保管している。

例年の審議事項の他に、以下の件について話し合われた。

１）入学生の増員を含め、収入増を検討してほしいとの理事会からの提案を受け、大学の将来構想について話し合われ、入学生の増員以外の支出削減、収入増の方法を検討した。

２）表彰システム委員会を編成し、大学創立記念講演会において表彰を行った。

３）聖路加国際病院との共同事業として助産施設を設立し、母性看護・助産学の教員が企画から参画していくことになった。本学から教員が出向することになった。

４）学部長任期満了に伴い学部長選挙が行われた。

５）大学院において、成人看護学の領域が急性期看護学、慢性期看護学、がん看護学・緩和ケアに細分化され、より専門性を高めるために、成人看護学の部門を急性期看護学、がん看護学・緩和ケアと慢性期看護学に担当者を分けることの提案があり、承認された。慢性期看護学の教授人事委員会を立ち上げ、選考を行ったが、2009年４月１日からの採用とはならず、継続審議となった。

６）学生の提出リポートの紛失および書き写しの不正行為が発覚し、「学生懲戒処分規程」に基づき協議を行い、処分を決定した。

不正行為を犯した学生は昨年に引き続き２回目であったこと、大学の秩序を乱したことから停学処分１年とし、その学生にみられる衝動性のコントロールについては、専門家の支援を受けることを条件とした。

また、改悛状況の判断や、不正行為が繰り返された場合の処分については、今後の課題となった。

７）各種規程について検討された。

・学内ハラスメント対応システム

・がんプロフェッショナル養成プラン交付金による特任助教の雇用に関する規程

・学生懲戒処分規程

・コンピュータネットワーク倫理規程

・各委員会規程（国際交流委員会、入試委員会、カリキュラム運用委員会、情報システム委員会、

紀要委員会）

・認定看護師教育課程細則

研究科委員会は、学長、大学院担当教授をもって構成され、必要ある場合は大学院担当准教授を構成員に加えることができる。毎月１回の定例委員会のほかに研究科長が必要と認めた場合、または構成員の過半数の連名による要請書の提示によって研究科長が招集し臨時委員会を設けることができる。また、研究科長が自ら議長を務めている。

審議事項は、下記のとおりである。

①大学院担当教員の人事に関する事項

②入学・修了・休学・退学・転学・留学・賞罰その他学生の身分に関する事項

③教育課程および研究指導に関する事項

④学位の審査に関する事項

⑤その他大学院に関する事項

2008年度は、学長を含めた大学院担当教授16名、大学院担当准教授１名の計17名で構成された。

定例委員会が11回、臨時委員会が８回開催された。議事録確認者として亀井智子教授が互選さまた。カリキュラムの運用をさらに検討するため大学院拡大研究科委員会を２回開催した。

定例の審議事項のほか、下記について論議された。

１）2008年度より引き続き、修士課程および博士後期課程の新カリキュラムについて検討され、2008年５月の理事会で承認された。2009年度入学生は新カリキュラム（別表）で募集された。

なお、この新カリキュラムは、博士後期課程、修士課程ともに、専門分野が細分化され、看護師免許をもたない学生が入学できるコースを開設した。また、修士課程では、従来の専門看護師のコースに加えて小児看護学の分野で上級実践看護師（プライマリケア実践）を目指すコースも開設された（新旧カリキュラムの専門分野については別表のとおり）。

２）2008年度に引き続き、2009年度にも留学生を受け入れるにあたり、具体的な履修計画等について検討された。

３）文部科学省の事業「大学院教育改革支援プログラム」に「若手看護・助産教育リーダー育成プログラム」を申請し、ヒアリング審査に進んだが、採択には至らなかった。

４）博士後期課程、修士課程ともに2009年度開始の新カリキュラムを決定し、実施の準備を進めた。

５）社会人入学を推進するための方策を検討するため、「大学院社会人入学推進ワーキンググループ」を立ち上げ、検討を進めた。

６）卒業生、修了生の状況、院生獲得のためのニーズ確認等を目的として、実習先や近隣病院との情報交換会を計画し実施した。

別　表

博士後期課程

【旧カリキュラム】

看　護　学　専　攻		
基礎系看護学	臨床看護学Ⅰ	臨床看護学Ⅱ
基礎看護学 看護教育学	小児看護学 母性看護･助産学 成人看護学 老年看護学	精神看護学 地域看護学 看護管理学

【新カリキュラム】

看　護　学　専　攻			
基礎系看護学Ⅰ	基礎系看護学Ⅱ	実践看護学Ⅰ	実践看護学Ⅱ
看護統計学 看護情報学 看護社会学 看護心理学	基礎看護学 看護技術学 看護教育学 看護管理学	助産学 小児看護学 成人看護学（急性･慢性） 老年看護学	ウィメンズヘルス がん看護学・緩和ケア 精神看護学 在宅看護学 地域看護学 国際看護学

修士課程

【旧カリキュラム】

看　護　学　専　攻			ウィメンズヘルス・助産学専攻
基礎看護学･････････ ☆ 看護技術学･････････ ☆ 看護教育学･････････ ☆	小児看護学……☆★ 成人看護学（急性･慢性）…☆★ がん看護学・緩和ケア…☆★ 老年看護学……☆★ 精神看護学……☆★	在宅看護学 ･･････ ★ 地域看護学 ････ ☆★ 国際看護学 ････ ☆★ 看護管理学 ････ ☆★	ウィメンズヘルス☆★ 助産学☆★

【新カリキュラム】

看　護　学　専　攻				ウィメンズヘルス・助産学専攻
基礎系看護学Ⅰ	基礎系看護学Ⅱ	実践看護学Ⅰ	実践看護学Ⅱ	
看護統計学 ☆ 看護情報学 ☆ 看護社会学 ☆ 看護心理学 ☆	基礎看護学 ☆ 看護技術学 ☆ 看護教育学 ☆ 看護管理学 ☆★	小児看護学 ☆★* 急性期看護学 ☆★ 慢性期看護学 ☆ 老年看護学 ☆★	がん看護学・緩和ケア ☆★ 精神看護学 ☆★ 在宅看護学 ☆★ 地域看護学 ☆★ 国際看護学 ☆★	ウィメンズヘルス☆★ 助産学☆★

修論コース☆　上級実践コース★　プライマリケア実践★*

11. 表彰制度準備委員会

委員長：山田雅子

委　員：井部俊子、小林真朝、細川恵子、櫛田智恵美、畠山小巻

１）表彰制度準備委員会の設置ならびに表彰制度の検討

学生・教職員が互いに関心を持ち、努力を称え感謝の気持ちを伝えあうことを目的に、表彰制度が創設されることになり、表彰制度準備委員会が設置された。初年度の表彰制度準備委員会は、学長、研究センター長、教員２名、職員２名の計６名のメンバーで構成された。

2008 年 10 月に第１回委員会を開催し、広く学生、教職員、学園関係者などを表彰対象とし、2009 年１月 23 日の創立記念行事に第１回表彰式を行うこととして教授会に提案した。以降、2008 年度は計９回の委員会を開催した。

表彰制度の検討に際して、表彰対象の中心である学生の意見を十分反映させることが重要と考え、学生から委員を募った。その結果、３年生１名、２年生２名、１年生２名の学生表彰準備委員を決定した。学生および教職員メンバー間で、表彰の意義、表彰内容や表彰式の実施方法などについて検討を行った。また、表彰制度の周知、選考の実施準備、表彰式の運営などは連携して準備を進めた。

今後、表彰全般における企画・準備・実施・評価を通して、さらに学生表彰準備委員との協働を強化していく必要がある。

２）初年度表彰の企画・準備・実施

⑴　初年度表彰内容および選考方法

初年度は下記の６項目について表彰を行うこととした。各賞の表彰対象・表彰内容・選考方法は次のとおりである。選考は 2008 年 12 月～2009 年１月にかけて実施した。

ａ．【学長賞】総合看護・看護研究Ⅱ（卒論）グッドプレゼンター

表彰対象：４年生・学士 11 回生
表彰内容：総合看護・看護研究Ⅱ（卒業論文）　発表会において、最もわかりやすく・おもしろく・ためになった発表をした学生
選考方法：各領域における卒論発表会において参加者による投票にて選考。
「わかりやすい・おもしろい・ためになった」の３つの項目について得点化し、領域ごとに集計した。

ｂ．【学長賞】最多単位修得者

表彰対象：４年生・学士 11 回生
表彰内容：４年間で最も多くの科目を修得する学生
選考方法：最多修得単位者を教務課にて選考

ｃ．Dr. ホルツマー賞

表彰対象：大学院生（修士）
表彰内容：大学院の「看護学研究法」の授業において最も優れた発表をしたグループ
選考方法：ホルツマー先生による評価にて選考

ｄ．ベストティーチャー賞

表彰対象：教員（非常勤・外部講師含む）
表彰内容：優れた授業や演習・実習指導をした教員
選考方法：学部生による投票にて選考

ｅ．研究受賞者賞

表彰対象：教員および大学院生（博士）
表彰内容：研究活動が学会などで評価されて受賞した教員・大学院生
選考方法：学会等の受賞者の自己申告

ｆ．感謝状

表彰対象：すべての大学関係者
表彰内容：多額の寄付者
選考方法：本人の承諾に基づいて大学事務局にて選考

⑵　第１回表彰式の実施

2009 年１月 23 日の創立記念行事にて、第１回表彰式を行った。表彰式では、表彰制度の創設目的、表彰内容や選考方法の説明を行った。各賞の受賞者には、表彰状、記念品（七宝焼き校章付きスプーン）、金一封と花束が贈呈された。学長賞と Dr. ホルツマー賞には、学長の著書も副賞として贈呈した。初年度の受賞者は以下のとおりである。表彰結果は、表彰式終了後に学内で掲示し、学園ニュースに掲載した。

受賞者一覧

	名　　称	受　賞　者	受 賞　対 象
1	【学長賞】 総合看護･看護研究Ⅱ（卒論） グッドプレゼンター	近藤　華子	「長期子どもキャンプでみられた子どもたちの変化に関する研究－自然・大人・子ども同士の関わりが子どもたちに与える影響について－」
2	【学長賞】最多単位修得者	浜岡　亜衣、堀川　　麗、藤澤　朋美	（140 単位修得）
3	Dr. ホルツマー賞	佐藤　友美、中山　智恵、白井　希、舩津　美帆、園田　希、水島　祐子	「Effect of timing of umbilical cord clamping」
4	ベストティーチャー賞	卯野木　健	
5	研究受賞者賞	小野　智美	〈日本看護科学学会学術論文優秀賞〉 「日帰り手術に向けての幼児の自律性を親と協働して支援する看護介入プログラムの開発 －第１報：看護介入の試作と介入後の親の取組み－ －第２報：看護介入の影響と介入プログラムの構築－」
		堀内　成子、片岡弥恵子、江藤　宏美、松本　直子、八重ゆかり	〈日本私立看護系大学協会看護学研究奨励賞〉 「Development of an evidence-based domestic violence guideline: Supporting perinatal women-centred care in Japan」
6	感謝状	青木　康子	（多額のご寄付および奨学金創設、著作権寄付）

３）次年度に向けた表彰制度の検討

表彰の目的を達成するためには、年間を通じた取り組みが必要であり、年間を通して計画的に進めていく必要がある。選考および表彰式の実施に伴う必要経費の検討を行い、表彰運営委員会として次年度の予算請求を行った。

2009 年度は新たな表彰内容についても検討する予定であり、一人ひとりの顔が見える本学の特徴を活かして、学生・教職員が相互に関心を持ちながら学園生活を送れるよう、表彰制度を洗練させていきたい。

12. 防災対策

2008年５月28日に本館と２号館と同時に消防訓練を行った。想定は東京都を中心に直下型の大型地震が発生し２階パントリーで火災が発生したというもので、館内放送に従って校舎内の教職員、学生はいっせいに中庭に避難した。中庭に集合後、消防署による講評が行われ屋内消火栓から学生が実際に放水してデモンストレーションを行った。

９月25日には聖路加国際病院との合同防災訓練を実施した。中央区にマグニチュード６の直下型の地震が発生したとの想定のもとに連絡、記録、調査など各担当が割り振られ模擬患者の救護など細かい役割分担を設定し、本番さながらの真剣な訓練が行われた。また、大学玄関の前に設置された起震車では地震体験や煙テントでは煙の中での避難体験、避難食の試食なども行われた。

本学で実際に災害が発生したときを想定して日頃から会議室内に各階の平面図や筆記具、ヘルメット、携帯テレビやラジオなど必要物品を収納しておくことは最低限の準備事項である。本学ではサリン事件の際に聖路加国際病院を中心としためざましい救護活動を行った実績がある。その教訓、経験を活かして地震、火災など災害に対する備えを常日頃から心がけておくことが大切である。

XVII　自己点検・評価

自己点検・評価に関する規程に従って、９回（５月、８月と２月を除く毎月第３火曜日）の定例委員会を開催し活動を行った。自己評価委員会は学長に直属する常設機関である。委員は学長のほか、学部長、教務部長、学生部長、図書館長、看護実践開発研究センター長、事務局長で構成すると規定されている。委員会にはほかに総務課長が事務担当として出席した。

１．大学基準協会による認証評価の報告書作成

大学基準協会により2008年３月24日付で公表された評価結果は、「評価の結果、貴大学は本協会の大学基準に適合していると認定する。認定の期間は2015(平成27)年３月31日までとする。」というものであった。

2007年度に委員会がまとめ大学基準協会に提出した「点検・評価報告書」ならびに同協会から授与された「大学基準適合認定証」および「聖路加看護大学に対する大学評価結果ならびに認証評価結果」を編集し、2008年４月に『聖路加看護大学 知と感性と愛のアート』として刊行した。同冊子は、法人事務局、図書館に備え付けたほか、法人理事・評議員・監事、教職員、非常勤講師や実習施設・給付奨学金団体等に配布したほか、大学ホームページにも掲載した。

２．2007年度年報の作成

2007年度年報を作成（11月６日完成）し、教職員、役員・評議員、民間の奨学金財団等に配付した。2008年１月22日の第９回委員会で、執筆内容・担当者表、個人業績報告票作成内容などについて了承され、2007年１月31日に学内に依頼状を発信した。完成予定を７月末に設定したが、編集に手間取り完成が遅れた。

３．修士学生によるカリキュラム評価への対応

学生から回収した2007年度大学院修士課程の修了時の授業評価ならびにカリキュラム評価、および2008年度前期科目評価の調査票について、回答の必要な項目を抽出し、回答を学内のウェブに載せるための作業を実施し、2008年３月にイントラネットに掲載した。

４．教員評価・職員評価の実施案について

11月13日㈭に桜美林大学大学院教授の諸星裕氏を招いて、「我が国の大学の欠陥、GPA、教員評価、など」と題する講演会を開催した。氏の経験に基づく米国と日本との大学評価制度の比較など示唆に富む内容で50名余の教職員が聴講した。

教員評価ならびに職員評価の実施に関して委員会で提案した原案が2009年３月24日の臨時教授会で承認され、2009年度に実施する運びとなった。

実施目的は、「PDCA サイクル[plan-do-check-action]に乗せて、個人やその個人の所属する組織、さらには大学全体のレベルの改善や改革に結びつける」ことである。

期初の被評価者による目標設定と１次評価者との対話を５月に、中間期の目標達成状況についての対話を９月に、そして期末における被評価者による自己評価と１次評価者・２次評価者等による対話・評価を2010年２月に実施する。この承認を経て、また結果を踏まえて2010年度の新たな目標設定を行うこととしている。また当面は、評価結果を給与や手当、研究費に反映させることなく、教員・職員の活動向上を目指したい。

５．2008年度年報の作成準備

第９回委員会（2009年１月20日）において、執筆内容・担当者表、個人業績報告票作成内容などについて了承され、2008年１月23日に学内各担当教職員に依頼状を発信した。完成予定を７月末に設定した。

聖路加看護大学年報　2008年度（平成20年度）

2009年７月

発行者　聖 路 加 看 護 大 学

〒104-0044　東京都中央区明石町10番１号

TEL （03）3543－6391

FAX （03）3565－1626

Htpp://www.slcn.ac.jp/

コクダイ印刷株式会社